

ねし本會のみさかの紀行もひまゆくこまのこゝちし
て。うつべきむちはいたづらに。魚ツギ筆のみしりて
笠とればモツ。すししくもる月の顔たが短夜のしら
しらく。ハルしらぬ人なき名はむさし野にこゑかる
る三サカリほととぎす。上人のこゝろはむごらしやを
なごころはそふじやないわいな。アイかたときあは
ねばくよくとぐちな思ひか泣てゐるわいな。アイわ
しをかはいと思ふてゐるやくたかけ鳥のハルなくや
一聲。ハル現や夢の。下ひとねぶりわがあらばこそハ
ル。三重覺もクルせめ。ちしきとは此枕なり。げに有が
たきのりの道。下ひとへに。頼むなつころも本アシ秋風
ハツシちかく身にしみて。セツキヤ扇けふときなぐり
がき我身の。オチヌ花は散し書されば歌にも山寺の。下
カ、ル春の夕べを物として何となされて。花やちるら
む。

○たからぶね

コトバながきよのとをのねぶりの。カンみなめめ。上
波にもいもせ。ありを海の。中女波おなみの。戀ぐさ
を。レイセイわけてくる。は。神代ひく。岩戸を明の。
ハル下おとこ。箒とる手に。下腰うちまげて。松葉か

ぞたからの舟よせて。ハシルあたらしふとんきそはじ
めヒトリ三重なみのり舟の。アヒノテ音のよきワタドメ
かな。

○戀慕三輪山 上の巻

シテ三輪の山本道もなし。椴原の奥をたづねんッ
ン。實にや老少不定とて世の中々に身はのこり幾春
秋をか送りけんシテ。あさましやなす事なくていたづ
らにうき年月を三輪の里に住居する女にて候地また
此山かげに清玄法師とてたつときお僧のましますよ
し。檜あかの水を持ってウタヒ參らばやと思ひ候。ラキ。山
頭にはよる孤輪の月をいたゞき洞口にはあした一片
の雲を吐く山田守る僧都の身こそ悲しけれ秋はてぬ
れば問ふ人もなしシテ。山影門に入ておせども出ずッ
キ。月光地に敷てはらへどもまた生ず。シテ。鳥聲とこ
しなへにしてらうせいと静かなりッレ。アミド柴のあ
み戸をおしひらき伴ひ内にぞ入にける。本アシ實に秋
さむき窓の内レイセイ軒の松風うちしぐれ木の葉かき
しく庭の面門はむぐらやとちつらん。清玄が申や
ういかに女性御身はいづくの人やらんシテ。其時女顔
をあげわらはが住家は三輪の里山本近き。なり三輪

くとの。たはぶれも宵の。たき火の。空ごとに。カンか
すみ染出す。ハルさほ姫の。上帯にせよとか。ギンガハリ
横雲の。ハル山にはあらぬ。禿が腰を。二重廻して。ハツ
ミきり。とむすぶ。袖は手まりの。邪魔になる下二日
はウタ夢の初枕。浪のぬれ衣。おふといふ。トルしんく
のはやを。しゆすの苦。きせるの棹へ。三重うつ波の。
ひかたしよぼ。行うは草履。申すを吹ハルおくる春
風に。たかねど梅の。かほりユリステくる。ウタツツリそ
らに敷へてつくばねの。カン峯にすめくすみよし
の。本アシ松より宿の。松高き。ハツミ枝にかゝるを。ふ
るふて見ても。ギン落ぬおもひの謎かけて。とくる雪
間を。上ハルよく見れば。カン垣根花咲齊かた。三下り戀
しゆござらば。たづねてござれのふさ。前は高石が
きの。高もがり。さあさなどしよかどしよかいの。アイ
ノテ。本アシはや七草を。うつり香の。チャクリきぬ。ぎ
ぬ時の。門々をユリツツケ八聲せぬ間に。拍子して。中夜
も明そうよ。ギン小夜も明そうよの。下ノリほのくわ
たるしの。めの土手行く人に東風ムスビへて。ふく
の神風しづかなり。中大黒天は立上り楫に御手を。そ
へさせ給へば。ハルひるこは棹をさし汐の。ハツミこれ

の山本戀しくば地何しに我をしらの貌今は此世にな
き人の手向の爲のあかの水菩提の道にいらんとて是
まで參り候と涙ながらにのたまへば。清玄は聞よ
りもよく。見ればこはいかにわかれもとをき戀人
の櫻姫にておはします見るよりぞつとさむけ立わな
わなふるひ合掌し南無阿彌陀佛みだぶつと思ひ直せ
どぼんなうの跡より戀のせめくればとやせんかくや
と身をもたへ中有にまよふ清玄が心の内こそやるせ
なき。

○三輪の山 下の巻

シテ。姫君は御覽じてかゝる侘しき柴の庵世を捨人の
御住居みなみづからがゆへぞかしゆるさせ給へさり
とては此世は假の仇し身のあだし詞の人心たのむか
ひなきならひとてわがたらちねも世を去りて跡にの
こりし自らもよるべなき身の海士をぶねあまともな
してたまはれや。せめて未來は蓮葉のおなじ臺に
墨ぞめの衣の色はとにかくにシテ。薄くもこくも濁り
江のちりのあはれやうたかたのすゑは消行く身の行
衛導きたまへと有ければ。清玄はたへかねてア、
いたはしの御風情上アシ花の姿をそのまゝにあらさ

んとての菩提心ア、曲もなし曲もなし我は君ゆへ君をいとひつゝけふおもはずもあひ見ての後の心にくらぶれば昔にまさる思ひ草かはくまもなき水鳥のおしのおもひ羽おもひにはしなれざりけりさりとては色にぞいづる我心ヲキ、はらさせ給へ姫君と餘念なふこそ見えにけれシテ、櫻姫はきこしめし來世の事は見えぬおに一口の雨の夜もシテ、ナゲアツむかし男のツレあくた河戀の重荷やむさしのにつまもこもれり我もまた此草庵の草枕あふせはいかでそむくべきシテ「色地さりながら世の中のきのふにけふはあすか河頼むかたなき露の身をあはれとはせ給へやとなみだと共にくどかる、ラキ、清玄あまりのうれしさに心も空に姫君の御手をとつてしら玉カツ」なにぞと人の見とがめんこなたへいらせ給へやと伴ひ奥にぞいらたまふ。

○富士ふたすみ 二重霞にじゅうが

上ギンかみぎんはるがすみ。たてるやいづこ。みよしののユリスユリステ。チクリ山口牛ユリ三浦うらくと本地まだうらわかみ。わかぐさの。中ギンねよげにみゆる。ギン大門の。うちとの神のふたばしらあけゆくとしのスギン松かざ

り。上イロ日本めでたきトル國のなの。とよあしはらや。よしはらの。はつうぐひすのすがゝきも。そのつれびきの。イロナガシこまとめて袖うちアイノ手。下はらふよるのゆき。つもれば。ハル人のおい風も。うつりがふかき中の町みぎとひだりの。戀のふちげにつくばねやナガシはごいたのアイノテ、中カ、リおもひそめたる。五所イロチクリもんにはたんの花ぶさは。ときならねどもムスビ。一名をレイセイ廿日正月はつかなる。くさのと出てさへかへる。セリフ。イロ地此はちまきはすぎしころゆかりのおびのむらさきのいろこき。ときはめもはるの。はつもとゆいのゆづりはを。つたへて。けふぞしめなわの。ゑほうにむかふすきびたい。セリフ。ノリつゝみ八町さしがさも。ふじとつくばのこぼれゆきくさにおとせぬ。ぬりはなをユリステ。ひとついんろうひとつまへ三下り歌せくなせきやるなうきよはくるまいのちながけりやめぐりあふ。ナチシ。カールふたへまはりのねまきおびとりなりゆかし。きみゆかしハッしんぞ。いのちを。あげまきのこれすけ六がまへわたり。ふせいなりけるしだいなり。

○湯浴衣地主の櫻ゆあらいぢぬのうづ

上、シテ、しゆんせんにあめ有てはなのひらくること
はやし。ツレこゝぞギン名にあふ地おとはやま。をとに
きこへしはなのたき。おちこち人もいまこゝに。く
るまやどりやむまよとめ。いろにとままるふうりう
の。よをたてがみのはすはふう。心の上ギンかどはま
ろめても。すみ前がみのはなみづれこれや。むかし
のギンガハリゑすがたと。みなみをはるかにながむれ
ば大悲擁護のようすげしやう。下ぬれしがうへのぬれ
ゆかた。都女中のたきまふで。げにうらくと。はる
の日のながいかなたなを下さいたづま。シテ立いでてみ
ねのくも。ツレゆきちがひたちもどり下部にもたせし
女繪の筆を。手本のいろと色ユリ。くらぶの山の。ほ
とゝぎす。ながなくさとは。いづくぞととへどへだつ
る。はるがすみ。たちとまりふりかへり。それかあら
ぬか。ゑすがたと上くらべみすぢの。ノリたきのいと上
わかれくゝに三重合ノ手さしもぐさシテ。ウツツさして
それとはツレ人目にも。上みのの野がみのかみかた
ち。あるきぶりまで氣をつけて。ふうはかはれど。か
はらぬはユリ上ツツふたりが中と。思ひしに下班女が
ねやのかたみさへ扇子とはそらごとや。そらにしら

れぬわがゆきと下おもへばかろしぬり笠に花の。ふ
ぶきの牛ユリおとはやまあゆみをはこぶ。上めぐみに
てふたゝびつまにあふ坂の。山は櫻のえだにかくれ
てギン見てもみわかぬこゝろのやみ下おなじ上ぬり笠
御所風の。女中ばかりのしなかたち。上かざるや花の。
ノリ錦のまへ。たがいにそれとしらねども一つねが
ひのやえひとえ。いづれおとらぬはなのかは。行ちが
ふてはふりかへり。ギン上さゝやきあふも女どし。下み
るめにこぼす鹽がまや。手まり櫻の下ひいふうみい
よ。リ見よならく袖をかざして。上櫻人上えだにつ
けたるたんざくやナトスこなたもむすぶいと櫻みぬ
ふりながら見かはすも。イロ女心のはかなくも。あた
ら櫻にひがんの名。下よみ人の名の見まほしく本アツ
花のこのもと立かはるレイセイ袖やたもとの。にほひ
櫻につけたたんざく。手に取てたがいにみそじ。ひ
ともじのアイノテいはねどそれと見てのみや。人にか
たらん下櫻はな手ごとに。上枝を折もちて。歌あらそ
ひの色ほかに。うつりにけりないたづらに。中小町櫻
やいせざくら。枝とくゝの行ちがひ。あたればばつと
牛ギンちるはなの。上かほにひざくらせきのぼる。戀

の山ちに立留り合ノ手、シテ「上りんきねたみの山風に
下吹まきよする花のくも地こずるにかゝるとみる内
に。ふしぎやせうくこれさだは。下さをはれきぬる
地はうちわの。あたごおろしのおとは山。どうとおち
たるたきの水。そこはかとなき有さま也。ツレ、ハシ
「かねてのうらみいまさらの思ひをしめすたきまふ
で。これ真さまはこなたへと手を取りほりに入相の。
地ころしもみどうのらんかんに。見る人ありともし
らいとの。スエむすぶちざりのれい参りさせる。ゆか
たは上やまかせにふきかへしても。中々に。上おもひ
かへさぬねたみのいろ。かほにあらはしにしきのま
へさきにすゝんでゆく水にしがらみとなる地はん女
がもすそ。いそげばいと、土はらくと。上地かきあ
はせてもしどけなく。はぎのしろきもありくと。た
そがれどきのそらめにも見とれ。ウツリ見ほれてかね
のをに。すがるも戀のぶたいとび。げにや名におふ仙
人の流れを。くめる平内兵衛。まよふ戀ぢぞうき世
なる。

○いの字扇

竹婦人述

上といとも。下かしこし。日のもとの。伊勢は御國の要

ちに。ひとはけくもる男むき。上フツさももぎど
いな光いぬる。涼しく吹こして空もほどなくはれ。ウ
クやくたいも夏の夜を。カ、ル長くもがなといのりに
し人の。命の。すへひろはいつも替らぬときは木や。
五葉の。松の敷とりて。上五條あたりの夜語り。ウタ
貌のせしいにしへを。地野上の間につたへつ。今又
奈須の家印。よいくよハルふるともつきゆみの。ゐた
りや。ゐたり扇のまといさみある身のいわるかな。

○品定間垣の錦

中やみの夜は。よしはらばかり月夜かな。まがきのほ
かげくまもなく。ハル木アツきらく。しくも。まへわ
たり。あふぎをかほに。上鼻平太とたわれてすぐる。
牛ユリたわれおの。こしまきはをりかわゆらし。ある
いはづきんまゆはんにかぶろがのぞく。かほよ鳥ひ
ぢがさふかく。ゆくもあり。よるのあみ笠。しのぶと
すれどさすががたは。ものゝふの。ヘイセナガシ下鎌
倉ふうのいまやうに下ハシリすそながくとあしびき
の山鳥のおおとしざし喜代三郎出端 あいの手花かい
らぎの佐谷ならでこすにこされぬイロユリ大井川。宗
十郎出は あいの手五十三つぎかくれないおのこ島田。

にてなをうら。おもて本ユリ有るものと下陰と陽との
ふた柱。いもせの橋のいさぎよきいすゞの。川に。か
け初て。八百萬の言の葉を地紙にうつす。上神風のッ
ル。あふげばたかきいやしきも。こしに。アタルさしで
の磯ならば。ちよつとひらいて。見るめかなユリ。いや
な人をも。みしま江の藻にかくれぬの。よすがにも。
ウツリかほをかくすのてうほうはいづれしら地に下し
くはなしもよう。ギンガハリいろく。大井川。上クルい
かばかりふく嵐ぞと岩にせかる。もみち葉の中ハル
いせぎにかゝるその風情。ウツリお目に。入るの
と御氣にいらぬは。はねのけて。ウツリお目に。入るの
を入相のハルかねてふみにもいよくと。夕べもすぐ
る。妹が加ど。三サカリいづつくと水もらさじの。中
にいつしかくほんにエ子もちつばめのケンせなに
もクツつばめいと。らしいていと柳。子もちつばめ
にいと柳いかだに。花はいやらしと。いつそすみ繪が
ましろなる。中ノリ不二のはつ雪ふることも。いつわ
りなしと。みな月の。いまはた。夏もわすれ草くさか
り。笛のほのくといたいけ。上したる野がひには。
つのもじとこそいひやせん。いと。はげしきゆふだ

かなやの。本ユリ友千鳥文セアツかたちにかげのひよく
もん。是ぞあげはの。てふつがいエイカン屏風はまぶ
の。くらぶ山ハルねよとのかねのムスビ。をとづれて。
セリフ。ウタとなりざしきのむつごとも。もらさぬなか
の。水でうしレイセイみすぢのいと。ひとすぢは。き
れてこぬとの辻占も。こゝろがかりの。むらくもとは
ち。ふりあげて。まねけどもサシ月は。にしへと。ゆく
そらに三重おくりて出る君も有セリフ。ミヤケアツあだ
し。おとこのかへるさを。つけてくせつのむなづくし
とりのそらねセリフ。は。はかるともユリナガシ。よにナ
チン大門のゆるしなきせきの戸かたき。下紐を。むす
ぶの神の。ときそめて。本アツほかのきやくには。上あ
わづの森のセリフ。キンくすのはの。うらみられても。
せかれても。ユリ上おとこにたつる心中はセリフ。ゆ
みはり月のいるさ山中ハシリたひとすぢにおもひね
の。まくらの。ウツリしたにをとづる。ウツリちや屋船
宿のあさむかひ。こゑはしたなくねやの戸をイロサツ
リあけゆく。そらともろともにアツリうきよに歸る。
つとめの身。イロ地たれかはけふのつまならん。さだ
めなきよにさだめなき。身をしる雨のふる里を雲の

いづことながめやる。

○夜の錦

上「千代のちぎりの。一トおどり。まつざか。ウツリこへてゑい／＼な。人をまつ坂こへたる。ウツリおさまれる上みよのひかりを。か／＼げんとユリステともすともしのゆふけぶりたみの。かまどの。ノルにぎわひと。めぐみじまんは。ギン御歌の。みそじひと。ひとすぢに。軒もまがらぬ。中の町。ハル五町をいろのえだ／＼に。花がとうろかノリギン女郎が。花か。ふぢやさくら。かほばかりほんの。かほりは。たもとより合。ウツリウタガカリもるゝとめきの花なれや。ウツリヤレ花なれや。ウどうで。おくるゝつとめのユリツツ身。ハルつき月日のくる／＼と。カハクキア廻りどうろの。すまふとり。ウツリはだを見するは。はづかしゆないか合。ウツリいかにウタガカリ男じやなじみやと。かやの内にも。ギンムスビ仁義あり。イロ地じやれにいふたをわんにして。ウツリのちのまことは。いたづらにかはる燈籠の。ハルウツリあすか川。合きのふのくせつ。下水にして。さつと流せば飛はたる。上ユリツツケとうろの中へ。身を捨て。ともにこがるゝ。ウツリウツリ

まの文七あまりくまなき。かげおもはゆく。ナチス月もづきんに。かほかくすハツミユリ。ホアツ雲のゆき／＼の。しげけれど同じ風なるほしとほし。ウツリ雨のナガシふる夜も。また風の日も。上見付けよかしの。下九十九夜。まくらすいめと。ハツムかよひちは。ウツリ百に。なりてもわすれぬおどり。ウツリ人めづつみをこへたる。二上りしらすきは。ノフツツつかひにきたかた。きたか。つかひにもこぬ。たゞもこぬ。つまを上げたづねてしらはまこへて。あふてもどれば千里も一里あはで上もどれば入又千里ほんにへエイ／＼／＼／＼。サテイカニ下ハシリ行ては歸りかへりては。ハル通ひくるわの。はんじやうは。下いづれよの中。よしはらの。上ル色の千種をおしわけ。合かきわけゑいとう／＼。ウツリゑいとう／＼と。うからからの舟燈籠。上ヒロコがるゝ入身よりと書捨る。是又月の詞なり。

○追夢の秋

上ものゝあはれをしるあきの。ウツリ、上さびしさを心にかぞへまどろめば。とほその風におどろきて。はつかり。がねのウツリこゑまでは。上なをもこぼるゝしらすつゆを。アミドガ、リうけてすくふてうてなへの

まの。いとながくよるべのみづのたへすとふみちはつきせぬちぎりなれ。

○戀の題かさねすゞり

中筆にも花の。咲ばこそ。色をこめつゝかきつばた。きつゝなれにしからごろもアミド人の國まで。日の本の。めぐみもひろき君が代に。ウツリなびく。下ギン草木も。ハル戀ごころ。尾花がもとをゆくそでの。わけといふじをイロしりそめて。レイセイ手ならふ戀の。歌づくし。春の柳の。イロたよ／＼とみどりふくめる。其風情。をゝなの。かみぞめでたけれ秋は。さやけき。上三重月かげを。たがためこゝにうつしてかそらをみふゆの。うすげせう。ちら／＼雪のはつ戀に。つもる思ひを。うちかけて。岩間の水の。いかなれば。心ほどにはをとせで。風のみしりて。いたづらに。アツル下とをくきく戀。ちかきこひ。ギンきのふ歸りてまた村雨の。かわくまもなき袖のうへ。ホアツくちてほたるに。なる澤と。イセドキさは思へ共はたる火の。けぶりなしたもたつものはうきな戀の。中つらさにてほどふる戀のかれん／＼も。下イロいふてしまへばねもなき事よ。あふがたのみのちから草ヲドリ歌あふて。かほ

せて。はずのうきはをかききん。ホアツあめのかはづのウツリ下みのりをなけば。いかにむかしやししのぶらん。ウツリそのおりふしのすさみにも。まがきよみしうきかげはあしたに。しほむツルあさがほの。あさな上ゆふなはウツリギンがぶろのなかと。たはぶれしよも上ある日には。酒にかづけて。ねすがたやすそに。ふはりとかし小袖。ハルこゑウツリかけて。ゆきちがふ。そのかさゝぎの。三重ながらうか。ハルをのがはこぼすのべがみは。かぢのはならん筆とればハツムそれと。とがむるいなづまのウツリ。文せにくやひかりのうすからはのちにとかいて。上さはるよの心にかよふ。いひわけをまつむし。ならでねにたてんウツリ。上方ひざへなみだのはら／＼とおもへばあかのしみとなる。それがとうろの。ノリもやうぞとむれきて。人のホユリみじかや。イロ地ごやのかねごとときときは。いとせはしき袖のあめ。ぬまのまこものみづこへてのりのむしろに。ウツリしきみさすきくもきさやうも。たむけぐさなきたままつるよやさらに。下ノリはやくも瓜にむちそへて十とせ。あまりやみとせたつハルそのあかつきに。大阪めぐりくる。上花のくる

みてにくうはないが。水のあわびのかた思ひ。思ひに
 思ひますほがは。みるめとそれを。よむならばアイナ
 ナルうれしきこともあらめかる身は。あまごろもしど
 けなきしづがのきばの。忍ぶ戀。こひし。いとしの。ふ
 たすぢを。いとにくるわの。てにはには。ギンガハハむ
 すびし水をすいとよみむすびし。水のとかれぬを。う
 つじんなどとわる口や。神にいはふてナガシちはやぶ
 る。中ノリなゝのやしろのおんまつり。おゝみや人の
 せちゑにも。同じ物日をつとめてかわらぬ戀の。ハ
 ルほんに中「酔たまぎれに。女房にしやうと上」わしも
 あふとは。うらなしのなりもならずも。ちかふ戀。ゑ
 んの言葉の。いつのまにふうふのなかもやわらぐる
 イロチクリこれらを。戀のたねとして萬のことばうみ
 そむる。其ちゝはゝのふたうたの二たびすめる川波
 は。水よく船をうかめつゝ君をとときはの山によせ三
 重。うごきなき代は敷島の。みちずゑひろきカジあふ
 ぎの風。入ゑだもならさぬ時なれや一さしまはふま
 んざいらく。萬歳樂。アイノテよはひかさなる三つ盃
 の。よはひかさなる三つ盃のかげも。いくちよまわし
 だい。ナトシちぎりの歌共申なり。

○ひよみのとり
 ハルギン袖ひちて。むすびし。水をむすばずに。かくや
 ひよみのとりのなも。わかれつげねばイロにくからず
 つきぬ。ちぎりの。いづみぞと。ほめてそだて、筆染
 し。下そのふみ月をしのぶ草。ききやう。おぎはぎい
 とすゝき露もほろ／＼。ゑひ心。本アツみちはいくす
 ぢ。みだれあし。よしやよしなのレイセイ一トはぶねこ
 こも川霧たえ／＼にあらはれわたる朝返り。人めづ
 つみを。ゆきちがふそのきぬ／＼のうつりがのはを
 りそよぎてひとねふり。さむればもとのしらふのた
 かよ。のめや三國いち富士の三重。上ギン夢のうきよに
 これぞ此つもればおいととなるといふ。下それは月かげ
 これはさかづき。下げこならぬこそユリスチをのづか
 ら。心こばも。わか／＼と。まづとそよりもくみそむ
 る。露のめぐみのひとしづく水ももらさぬ。ひな酒や
 とのさまかみさま。さいしよさま。むすぶゑんから。
 をちこちの軒はふくてふ月も日も。いつか五日のあ
 やめ酒。本アツみどりの色も。ひきたがへ。アソアツか
 ほはもみぢのはしたなく。そらにも戀の瀬ぶみして
 あまの河原の石まくら。下ならべてねなんふたつば

し。かぢのひろ葉のさかづきはとしに。ひとよのユリ
 ツクおほもんだ。ぬかよるこびの。ぬかぼしはふけて
 ねむたきかぶろぼし。二上り歌松のふたばはあやかり
 ものよ青葉はましてをちばさへいもせかはらぬちぎ
 りとはうれしからうであるまいかナチャげに色しらぬ
 おのここそ。三下り玉のさかづきそこはかと本テツシ
 りめぐるとし月。とめてもちから車に。なゝぐるま
 なゝとせの夢。上さめていま。なゝのかしこき人もみ
 な。もとむるものは酒のとも。竹の。はやしの秋風に。
 光はさへぬともしびののこる。ほたるやしとふらん。
 ○御句 油 梳櫛男 黒髪
 色ハシリ「そがざくとうき名たちちのすそ野よりかた
 見におくる黒かみのアミドガカリいまとりあぐる牛ユリ
 手づからもむかしにウツ似たるとら御せんつゐにた
 むけの。水いれにハル朝がほいけし。曉も。かなしきひ
 るのかげぼうし。あゆみもやらずねもやらず。下あん
 じ詫たる身のうへを。上千代もといはふツツ松竹に
 下ふしを。こめたる。本ユリほうらいの龜の盃。取そへ
 て。中めうとの。上中のにげ水とハル人にしらせぬむつ
 ことは。又ねの床をいそぐなる。月日のあゆみ三重か

ぞふれば。鐘はねよとの便かや。ウツリ又はみらいの
 つかひかやウツリ妻にしらさぬむねのうち。涙の玉と
 くる。珠数をウツリ袖に隠して袖がうろ上ウツリ煙はそ
 らに。せい文の。ハルばちがあたらば。我つまの後の世
 までをクリムスビあんじ過。色地なくとはしらで笑ふか
 とハルウツリそむけたせなか。うちヒロイたゝきうれし
 き中のきをくれも切下おくわの。髪に櫛そへてハル鎌
 倉風のハツミ中々に下わけてすけなりスエときむねの。
 ウツリかみはくるわをつなげとや。すいてほだいてレ
 イセイゆたひて、ユリ又ねて上みたぐ。下みだれがみか
 り場の露と下なみだぐむ合ノ手そのくりごと。上き
 にかゝる。かゝれとてしも。うば玉の上ウツリわが黒
 かみの。長かもしハツミしめてもゆるむかた結び。ウツ
 心やすくも。打とけし。スハルこゝろがとはいいらへ
 には何とハルへんじも。しら玉か。つゆちる櫛をひい
 やりと。ゑりに落せば。上我命。ハルはや別れとや。な
 りなんと。思へば。いと隠しかね。本アツそのかね言
 も。筆の跡。下ノリ鳥のあととふ明鳥地ないて。くれよ
 とよびさして。つゐふところにおしいる。クドキ涙
 がさきかうらめしき詞はカハル跡におしつゝみ下つま

も隠せばユリわれもまたハル地しらぬ顔して。身をひそめウツリ若や悲しき別かとウツリせきくる思ひ下亂宮。ハル櫛筒しまふて。立留りしばし伺ひむたりけり。

○梅枕くせつうめざくらの鶏にほとり

上はるの夜を。ハル夢ばかりとのうらみより。うき世の夢のみじかきを。ハルかりねのゆめに。うつしかへクルわかれにギンなればいふこともわすれてあとのものおもひ。かいておくれれば。ギンふみのうそ申まことすくなき。ハルののちげに。鹿もハルなくねやしたふらん。野邊より山に。ハルいりあひを。ハルゆびにおりゐのまなごことひとりぬるよはすがたなくせつに上おれしギンくしのはをうらにひげどもこぬひとを色地まつにかづらのくるしさをウツリ。文セアッといてくれはのあやなくもサシ見へぬこゝろをともしびにうつりがウツリのこすツツかほとか合ノ手。上見てみぬやうな。下なりよりもかくす入クルなみだのたぎつ瀬に。ながれをさそふ川ちどり合ノ手よるのもやうはむら千どり中ギンないて。上あかしたときもあり。上またあふまでは。下ギンまちどをしよにふる。をのユリマハシもとがしは上もどかしくのみ見るひと下をぬ

さきとや。しられなんア、色地しるひともしらぬひの。上つくくくとみおくれれば野べの。きつねび。ちらちらと。下ハシリゆきかふそでもかざす手もハルあげやあげやの。しのゆめに。上かせのハルウツリとひたるいとやなぎ。ゑりにさしこむかほのゆきしらむかたをやながむらん。

○亂髮夜編笠みだれがみよるのあみかさ

上花の。ハル姿を。風ぐるま。吹ば狂ふてちりぬらむ。上水にも波の。くるひ有り山にも。松の本ユリ亂れがみ。上とりあげて入いふ人も。ないたかほせず腹たてすわらふを癖の。クル物狂ひ合ノ手富十郎出。クリ上しやんとこづまをとりかぶと。それにはあらぬ。編笠もおとこほしさの。星祭。本七夕の夜も仇に見ん。ノリ小袖をかりの狩衣と着ながしギンガハリながし長羽織結べばささの枝たれて。正月遊びハル戀草の。手まづさへぎる手道具を上並べた琴の雁金もギン二つつれぬを。恨みとや。三つ四つ手まり。つくはねの。上品をやりはこ。はねうちかはす。カ、ルつばめすゞめの。上とぶさにも。マイガカリゆき花がちるはの。空にはねまふはの。上うたは二のいとつゞみをうつし。上方ちこひしや

と。とりつけば。つたぐかべに寫かづら。ほほけきやうと。なく鳥は。梅をぬふてふ。ノリ笠かりて。マイいざや蘆をからふよ。よしあしのはを。結ぶならば。文よりましの。かねごともしりしは驚は使にきたかたいたかつかひにもこぬたゞもこの妻をたづねてしらはまこへて。あふてもどれば千里も一里あはで。もどればまた千里ほんにヘエツ、エイ、エイ、エイサテイカニハル引ば袂をふりきりてゆふべのくせつ。けふの酒。うつらくとねむるてふ。菜種は蝶の花しらす合ノ手。狂言ア、くく嬉しやな。上あれあれを見やむしさへもハル露を命の置どころウ命といふ字はたが書た。中白むくぬいで。見せさんせア、あんまりなつらにくやムスビ、上憎い／＼はかはいのうらよいやじやいやじやまたその裏よ。ないておどすはそれうらのうらヨイヤナエ上またうちふして泣顔をゑりにつめばさしのぞき。色地ともに涙のこぼる、萩は秋の。花野をふむあしもともイセナンド忍ぶ。人めのすきあふらとけてぬる上ギン夜の中ギン中たへて。ひとりまろ寐のあふらつば。たがこまくらのかみわけもヲヲみじか夜。ながらたけ長に。思ひまはせば明かぬ

る。上其曉のくしはらひ拂へど袖に散かゝる。もみぢぶくろの鹿ならで。いまはふたりがうき上こひすれどすゑの。すゑの松山色かへぬ。下萬代かけてへ。萬代かけてへ。ついでにひやうしにのりの道かねもたいいこも打そへて三下りそなた戀しさに七里が灘を。いのちやすてがゐきた物をほんにさ。ウツリはなれくこのあの雲みれば。あすの別れがおもはる、ほんにさ。ウツリ見れば見たす棹さしやとく。なせにとウツカぬ我おもひほんにさウツス。ナツかねてとむすぶ。手にはとにてもたゆくギン。西へちろり上東へちろりとほしの影ユリツツケハル水の月かや。姿はあれども。手にはとられぬは、き木のありや。ヤツハなしやと。尋ねて爰にムスビ下戀し床しの。上人がわらは、明のからすも下もろとも笑へ。人が歎かば其きぬ／＼のとりも啼きスエハル鐘は生滅妙法蓮花。ハルきよくひらけばギンたむけの水に。ハツミ花折りそへて佛の。みまへの。それ其姿三重戀人かへせ。うき人かへせ。かへし屏風の雲間もしらむ。はや東雲か。夫かあらぬか心の綱も。ともにも引る、思ひ川下ノリ舟はなくともぬれてゆく。かしこに。たてば。こなたへはしりこゝにとむるふた

りの袂そなた。ばかりの源氏雲。ハルおもひきりつば
地繪あはせの君はしらちの扇の風も俱に散行く夢路
の誠。上消てはかなき花の塵塚まどろむ宿とぞなり
にける。

○髮梳えもん作

中アツ竹のつとめに。ひまをなみ。つげのをぐしもさ
らでやと。レイセイとりちらしたる。玉くしげ。ユリすき
かへしぬる数々はサシ濱の。中眞砂やウツそらの星ユリ
ステ。下よむとも。つきぬ。てうちんの。ノム紋はいもせ
の。二柱チヌ女神下チクリ。男神のチヌ酒もりに。もりに
餘所にや。しられなん。三重そのきぬくの。カシら
梅は。櫻の色のわかれ酒。ハシリ土手の春色。絲柳出ハ
やなぎの髪。たよくとゑりにかゝれば。なであ
げて。ムスピカン顔とかほとを見かの月ギンチクリ袖に
くゆらすたきものは。霞たなびく。庭の面。ウいとし
き。人はユリ源氏とも。かほる大將。つかみざし。振
てふりだす。ウツリムスピ道中に。ウツリ上揚屋の。かど
の。うらくと。うしと見し夜も祐成と。ギンとらが比
翼の。上カン中座敷合ノ手あふ夜の数の。幾度か手はづ
の違ふ關守は。やりてがくせの。共りんきセリフ。カン

まいらせ候の。言の葉も。せめて一度の。返事もせず
にセリフ。文七むりは女郎の。習ひかやサイモカりの浮
世の契りとは。人やいふらんよし原雀。下黒い羽織
は。葛城の。よるべ定めぬ。かさね妻合ノ手、チドリガカリ
躍る其夜の目遣ひは。口舌のたねを思ひ出す。いやじ
やいやじやの。其夜半は。恨のたねを思ひ出す。思ひ
のふちのしら浪は。おきつまるひつ。物思ふ。松の二
葉の。三重鏡にも移り安きは人心。ウツりにくひくは
かあいのうらやましくも。末かけてセリフあしのまろ
やに。獨り臥とも。君が外替り。ハマたまふなヤドセツ
キヤウかはらじと。手に手をとり。つげ渡る。二つ枕
のかんたんも。妹背の夢をやむすぶらん。

○時雨傘

堤 堂 述

ウラすもの。おりてはたゝむ。上くものあし。折しり
がをに軒ばうつむらく。しぐれ牛ユリしみく。と。
いつかハルみとせの袖ぬる。中いづらやそれともみ
ぢばの中ちりてはもとの。ゑいごゝろ下おしむかもろ
こしのイロ地な。のかしこき人さへも。ほかにはなに
を。クルたのものなくウツリ、ハルそのしらすぎのマスこ
ゑしたふ。はるにはながれ。ウキユリはつふゆのサシ花

は。むかしのイロムスピおもひぐさ。本アシおもひにあ
まる。一筋に。ウツリふたすじそへてウタギン三すじの
いと。よそにとやかぬしのびごま。アイ。上さそふは
ウタ夜半の友ちどり。ゆくて。おかしき。ナチヌユリツヤ
ケくりごとにハルちとせをちぎる。ときわ木もカハル
日かげまつまの。草の名も。ハルさとればともにもうか
む瀬のかず地つむからは君がため。ちかひの海に。下
ノリいりねする。ハルゆめもかややく。ほし下り。梅も。
ハル入。ウツリ櫻もおしなべてチヌしもまつそらにさき
そろふ。御のりのすへぞたのもしき。

○千年の枝

納 子 述

ハル咲つゞく。ギンハル花は浮世の。ともし火と。本アシ
分行道も。しる人に。アミドガカリ白子ウツリ若松。わか
わかと。色みどりなる。ひと木こそ。四季の。ハル櫻の。
なにめでて。たとへ吹とも。神風や。いせの三重もす
その。上天津空。ウツリ。中くもの。通ひ路。明野が原
の。上ムスピにしきを。くゝる裾模様。ウツギン襷は小ま
つのちらしがき。ウツとかじと。帯を。ウツリむすび松。
おなじ中ギン出立の。姫松に。風のさそへる。機音は思
ひ。ユリマハン出たつ七夕の。下くれはあやはのとり

どりに。おさや。まねきや。かけ板の。おとゞれな
る。ムスピ折々は。松むし鈴むしきりくす。聲の。あ
やを織そへて千世美草と申さんや合ノ手「わが宿の。
シキアわが宿の。アミド草の。垣根の本ユリ。夏ながら。ハ
ル照つゞくなる。暑き日を。風の姿と。しほれしも。中
ギン神の心は。おりくくの。草木に雨の。ハルめぐみぞ
と。下流れの末の。民草や。葉ごとにおける。しら露は
秋へ。カダガカリこぼれて稻妻の。實の門田に。風そ
よぐ。櫓の葉がしは。ナチヌみさほよし。ノリ其ことぶ
きは。いをとしや。下しづえをあらふ松がねと。かせ
ふりほどくわか竹と。えだもつらなる。鳩のつえ。千
とせのさかを。中ギンこえむには。まづ萬代と。祝す
べし。

○和壽連草

竹 朔 子 述

クミツタことづては。沖風のたよりの。かへ言葉きけば
涼しき萩の葉の。かはらぬ上ハルよしの。おとづれも。
ノリことづてのまたかへことば。アファミふみをかくま
もあらいその。アミドガカリ硯のうみのはるくくと。カ
カルうそとまこと。中ギン字まじりに。筆のあゆみ
も。こへゆけば。戀のとうげはいもせ山。ヒキステそれ

をたのみに長き日も。むすぶばかりに。玉のおの。ユリツツケハルたま〜あふを。うどんげと。ギンハズミりこ
うな名をばさきもせで。下いつみしまゝのおもかげ
や。上松は久しきウツためしかな。二葉のいろのすへ
かけて。カハルたとへちとせは。ノルそふとも。か
みの内に。雪ふりて。うつせば。うつる本ユリもろし
ら。ギンウキたがひの。かほがたがひの顔の。おかし
からふかつらかろか。ふたつよいことなきくらす。本
ナシ蟬の羽衣。かたしきて。枕とるまも。三重やるせな
く。ハル手をかざしては。クルサツマ木の下陰に。あつさ
わする。夏の夜も。思ひ過して曇りナクリゆく火しや
う。水しやうユリナシハツムや。ともすれば。澤邊にも
えて。とふ螢。それよ。ほたるの晝は寐て。うちわ扇子
に下うちたゝかる。カハルこはいゆのみておどろけ
ば。ウツリ秋も近よる。風の音。文七團扇あふぎにうち
たゝかる。ウツ何がこゝろにそまぬやら三下り口舌
した夜は。互にすまぬそのあとは。どふいふてよかろ
やら。ア、おまへにとふたらいはしやんしよ合のこ
る下着に。のこりしおもひかねは六つ。どふしていな
したぞヲ、おまへにとふたらいはしやんしよナチス

マイアンのこりしをもひも恨みもむりも。上カハル明
けぬあいだの戀衣其きぬ〜はさま〜に。上ふか
くそまるとそまらぬと。ナトス心のいろのひながたは
ふたりが。カキユリ中のでんじゆにて。ノリ一草二名の
しのお草ハルちわに云たも。名になりて。ア、わすれ
ぐさツメルわすれぐさ。契りあればぞ花はさく。

○ときはの聲

上「賤がうみその。夜までも。カハル世渡る業こそ物う
けれ。中さらば礎を打べしや。あらおもしろの折から
や。ころしも秋のハル夕つかた。男鹿の聲を物す〜
ハル見ぬクル山風を。送り來て。梢はいづれひと葉ちる
ギン空すさまじき牛ユリ月影も。ハル軒の下ギン葱に。う
つろひて色地露の玉だれかゝる身の。おもひを。のぶ
る夜すがらやスエ引。ウツリ 平家宮樓高く立つて風。北
に廻り。下隣礎ゆるく急にして。上月西に流る。カハル
故郷の軒端の松も心あれ。己が枝々ふくとて。下嵐
の音を残すなよ。今の礎の。音へて。イロきみがそな
たにふけかせや。あまりに吹てギン松風よ我心かよひ
なばもしその夢や。破らまし。色地やぶれて後はこの
衣。下たがきてもとふべき。來てとふならばいつまで

もこゝろはたちもかへなんなつころもユリツツケ。う
すきちぎりは。ウツいまわしや。君がいのちは下なが
き夜の。ハル月にはとても寐られぬに。下いざ〜こ
ろもうたふよ。マイガカリうたるゝたびに蘆の屋の。ハ
ルともし。ウツリゆりけすくらまぎれ月も。三重かたぶ
き。おく霜の。いと物すこき折からに。むしのもろ
聲何々ぞ。手をたすけんとはたおりの。ウツつれさ
せてふきり〜すときはのこゑのまつむしに八千代
を。いのる三ツユリはふり子が。神をいさめのすむ
しのね。ハルりん〜とさよふけて。礎の音夜あらし。
かなしみの聲蟲のねまじりて。おつるつゆ。なみだ下
ノリはら〜。ハルほろ〜ほろと。いづれ。ウツリき
ぬたの音やらん。中ギンいざ〜さらばはたもの。
ころもを地織て旅人の。御なぐさめを申さんと。カハル
錦を織なる機物の中に想思の字をあらはし。ウツギン
衣うつきぬたのうへにゑんれつこのゑ。こゝはとこ
ろもうちかきまつふく。風と。もろともに。礎う
つ波のおとそへて。ギンしきりにひまなき機もの。
ノルとるや。くれはの手ぐりの絲わがとるは。ハルあや
はふむ木のあしおときりはたりてふ上きりはたり。ア

イヤハてふ〜とかたきもおそる、聲なれや。中ギ
ン實に織姫のかざしの袖。上たま〜あへるたび人
の。カン夢の精靈妙重菩薩も影向なりたりよもすが
ら。下よもすがらしづがいとなみひとめもはづかし
お休みあれや人々と。かこちわびたるばかりなり。
○助六郎の家櫻 作者 藤本斗文述
カン此里ばかり浮世ぞと。はかなき身にも。ことしよ
り。春知りそむる三重。上さくらばな。ねこじて植てギ
ンガハリ待つぐれの。よすがと成し中の町。上飛鳥の山
を。ゐながらに。爰に移してみちのくの。千賀の鹽が
ま。カハルとらのをに。通ふ衝のサツマ名にたてる。レイ
すまの若木の初櫻。ウツうはきの風にさそはれて。ウツ
リ群くる人のヒロイ袂まで。匂ひ櫻の香に愛て。くれな
ばなげの花の陰。ナゲアツよしの初瀬はものかはの。鐘
に散り行く夕景色菊次郎出は。カンこのもかのもの。木
隠れて。しゆび待つ君が仇櫻。うつらふ色や紅の。ウツ
リうす花櫻やかば櫻。上淺黄櫻や八え七重小襦そろへ
て。トルしどけなく上きぬ〜送る。曙のハル花のふ
ぶきの一トけしき。わけ類ひても嵐ふくスエルこの。ノ
ルした陰にかくろひて下歸るさつげる犬櫻。くせつの

荅。一中ほころびし袖を禿が力草。コハツレ引れて行や
後坂。三重心づよくもきりが谷此間狂言あり。中よしや頼
むな。一花心過しゆふべの憎いこと。聞いたうわさを
たきつける。胸の緋櫻上こがれては橋ばになびくウツ
夕煙雲の櫻の空にきへユリホアッ行るもしらぬ。戀に
身をうつり香ばかりカ、ルだきしめてまた寐のハヅム
牛ユリ夢をこそぐられうき世に歸る。すが、きの。ね
むい下。との。カ、ルユリ上いとさくら。睡さめよと。
ふきかけるたばこも薫る。三重花の雲海老藏出端。上鐘は
上野か淺草か。名もなつかしき花川戸。人にしられ
し家櫻ウツけふぞくくるわにさきをむる。ハシルぎ
よう牡丹の五つもんふたえがさねの。ひとつまへハ
ツリ一つゐんらうひかりそふ。珊瑚の珠の朱うばふ
リツツ江戸むらさきのはちまきに。色地ゆかりのい
ろの。もみぢ傘。上さすが名におふ男山海老藏せり有。
ナゲアッしんぞ命も總角の。これ助六が前わたり。風
情なりける次第なり。

○お七お七はせんごん戀櫻反魂香

中三重「はるの夜の。ゆめばかりなるたまくらに。かひ
なくたちしよめがはぎ。アミドガカリ三つ葉四つばに中

ユリとのづくり。ウツリそのぬしさまのゆくゑをも。上
ウツきかたよりの封じ文。かのかりがねもいまこゝ
に思ふもげにや戀のやみ。百夜もしたふ百千鳥。合ノ
手 市松出いなおふせ鳥。よぶ子どり。聲をばかりにま
よひしを。道行人はきやう氣とも。わらは、笑へけ
ふよりも。上あすかの山の。ひと霞をび引しめて。小
づまほら、八重ひとえ。すみ染ざくらたちいでて。
とらの尾をふむこゝちにて佛にいのるふげんぞう。
三重いつかふたりが家櫻。やうきひ鹽がま権ざくら。
淺黄ざくらはいやじやもの。ウツリよしやよし野の花
よりも。さみのおもかげちがひなく。レイセイうつす
がたにいだきつき。中物いふごとくかほとかほ。上ハル
よるべさだめぬみち芝の。とあるところ立よりて。
しばらく心をやすめけり。狂言 合ケンカ、リげにいと
ゆふともろ共に。たなびくうちありくと。吉三
郎が姿こそ。兼太郎出端。合ノ手。二上リ「かよひくるわを
入をちこちの。たづきもしらぬすがた繪を。けぶり
となすは我をこふ。中ゑんにひかる、車の輪。カンめ
ぐりめぐりてきさらぎや。ウツきつ、なれにし戀ごる
も。ハルお七もうれしき紫のウツゆかりほのめく中の

町。源氏の君を手本にて。かほる大小つかみざし。ふ
つてふり出す道中は。合ノ手 上外はちもんじウツおう
よふに。足はちどりかうぐるすの。月日星ぞとなく時
は。合 ハル 四方うら／＼とうらやまし。よそのくせつ
の手くだにも。狂言 合ノ手 中おんにさせるのもん日
にも。人にあわづのせいいらんと。さりしハルさりしあ
ふみやともへやの。ひたりと右に行ちがふ。下ノル土
手のしゆんしよく朝げしき。羽織をまねくきぬ／＼
に。合 三下リそなた思ふかしら浪の。舟につくばを
のせてゆくわいな。合「そなたおもふかしら藤小ふ
じ。かごにうき名をのせて行。合 上ハルうつ、にあふ
て下わりなくも。たがい手に手をとりの聲。下ノル横
雲しらむ別れ。路に。さへて三重かたちはうせにけり。
上お七は興さめこゝかし。地草葉にそでのひじきも
の。ハルくるひめぐりしありさまをみな。したはぬも
のこそなかりけれ。

○はつかの月

中ギンゆく川の流ればたえずして。下しかももとの水
にあらず。よどみにうかむうたかたは。かつ消え。か
つむすびて。まことにつねあることなし合ノ手「きの

ふはけふの一昔。かたり傳へし萩の聲。その初秋の天
津空。アミドガカリ月もはつかにかげうつる。はや七年
の。夢ごこち。ゆめにゆめ見る。夢の夜は。三重をざさ
がうゑの。上ハル白露を。ウツ袖にしれとて。ふく風や。
野邊のうきざり。なびくらん。ゆくむらすきホユリ
ほのかにも。結びかわせるをみなへし。うつくしよし
と啼く蟬のなきがらしたふおもひ草。もとの雫とさ
き立し。それは煙か。ありなし雲か有やなしやとこと
とひし。イロ隅田川原も遠からぬ。カ、ル野寺有てふ淺
草の。こなたにひびく夜半の鐘。つく／＼と觀すれ
ば。しやうじはすなはち。ねはんなり。ぼんなうはこ
れ。菩提なり。咲ちる萩の三重いろ／＼も。佛のたねと
きくものを。よしや歎かじおもふとも。下何かなにわ
ののりならぬ。あそびたはぶれ打むれて。チンドガカリ
秋のこてふのねぶりさへ。さとの道の一すちに。心
の花の春ならで。またぬぎかへぬ。夏ごろも。新に涼
し彼岸の合ノ手 上ハル「なみいさぎよき玉蓮。カン戀路
の中に生いでて。色香床しき。古の。上ハル十寸見の鏡
曇りなく。こゝにうつして。ふしや三下リ「笹にから
まり裳へまりが／＼袖くゝる手どりにひとつ。袂へ

二つ合 上三つ四つの時ゆきめぐる。はると秋との。すがたをも。おなじ情に水莖の。跡名をたえぬ。手むけ草。下ノリしげき人めのかれやらで。千年の後も。ウタイまつ蟲の上音にあらはる。吳竹や。末長からん深みどり。

○富士 卯月里

中ウ「ほととぎす。なくはいづこぞ。みよしのの。ユリ山口。三浦半ユリうら／＼と。あけぼのハルいづる三重日の始めクル寐ぬに目覺す。稻舟は。乗初よしと。のりそむる。ふねは名におふ寶ぶね。下ハシヨ永きよの。とをの睡りの。中みなめざめなみのり船の。音ぞよき喜代三郎出下「初すが／＼きのひ／＼くなる。初夜はうへ野か上淺草か。下遠寺の鐘の聲つれて。中ハシヨ瀟湘の夜の雨何ぞととはんみやこ鳥。橋場いほ崎クリ待乳山合。宗十郎出關の夜も。上ハルよしはらばかり月よかな。ウツリ中ギンふられぬ客もふる客も。笠きて顔を。隠す戀。首尾待合の。つじ占も。よしやゑにし衣紋坂。こゑていつまたくるはとは。誰が呼子鳥百千鳥上ハルうたに和らぐ。さみ線の中カ、ル引手にまよふ。歌がるたするのまつ山。すへかけてわかれても末に。御げんとは。む

すぶの神の。上ちかひなり。合。團十郎出ハル「人めの關のゆるしなく。かさの牢に。しよばぬれて。あめのみの輪の。さえかへる。イロ此はちまきはすぎしころ上ゆかりのすぢの。紫の。はつハツミもとゆひの。まきはじめ。ツバクウゐかふむりのギン若松の。まつのはけさきすきびたい。ユリつゝみ八町くさをよぐ。草におとらぬ。ユリぬりばなを。アヒ 歌ひとつ印籠ひとつまへ。ふたえまはりの雲をおび。ウツふじとつくばの。ハツミやまあひにそでなりゆかし。きみゆかし。團十郎出君なら君ならアヒ ナゲアシ「しんぞ命を總角の。これ助六がまへ渡りスエ。風情なりける。しだいなり。

○十寸見櫻

中「年をへて上花の鏡となる水に遠近さそふ入相はさくらの夢やさますらむ言は「かやうに候者は吾妻の片邊に住なれて絲竹の風を傳ひ得し十寸見第四世のおのこにて候げにや光陰は目た／＼くまとか申候扱も今年我初祖三十三回先人又十三回にあたり候にかの一節の賦比興をもて孝養の手向にせばやとぞんじ候ッレ 地スエ「きくやいかにはうはの空なる風だにもそよとの使ゆかしくてまがきまでもとたのむにはいなば

の山のまつくれをつゝみづたひの菜の花に蝶の袂のひら／＼と通ひなれたる早駕の蹴上のはこりたちまちに衣紋坂にぞ着にける三重衣紋坂にぞ着にける合ノ手今朝をきのふに春の日の長柄手がさにむら雨のふることながら本ユリいつともよしやよし野を中の町ひとめに千もとのほな盛アミドとまり鳥か牛ユリ黒羽織ウツ白むく緋むく香に匂ふ花にまたれつまつよひごとにその俤をいくたびかウツリ立出てみねの雲籬からげてよぶこ鳥あるはうちつれ伴ふて花の山路の箱階子カンのぼりつめたとわる口もクルおなじつとめのうき中をゆふべに歸る客ならば花なき里に住やならへると雁のたよりのかへりごとと、かば何かおもひ川をふる涙をつゝむには合ノ手 三サガリ「袖がかはいやかほよ鳥こぼれし髪をそのまゝに逢ふてわかれの無理ばかり合 淨りりそれもこなたにくからずきかぬふりして帯かくす顔にひやりとまだ寐のまくら枕はづかしすね言葉こちらむいたを中なをり手づからかゆるむかひ酒さめてうき世へ上三重かへり來るシチリ鐘のひゞきともろともハシル 田毎のかはづこゑ／＼にきぬ／＼いそぐ有明の朧にへだつはな

ぐもり土手に見かへる立すがたちるとやいはむうつり香を吹もといめよ袖のはる風。
○助所縁江戸櫻 作者 金井三笑 櫻田治助
三浦うら／＼とうらわか草や本ユリ 初花に本アシ 和らぐ土手を誰いふて中ウツ 日本めで度きハル國の名のウツリ豊原や吉原に根こじてうへし三重 上ハル 江戸ざくら匂ふ夕べの風につれ鐘は上野か淺草に其名を傳ふ花川戸合ノ手 龜藏出 上ハル「をちこち人の呼子鳥クルいなにはあらぬあふ瀬よりウツキ愛を浮世の中の町下ノリよしやかはせしこしかたをスエ ウツリおもひ出みせやすが／＼きのウツ 音じめのばちにクルまねかれてそれといはねどかほよ鳥問夫の名とりの草のはな引スエ

愛藏「せうし地まわりのわかいしゆかと思ふたれば助六さんじやわいな秀松「すけ六さんいままでさるおあひかたさまがおまへの事でこゝに氣をもんでゐさんしたぞへ愛「それにおまへはあくしやうばつかりしてゐさんすほどにそのやうにうはきではあげまきさんにしつばりとしかられさんせふぞへ

秀「ちつとあふてあやまつたがよいはいな助六さん愛 秀「ほんに龜藏「そふじやなあ

上ウク「おもひ上方アソのたる五ところ上ウク紋日待日のよすがさへ子どもが便カ、リユリまち合の本アシ辻うら茶屋にぬれてぬる雨のみの輪のさえかへるスエ

龜藏「せいもんくあさちがはらがたつはへ女郎衆のまことにたばこのしまつはないものとはしりながらかうならふはしばかわしらがやうなわかいもの心はおまへがたにのぼせられてうへをしたやにかへすによつてそれではこひがかなすぎとたれとつてくれないくちおしいはへくあたまのうへかみなりもんがおちかゝつてもびつくりともするおとこじやアなけれども女郎衆にはかたれぬくらまへからうしをひきたすやうにべらくべらくとしやべらせんすによつておまへがたにかまけてこのせつくまへもこまつたとこそいへこまがたとこそいへわしが心が竹町ならば二つにわつておめにかけたいわへあゝきのどくの山のしゆくじやなア愛「なんとしやうでんでうかへ秀「せう

しすけ六さんはなせはちまきじやる龜「すけ六がはちまきがおまへがたのおめにとまつたかゝるみな「あいなア

イロ地「このはちまきはすぎしころゆかりのすぢのむらさきも君がゆるしの下色見えてうつりかはらでときは木のムスビ 下ハル松のはけさき入す額引

愛「さあ助六さんはやうござんせられやらがまちかねて、あらふぞへ龜「何なアおらづれをひよつとおじやまになればわるうごんす秀「またすねた事をおしやるともかほ見せてやらんせいな龜「なにをおつしやるやらわしらはすいぶん見つからぬやうにかほをつゝみまするはみなく「そりや何んでへ龜「ふろしきで

中ノリ「つゝみ八町風さそふめあての柳ハシリはなの雪傘につもりし山あいは下ノリ富士と筑波をかざしぐさ草におとせぬ塗鼻緒上ウクひとつ印籠ひとつまへ三下リ「せくなせきやるな浮世は車ナナルめぐるギンガハリ日並のレイセイイガカリ約束にカ、ルまがさへ立ておとづれも下ノリはてはくせつかありふれたハル手くだにおちてむつこととなりふり床し君ゆかしムスビ

龜藏「きみならく。上ナゲアソ「しんぞいのちをあげまきのこれ助六が前渡りふせいなりける次第なり。

○巢籠花有里

作者 塚越二三治

上「見みへそめしもはやむかし申きのふはけふのスキエ日をかぞへ色地けふはきのふへくりもどし上カ、ルかよひくる身は下世をしのぶ草シキアおぼろにくものたたずまひレイセイはなにあらしのウツリさわりはあれどウツクそれをいとほぬかよひぢの下ウツリこよひは上ウツク土手もうらゝかに野澤の小田をすきかへし下ハシル去年のこゝろにたちもどる合ノ手。菊之丞出、セリフ有。上ハル「かわづのこゑのものなつかしや上ウクとても角ぐむ蘆ならばまがきに置いてせかれなばおもひきるせのムスビながれの身本アソ世をうたかたのひとやすみやすがもよしと立とまる引スエ 合ノ手 産三郎出、上ナゲ「はなの人まつ。さとありて。ハルやばなあらしはよもふかじ。本アソたとへふくとも。ゆるやかに。中えだにながるゝ五すぢの。ちまたは戀の。カンケル名にそだつせりふあり。上ハシル「それとしられてレイセイガカリせかるゝはたぎつしらいともつれたわけを上ウク

くだけでとくるはや瀬川下ギン坂東一のとね行く水の中をもらさじ離れじとよればそむけててらすはしんさいつのまにやらもろくもおつる。チンドカ、ルつらつらつばきその手にすがり。ウツク女子ごころのわびすけ喉ど。物をいはねばやまぶきの身にならぬとて。うらみられ。おふささるさの。ものおもひ。合セリふあり。下ノリ「ひろくすませよ武蔵野の。おきある月の影そへて。形にかげの二人づれ。かせをおこしてつれぶきの。中ギン誠やくわが宗は。地ふうざんろしゆく。嶮岨を越て。攀て三重登りてムスビふもとの道。中ギン北へうかれて雲晴る。上ハル露の玉菊若葉して。すがればかこつまへわたり。おもしろかりける次第なり。

○三燕櫻 臙夜

作者 塚越二三治

中ギン春がすみ。たてるやいづこ。雲水の。山口三浦うらぐと花もおくある。奥ざしき。見てみよし野のふもと。までうへそゆる日は。空のみか。こゝろのどけき。さくら人三重むれつゝ來ぬる旅ならで。花のふぶきの里のくれひな次出。此間狂言有。上「通ひくるとは。たま柳。一すぢ道も。つもりては。千筋にあまるハ

ルおもひの闇。下月夜にほめく。むらからす合ノ手。彦三郎出かねはうへ野かあさ草に。ゑんにひかる。この箕輪。雨にもゆく。雪にもいとほす其意にしさへ。いは崎の。ハッルあき葉三圍まつちやま。いもせのはしの。紙ぎぬた上ルかはづともにもすらくらん彦三郎。ナリふ有「このはちまきはすぎし頃。ふぢさく。かどや門だちの。ゆかりのすゑの。むらさきの。はつもとゆひの。まきぞめや。まわりそめにし。うらみごと二間の。ともし。かすかなる。夜ふけてきみに。あをによし。奈良のまゆみの。葉がくれて。うるかふむりぞ。わかまつの松のはげさき。すきびたい。つゝみ八町くさそよぐ草におとせぬユリぬりばなをウツリひとつ印籠ひとつまへ。ふたえまわりの雲を。帯ふじとつく波のやまあひに袖なりゆかし。君ゆかし。しんぞウツリいのちをあげまきのこれ助六が前渡り。風情なりける次第なり。

○契情反魂香

シテはるの夜の。夢ばかりなる手枕に。かいたく立しよめがはぎ。三つば四つばに殿造り其ぬしさまの行衛をも聞ん便りの封じ文。かの鴈がねも今爰に。思

た思ふかしら浪の。舟に筑波をのせて往はいな。そなたおもふかしら藤こふじ。駕にうき名をのせて行。うつゝに逢ふてわりなくも。互に手にてを鶏の聲。横雲しらむ別路に。消えて形は失にけり。行平興さめ爰かし。草ばに袖のひしぎ物。狂ひ廻りし有様を。皆したはぬ者こそなかりけれ。

○四季の屏風

いにしえの。いの字扇の要右うごかすまみ。ますますに影を。うつして十寸鏡うつる年月六つ折の三重ひらく屏風の。繪空ごとユリ畫工は誰かしら波の。橋うちわたす其氣色いかにとはまほし月夜うすく。かたりたまふべし「むかし張良かひのほとりにあそぶ時「一人の老翁きたりはいたる沓を麗水におとしその沓とつてはかせよと」良驚て見あぐれば。ひやうひやう。然として下まさに仙風ありやがてひざまづいてくつをとつてあたふ「翁莞爾としてほゝゑみ一卷の書をあたふこれに奇術の奥儀を得てフシ名をつたふると今さらに。むかしがたりも上かたりならぶも一雙に十二の。かづのひととせやふだん櫻の。花の友下そこはかとなきたはむれに空もおぼろのはつし

ふもげにや戀のやみ。百夜もしたふもち鳥。シテいなおふせ鳥呼子鳥。うき名を仇に下河邊行平が。身の置所君に引れてうつゝなく。せめて心を慰る。俣うつす繪をらごと。煙となすはなき人を。其たまよばひ奥州が姿はこゝにありくとシテかよひ廓をおちこちの。たづきもしらぬ姿繪を。煙となすは我を戀ふ縁にひかる、車の輪。廻りくつてきさらぎや。きつゝなれにし戀衣。行平嬉しき紫の。ゆかりほのめく中の町。源氏の君を手本にて。薫る大小つかみざし。ふつて振出す道中は。シテ外八文字おうように。足は千鳥か鶯の。月日星ぞとなく時はシテ四方うらく別れたし。年所の口説の手くだにも。思にきせるのもん日にも。人にあわすの晴嵐とさりしくあふみや巴やの左と右に行違ふ土手の春色朝げしき羽織を招くきぬぎぬに。あの憎らしい貌はいな。起請誓詞は嘘かいな。嘘にもしやれにも誠にも外の女郎に逢ひ申まじき事と書て置たはこりやどうじやちと又義理にもはぢさんせをちら向て居さんしても顔見にやならぬ傾城に實なしと。玉子の四角はなんけんけれど。縁のあるのが誠なり。もんさく手くだにういてきた。そな

らべ三下り「門の松が音かよふらしついきさらぎの蝶つがひ出たり這入たりゆふぐれの上衣紋坂からうきうきとギン人のこゝろの。はなにぞありける。夏たけ秋の燈籠に光りかやく月ふたつ過ては屋根の雪見山さぶいといへばうちかけを四季にたえせぬたのしみもおさむる御代のいちじるきためしをかたりつたふかも。

○助六廓の花道

「春霞たてるやいづこみよしのの山口三浦うら若き花櫻女のつぼみよりさかりの色にあひなれて。其通ひ路のかごとなるいよし御げんのかすくもほどけぬ文のあらましをかしくととめて氣にかゝる手くだぬしをまち合の辻うら茶屋の首尾の松うれしの森と寐かへれば舟のまくらのうすけぶり匂ふ夕べの風につれかねは上野か浅草か合ノ手「たがいにそめて廊とは假名にやわらぐ此里の初すがきにさそはれておちこち人の仇ごと水によるべの神ならではしばいは崎真乳山合ノ手半五郎出「あま雲のはれてぞのちにはつぎくら土手の拍子木音たてゝ通ひなれたる衣紋坂合ノ手八百藏出「人目の關のゆるしなく傘の

しづくにしよぼぬれて雨のみのわのさへかへる此
鉢巻は過しころゆかりの筋の紫の初元結のまきはじ
めういかうむりぞ若まつの松のはけさきすきびたい
堤八町草そよぐさに音せぬ塗はなを一つ印籠一つ
まへふたへまわりの雲の帯富士と筑波の山間に袖な
りゆかし君ゆかし八百歳「君ならく」「しんぞ命を
あげまきのこれ助六が前わたり風情なりける次第な
り。

○筆始四季探題

文 魚 述

シテ「いつしかに(と) 硯の水とけそめてツレ」ふでこ
ころむる文臺に今日はつ春の歌あわせ當座は四季の
さぐり題吟じあひたるよみ歌の聲もうらゝに日影さ
す谷の戸出る鶯の木傳ふ枝や梅柳かすみこめたる野
邊の色子の日の小松けふよりも君にひかれて萬代も
かはらでかよふ鴈がねの都の花もいかなれば跡に見
すて、行旅の越路は雪のしらくししらけたる夜の
むつごとに賤が垣ほに卵の花の盛りはまだき郭公お
ちかへり鳴く五月開空のあやめも軒近く花橋のうつ
ろひてシテ「昔ゆかしきツレ」袖のかも風にかかせし夕
涼ひるの暑も水無月のみそぎのけふの河の瀬に朝の

ゆふしで淺くともふかきゑにしほしのつまたむ
つごとのつきなくに明るは早き朝がほの花一時も千
とせふる松の梢に望月の照そふかげのさやけさは實
に二千里の外迄も果しなげなるむさしのや桔梗刈萱
われもかう「千草にすだくむしの音のツレ」いろく
なりしその中にわけてやさしき松蟲のこへりんく
と更渡る夜の間は人も白妙につもるや雪の朝げしき
水に浮める三重をし鳥のシナリ岸の枯蘆風さへて身は
かくれぬのかく迄にあらはれそめし戀衣 二上リシテ
「たれか恨みんわがおもひツレ深き契の戀中を忘る、
戀の仇事と三下リ」かわるもつらき人ごころ合ノ手「現
心か見し夢の覺て淋しき鳥鐘の聲本調子」ひやくさん
くわの程遠く道によせたる祝こそ實も直なる御代の
春猶行春の末とをくかぞへかぞふる言の葉は濱の眞
砂の数もつきせじ。

○御田

市川三耕作

シテ神かせやツレ上 ながれたへせぬいす川。なわ
しろ水に。せきいれて。たがやすわざも本ツリ月をへ
て。青葉苦葉の。しげみより。此ころこころ。かりけ
れば田の面の緑。色まさるますげの。笠の上白たへ

に。わかうきたなげなき。女ども。いつのほどにか來
あつまり。聲もすぐなる。とふしはシテ「あさざりに
あさざりにツレ」たもとひくのはむこがねのうたがひ
ぶかい山松や。よろづ代かけてやしわ子のすへのす
へまでかわらじよ「田子のたもとも。しほとけて。み
るかほさへも。おもしろき。時にうるわふ。さみだれ
のもすそ。ぬらしてうゆる田をきみが千とせの。みま
くさにとぎはふ民のよろこびは目出たかりける次第
なり。

○露の二葉

馬場存義述

シテ「靜に曉の夢にかたらへば懷舊の露手枕に結ぶ。
ツレ」其年月は三十三花橋にめぐりきて程ときすぎず
啼なるも昔ながらの聲なれやたへぬ音羽のたきの絲
三筋の末の百千筋惠みの露の玉の緒にかつぬきとめ
しことのははかわらぬ色のみどりどちシテ二上リ「松
の二葉はあやかりものよ青葉はまして落葉さへツレ
いもせかわらぬちぎりとはうれしかるふであるまい
か三下リ「たけのさえたもそよ／＼ものよなびくすが
たのはのめくふしは風のよすがであるまいか本調子
「はなのむしろに燈籠のかげにムスビ三つのともが

きうちつらねあそびたわむれいく久方のあめつち
とともに常磐の山びこのこたえぬ山はあらじよ
づ代。

○常陸帯花

櫻咲くさくらの山の櫻ばなちる櫻あれば咲花の移る
月日も過し年我おもひ子にうきわかれ行すゑ何とし
らぬ心の心づくしを立出つはる／＼尋ねまよひ來て
此ごろ爰に筑波山このもかのもの花の香もなになが
れたる櫻川ちりうく花をせきとむる手さきかよわき
すくひ網女ごころのみだれ髪取あげてゆふ人もない
てあかせし春の夜の夢ばかりとも見まほしと合ノ手
ゆききの人に立まじり行つもどりつこ／＼かしこ尋ぬ
る我子は何國ぞやおしへてたばせ給へとよ里の子ど
もの口々に面白ふ花をすくひなば戀しとおもふ其人
のありかをしらせまいらせんナニおもしろふすくえ
とか我うき心もしら浪に散ればぞさそふ櫻川尋ぬる
其名ちさくら子とあひにあひたる所からこれぞ他生
の縁ならんあら心なの河風や「いで／＼花をすくわ
ん山花ひらいて錦に似たり湖水たへてあいの如し
おもしろの春の景色や筆にもいかでつくさん 二上リ

霞の間にはかば櫻雲と見へしはみよし野の芳野の川の瀧津瀬や風に亂るゝいとざくらいとしかあいの兒ざくらわすれもやらぬうばざくら故郷を出し其月の其ひざくらもいつくとおもひかさねし八重櫻ひとへざくらに神かけていのりしかいも波のうへ雪もさくから見ながらにすくひあつめてもちたれどこれは木々のはなまこと我たづぬるさくら子をこひしわがさくら子を戀しき花見群集の其中より沙門一人立出てなんぢがたづぬる思ひ子にあわせて得させんこなたへとおさなき人の手を取りて花さくら子を是ならん母はゆめとも現ともおもひがけなき嬉しさにこれぞ誠に故郷の木の花咲や姫の御加護ぞと親子手に手を取かはしよろこびあふぞありがたきかくてともない立かへる親子の縁の深き事目出度きとも中々申ばかりはなかりけり。

○道成寺

ワキ「扱も其後紀州道成寺には。さる子細あつて。つき鐘退轉す。此程再興し鐘を鑄させて候。今日吉日にて候ほどに。かねの供養を致さばやと存候。いかに誰かある。鐘供養の場へ女人は堅く禁制と。ツレ」近國

在々ふれをなし。鐘の供養す。シテ「作りし罪もきえぬべし。つくりし罪も同音きへぬべし。鐘の供養にまいらむ。シテ」みづからと申は。そも同音よるべきだめぬ忍び妻。紀の路の奥にすみ馴て。人のこゝろをなぐさむる白拍子の鼓革。なる瀧川のながれの身。シテ「道成寺の御寺には鐘の供養の有よしを。同音みな人ごと夕間暮。月はほどなく入汐の。さして我身の罪科を。作らんことも嵐吹く。三室の山のみみぢ葉は。色に染みにし仇衣の。薄からざりし三従の罪おそろしく。殊には又罪業深き河竹の。シテ」ひと夜ばかりの同音「手枕に。人の思ひを身にうけて。ながき闇路や。シテ」黒髪の同音「みだれ心のむすばれて。煙みちくる小松原。いそぐこゝろかまた暮ぬ日高の寺にぞ着にける。シテ」やがて門前に立寄て。物申さんと有ければ。ワキ「警固の法師何事にやと答ふ。シテ」さん候。みづからは此國のかたはらに。住なれし白拍子。鐘の供養の御場を拜み申さん其ために。是まで参り候なり。ツレ「法師共聞よりも。心ざしは殊勝なれども。女人はかたく禁制と。仰出されたりければ。かのふまじとぞ申ける。シテ」女性かさねて。鐘供養の御場を。おがま

せてたまはらば。つねづなれし舞の袖。面白うかなでつ。此ほどうちのの人々の。心づかれをはらすべしひらにくと申ける。ワキ「法師は是をきし所詮舞もひとかなで面白う候はん。幸ひ是に烏帽子あり。是をめされて。面白う舞給へ。拜ませんとぞ申ける。シテ」女性よろこび。さあらば一曲かなでむと。あれにまします宮人の。烏帽子をしはしかりに着て。扇おつとりいろくの。同音「すでに拍子すすめけり。花の外には松ばかり。暮そめて鐘や響くらん。シテ」ひやくらん。「道成の卿承り。始て伽藍たちばなの。道成興行の寺なればとて道成寺とは名づけたり。同音「山寺のや。春の夕暮来て見れば。入相の鐘に花ぞちる。花ぞ散ける。さる程に遠寺のかねに。月落鳥啼。霜雪天にみちしほ程なく。日高の寺の。江村の漁火愁に對して。人々眠ればよきひまぞと。立舞ふやうにねらひよつて。つかんとせしが。おもへば此かね恨めしやとて。龍頭に手をかけ飛よと見えしが。シテ」引かづいでぞ合同音「入にける。ツレ」警固の法師驚き騒ぎ。急ぎかくとぞ申ける。ワキ「住持大きに驚き。さればこそ女人は堅く禁制と。かねては申渡したり是は偏にまな

ごが娘。霜夜が執心。また此鐘に恨をなすと覺へたり。我人の行法は。かやうの爲にて候へば。外聞祈て。この鐘を。ふたゝび鐘樓へ。ひきあげんと。同音「手に手に珠數を押もんで。水かへつて日高河原の。真砂の數はつくるとも行者の法力盡きかと。皆一同に聲を上げシテ「東方に降三世明王。ワキ「南方に軍荼利夜又ツレ「西方に大威徳。ワキ「北方に金剛夜叉明王。シテ「中央に大日大聖不動。うごくか。動かぬか。さつくの同音「曇曇。三曼陀。縛曰羅南。旋多摩訶嚕遮那。娑婆多耶。畔多羅吒干鑊。聽我説者。得大智惠。知我身者。即身成佛。と今の蛇身を祈るうへは。一念毒蛇のうらみの數。なに有明のシテ「つきかねこそ。合同音「すはすはうごくぞ。いのれ唯。ひげや手に手に。千手の陀羅尼。不動の慈救の偈。明王尊體力を合せてたび給へと。肝膽くだき祈りけり。祈りいのられ。つかねど此鐘響き渡り引ねど此鐘踏るよと見えしが。程なく鐘樓へ引上たり。ワキ「あれ見よ。蛇體はあらはれたり合ツレ「謹請東方青龍清淨。謹請西方白體白龍。謹請中央黃體黃龍。一大三千大千世界の恆沙の龍王。哀愍慈矜のみぎんなれば。ワキ「いづくに大蛇の有べきぞと。

いのり。シテ「祈られ。かつばとまろぶを。又起上つて。たちまちに。鐘にむかつてつく息は。猛火となつて。その身を焼ば。あらおそろしや。ありがたや。此のち又も障碍はなさじ。跡弔ひ給へと。いふ聲もろとも。日高の川浪深淵に飛でぞ入にける望みたりぬと驗者達御寺にいらせ給ひけり同音實に佛法の御威徳有がたかりける次第なりとて。貴賤上下おしなべて。かんせぬものこそなかりけれ。

○櫻さくら 曙あけぼの

シテ「時を得てひらくや花の山つゞき夫と眞乳の妹背山中をよせ来る舟の名は。千代をちよきとのやつしにて編笠ふかき夕づくい見てみぬふりのならはしもあふさきるさに堀へ漕ぐ舟宿の名ははじとみにかなでやはらぐ名所もまた袖すりの仇名ぐさいなりの名にやかば櫻あをかりしより名にたてる日本堤の名もゆかしたが名づけける衣紋坂五十間道名もふる道の名古屋の關の大もんや名にたち花やこしかたのつまと心に誓しゆかりをそよと待合の辻や女辻の櫛占もてるも月夜の名なりけり名よせの君かてうちんの紋でしらせて朝倉や名のりをしつゝ茶屋の門たせうの

○老の鶯

らうたいゑんにつれ櫻名にたつうかれ人シテ香爐峯の雪ならで簾かゝぐる夜櫻にすそ吹き返す駒下駄もいさめば花も仇なりと名にこそたてれ名對面名こそ瀧の絲筋も三すじ四筋や五でうの名色で丸めて中の町くる春ごとに跡絶す櫻さくてもうほのめかし植ゑてさかせて雪にしてはくや箒に名はの名を文でしらする名古屋帯めぐり逢ふとの名づけ親とてもふるな春雨はかはゆらしぬれてほどよき軒のつましのげばしのぐ袖袂舟で行身につまさるゝ忍ぶが岡といふわゐなとでもちるなら櫻はいとしちりてほどよき庭の面はらへば拂ふ笠の雪櫻が岡といふはいな花あれはいはるはなの名のなにしおふたる名なれやとてそふしが残すことのはにほうていかしゆつりんかしゆつ各其名によるものを山彦の名もなりのその眞乳の山の時を得て開くや花の山つゞき。

○鶯

「鶯や竹の小菰におい樂の。ねぐら定めて花にあけ。月に暮しをゆびおれば。流れてはやく八十瀬川二より「水ももらさじといふたはうそか。うそじやなひものうしろから合羽織させたる手ごころに。玉のお琴を

引しめて。うら約束を定めおくア、待遠し耳な草。きくもまじれるたかむらや。みどりあらそふ青柳の。ちまたにわれは巢立して。梅にさへすり櫻にふけり。扱ゆきの夜の寒さにも。むなしからざるひとふしは。實に此君のく。ちひろのかげに羽をやすめ。けふぞ其音をいれにける。

○源氏十二 淨瑠璃供養

河東中ギンシテ「去程に。武士のムスビ。下ツレ「矢矧の。里に。さへへたる。何がし長者の。おとの姫シテハル「淨瑠璃御前と。申せしは。峯の薬師のもふし子にて。ツレ「智恵もツキユキりやうも。ぼさつなる。花のまゆすみうすからず。中ギン雪の袂のにくからぬ。年もいざよふ下ヒスイ月の頃

一中、シテ、イロ「夜遊の友にめされしは冷泉十五夜はじめとしてツレ「なまめき立る女郎花。引ときくねる男山。おとこなりして陸奥へ。御門出の牛若丸。こゝに宿りをかち初の。えにし導く爪琴や

河東ツレ「ウツ時の調子も想夫戀。ハル山の端いづる月さえて。絲のしらべの。ハル音もすめりシテ「琴ウタ心盡しの秋かせに。須磨の。浦はの浪枕。ころもかたしき

ひとり寐に。ゆめもむすばぬ夜な〜 此内管絃

一中シテ調、イロ御曹子は妻戸に立より給ひて。面白の樂の音や。吾妻の琴はしられじと名に逢坂のそれならで。かほどめでたきほど拍子世にも。たへなる音楽に。笛のなきこそふしんなれ。調あづまの樂のならいにて。わざと笛をば吹ぬかや。よしつねはあれ樵夫の歌。草刈笛もあるものを。其音ひとつのなかりしは。一夜のふしをカ、いとふかやよしよし我も埋木のツレ「春秋知らぬ蟬折は。關守る人もゆるせとて。歌口しめす草の露。かくに合せて吹く笛の合音色や深き戀の淵。三河にかけし八つ橋の。渡り初ぬる縁ならん

河東シテ上「カイドウたへなるふしをツレ「それぞとも。知らで地謡ふ小童の。手拍子やめてツキ「姫君に。あれ聞しめせ宵ながら。妻こふ鹿か狩人の。鳩吹笛かとしどけなきツレ「言葉の露に玉琴の。つま音とめて音をとめて。聞に色ある笛竹の。下しめやかなりしムスビ一間の内

一中ツレ「人々かんじたれ人の。合す音色ぞかしがまし。野もせの蟲にあらなくに。見て參れよやかしづ

きと。冷泉十五夜仰をうけ。手燭たづさへレイセイ庭
づたひ。下柴のフミド網戸をシテ「おし明けて。月影
かざす殿ぶりに。さしもやさしき御姿

河東 ッレ「ウキギン上に唐綾下重ね。殊に袴の物好は。
貴船の社壇を繪がきたる。朱の鳥居に玉垣の。三重た
まをあざむく月額

一 中 ッキ「柳の枝にさくら花。梅の苔の香もく有
て

河東 ッキ「ナゲアシルしんき上氣のッレ「顔紅葉詞はなく
て姫君に。ホウレイアサさ、やき竹や心のたけ

一 中「岩木ならねば若君も。今宵を千代のはじめに
て。いつの時雨の神無月。出雲に結ぶ。縁の帯

河東 シテ「本アシ 姫も思ひの近まさり。ぞつとする程
いとしさとッレ「逢ふ嬉しさとやるせなき。いはねば
胸にさわがれて。人目はかれぬギン戀草のウツリウツ
ひは千束の文ならで水に繪を書く。上ムスビ筆つばな。
下うら紫の袖几帳

一 中 ッキ「それとさとりて。おもとびとおもて伏屋
にいひ兼て。お茶の通ひの愛想に。姫の心を汲かわ
す。濃染色の口切も。すいでりつばな黒髪さまよ。

尋ねて來ませ松の門。三輪の酒屋の詞娘じやない
がシテ「ウタ竹にサア雀はナアエ。上ハル品よくとま
る。とめて留らぬ戀の道。留させ給へとおしやれ
ば

河東 シテ「ハル今さらなんと姫はなをッレ「岩にせか
る、瀧川の。我から濡る花の雨。君が恵にさきそめ
て。うつろふ色はしら絲の。もつれてとけぬ。スエルお
こゝろと。夜の伏籠の香に匂ふ。はづかし盛り戀ざ
かり

一 中、シテ 詞「立ならびては深山木の。花のあたり
のあすならふ。わらは、いやしき陸奥の。金商人
の。吉次が下部

河東 シテ「ハルいひやつ、めど紅は。園生に植て隠れ
なき。君は源氏の右馬頭義朝公の八男にて。牛若丸と
は申さずやッレ「シチリけふの今宵の殿もふけ。御座
うつりとてすゝめられ

一 中 シテ「思ひよらずや往昔は。木屋七太夫アツ日影
鞍馬に人となり。イロ世を牛若とも名のらじと
河東 ッレ「つれなく見えし若君の。袖よたもとよとり
どりに。聞の。むつごとさゝめごと

一 中 二上リウタ「妹背の中を陸奥の。十符にやおち
ゐて。上ハル語るにおつる合君を七布にわれ三布に。

さんざ合さんざ寐よもの。我三布にナナス「寐よげに
色チクリ見へし御風情

河東 ッレ「はや明ちかき鶏鐘に。またのあふせを誓ひ
てし。ムスビ數の盃納る御代。相生松の萬代と。御門出
を祝しの樂

一 中 ッレ「またもしらぶる玉琴や。鞆鼓どびやうし
笙の音も。ウ時の調子をハル越天樂

河東 ッレ「春鶯囀の樂の音も。聞春風と諸共に。花を
散らして。どうと打

一 中 ッレ「秋風樂はあきのかせ。波をひっかしどう
と打

河東 ッレ「萬歳樂はよろづ打

一 中 シテ「ウタヒ青海波とは青海の
河東 ッレ「波たち打は採桑老

一 中 ッレ「拔頭の曲はかへり打
河東 ッレ「ハシル打なり。ハハハ。ホスイつきせぬ御
代のしるしとて。流れはたへぬ一河の東

一 中 ッレ「都の水も未清く

雨吟「かたり傳へて。むつまじやく。

○七重八重花のしをり

シテ「芳野山。こぞのしほりの道かへてッレ「まだ見ぬ
方の花を尋ん。シテ花を學ては花に傳へ。月を習ふて
月を詠ず。是や東の常とはに。直なるべしや一筋の。
日本堤を踏分て。名も新玉のけふよりぞ。歳ゆたかな
る門開く。まつとは戀の隠題。よそへ言葉の謎かけ
て。爰に廓の伊達くらべ。もらふてくれと夕嵐。吹か
せぬ手くだ流し目の。うつゝなひのを酒ぐせに。言ほ
どいたる仇し帯シテ「つめたい心もたぬのをウキ「うた
がひぶかいくるま井のシテ「そこはすむやらすまぬや
らッレ「くみてしら地の扇に誰か。よし原や江戸の女
は山ざくら。よむともつきじ花かづらシテ「土手の朝
風はだ寒おもふウキ「爰をのがれてまた外に。はなの
世界があるものかッレ「藤がまねけば柳がなびく。曙
しらの二上リシテ「おりもなし。蛙聞く夜の身はしの
びごまウキ「ひけてしん氣な手に疊さん。シテ「かどは
なふてもとしはのゆかぬ。しどけないのに氣はまわ
りむくッレ「浮名たつとも月雪花に。かへて思ふじや
ないかいな合ナナス「チンドッレ「まつちおろしの襟元

へ。ぞつとすことやあやめがた。引ばかへさじかひろ
んの。行も歸るも袖すりの。呼んでそら飛ぶ鳥のか
げ。たそやのともし水かきみ。うつりにけりないたづ
らを。筑波がのぞく船の中。シテ「またすねごとを五百
崎のツレ」口舌ほぐれてたちまちに。つい隅田川あや
せも知れぬ。おもひ逢ふてはうれしの森の。首尾の松
風ひやうしよく。船にぎわしきあけくれやシテ「緑樹
かげしづんでは合ツ」魚木にのぼるみち汐の。椎の
わか葉をのどかなる。駒止石の苦むして。なづとも
盡じかはらじと。八千代の末も舞諷ふ。祭へ久しき
めでたさよ。

○七くさ

佳 續 述

七くさや明ぬに聲のよい夢をさますもはるのひとも
やう家鶏のたれ尾の長々しいはひそめむとかぞふ
れば二上リ「すなすなすしる片なづな五ぎやうたびら
こ耳な草なをいろく」の種々は師遠にこそ問べし
や。シテ「平家ガカリ」白河の院の御時よりツレ傳へて
今の世にうちも揃ふや七種のおとも日本の國々には
やさぬ宿こそなかりけり。

○橋辨慶

は寺へ登るべし今宵計の名残なれば五條の橋に立出
て川浪そへてたちまちに月の光をながめんとツレ「夕
浪のけしきは夫か夜嵐のゆふべほどなき秋のかせ面
白の景色やなそらうき立つ我心浪も玉ちる白露の
夕がほのはなの色五條の橋の橋板をとろく」とふ
みならし風すさまじく更る夜に通る人をぞ待居たる
シテ「すでに此夜も明方の山塔の鐘もすさまの雲の光
輝く月の夜に着たる鏡は黒草おどしにおどせる大鏡
草摺ながにぎつくと着元來好む大長刀真中取て打か
つぎゆらりく」と出たる有さまいかなる天魔鬼神な
りとも面をむくべきやうあらじとわが身ながらもも
の頼母しうて手に立敵のこひしさよツレ「川風も早吹
過る橋の面に通る人もなきぞとてこへろすごげに休
らへばシテ「辨慶斯ともしら浪の立寄渡る橋板をさも
あらゝかに踏ならせばツレ「牛若かれを見るよりもす
はや嬉しや人來ると薄衣猶も引かづき傍により添た
たすめばシテ「辨慶かれを見付つゝ詞をかけんと思へ
ども見れば女の姿なり我は出家のことなればおもひ
煩ひ過行けばツレ「牛若かれをなぶつて見んと行違ひ
ざまに長刀の柄元をはつしとけあぐればシテ「すはし

シテ「是は西塔の傍に住む武藏坊辨慶にて候地我宿願
の子細有て五條の天神へ丑の時詣を仕候今日満參に
て候ほどに只今參らばやとおもひ候いかに誰か有
る。ツレ「御まへに候シテ「五條の天神へ參らふするに
て有ぞそのぶん心得候へツレ「畏て候又申べき事の候
昨日五條の橋を通り候處に十二三なる稚き者小太刀
にて切てまわり候さながら蝶鳥のごとくなるよし申
候先々今夜の御物詣は思召御とまり候へシテ「言語同
斷の事を申候たとへ天魔鬼神なりとも大勢には叶ふ
まじ追取込てうたざらむツレ「追取こむればふしぎに
はづれかたきを手元へよせつけずシテ「手近く寄ばツ
レ「目にもシテ「見えすツレ「神變きどくふしぎなる化
生の者によせ合せかしこふ御身うたすらん都廣しと
いへども是程の者あらじげにきどくなるものかなッ
テ「さあらば今夜は思ひとまらふするにて有ぞ去な
がら辨慶ほどのものが開逃は無念に候間今夜よふけ
ば橋に行き化生のものをたいらげんとツレ「ゆふべほ
どなく暮方の雲のけしきを引かへていともしづかに
更る夜を遅しとこそは三重まらひたれシテ「おそしと
こそは待居たれツレ「さても牛若は母の仰のおもけれ

れものよものみせんと長刀やがて取なをしいで物見
せん手なみの程と切てかればツレ「牛若はすこしも
さわがす突立直つて薄衣引のけつゝ「ンブ」太刀
抜放つてつづさへたる長刀の切先に太刀打合せつ
めつひらひつ戦しが何とかしたりけん手元に牛若寄
ぞと見えしがたゝみ重ねて打太刀にシテ「さしもの辨
慶合せかねて橋げたを二三間しさつて膽をぞけた
りけるあらものくしあれ程の小姓ひとりきれば
とて手なみにいかでもらすべきと長刀柄長く追取延
てはしり懸つて丁と切ばツレ「背けて右に飛ちがふ
シテ「取直して裾をなぎはらへばツレ「おどりあがつて
あしもためすシテ「ちうをはらへばツレ「かうべを地に
付けシテ「ちやに戦ふ大長刀打落されてちからなく
まんとすればツレ「きりはらふシテ「すがらんとするに
便なし詮方なくて辨慶はまたいなる少人かなとてあ
きれ果てぞ立たりけるふしぎや御身誰なればまだい
とけなき少人の斯程けなげにましますぞ委敷名乗お
はしませツレ「今は何をかつゝむべき我は源牛若ッ
テ「義朝の御子かツレ「扱汝はシテ「西塔の武藏なりと
ツレ「互に名乗合ひ降參申さん御免あれ少人の御事我

は出家位も氏もけなげさもよき主なれば頼むなり卒
忽にや思召らん去ながら是又三世のツレ奇縁の初め
今より後は主従ぞと契約堅く申しつゝ薄衣かつがせ
奉りシテ辨慶も長刀打かつゝ九條のツレ御所へぞ
まいりける。

○汐汲里の小事

伴 清 述

さして汐路に跡たる、洲崎の浦に宮柱ふとしく建る
御神は辨財天にておはします南は蒼海渺々として松
ふくかせも心せよ元鹽がまのうらさびて汐くみ車め
ぐり来る大盃も浪たゝぬ客は融の大盃の其全盛の數
數はまことに日々新にてけふもつきせぬ遊びなり
シテ花の夕顔のきばにさくをツレかゝげて見ばやすだ
れ貝雪とちり敷く櫻貝うつりかはるは月日貝いつか
は君を見る貝やあさりの貝の淺からぬちぎりは千代
もかわるまじシテ光りかやく日の本や唐土までも
かくれなき干珠滿珠の世語りをくめやくめくすざ
きの濱の汐こそ國の寶なれ。

○秋の白膠木

三下リシテ秋やくる。もちの夜ごろもたちまちに。
此長月の有明の月の名残のつきすして残るともしの

しらむよりかりのほかに聞ゆるはかの稻舟のいな
にはあらぬをみなへしナチスシテたとは粟の内侍
さへ九日小袖のツレ紋ちらし箱でうちんや長柄傘雨
にははするかへ帯ツレそれもそのそのをのが名の
仇にたてれどさほしかのツレレイセイつまこふ聲の
もれてさへ本アツ秋かせぞふく吹上の濱に咲てふ白
菊のムスビ星かと露を見まがへし雲の衣の絶まより
いとまさやかに三日の月シテはやくも五十と七とせ
にたむけぬるでのユリステ紅葉ばにツレながれのすゑ
を汲てしる清き音色も三重山彦の合「こだまのひき
つきせねばムスビ常磐の松の男ぶりよしや女松のへ
だてなく明るもしらで鳥がなくあがつまぶりのすさ
みかな。

○江戸露

鶯 郵 作

シテ花に啼くうぐひす水に栖むかわづ迄何れも諷ふ
一曲ありツレ人はもとより妙音の仰げば高き梁の塵
を動かすためしある其節おしの中にしもひろまる道
は大江戸にひきわたたりて朱欄干昔語りを今の世も
傳へくといや榮へなびかぬ草もなかりけり。シテ
「扱淨瑠璃の其始信長公の御側に「小野のお通と申せ

しは能書秀才世にひろくツメ「淨瑠璃姫のむつごとを
十二段にぞ書しよりこの道初て起りけるツキ「それよ
り世々に絶せずもツテ「土佐ツキ「外記ツメ「又は大薩
摩シテ「半太夫とてさまゝに節は替れど誰しらぬ東
訛を引かへておもしろしとや取はやす音曲にこそと
どめけれツレ「唐迄もかくれ無きげに其名やくらぶ山
花の錦を翻す「月にうかるゝ二人が中はツレ「はづか
しいほど照まさる雪のふり袖ふらばふれくむすび
てとけぬ中じやもの本テツシ「此淨瑠璃の嘘言は日々
にして又日々十寸見櫻の咲匂ふ貴賤上下おしなべ
て皆感せぬものこそなかりけれ。

○松竹梅(一名老松)

作者 文 魯

「實におさまれる四方の國。四方の國關の戸さゝで通
はん。昔かしこき久かたの。天滿神のめでまし。松
の葉色も時めきて。春をむかへてたちまちに。梅の
匂も深かりし。徳を顯し文學の。盛を祝ふ此神の。先
社壇の體を拜み奉れば。北に峨々たる青山あり。臘月
松閣の中に映じ。南に舜々たる瑗門あり「斜日竹竿の
もとにすけり。君ならでたれに見せんうめの花。間
夫の浮名もせかれては。翠帳紅閨の癡話ごと。今

宵きたのもさゝの醉。子どもがすゝむ袖の梅。香り
ゆかしき仲の町。太夫といふも唐の。かしこき君の爵
とかや。かやふに名高き松梅の。かはらぬ中のふた木
とて。枝さしかはし諸共に。千代に八ちよにさされ
石。苔のむす迄鶴龜の。よはひもながく常いはの。か
たくちぎりを結び帯。解くにとかれぬ行すへを。神も
まもれと我神託の。告を知らする松風も。梅も色そひ
かはらずも。久しき春こそ。めでたけれ。

○邯鄲 下の巻

一中ツレ「三重ふしぎさよ。シテ「有がたの氣色やな
ツレ「元より高き雲の上。月の光も明らけき。雲龍
開や阿房殿。げにも妙なる有様のツキ「庭には金銀
の砂を敷きシテ「四方の門邊の玉の戸をツレ「出入る
人の姿迄。光をかざる粧ひは。誠や名に聞し寂光
の都。喜光城のたのしみも。かくやと思ふ。氣色
かな。

河東シテ「東に三十餘丈に。銀の山を。築かせては。黄
金の日輪を出されたりツキ「西に三十餘丈に。こがね
の山を築かせては。銀の月輪を出されたり。ツレ「たと
へば是は長生殿の内には。春秋をとめたりシテ「不

老門の前には合ノ手ツレ「日月遅しといふ心を學ばれ
たり

一中 イロ調「如何に奏聞申べき事の候。御位に即き
給ひては早や五十年なり。然らば此仙樂をきこし
召さば御とし一千歳迄保ち給ふべし。去程に天の
こんずやかうがいの盃。これまで持て参りたり。

河東 シテ「そも天のこんずとは

一中 シテ「是仙家の酒の名なり

河東 シテ「かふがいの盃と申事は

一中 ツッキ「おなじく仙家の盃也

河東 シテ「壽命は千代ぞと菊の酒。榮花の春も萬年。
君も豊にツッキ「民さかへツッキ「國土安全長久の。榮花も
いやまして。猶歡びはまさり草の。菊の盃とりく
いざやのまふよ。

一中 ツレ「めぐれや盃のくツッキ「ながれは菊水の。
流に引れて。疾く過れば。手まづさへざる菊ごろも
のシテ「花の袂をひるがへして。さすもひくも光り
なれやツレ「盃の影のめぐる空ぞ久しき

河東 シテ「我宿のツレ「我宿の菊のしら露けふごとに
幾世つもりて淵と成らんよもつきじ

一中 ツレ「藥の水も。泉なれば。くめどもく彌増
に。出る菊水をのめば甘露もかくやらんと。心もは
れやかに。飛びたつ計り有明の。夜晝となき樂は。
榮花にも榮耀にも。實に此上のあるべしや樂、合ノ手
三下リ ツレ「いつ迄ぞく。榮花の春も常磐にて。
猶幾久し有明の。月人男の舞なれば。雲の羽袖を重
ねつ。歡の歌をうたふ夜もすがら。日は又出て明
らけくなりてシテ夜かと思へば

河東 シテ「ひるになり

一中 ツッキ「晝かと思へば

河東 シテ「月またさやけし

一中 シテ「春の花咲けは

河東 シテ「紅葉もいろ濃く

一中 ツッキ「夏かとおもへば

河東 シテ「雪も降りて

一中 ツレ「四季おりくは目のまへに。春夏秋冬。
萬木千草も。一日に花さけり。おもしろやふしぎ
やな
河東 ツレ「斯てころ過ぎ時去れば。五十年の榮花も盡
て。誠は夢の内なれば。みなさへくとうせはて。

有つる邯鄲の。枕の上にシテ「眠りのゆめはさめにけ
り

一中 シテ「如何に御旅人。粟の飯の出来て候。とふ
とふ御目を覺れ候へ。さまされ候へや

河東 シテ「二上り廬生は夢覺て。ろせいはいゆめさめて。
いそぢの春秋の。榮花もたちまちに。唯茫然と起上り
てツッキ「さばかり多かりし女御更衣の聲と聞しは。松
風の音となりシテ「宮殿樓閣はた邯鄲の假の宿ツレ
「榮花の程は五十年。さて。夢のあいだはあは飯の一
するの聞なりシテ「ふしぎなりやツッキ「はかりがたし
や

一中 シテ「二下りつらく人間の。有様を按ずるに
ツッキ「百年の歡樂も命。終れば夢ぞかしナチスシテ
「五十年の榮花こそ。身の爲には是迄なれツッキ「榮花
の望もシテ「よわひの長さもツレ「五十年の歡樂も。
王位になればシテ「是迄なりツレ「實に何事も一する
のゆめ

河東 シテ「南無三寶。よくく思へば出離を求る。知
識は此枕なりツレ「げに有がたや邯鄲の。夢の世ぞと
さとり得て

兩吟望かなへて歸りけり。

○廓八景

劇神仙稿

シテ「まづ春の仲の町ツレ「入相霞む誰彼に簾か、ぐる
ハル軒のつま大門口の晴風といへば岩間の水もらさ
じと結ぶ契りの盃をシテ「さすが恥らふつき出しは見
て見ぬふりの流し目にツレ「照そふ顔の夕日影初會の
夕照是ならん合ナンド「しのぶまがきに身をこがす
闇のはたるの間夫ぐるひせきに關もる神々もア、恨
めしきうら茶屋のツレ「蒲團にぬる、夜の雨ツレ「蓑蟲
すだく夕暮の淋さしらの盆燈籠光は露の玉菊かツレ
「二十五絃のツレ「瓜音は琴柱におつる雁の弓合から
櫓おすかと聞迷ふ是や座敷の歸帆にて下風の便の玉
梓をたのみ田面の節供へツレ「月の名におふツレ「八文
字鶴のあゆひの白小袖これぞ暮雪とさながらに三浦
山口家々の名取の君のゑくぼにはシテ三下リ「しんぞ
命もみな投節のツレ「聲も曇らぬ秋の月ツレ「楯子にも
る、霜の色シテ「土手の風さそひ來てツレ「晚鐘寒き夕
べにもわかれ郭の全盛は夢か現か白柄組の調子ナナル
「その大小の神祇組天の浮橋かけ初て戀教鳥背背鳥
鶴鶴組のせき立ていざ供せよといふまゝに。長が許

へと急がる、伊達の遊びぞ面白き。

○弓はじめ

壽阿彌作

「去程に八郎御曹子爲朝は。保元のやぶれより。身をひそめておわせしが。遂に平家に生捕れ。手足のふしをくちかれて。伊豆の島へぞ流さる。元より此島と申は海岸孤絶の所にしてしばし風待つたれにとて。ともづな繫ぐ船もなし。岩をうがちて家となし。荒布わかめの敷物に起臥つらき配所の床。たまくこととふ物とは。松の嵐の聲ならで。浪のかすむに春を知り。霧を秋ぞと見る計りかゝる島にも。住人のあれは有とて蚕の子が三下り。釣する戀するしほらしや。ヤンレ戀するしほらしや。月の出汐に千鳥の啼は。月見にきたか妻ごひか。月はみに來ぬつまこひて。あふた一夜を千代となくホシニサナナス。かくて年月ふるまゝに。天性無雙の驍勇にて。手足も自然と本復せり。あら心地よし去ながら。我武運のつたなきに。人のうき身を思ひやり。運命長久家繁昌。子孫の榮へを守るべし。此願とほるかこゝろみに。弓始せんでやとて。山椒の丸木のゆみに藤蔓かけ。五寸まわりの三年竹。鯨の鬚をみつ羽にはぎ。鐵をこがしてひつそぎ

に。はいたる矢とつてからりと打つがひ。こよみなければ歳徳も。黄幡も知らねども。先祖頼義ましませし。鎌倉こそは恵方なれと。能つ引きひやうとはなつ矢は。十八里の海をこへ。光明寺の門前に。矢響してぞ立たりける。矢の根の井とて今もなを。語り傳へ言つたへ。聞傳へたる弓勢には天魔惡神魑魅魍魎。いかで近付事あらん。別して痘瘡安全を。守らせ給ふ御ちかひ。勇士の威徳ぞ有がたき。

○熊野

二上りシテ清水寺の鐘の聲ッレ。祇園精舎を顯し。諸行無常のこゑやらん。地主權現の花の色。娑羅雙樹のことわり也。生者必滅の世のならひ。實にためしあるよそほひシテ。佛も本は捨し世のナチスッレ。なかばは雲に上みへぬ。鷲のお山の名を殘す。寺は桂の橋ばし下河原。南をはるかに眺れば合シテ。大悲擁護のッレ薄がすみ。ゆや權現のうつります。御名もおなじ今ぐまのシテ。稻荷の山の。薄紅葉のワキ。青かりし葉の秋。また花の春は清水のッレ。唯たのめたのもしき春の千々の花ざかり合ッレ。山の名の音羽あらしの花の

雪深き情を人やしるシテ。妾御酌に參り候べしワキ。如何にゆや一指舞候へシテ。ふかき情を人やしるシテ。なふなふ俄に村雨のして花をちらし候はいかにワキ。實に唯今の村雨に花のちり候よのふシテ。あら心なの村さめやな。春雨の降は涙かふるはなみだか櫻花散をおしまぬ人やあるワキ。よし有げなる。詞のたねとり上みれば。いかにせん都の春もおしけれどシテ。なれし東のはなや散らんワキ。實に道理なり。あわれなり。はやく暇とらするぞ東に下り候へシテ。何お暇と候やワキ。中々の事とくく下りたまふべしシテ。アラ嬉しやたうとやな是觀音の御利生なり。是迄なりや嬉しやな是迄なりやうれしやなッレ。かくて都にお供せば。又もや御意の替るべき。たゞ此まゝに御暇と夕つげの鳥がなく。東路さしてゆく道の。やがてやすらふ逢坂の。關の戸ざしも心して。明け行く跡の山見へて。花を見すつる雁のワキ。夫はこし路へシテ。われはまた。あづまに歸る名殘かなッレ。東に歸るなごりかな。

○追善

籠園述

「ねがはくは花のもとにとうそぶきし。そのきさらぎ

のもち月に。花と夜おくるいざよひの。あたら光をこたつなくおもふ浮雲ア。まゝならぬ。無明の酒の酔心。のめやうたへやよしそれも。思へば煩惱即菩提。狂言綺語の道すへに。讚佛乘の縁とかや。さればとよ。書寫の聖のその昔。室の長者が庵にて。興をすすめの一とかなで調子カハリ。周防のみたらし。澤邊に風の音づれて。さゝら浪たつヤレ。こさすナチス。目をとぢこゝろをしづむれば。法性無邊の大海には普賢恒順の月の光。ほがらかなりときこえつ。また目をひらけばさゝら浪。こたふも舞ふも法のこゑ。いづれかまことの道なちぬいで。さらばありし世の。さけのむしろの口すさび。其ひとふしを手向ぐさ。かたりつたへむのちのかたみに。

○河社

千俣遺稿

琴ウタ。河波に七日ひざらん衣手を折はへてほす空の色し。ろきは天の河やしる河波高く遊ぶなるきねが鼓のおとさへもまだ來ぬあきを呼かけてそれとこたへの夏神樂遠き昔の形代と身を撫てふく夕風に。合二上リカリ。若草のや妹ものりたりやあいそ我ものりたりや舟かたぶくな舟かたぶくな。其神歌の神さびてい

とも尊き廣前や墨田河原の夕暮にまつぎきかけて舟
つなく岸の柳のたれこめてぬしは誰とも白ぎぬの雪
をあざむくおとめ等がひたひの富士のゆかしさにふ
ねのすだれをかゝけて見たや「橋場わたりと聞か
に絶にし人の係は鏡が池の物換り星うつりたる今の
世や今戸の里に瓦やく煙の末は誰かたへよるこそ増
れ我胸の思ひくらべん瓦竈「思ふ事みなつきねとて
麻の葉を染し衣の袂を幣にきりつゝそことなき合
三下り「川瀬の波に御積して岸の巖のかどもなき世を
すが／＼と菅薦の上なき際に縮たる茅の輪を本調子
だにもくゞりなば千年のいのちのぶとさく茅のわに
ちとせやのびぬらん。

○東山懸物揃

三下り宇治シテ「此殿はむべも富けり咲草のみつば
四つ葉のとの造りツレ「庭のいさごもしろがねの
上をきしらす御所車合ナチヌツレ「心も詞もおよば
れず。かくて其後義政公。月まつ山のふもとなる。
シテイロ「御下館に成らせられ。懸ならべたる名畫
の數々。近習の人々諸共に。立よりは是を見給へば。
ツレ「扱も見事の次第やな。

河東シテ「先一番にかけたるは。梁の武帝の御筆に
て。出山の釋迦の像をぞかけにける。此御佛と申は。
淨飯大王の御子。悉陀太子と申せしが。十九歳にて御
出家あり。ツキ「檀特山に。分け入りて。あら、仙人に
宮仕へ。菜つみ水くみ薪こり難行。苦行功つもり。
三十歳にて御成道。四十九年の説法は。一切衆生我
如く一佛淨土たるべしと。ツレ「みのりのちからにひ
かれつゝ令天上。人間。非情草木にいたる迄シテ「悉皆
成佛せん事は。何疑の有べきと。忝くも御大將。掌を
合せ給へばツレ「知るもしらぬも一同に。皆手をこそ
あわせけれ。

宇治シテ「第二番の掛物は。晋の王ゑんが筆の跡。
龍門の瀧の流に鯉の登るいきほひなり。シテ「抑此
瀧と申はその高さ八十丈ツレ「みなぎり落る岩なみ
を。たま／＼登り得たる鱗は。忽に龍と化して。天
上するが故によつて。龍門の瀧とは名付たり。ツキ
ノレ「去ば戰場に。先をかけ。名を萬天に揚る者は。
ひとへに此鯉の。龍となれるが如くなればシテ「ヤ
ア心がけの侍は。取わけこの繪を賞翫有べしとの
ツレ「御事なり。

河東ツレ「キリヤマ第三番には瀟湘の夜の雨。遠寺の
ねのほの／＼と。夕日うつらふ浦里に。船漕歸る折こ
そあれ合シテ「平沙に落るツレ「鷹のシチリきりの絶間
に飛さへて。あるか。なきかの有さまは。聞しにまさ
る八景の筆を。三重盡して見へにけり。

宇治

シテ「イロ第四番にかけたるは小野の小町がい
たづらに。身は百年の姥となり。ツレ「羅綾のたもと
いつしかに。軀に垢づける破れ衣。シテ「うきふしし
げき吳竹の。杖にすがりてよろ／＼と。立出見れば
逢坂のツキ「關の清水に影うつるシテ「老の姿はあさ
まじや。かの深草の少將の。雨の降夜も。ふらぬ夜
もツキ「風の吹日もふかぬ日もツレ「人目忍の通路に
シテ「心を盡し身をくたさ。思に消し其報ひ二上り
ツレ「肩に小袋腰に付たる菅笠忘たり扇破れすが籠
合しやんと着ないたよの。一寸着ないた合去とては
合捨ぬ命の合身にそいて。たゞ面影に。つくも髪ナチ
スシテ「ツキ「ミツタ「哀なりとよ古へはツキ「木屋七太夫ア
シ花のすがたといわれし身のシテ「イロいつの間に
かは引かへて。有にもあらぬおとろへのツレ「盛者
必衰のことわりは只目のまへとぞ。見へにける。

河東ツレ「扱又五番にはシテ「筆の匂もツレ「たゞなら
ぬ。子昂の梅をぞ懸にけるツキ「春待かねて咲花のツレ
「色にたわる、枝うつり。笠をぬふてふ露も。折知り
聲の風情なり。

宇治

ツレ「六番には我朝の其むかしツキ「イロ延喜の
帝の御時に上手のほまれ隠れなきツレ「巨勢の近江
が書たりし。淺澤水のかきつばた。花紫の色にめ
で。かほよ花とぞ名付たる。陰に眠れる鴛鴦の。羽
れとはねとを打重ね。深き契りやかわすらん。
河東シテ「扱七番には秋の花野の草盡ツレ「桔梗かる
かや女郎花。露重げなる萩がはなニ上りシテ「思ひま
すほの絲すゝきツキ「たれをさしてか招くらん。夢の
浮世と朝顔のツレ「日かげ待間のひと盛りシテ「實に人
間の榮花まで。思ひ知らるゝあだし野の。葛のうら風
身にしみてツキ「香りゆかしき藤ばかり。つゞりさせ
よと鳴蟲の合ツレ「こゑもあるかと疑はれあかぬ風
情をつくしけり。

宇治ツレ「扱八番の懸物は。かの金岡が筆の跡。チク
ツキ「ふじの高根の。一ト霞。雲より上を見あぐれば。か
のこまだらに降る雪の。時をも知らぬおもかげは

シテ「三國一の名山やとツレ」いわれしもことわりなり。麓は田子の浦波やシテ「打出ツレ」見れば三保が崎。松の村立はるくと。みどりの空もひとつにて。清見が關の明方に。沖つがわらの村千鳥シテ「己が友をやさそふらんツキ」汐風シテ「松かせツレ」ふきをひて冬の氣色はものさびし。

河東「シテ」九番目のかけ繪には。竹の林に住虎のツレ「吹來る風に勇をなし。身ふるひしたる有さまは。實にいさぎよき筆勢なり。」

宇治「ツレ」扱十番には是も亦我朝の畫かきにて。千枝の常則といつし人。忝くも勅命にて。筆を染しと承る。蓬萊の島のかたちなり。

河東「シテ」るりの砂の其上に
宇治「ツレ」群居て遊ぶ友鶴は
河東「ツキ」みぎわの龜にたわむれて
宇治「ツレ」千代萬代の姫小松

河東「シテ」よわるや君に譲るらん。四海浪風おさまりて。枝をならさぬ松が枝の。ツレ「久しきためし是なりと。彌興をぞ催しけるさて
兩吟「治る筆こそめでたけれ。」

○信田妻釣狐の段

宇治「ツレ」扱も其後林の次郎友季はシテ「イロ兄の則國人を打。都の住居成がたく。和泉の國に聞へたる。岸の和田といふ所にツレ」引籠り居たりしがシテ「徒然のあまり狩すなごり。夜にも成れば狐畏ツキ」惡念妄想するは。慈悲の殺生ぼさつ戒ツレ「夫と有ければ。したくの毘を掛置て。側のとやに入り野干の來るを待居たり。」

河東「中元より妾は淺ましき。八十氏人の數ならぬ。とぎ牙つめをちからにて。いどみ争ふくるしみの。重きが上の小夜衣。クルつまの寐覺もわびしくて。ハル思ひの種とも。なりやせん。」

宇治「ツレ」いと心はうは玉の。夜のふしどに稚子のシテ「母を慕て。さこそ歎んいとしやとツレ」目にも餘りて袖の露。こぼるゝゝ零溢るゝ。弓手も馬手も里遠く。立煩ふぞ哀なる。

河東「ハルころしも秋のなればにて。ハル千草にすたくむしの聲。クルかれゝゝになるさゝめ事。ハル篋にいぞよ。ユリそよゝと
宇治「ツキ」風の落れば自ら。引かぬ鳴子の音高く

シテ「粟の小鳥のばつと立。案山子の弓は動かねども。若丈夫にて有やらんとツレ」胸轟て足震ひ行先更に見へわかす。

河東「身にしみわたる夜風に。野寺の鐘のツルキをひ來て。シテ「月の光りやみがくらん。忍につらしはづかしと。薄苜萱わけ入りて。しばし休らひ氣をしづめ。又飛出て本ユリ細道の一とも。柳かひユリステめぐり。引トリしやんとたゝすむ。姿見の

宇治「ツキ」池水寒き泡沫のうたてや香に焼鼠障ると逃ん振返しシテ「イロあら恐しの人のこゝろやな。野干の性根を誑し。切にきられず拔られぬツレ」煩惱の繼をかけ。忽命を取らんと

河東「下たくみはこなたに知るものを。いやゝのいざさらば我すむ方へと立はなれヌエ。ゆき過んとはせしかども。畜生のかなしさは

宇治「ツレ」さすがに思ひわけがたく。行ては歸りかへりては

河東「ハル」上方アッせんかたなみの夜の毘くるりゝとはせめぐり
宇治「ツレ」暫く時をぞ移しける。されども終に堪難

き。句に心も亂れあし合野干と成て狂しは。無慙なりける三重次第なり

河東「三下アインツレ」梓弓のまゆみの。引べきはひかいで。われながらたわむれぬるぞナチス「くやしき。さのみはいかでこらふべき。終にはるばに飛つひて。くわへてひけば南無三寶。毘は襟にぞかゝりける

宇治「ツレ」友季主從悦んで。打殺さんとせし所へ
河東「小鍛冶なくゝ來られしがはつと驚き此狐は。某に賜るべし。價は望に任せんとわなのかけ繩引給へば。野干はのんどゆるまりて。毘引はづしてにげける

宇治「シテ」友季大きにいかりをなし。我を獵師とあなどつてかく狼藉を致すかや。今こそかやうに身を忍べ。則國が弟友季とは我事也。くわん念せよと呼われば

河東「何友季か珍らしや我こそ小鍛冶宗近なれ。あますまじと太刀ひんぬき。飛んでかゝれば
宇治「シテ」ぬきあはせ

同吟「しばしが程は戦しが
河東「小鍛冶もとより手さゝにて。肩先かけて打はな

せば

宇治 ヲキ「下人は驚きにげ行を

河東「追かけすかさず取てふせ。ひさの下に引敷て。おのれ殺すは安けれど。則國が住家をありのまゝに語りなば命を助けとらせんと。たばかり給へば

宇治 ヲキ「何がさて命を助けカ、給らば住家をおしへ參らせんと。ふるひくぞ申ける

河東「さあらば案内いたせよ。さきにおしたて宗近は。かたきの方へといそがれる。實にも稻荷の御惠。有がたしとも中々
兩吟「申ばかりはなかりけり。

鶯 郵 作

○八日の月

三重初時雨ふりみ降らすみさだめなきならひはいかにやるかたも雲がくれにし八日月牛ユリはや一とせのむかしにてかはらぬ友の水鳥はナゲアッおしやたかへもうちむれて隅田川邊の庵の戸に雪やみぞれのおりおりも涙かわすてふ盃の影は筑波や北時雨その紫の總角がゆかりの色と思ふらむ合引四つおそき冬の夜のまちくたびれしうたゝねにこひしき人の見まほしく明ればけふのやくそくと鏡取出しうち粧ふ比翼

連理の戯れのつきせぬ契ぞ久しけれ。

○葵 上

如 童 述

シテ「みつゝの車に法の道火宅の門をや出ぬらんシテ「身の憂に人の恨の猶そひて忘もやらぬ我思ツレ「さめてやしはしなぐさむと梓のゆみのうら筈にシテ「是まで顯れ出たるなりヲキ「不思議やな誰ともみえぬ上臈のやぶれ車に召れたるに青女房とおぼしき人の牛もなき車の轆にとりつきさめくとなき給ふいたはしさよもしか様の人にてもや候らん大方は推量申て候まゝつゝます名を御名乗候へシテ「夫婆婆電光の世にありし古へ雲上の花の宴ヲキ「仙洞の紅葉の秋の夜はツメ「月にたはぶれ遊びしも「衰へぬれば權の「日影まつまの有さまシテ「思ひしらすや六條の御息所の怨靈なりシテ「東屋の母屋の妻戸にゐたれどもツレ「妾なれば問人もなしヲキ「我人のためつらければ必身にも報ふなり何を歎ぞ葛の葉の恨はさらに盡すまじシテ「あらうらめしや今はずたではかなひ候まじあら淺ましや六條のみやす所程の御身にてうはなり打の御振舞いかでさる事の候べきた「思召とまり給へ「いや如何にいふ共今はうたではかなふまじと枕に立よ

○霞島臺

シテ「あら玉のツレ「松のみどりも。いつしかに。中カンかさねく。て。中六十とせはッひと見かへりに。うち過て。爺よ婆よの。悦も。棚雲はれし。初日の出。シテ「凡千年の鶴は。萬歳樂と。うたふたり。ヲキ「又ばん代の池の龜は。甲に。三曲をいたたり。ツレ「なをもときはの。三重いろふかく。シテ「アゲアゲ千代に八千代の。ツレ「ことぶきに。その十かへりの。花や。咲らん。

○あきのしも

龜 岳 作

シテ「ヘイケ花は合掌にひらけてはるをまたず。常樂無爲の都の空合ツレ「ゆかりの袖かむらさきの。くも井の月のかげすみてヲキ「絲竹の昔もところからツレ「律の調や盡すらん合みわたせば見渡するりの天皇三重池水にシテ「上ツレ「見る目すッしきツレ「よも山の。昔がたりをいつの間に。胡蝶のゆめのはかなさを。ときおく法のふみにまで。うつせしことはそらめかや。ゑんぶにめぐる月と日はヲキ「げにもひまゆくこまがたのシテ「かたごころにも契にしツレ「大悲擁護のみや戸川。つみはあさちの原ながら。なほ消安きあまのし

り丁とうてば此上はとて立寄て童はあとにて苦を見する「今の恨は有しむくひ嗔恚のほむらは我をこがす「思ひしらすや「思ひしれ「あらうらめしの心や人の恨の深くしてうきねになかせ給ふともいきて此世にましまさば水くらき澤邊の螢の影よりも光る君とぞ契らんわらはは蓬生のもとあらざりし身となりて葉末の露と消もせばそれさへことらめしや夢にだにかへらぬものを我契昔語になりぬれば猶も思は増鏡其面影もはづかしや枕にたてるやれ車うちのせかくればゆかふよく「いかに横川の御聖葵の上の御もの、怪彌々以外のに御座候程にはやん、祈まゐらせよ「承候さらば加持申さんと九識の寶前三密の月もすむなれや七寶の露を拂ひし鈴掛に阿伽木のすすのいらたかをさらりく「と押もめば「いかに行者はや歸り給へかへつて深くし給ふなよ「たとひいかなる悪靈なりとも行者の法力つくべきかとかさねて數珠を押しもんで曩謨三曼陀ばさらだ「あらく「おそろしの般若聲や是までぞ怨靈此後又も來るまじッレ「讀誦の聲を聞時は悪鬼心をやはらふ忍辱慈悲の姿にて成佛得脱の身となりゆくぞ有がたきく。

も。しもとに結ぶゆきならで。柳の絲の葛城や合たか
 まどやまにあらなくに。あさ戸あくれば誰々も。目に
 つくばねのあさがすみ。なびくもそれと隨縁の。すが
 たばかりが實相の。名はとこなつにくちせねど。おと
 づれたへし。二上り、シテ「仲のあき。鴈のたよりもいた
 づらに。ツキ」露はしぐれて行雲のツメ「綾瀬はおりも
 いとよしとツレ」すみだがはらの渡りにて合いざこと
 とはんありやなしナチヌツキ「答ていはゞ不二なりと
 ツレ」さればちかひの友ぶねに。棹とりのれば其まゝ
 に。ぼだいねはんのかのきしへ。くみし流のすへひ
 ろく。松吹風もやまびこの。十寸見の鏡いく代さか
 るん。

附

録

(校訂者曰、今日河東節家元に語り傳ふる外記節二段を茲に收む。)

○泰平住吉踊

シテウタマロ「千早ぶる神のひこさのツレ」むかしより
 神をいさめの御祭。赤前垂に對の笠。みな一様にしや
 んときて。袖はしら露朝日影。裾打そろふ紅の。シテ
 「なびくは風のツレ絲薄。につこと笑ふ貌ばせは。さて
 もいつくしよめとをめ。月の召たる笠の内。びんの
 こぼれの雲となり。雨とふりよしなりもよし。人やね
 んふうぞくを。此身に移すなりかたち。中に笠鉾々々
 いろく。うちわあふぎの模様よく合ノ手「かさを
 さそならばエイ／＼エイ／＼春日山。これも神のち
 かひとて。人が傘をさそならば。エイ／＼エイ／＼わ
 れもかさをさそふよ。げにもそふよの。やよげにもそ
 うよのと。げに誠あつさ凌がんしばしとて。片山里に
 住よしの。御神事なればうち出て。まだ手に入らぬお
 どりぶりが面白や二つ拍子にそろふ聲。四社の御前
 のそりはしは。たが懸たやら中高に。サア住吉様のき
 しの姫松めでたさよ。「小松の影のした露に。よその

袖迄しつぼりと。ぬれて濱邊のぬれさが。沖にかも
 めかトシ友呼かはす。はま衝のちりやちり／＼／＼
 ちり。ちりやちり／＼ちつとも漕出ばなふ。からろの
 音がしつとんとんからころり。からころりからころ
 からころりとも賤が手折や布引の。漣の白絲打はへ
 て。天津乙女や晒すらん。ほしか澤邊の螢かと。かの
 やさ人の歌の種。よむや真砂のかす／＼に(も)。浪
 と渚に身をはらす。そのますらをが十寸鏡。なみに
 なりたや磯打浪に。女浪男浪の濡にぬれたる中ぞ床
 しき。あらうらやましいかなれば。片山里にうまれ來
 て。遠き越路と住の江の。浦山國をへたてゝも。シテ
 「住ばツレ都とおもへとや。いづれすみよき住の江の。
 おどりつ舞つ祝ひつ。サア住吉さまの峯の姫松めで
 たさよ。シテ地」さればまつりの姫小松。おつとりそろ
 へて千代八千代。中なる女の舞の袖。今日の御祈禱な
 りシテ「在原やツレ」たかまが原の其昔天津岩戸の神歌
 を唄ふていざや清むべしシテ「とう／＼たりたりら
 ら。ツレちりやたらりは扱いかに。是真言のひみつに
 て。たへすとうたり漣の鼓は福壽圓滿。太平樂をしら
 ぶるなり。また萬代の池の龜。甲にいたゞく三曲は。

なぎさのいささく／＼として。神の内には延命長
 壽。萬歳樂シテ。萬歳樂ツレ「誠かや堺浦には寶舟がつ
 くと。ともへには伊勢と春日と中は住吉四社の神
 君が代は／＼久しかるべきためしにはかねてぞ植し
 岸の姫松めでたさよ。うたひかなでて三重まひあそ
 ぶシテ「其時地翁あらはれ給ひ。能哉々々我は是。住吉
 の明神なり。汝まことの道を守りつ。我をいさむる
 神祭など納受のなからんや。天下泰平國土安穩と守
 るべし。ゆめゆめうたがふ事なかれと。ツレ」のたまふ
 御聲と諸共に。御神體はたちまちに。御輿と變じ二上
 り合ノ手「給ひけり實に神國のそのふしぎ。てうさや
 よふさの神いさめ。ありがたかりける次第とて。貴賤
 上下おしなべてみな。感せぬものこそなかりけれ。

○浮世くわいらいし

「うきよのわざや。にしのうみ。しほのひるごのさと
 ひろく。國々しゆぎやうのくわいらいし。スエルつれ
 にはなれてはるさめや。かくやをかぶりとをるにぞ。
 地へいがまへなる。まどのうち。よびかけられて
 ゆかしくも。立とゞまればうるはしき女ちうの。言
 こゑにてくわいらいし。一曲まはせとのぞまれし。言

葉の下よりとりあへず。こゑあしけれど箱つゞみ。拍子とり人形を。あまた。出してそれごとくうたひけるこそおかしけれ合ノ手をぐらの野べの。ひともとすゝき。いつかほにでてをばなとならば。つゆがねたまんツバガキこひぐさよな。つもりくてもあしびきの。山ねこの尾のながくとひとりかもねんさびしさに夕べむかへし花よめ様は。かまもよくきれ千種もなびけ。心よさそなかみさまじや。おらが女ばをほむるじやないが。物もよくぬひ。はたもおりそろ。綾やにしきや金らんとんす。おりくごとのむつごと。三人もちし子だからの。そうれうむすこはおうように。ちのまへでもイロユリふところ。物をいふてもへんじせず。二ばんむすこは本ユリせいたかく。三ばんむすこはいたづらに。わるさざかりの六つ七つ。中でいとしきちのあまり。かたにうちのせみやこのめいしよ。まわれくかざぐるま本ユリ。はりこかつこやふりつゞみ。てにもてあそべさ。花が見たくばよしの。ござれ。いまはよし野のイロユリ花ざかり。はながさきつれしやらくと。このはしたはすひづつを。たもとにまきてからたまや。ついあきらけきあま

つそら。さくらぐもりにけふの目も。くれはあやはのとりくに。くれはあやはのとりくのみつぎもの。そなふる御代こそめでたけれと。はこのうちにぞおさめける。

十寸見聲曲集終

歌撰集

口演

去る丑の歳新板めりやす豊年蔵と
題して長歌座がかり新古の書キ本を
撰集して見やすからむがため假名書
六行にして櫻木に鏤め好キ人稽古の
うつし書の世話をぬく事少しは筆の
祐ともならむか今さまの板の世に普し
といへども此美曲の新板なきゆへにや
年にまし日を逐て世上に布を流す
新作は濱の眞砂にして豊年蔵にも
載がたし依て又々歌撰集と號
是を出す都て此一流はしどけなくして
又香をふくみ菊の花形のなよやかに
亦秋菊の慈を込て童のもて囃に
あづからむと新作のきくじどうを
巻頭に据て是より新板の目録御目に掛申候

目録

- | | |
|-------|--------|
| 菊じどう | 七へんげ |
| 糸太郎石橋 | 新道成寺 |
| 新はごろも | めい／＼てう |
| 戀の空蟬 | きつす |
| あけがらす | 便りのつばさ |
| 月しろ | そでのか |
| よはの鳥 | とうがね |
| こひ | うらみ |
| あすの鐘 | うきはし |
| 草たばね | 名とり川 |
| はなの川 | あきの風 |
| ゆきの夜 | 袖のむめ |
| 里の菜種 | 里の鴈がね |
| 小夜あらし | すがたの花 |
| かみすき | 花がたみ |

歌撰集

○幾久慈重（本外題、亂菊枕慈重）

一セイ「千代までとさきそふ花のまさりぐさ久しきき
みのためしかなくすりとさくむらのくも色ふかし
みたに水詞（初五郎セリフ）「これはむかし周のぼく王に
つかへしじどうといへるものにて候ッタ上「みねのは
つ花入谷の月七も、とせもきのふけふ。合名をも彭祖
とよぶこどりおぼつかなくもたゞひとりみやこの空
を戀衣よはのあらしくしけづりあしたの雨にかみ
あらふ合ハルこのはごろものあやにしきわれから染
る秋の色さくひとの夢にさへ思ひ出るもはづか
しや合チンげにいにしへはギン宮中にてにしきのし
とね玉のとこチンきみがなさけのことはにつゆの
ちざりをハツムかさねぎくイセイとしかはいもいも
とせのこひにもはるかますかみおろのつまこふ山
どりのあだなかりねもつれなきをすゑしらすくのた
まかづら合人めのせきはこえもせで入まくらのとが
やみだれがみ合いまはみやまに世をすてぎくの下雁

のはつかのギンチャクリたよりもたえてさくのはすえに
ハルかくもじの。牛大夫アシふでのいのちげギンガハリき
れはてもせずナトシクむやながれのさくのさけあい
もおさへもひととさくのタキ「かぶろぎくとはま
せがきのませたなりふりかはたけのハル「ゑんにひか
る、名も。かはゆらし上「戀のいのちははつほと、
ぎす「月のかげさへそら。なつかしき「二どのあふせ
はしぐれのみみぢ「見ればそのま、顔に火が「たかい
も上「ひくいもいろのみち「のちはたがいにいふこと
さへもそでにわかる、ナチスとめきのかほりナトシ「き
みとわれとは合とびかふてふのふたつたつたたるひよ
くのくるまちらりちら「ちらり合方「そでやハルた
もとに合方「はるならで合方「こてふのゆめかまぼろし
かナトシ「風につばさの白粉も亂れ「て絲のもつれ
や思ひの継「花にあこがれ月にうかれて待つに來ぬ
夜はこほりのぢぐくに責られ身をきるつるぎは仇に
明ゆく八こへの鳥がね火中の燭にくるしみ「くるり
くる「ひかげのをぐるまわれのみ物や合思ひがほ
おもへば昔なつかしやはつ春霞秋の風四季もの狂ひ
と人やとふ合人のながめも合袖にそよ「ふくかせ

をこひ風とおもはんせヲ、それ「「まこと「
合上「「ろもくもるむねのやみハル合かんならずエ
エ月の上にござんせつまかへさんつまかへさん「
戀風とおもはんヲ、それ「「それまこと「合まこ
と合笠であふ夜はナア月のくもつらにいととしん
きのかほ見たやいととしんきの合なん「なさけの
それがまことにてんとせいもんわがおもひ合それか
うき名のナたつともこちやうれし合いととしんきの
かほみたやいととしんきの合なん「なさけのつゆ
やしぐれやてんとせいもんわれ（が）にほひそれが
うき名のたつともこちやうれしちらぬすがたのをと
めぎくウタイ「ことはりやしらすぐくのことはりやしら
ぎくのさせわたをあたくめてさけをいざやくまふよ
まれ人もつらんすらん月ほしはくまもなし所はじん
やうの江のうち酒もりしやう「まひをまはふよあ
しのはのふえをふきなみのつみどうどうちこゑす
みわたるうら風の秋のしらべやのこるらんウタハル
「もとよりくすりのさけなればゑひにもおかされす
その身もかはらぬ七百よさいをたちぬるもこの御
まくらのゆへなればいかにもひさしきさくの水くめ

やくめ「「つきせじとさくかきわけて山路の仙家に
其ま、慈重は歸りけり。

○七へんげ

第一 官女

二上リ「長生殿のうちには秋ふかくチン不老門のまへ
には日もかたむかず。月はなを「ていけのちんの春
風ギン月よりも花よりもハル「紅葉よりもなを戀しき
人の闇の内見たい物じや「ハル「ねやの扇のゑそら
ごとかへ思ひのますわいな扇のゑ「闇の扇のゑそら
ごとかへおもひのますわいな合ハルたまにあふよの
ことのはゆかし。

第二 春駒

「めでたや「春のはじめのはる駒なんぞは夢に見
てさへよいとや申「「花のな。さかりのな。色くら
べ品よきふりを太鼓の拍子でさ。うちつれ。引連てい
さむゑがほやなりよし。風よしせめて一夜はなびけ
と申「「ヲ、それはそれよさ。筆にばかりは文と
はよまん。こはのへんじが。よいとや申「「ヲ、さ
りとはよいてな「九十九夜々々々々どかばおちよ
ぞ。情ないぞやあたどうよくな。どふぞしばしはなび

せ。しん實せい文でのふござんすかあ、ま、うれし
いせんどだまされたからは一ふんたゝぬはへ。あゝ
しんき。それでねもせでまよひまよふ人の心と川の
瀬はさだめなや千代のこすゑもおもしろや。

第三 杜若

「形見の花は今こゝに三下り歌」在原のヲトシ跡なへだ
てそかきつばた合花紫のギンガハリゆかりとて「かた
みのかぶりから衣身にそへ持しことのはも契りし人
の数々にヲトシ」よしや思ひのな露のしのぶ山忍び
て上「かよふなり平のすがたはいまに見かはす俤い
としわすれぬ心やな戀しゆかしき有さまを合かたる
もなつかしことぞかしヲトシいとゞ色ばかりこそう
きよなれたのしむもはや。昔男の名をとめし杜若ヲ
ながめ給へや都人。まことは花のせいなりと。見へつ
かくれつなりにけり。

第四 鐘踊

二下り「ふりだせ」宿入じや「お、扱のみ込ハル山
ざくら合見事々に咲たりな。やゑひとえちるはち
るは散々々くるは合行列くづすなふりての衆詞あり
やん詞こりやん合ひやうしをそろへてお供さき」やり

をふるなら詞ありやん手のうちがてんかの。こしのひ
ねりはこんごどふふるいとし君なら戀のかけはし合
渡らばわたれ。しとんとんとう。まいろ「まいろ花
の顔ばせかはゆらしいじや。ないかいの「よい／＼よ
い／＼よいやさ。むすびそめにしみえの帯。きり／＼し
やんしやん「しやんくる／＼／＼くるまやりさんざ
笹鎧しぐれまつ「しぐれまつ松はときはお江戸見
そめた揃ふ行列花の宿入。

第五 傾情

三下り「やく束のくるか／＼と待ときやこいで「よそ
へかわれてまゝならぬ合夜ふけてごんす。きのわる
さ合わしをこまらせ。おもはせぶりか合方宵から合
まゝで。どこにゐるくさつて。どこの色めと茂りくさつ
て。くせつしまふてきたのじやのさりとては合引手
數多の身じやとでもつらいしやうじやないかないぬ
しの心が。わしや取にくいさりととは／＼悪しよへ合
そふでもあろか花の咲のもみのるもわしがふたば戀
ぢのふねじや。ものさりととは／＼あくしよへ「わしが
まつよはきのふから。はしごにとはんせ。すそふみち
らしハルアッほんにかぶろをしかつて見ても。はらの

立つのはなんのやも。あかぬたばこのヲトシ煙たつ
「たれが待やら。しやらりととけし。ふたえ帯。見るた
び／＼や聞たびに合にくてらしほどかわゆさの合わ
しはかふした流れのつとめ。そのかひなきさの千鳥
やさんざ鳴音は合さんざ鳴音はヲトシしほらしや「通
ひ／＼し衣紋坂戀に引れてくる／＼と。まはる紋日
の品もよく。姿言原やりてかぶろのたてくらべ。いろ
めく花の散や惜まんげにもたへせぬふせいなり。

第六 山賊

三下り「中アジ」實や薬と菊の水水上おなじ流は遠こちの
老を養ふ瀧川の。詠めはいづれ面白や。しばし休ら
ひのたりしが。山ほとゝぎす。音づれて。いま一聲の。
きかまほし休むおも荷に肩をかし。さやけき月に影
移す八十の波の花も咲歸るセツユリギン 山むを漸々
に。そろ／＼とたどり／＼てあゆみ行「わしが若いと
きやな。なん／＼難所の。山でも合いかなる海川なり
とも。ほんに／＼千里一とび。今ではギンガハリさりと
はさりと杖がなければならねへ／＼今は歸らんヲ
トシわが庵へ。

第七 布曝

人「よ」しやござかしや愚人ばらハルソ地我を。あざ
むく者あらば合こんな。みちんになさんとて。大手
をひろげて待むたり「其時寄手の大勢は合たとへい
かなる。天魔きじんの勢ひ有とも「いで／＼からめ取
んとてはがねを鳴して。飛で出ればひらりと外しひ
らひら／＼ひらり／＼／＼と是ヨリ布ザラシ「四き折々
をさま／＼に「さま／＼に「今みるごとく覺しは是ぞ
しん慮のいとくなり。
○糸太郎石橋
つらみ歌「あめつちのひらけていもせ國。とつじをしら
すせきもいや。三下り「いざなみよればいざなぎさ道
をおしへの神の國さんせんさうもく海山も。ほこの
したより戀のたねまよふりんゑも戀ぞかしはまのま
さごにひらり／＼さつとひくなみうさすの岩に羽を
やすめ。ひよくの鳥のいもせごと「げにやうき世のわ
ざながらことにつたなきあまをぶねわたり兼たる夢
の世にすむとやいはんうたかたのしほくみ車よるべ
なき身は海士人の袖ともに思ひをほさん心かなよし
それとても女ぐるまの灘の潮くむうき身ぞと人には
たれかつげのくしたしくるしほをくみ分て上みれば

月こそおけにあれ是にも月の入たるやうれしやこれ
も月の有ッタヒ「月は一つかげは二つみつしほのよる
の車に月をのせて「うしともいはぬしほかなこれ
はなつかしきみこゝにウタヒ「すまのうらはの松の行
平立かへりこばわれもこかげにいざ立寄てそなれま
つのなつかしやサイモン「所は難波のひがし堀聞てう
はさもその昔ひとり娘におそめて年も二八の細ま
ゆに内のこがひの久松と忍びくゝのねあぶらにおや
たち夢にもしらしほりけふ生玉へまいるのもそなた
に咄すことが有るわしもよめりがはらが立つこれ人
がきかふに氣をしづみや思ひあふたる戀のふちナドリ
「おれとそなたは忍び車や松風車風に香の有る梅見
の車くんくゝ車井戸どちらもふかいつんくゝつ
るへのぬれくゝそめしやるかたもなき小車のへ「こ
よひ扇のナアかなめのちぎり手にくるくゝと日どり
がさ。笠をめそならばか々のあふぎ笠あふぎ車やは
ん女が闇の花扇風にひらく散かさくらの嵐木枯よ
きてふけひごろはよそに見てややみなんかづらきの
神のちかひや見ごとくへ文セブシ「すいたけんくわ
にや夜も日もわかぬ。あわざがらすの聲もろ共に。わ

たるかりがね文七こそは。きよ川つれて出をぶね出
入する氣もいろにはつなぐ。一どしんだらまよき
ア清川フツまうしふみさまいつぞはわしが。いはふい
はふとおもふてゐたが文セフツはてかしました。そり
やなんじや清川もやけんくわはにんげんわざか文セ
またくどくゝときゝともない清川やめてくだんせふ
みさまと女ごころのはかなさは。つれそふおつとの
身のゆくゑあんじわづらふきくばりは。ながれの身
にはたぐひなき「つよいくゝほめそやされて。さいた
しやくはち大わきざしのおとこいちりうかりがね文
七。いかな夜もひもかみなりしやう九郎。いつのけん
くわもあいづちうちせん右衛門。あんの二わうが
平ゑもん。わらふゑがほは。ほていちゑもん。五にん
おとこと名のたつにサア「あやとるなくゝみぶやせん
ぼんのはなのさかりはごんせ。はなのさかりはナ
アさかりは花のおてひきよふて。あらしやまかせい
とはできたやま。よし野はつ瀬のはなのふきがち
るはくゝちりくるの。きさらぎやよひもはなのそで
そでをつらねて。おせくゝよいくゝさせんとひ。
いろめくはなのおもしろや「しばらくまたせたまゑ

や。ゑうがうのじせつもいまいくほどによもすぎじ
しゝとらでんのぶがくのみぎん。ぼたんのはなぶさ
にほひみち。たいきんりきんのしゝがしら。うてや
はやせやぼたんぼうくゝこうきのすいきあらわれて
花にたはむれゑだにふしまろびてげにもうへなき
しゝ王のいきほひなびかぬくさ木もなき時なれや
萬歳千秋とまひおさめくゝしゝのぎにこそなをり
けれ。

○無間の鐘新道成寺 (傾城道成寺)

歌「われは此世になきがらのそのまゝならぬその中
にかはい男をしやはにをき思ひがけなきしでの山ま
よふが中のまよひとはちやに物こそかなしけれ佛の
道のうとければつらいつとめのをくる身の月はほど
なく入沙のくゝけぶりみちくる小松ばらさんげにつ
みもはれなんと中山寺にまいりけり「嬉しやさらば
舞んとてあれにまします宮人のゑぼしをしはしかり
にきてすでにひやうしをはじめけり「花のほかにほ
松ばかりくれそめてかねやひくらんいろは匂へど
散ぬるを我世たれぞつねならん人里とをかかねのこ
ゑ諸行むじやうの世の中に戀はまことのぼたいのみ

ちへひかるゝまでのいと竹やわれもむかしはみな人
ごとくにむすめくゝとたくさんそふにいふてたもんな
てならひならひ琴もおぼへ物ぬひならひやがてとの
ごとそひねのまくらふたりねがちにひきしめていと
そうぞうしき風のまに霞たなびくみねの雲いらかな
らべし此寺は小夜の中由とうけたまはりはじめてが
らん成就のあまねく十方かやけばとて光明山とは
名付たり山でらの春のゆふぐれきてみれば入相のか
ねに花ぞ散けるくゝさる程にくゝ寺々のかね月をち
鳥啼いて霜雪天にみちしほどなく此てらの江村の
漁火うれひにたいし人々ねむればよきひまぞとたち
そふやうにねらひよりつかんとせしが思へばこのか
ねうらめしやとて龍頭に手をかけ飛かと見へしが引
かついでうせにけり切のだん「まさこの數はつくと
も行者の法力つくべきかとみな一同に聲をあげ東方
にござんせ明王西方おとく明王天子北方こんがうや
しやみやう王「中央大日不動明王なまくさまんだば
さらせんだまかるしやなそわたやそわか「ひだりの
御手に三日三夜右の御手に三日三夜あはせて六日に
一日まして「七日御きねん御經どくじゆのきどくに

まかせがうまの利劔はなんのこつちや／＼ちからに
 よりてうんだら「たかんまてうがせつしやとく大ち
 ゑちがしんしやそくしん成佛」祈りければ「いのり祈
 られしやむづかしい事どもたんせい出しひたいに汗
 を玉のじゆすすりみなこゑをへつかねど此かねひ
 いきいでひかねど此鐘おどるぞと見へし程なくしゆ
 ろうに引上たり「朧月影もさだかにしどけなくやま
 ぶきの瀬にほのみへこづまなりふりほら／＼春風さ
 まはしのびの朝がよい小川淺ければすがぬれそろ
 よのふさ／＼つまもぬれそろよ／＼物にくるふやう
 き涙まぶの男はつらくやだいてねたときやわれな
 らでほかの女郎にやあはぬといふてだましくさつた
 がにくやゑゝならぬせいもんくつされだまはせぬ
 がひくにひかれぬひがあればそれはねてから其いひ
 わけをせふぞいのあゝいやらしい何ぞいの昔のあく
 せうしたらいでふ今のしなしはおかしやな。是は
 過にし言の葉の上「あゝ夜晝となきくるしみは無間
 の鐘。おそろしやくるしむくげんちか付て／＼來世
 は六つのせめ鼓うたふよ。しづく鼓は偽の契仇なる
 爪ごとの引はなれいづくにか我思ふ／＼忍びねのや

わらくうたふよ／＼。ましてめいどのしゆらだい
 こ劔をひつしとうへならべ罪人をおひまはしがんせ
 きせなにゆひ付られて峯よりどうど突おとさるれば
 ほねはみちんにくだかれて風に木のほの散ごとく。
 きしやうせいしの數々に恨のからす集りて鐵の嘴を
 ならし銅の爪をとき立て追廻し／＼。流れのつみと
 が地ごくの有さま花も一時月の光もうつるや夢のう
 つるや夢の定なきこそあさましや。

○相生新はごろも

「あさ風のまつはときわのこゑぞかしなみはおとな
 きあさなぎにつり人おほきをぶねかなときしも春の
 けしきやとみほの／＼まつばらにはくりやうもいざ
 やかよはん／＼合あまのはもふりさけ見れば霞たつ
 合そらにもいつしか行雲のうらやましげにうちなが
 め合かれうびんがなれ／＼しこゑいまさらに雁が
 ねの歸りゆくあまぢを聞ばなつかしや千どりかもめ
 のおきつなみ行かかへるかはる風のおまの羽風のひ
 らひらと雨にうるほふにゐまくらふたつ枕はあひお
 いのまつ夜はつらい長まくらうかぬてうしのさみせ
 んまくらいとしかわいの文まくらかはらしやんすな

木枕のよそへはなびかぬ下紐しやんとく／＼り枕や袖
 まくらこんなゑにしがからにもあろかいなあへうら
 やむふたりぬるよのひち枕あづまあそびの舞の曲そ
 の名も月の色人は三五夜中の空にまた去程に時移つ
 て天の羽衣うら風にたなびきなびく三保の松ばら浮
 島が雲のあし高山やふじのたかねかすかになつて天
 津みそらの霞に紛れてうせにけり。

○めい／＼てう

「むめもみぢぬれてやかはくしげれ月。にわの松もか
 げふたりたちすがたあらはれてきたわいなア、きた
 はいなうらみもこひものこりねのもしやよりとともさ
 んのおこゝろがかはりやせんとおもふうたがひをん
 などしわしがおもひは日に三どいゝやわたしが。い
 やわたしが思ひは。よに。三ど一申アッ「たゝみたゝ
 いてゆふ月よ。おり／＼くものにくまれてはれぬお
 もひのかほとかほつゆをふくみしふゆつばきさわら
 ばおちんふせいなり合ゆふがほ小はるのかきねにつ
 るばかり見るにつけきくにつけ合とのごのまことと
 たまごの四かくはなんけんけれどもゑんのあるのが
 まことなれ合うれしかいなのちとはア、こゝろ

でおがんでゐるわいな。ねやにのこりしまくらはも
 のをいわで。りんきのたねとおもひぐさいろ／＼は
 なのふゆごもり「まつにあらしのつれてふたりすが
 たのあるかなきかのみづの月かやちら／＼／＼とお
 つかけ／＼おひめぐれば合「むめがえさ／＼くわも
 みちのこかげにゆきちがひ／＼めぐりあひてはりん
 きのはのふのむねをこがしこはそもいかにあさまし
 やと合「うらみのかす／＼のこることのは。

○戀のうつせみ

「うらめしと思ふも君がいとしさのあまりてわれは
 身をこがすフシ「さわへのほたる草がくれ有とは見へ
 てまぼろしのみだれ心ぞあさましき合「トッすぎに
 しことを思ひだしふても／＼ほか心合あだな戀ぢ
 がゑて物でくどきおとすが御じまんかハルあのしや
 うわるな男めと合むなぐら取て引立る合其ふせいお
 そろしや「おかしやんせ何ぞいの合上ノギンよふも大
 事のすけなりさんを合おまへのとのごにやわしやど
 こまでもあゝならぬぞへ「申ぶし「みらいをかけて神
 かけていふておいたはおわすれか合上わしやわすれ
 はせぬ物をさりとは合上おまへのはだのこのや

やはいとしのごとふたりの中にめまつひめ松いく
ちよかけてうらやましわれはうらめしこひしき人に
合おもぎしの合にやうた／＼花あやめ合いたいけざ
かり手をひきつれてねん／＼ころ／＼合の／＼さまい
くつならなん／＼情の下にすむ合それさ合これさし
んじつうやつらや／＼「オトシメ」なをもさか立つ其
有さまふた道かくるあだし男を合つれゆかんこづま
かいとりしやんなしやんな／＼うしろかけ「見るに
するどきみだれがみ合かた思ひたあぢ
きなき世の中やかたるもなみだなりけらし。

○雉子

三下り「きすすなく野べの若くさつみ捨られて合人の
よめなといつかさてこがれこがる、合くがいの舟の
よるべ定めぬ身はかげろふにあづまが顔も見忘れて
うつ／＼ないぞやこれなふほんにあれむしさへもつが
ひ離れぬあげはのてふ我々とても二人づれ粹なぞう
しの中々に春にもそだつ花さそふ茶種は蝶の花しら
ず蝶はなたねのあぢしらすしらすしられぬ中ならば
うかれまい物さりとてはそなたのせわになりふりも
我身のすへのはなれごまながい夜すがらひきしめて

むかしがたりとあすか川。

○明がらす

三下り「たま／＼にあふよとあへばみじか夜にぐちを
いふまいあきられまいと心で心たしなめどすいたる
んぐわのあぢきなや合「ねむい／＼をこそぐりおこ
しきいてくだんせはつほと／＼ぎすしの／＼めちかき鐘
の聲戀しゆかしい夏山しげみ黒いはをりを跡から見
ればねぐら出て行く明がらす。

○たよりの翅

三下り「里ならで雪をこがねとながむらんふりつもり
たるけふの日のながくむすびしふうじめのかぶろは
茶屋へも／＼ちどりまつばのうちになよ竹はぬしへし
らせのひよく紋合「嬉しさつものしろむくは夜も
ふけわたるすがたかなしづが身と驚のこ／＼ろをと
りどしつめたい中にものおもふほんにしみ／＼わし
やはづかし。

○つきしろ

「宵やみに雲がしらする月しろにとのものまどへさ
しむけばまだおもかげにむねくゆるきせるにとがも
とをねさすよそのしづかにはださむきふけゆくかね

の空だきに袖で隠してなく顔をつたふ涙にしら驚ぬ
れてさりし夕べの筆とりてうぢ神かけしかね言もす
へをまつちの道ちかくをしのつがひの世にせかれわ
れてものちにあいたさ見たさうらむことなげくとて
かわゆく鳥のかこち／＼てまくらによればうつ／＼か
ゆめかまぼろしかさしうつむげばくろかみのひざへ
もつれぞうらめしき。

○袖の香

「すがたはすねて咲花のなりはいつくし源氏梅たれ
も心をやりむめのいづみしきぶが軒端の梅清少納言
のせわごとはこいもうすきも紅梅やいたりほうしが
ひとえむめいづれかいづれこ／＼のえにかすみをもれ
てふくあらしもて来てしばしとめ香のそのしこなし
もおのが香にあかぬいろかやそでのむめ。

○夜半の鶏

「おなじ世にすむかひもなき濁水ながれ／＼のうき
つとめ合ふかき中をもひきわかれつらさ語らん友さ
へなくて誰にをちこち便のなはどふかかふかと思
ひ過してけふもくらしつ飛鳥川いふてかいなき捨小
舟合うきにたへぬは涙のしぐれ定めなき世とかねて

はしれどゑ／＼さとられぬはほんにゐんぐわなるんぐ
わもの一人こがる／＼よいの鳥音づれてふくさよあら
し。

○とうがね

「あふはわかれとかねてはしれどけさのきぬ／＼い
つよりつらいたまに逢夜はとびたつばかりどふかか
ふかと心のたけを合いはふ／＼と思ふてゐたに結ぶ
の神に見捨られたかわけもなやいまは命もたへなば
たへよ住ばうらめしおなじ世に合「とうがねのな茂
右衛門女房はよい女ぼうあれ見さいナつくばのやま
の横雲よこ雲のナしたこそわしがおや里さとのつと
めをいつかはなれて心のま／＼にすへの落葉を誰かし
る。

○戀

「ぬれぬさき／＼きはつゆをなんのそのねたがうそ
ならはらみはせまい風がじやましてふたりが中をわ
けてわからぬあきのつたあかきはさけにかづけても
またはづかしき十六夜合くもはたがひのびやうぶに
なりてつ／＼むにあまるおもひのたけをいふにいはいれ
ぬいへばいふたいひとくちですむことをふでにたの

むもきかもめてたばこぼんへはとやかぬきせるみんなうき世はまゝならぬ。

○恨

「はださむみきぬたうつてふはたをるさにときてとふものはきりくすわしがおもひはます穂のすゝきこちよれなびけなびけこちよれ露はらくとうらみなみだかわしやおぼへないつめらしやんせたくしやんせみんなわたしがわるいにしてもそふはせぬものじやいな。」

○あすのかね

「しらなみのすへのまつ山こしかたをかたみにちぎるあすの夜の合しゆびをいのりのみつがしは合たちるしむねのかはやしろふちも瀬となるこひのふちままとねてまつあすのかね。

○うきはし

「よひくまにくらさだめんかたもなく月はたもとにうつろふ人を合おもひきろとてねし夜半もむすばぬゆめの中々になさけまじりのことばのはしにまよふわが身をいかにせんころでくこころうらめしやいそぐなみだをひとには見せんよしやたのむなゆ

めのうきはし。

○草たばね

「くしげきやうだいとりそろへこと葉にいはぬたままつりとろのふさのばらくともつれてとけぬのきのつまあけのころをおもひやる月とかげとのかみやまのおしみしかひもなくいまみつ瀬川しらなみや冷おなじながれにちるはぎのつゆもなみだもおとこゆへせかいのころひのものと神々さまをいのりてせいもんくつされすゑの世までもほかにないぞとくりごとながらかへすくもおもかげのいふにいほれぬわがなみだぬれてすみちるふるごとをうたふたむけのさまくにぞんじらうし。

○名とり川

「二上り」われがこひちは。いとなき。しやみやなんのねもせでなきあかす。それじやく見ればおもひのくものをびく。さすぞさかづき。ならずとひとつまいれいやよおしやるに。こちやもふ。それじやくいやそふさんせそれじやく。しかもよいこのなまけざかりに。ちよつきりこつきり小女ぼうの。こしもしなへて。やつくるり。くるりややくつくるり。

ぬめりしやんすは。ふたりとふたりが名とり川おそれふたりとふたりが名取川。

○旦みなの川

松風述

「はつぞらに上はごの子すますふりそでのしどけなりふりいつしかほんにハルはつねおぼえてうぐひすのむめにもいはすよそあるき下つゐしかられてあかねさすナドリ松のみどりのはごいたもいもせをえかくひよくもん合上つけてそらさぬやりはごをかせがをとしてみなのがはふかきころのすゑかけてかはらぬはるのあそびかな。

○種のかせ

松風述

「あきのそら下あだしころにくらべ見ん合ハルまつふく風はをとすれどとはぬ男のつらにくや合とはおもへどもハルまゝならぬ人の關のはてしなさ上ほんにほんばにうたてさを合つめばいとむねせまりなくもなけれずねもやらす合ケン「うつらくとふくる夜にわけもないこと思ひわび中ケンそでのなみだの露しぐれあひ／＼がさの中の町おくりかへせしその日より上文のたよりもあきの葉のそめてくやしき思ひぐさ。

○雪の夜

松風述

「ふるゆきに上つもるおもひのかすくを下とけてあふよのうれしさは何からさきのひとつ合ハル松まつとつけまいあの子が名をばまつは合ういものつらい物合ハル「ういものまつは松は合ういものつらいものつらいつとめも氣でくふてぬしをちからのわすれぐさ。

蘭路 輔鳥

○そでのむめ

「いく千代か春をしらするうぐひすの松と竹との中よいどしをしめて子の日の神まつりうき世繪ざうしすころくもはや道中の八文字ふり出す雪をたもとにうけて合酒といふ字のさりとはいやよむごいつげざしわしやしみるくとせなかをたやく羽子板のはねとはねとはひよくの翼風にふかる、袖のむめ。

○里の名田根

花丸

「てふや小蝶のせめてひと夜は手にとまれ合てふは菜種のおちしらすしらすしられぬことの葉の戀のやま崎それそのそにちかふみへれど與次兵衛さまみへぬカンわしにあの字が氣は中の町か文はいもせの文はいもせのいも見ざるまに「むづつ／＼はくるま

でくめど中でふたつにゆきちがふハテくハテ何と
しよう「てうしくわへが別れてゐれどしやくとく
の蝶番ひハテくハテなんとしよういつかつとめを
離れてほんにさとにあづまを置みやげ。

○里のかり金

「難波のエなにはほり江に名もたかき五つつれたる
かりがね組よ喧嘩かをくくろ船組よむりが通らば
のけくのけく合夜は何ときぞ四つ橋をまはらば
てうど八つ橋の見かはすくかほよ花さいたりく
長刀あづま男のてちちばへいろの中の町君ならばし
んぞいのちをあげやいり。

○さよあらし

「あいそめて「いまのこの身のものおもひ上」はる、
まもなきしたごころ合たがいろそめて戀ごろもむつ
ごとまでもハルうらやましよい中どうしのさよめご
とさだめなきかなうきどりの 此間せり「かよふつば
さのかをとめていもせひとつに戀のたねひとりこが
る、夜半の戸におとづれてふくさよあらし。

○すがたの花

「さりとはひとりこがる、心のやみははれやらで。

うつろふものは花の色梅がかほみんうぐひすの。谷
より出てまださとなれぬしんき。心にやるせがほん
にないぞへ合水のかみに顔みれば。見かはすほど
のかみかたち。さりとはあゝいかならん、身のゆく
ゑ何と忍ぶのしのおみだれたれゆへに合朝な夕な
の物思ひ。たれくみあげてとふ人も。わが身はひとり
ものおもふ。思へばゆめの世をしらで戀のしがらみ
せきとめよ。

○髪すき

「世の中の人のハルこゝろはさだめなきレイセイうつ
るかみにナナスくもりなくナン子ゆへのやみにヤン
ガハミだれがみつげのをぐしもあかなれし心の内
をあらひがみゆふにいはいれぬとき櫛のつるなげしま
だあゝまよ上「たれにかみせんしまだ曲しまだの
ふちはせとなれど戀のふち瀬はやるせなや合ヶせ引
とにかくにものおもふ身はせひもなきいつかナンあ
ふもりのこがらすくちすさみヲ、それうき思ひむか
しがたりのあすか川。

○華がた見

「花ぐもりのちははれ行名どころの。はなはさけども

わしやおもひのますかみ。くもりがちなるをんな
ぎの。こゝろはふたつ身はひとつ。なればいひわけ
するすみに。筆の命毛こよひかざりとさとれども涙
にはげしけはひ坂。せうしやうのよるのあめ。ふるよ
はひとしほなつかしや風のたよりにそがの里あんじ
くらししているさの障子。明ていはれぬことのはに。返
す返すもそがを御ぶじと祈りんし。

右の一絨は松島杵屋の流を汲で是版するの正本也
齋者予孤獨にして外類板なし

寶曆九卯七月

武江淺草御地内

伊勢屋吉十郎版元

歌 撰 集 終

刻舊 荻江節正本

〔西川千藏門弟〕

〔西川おふさ〕

〔おとめ〕	〔おときん〕	〔おちよし〕	〔おいし〕	〔おおくに〕	〔おきく〕
〔おとめ〕	〔おときん〕	〔おちよし〕	〔おいし〕	〔おおくに〕	〔おきく〕
〔おとめ〕	〔おときん〕	〔おちよし〕	〔おいし〕	〔おおくに〕	〔おきく〕
〔おとめ〕	〔おときん〕	〔おちよし〕	〔おいし〕	〔おおくに〕	〔おきく〕
〔おとめ〕	〔おときん〕	〔おちよし〕	〔おいし〕	〔おおくに〕	〔おきく〕
〔おとめ〕	〔おときん〕	〔おちよし〕	〔おいし〕	〔おおくに〕	〔おきく〕
〔おとめ〕	〔おときん〕	〔おちよし〕	〔おいし〕	〔おおくに〕	〔おきく〕
〔おとめ〕	〔おときん〕	〔おちよし〕	〔おいし〕	〔おおくに〕	〔おきく〕
〔おとめ〕	〔おときん〕	〔おちよし〕	〔おいし〕	〔おおくに〕	〔おきく〕
〔おとめ〕	〔おときん〕	〔おちよし〕	〔おいし〕	〔おおくに〕	〔おきく〕

市村吉五郎

澤村金平

澤村田之助

歌

荻江露友

松島安兵衛

錦屋門弟

錦屋平八

同勝吉

同金藏

同登美

同七

中村座

哥 松島庄五郎

中村兵藏

宮島三次郎

宮島幸次郎

三絃 杵屋作十郎

杵屋彌三郎

杵屋三郎助

小鼓 藤間勘右衛門

西島吉之丞

西村小野八

大鼓 田中傳左衛門

笛 西村吉右衛門

太鼓 中村利右衛門

市村座

哥 富士田吉次

木村源次郎

錦屋平次

富士田清五郎

三絃 錦屋總次

西川奥藏

淺田藤七

宇野長七

古川清藏

小倉重藏

大鼓 木村彌七

多田屋源右衛門

太鼓 小西重兵衛

森田座

哥 坂田仙四郎

同 仙之助

三絃 杵屋六三郎

杵屋太十郎

笛 中村彌八

會元

西川千藏

西川奥藏門弟

德 雨夕次

藤 曉

豐 都

壽 々

條 都

文 好

文 好

龜 治

松 次郎

志 調

長 藏

千 助

西 理

川 泉

而 巳

千 穰 萬 歲 樂 大 叶
右者西川千藏會合之摺物をもつて序文とする

舊荻江節正本目次

爪音幸紋盡し
 紅葉笠住吉丹前 (住吉丹前)
 戀文字道中雙六 (道中雙六)
 鐘樓黃昏姿
 女伊達姿花 (女助六)
 狂亂情姿繪
 末廣冬牡丹 (冬牡丹)
 所縁の茶杓
 旅寐の小蝶
 めんかぶり
 さごろも
 風流廓萬歳
 寒紅梅行列丹前 (行列丹前)
小林の朝いな
 曾我の五郎 草すり曳
 曾我祭躍づくし
 乗掛情夏木立 (興作)
 川柳二つの竹

狂亂手くだのすがき
 御所風俗鞆丹前 (くるま丹前)
 花錦嫩丹前 (ふたば丹前)
 冬至梅雪濃空灶
 冬小菊御乳女童 (おちやめのと)
 雪傘積戀歌
 濱衛幾世月
 縁結祝葛葉
 新そでづきん
 おもひ川
 夜鶴綱手車 (つなで車)
 おやこぐさ
 ますかゝみ
 紅葉賣
 名よせ草十番切
 琴歌夜の鶴
 うすもみち
 八重がき
 しきぞめ
 玉櫛笥寐よとの鐘

舊荻江節正本

鹿のまき筆
 よつのそで
 ねこのつま
 闇のまくら
 濱千どり
 かさねづま
 ありあけどき
 そでの露
 雪咲心の花
 袖の時雨
 戀のぬれぎぬ

○つま音さいわる紋づくし
 三下り「千代のはる。花にうつろふてふも、ちどりし
 ほらしやうちいで見ればしろたえの。ふじのたかね
 のうすがすみ。すそのはつゆのびか〜と。あさひ
 かやく御のせいきみをはじめたてまつり「さつき
 げじゆんはわれ〜も。葉ばかりながら御くらかけ
 ちん屋〜のもんづくしくぎぬき松かは木むらご
 う。三がい松にしやんとたづなもつなぎむましろ一
 もんじくろ一もんじわりびしわちがひ花うつほ。花
 のいろかもなにしておふいほりにもつかうだきみやう
 が。だきをもだかとなあゝ。人が三つうろこでも。ま
 まとはたてゑぼし。そのをりゑぼししのぶよの手は
 づやはづにいやましは。月にほし。かさをめしたか
 三本からかさ。さす手ひくてに二つ引三つへいじ
 四つめゆひ。あみの手やいたらい。きよきながれ
 の水ぐるま。くる〜と二つどもへや三つども
 へ。うつやたいこのひやうしとり〜。ひらくあふ

ぎのまひづるは。大一大まん大吉日とむまののりぞ
めゆみはじめ。しやうらんありておのくもほまれ
をのこすふじのまきがり。

紅葉傘住吉丹前

「ちはやぶる 合ナゲアシ 神をいさめのナチス御まつり
外記ヲロシあかまへだれにかさ合みな一ナチスや
うに合そろふたくくれなるの合いろもかはらぬ朝
日かげ合すそ打はらふあさ風のなびきさかふるけふ
の神事へ「かさをや合かさをさそならゑいく合かす
がやま合これも神のちかひとて人がかさをさすなら
エイくわれもかさをさそよげにもそふよのやよげ
にもそふよのげにナトシまこと合小松のかげの下露に
よその袖までしつぼりとぬれてはまべのぬれさざか
おきにかもめが合友よびかわす合はんまちどりがち
りやちりくちりやちりくちりくちりくちりともこぎ
いだせばのふ合からるのおとがしとんとからころ
からころからころりともしづが手をいやぬのびきの
たきのしらいとうちははれてあまついはとの神歌をう
たふていざやきよむべしナドリ」はまのまさごの合か
すくになにとなみに身をこがす合そのますらおが

ますかみなみに合なりたやいそうつなみに合めな
みおなみのぬれにぬれたる中ぞゆかしあらうらやま
しいかなればかた山里に住よしのおどりつまふつよ
ろこびつすみよしさまの三ノギンきしのひめまつめで
たさよ「ふでとりそめてく戀といふ字をおぼへさ
せたいさりとばさんざく合すみとすりはよいな
かふどのおもふたけをばしらせたいぞへさりとばさ
んざさんざふでにいはいする戀のみち一セイカハリ「そ
れくも見るときはいふくをおもひ花ながむればかた
ちをしたらふ「たうりふようのくれなるに合やうりう
のさいようと合そのからうたのいろこととうときう
きよをやまとなる「みそひともじに合やはらぎてこ
ひとなさけのその中々にくせつのためをまきばをり
くわんくわつすいてたうせい合日本もろこしつか
みざし合だせいさつがからかさのあめがしたとる
まれ人といはねどそれと三えのをび合うつくし色に
うつらふもみち合こすへてりますむらしぐれ一ふり
合ゆりかけふれくぬれにかしこき戀やつこ合
かさにももりをかけまくもかたじけなくかく
れござらぬ花のかほみせ合江戸市村の御ひいきを

便にうけてすいせんのしやんくしやんと姿はおと
こらしいやおとこらしきつとしてじつとしてじつと
しめたるふうぞくや三下り吉次カハリ「そのおもかげの
しばしまも。わすれかねたるはつ戀に。合中ギンはず
かしいこといはるゝものかかなのほのじもほにあら
われて。本ユリカハリひとりにおもひにこがらしの。風
にたよりのおとづれも。鳴て。合さわたるうらモツス
カシちどり。歌いくよねざめぬひとりねも。まこと戀
ぢのにるまくらツミ歌「およそ心なきをなごでも。は
けるあしだのはしくれに。ギンつくれるふえのそのね
には。かならずしかもクルフシよるの露。中ギンはすへ
たよりにむすぶこゝろの。戀すてふ詞「さつても見ご
となお女郎さま。くものびんづらはつしもに。くわ
つとツキユリわらひし甘日草。詞それ。ウタヒ地ヒヤッ
京こゝのえの美しきく。おむろの。合御しよのや
え。ひとえ。かたるも見事おとはやま「ゑゝなんじ
やいなこちや花よりも。お江戸ゆかりのこむらさき。
そまるいろかとアタルよりそへば「ちよとおじやまに
ちよとおじやまになりふりも藤蔵せりふ「どふ共かふ
とも歌「いふにナイはれぬいろかもありてなん「おと

もにとつつきおふてばさきげんくわんまへ羽左衛門
「こいよないくなんくなさけの戀のしな合あめ
にもゆきにもかよはんせ戀はくせものげにこひはく
せものいまの世までも世の中のく風はよきてふけ
いまふくかせにろをおしたて合こげやふななさ
からろのおとが合やつとんと合さつとたつなみはま
ちどり合ゆられてもまれて合ばつとたちそろびく
りびくくりしかんかいな合そつこでそろへてさあふ
れさ合との様のおめし物何いろにそめうぞこび茶す
す竹はんないろく合ちやつきんはかまちやくして
きりきりともこぎりめにてんとく合あつたもので
はないよさ合いさぎよやナドリ「あれ見さいな合むす
ぶのがみの中だち合ほんにおせいなゑんむすび合い
づもやえがきつまさだめあるはいやなり思ふはなら
ずそれじやくそのひと戀のはじめははづかしや
おもしろのいろねたえなるかぐら月合花のたんせん
かほみせきやうげんあさからとうからゑいとく
こがね満くるたからの市村千秋ばんせいとこよのた
ちばな合やぐらだいのおとは久しき。

戀文字道中雙六

歌「これくごらんせみさしやんせ是ぞ五十三次を
 のながらみせたるだて風を。フシいきな姿のしどけな
 く。ヒヤッま一もんじに日本ばしより真直に京橋中
 橋おまんがべに藤懸、べに白粉も手に付ずしんきしん
 くの新橋に品川つくる水かみもみぢみよふなら海
 晏寺もくぎよのおとは「なむあみとうふ／＼合ひや
 うたんあれど酒はなし。酒やは有つても花はなし。何
 をくうやのかほのしははらもしは／＼しの竹の杖が
 入そな夜明がた藤「おちやまいれ音八、茶の木のきよ
 ひよんでわれらがためにはしやかのでしげに品川の
 大佛ほとけもとは凡夫にておじやれ／＼がひく三
 味線は相方藤「ひくすが、きはくはるはを移す八文字
 ナゲアシ「なれしくるわもはやむかし藤「それ大名のお
 通りじや行れつそへてよいやさかちわかたうやお
 六尺ふむ七くさは、相方藤「跡からしやぐ／＼おつ
 ら馬小室ぶしをはり上てヨロアシ「千兩取るとも馬
 かたいやよ音「ほてつばらめと鈴ふりかくる鈴の森
 ふりさけみれば六郷の渡しばにはや月の駒相方藤
 「吾妻下りにあらね其その相方藤「なり平さんの歌枕
 こまくら持たぬ草枕出馬のこへにおこされてみやる

向ふはあはかづさ沖こぐろ拍子さつ／＼さ相方藤
 「駒もいさめばはいしいだう相方まづはや咲に梅のき
 や和中さんりは一ふくのたばこ呑むまに行過て火な
 はふる／＼ふる川やくしもみへるぞへ音「さつても
 しやべるは品ものめかの川崎の名物の茶めしまれな
 る女まご定めて色が有るである藤「わたしが思ふそ
 の人は音「其色は藤「さあ其色はサハリ「わたしが胸の
 数々は。かなでアタルテシいはれぬかな川のいそぐ
 程がやとつかはと足ももつる、藤澤の。合ひらつか
 のまも。わすられぬ。藤「其戀人にをた原と思ひこが
 る、胸の火にわきて流る、箱根のゆ音「お、そのゆ
 めぐりのなぐさみに里の女がむぎつき時にうたふ小
 歌のこへさへて夢ツキ歌「るんたきれると思ふな女子。
 水にうき草ねは。きれぬしよんがいな、わしは此町の
 軒ばのすゞめきてはないたりなかせ。たりしよんが
 いな「あすはお立かお名残おしや。せめて仙石やの
 まがり。までしよんがいな藤「花の姿をみしまよりふ
 かくはまりしぬまづのしゆくふじのけぶりの空にき
 へ行るもしらぬ戀人は音「何とかゆるのはまづたい
 うつの山の十だんごおあしつく／＼藤「つく手ま

りこのてまり歌「一つとやひとよ明ればにぎやかでに
 ぎやかで飾り立たる松かざり／＼「二つとや二たば
 の松はいるよふで／＼三がい松は藤どもへ／＼「三
 つとやみんなの子供衆はらく遊び／＼あな一駒取は
 ねをつく／＼「四つとや吉原女郎衆が手まりつくて
 まりつくてまりの歌こそ面白や／＼音「手まりつく
 右のかいなをうちかたぐ藤「そりや何じやへ音「岡
 べの宿や藤枝のそもじに命投島田かなやにこゆ赤坂
 「相方藤「とひましよ／＼音「聞ましよ／＼藤「女郎は音
 「おじやれ藤「ひきやくは音「はやだち藤「鳴見は音「し
 ぼり音「聞ましよ／＼藤「聞ましよ／＼音「鳥は藤「ほう
 わう音「花は藤「みよしの音「月は藤「更科音「薄は藤「小
 ぐら野音「ぼたもちは有まい／＼藤「問ましよ／＼
 音「聞ましよ聞ましよ藤「みやは音「大こん藤「くは名
 は音「はまぐりはまぐり／＼しんき樓藤「石やくし程
 かたふてもちやうと歌性のわるい男のくせに。水口ぐ
 せの仇ばれと思ひ大津の其人は藤「京迄か音「いやあ
 はた口藤「真先かけて殿様のおねがひ叶ひかつ色の
 花のお江戸のまん中に音「こひめは市村さいさきよ
 し藤「くはほうはねてまつ音「ゐながらあゆむひざく

りげ相方 兩人「はいしい道中すご六と口舌さわやかは
 なやかになぐさみありける景しきかな。
 ○鐘櫻 黄昏姿
 「そも入あひのかねの聲じやくめつゐらくとひヶ
 どもわれは思ひのあるゆへに真如の月をながめ明さ
 んつれなき人のしわざゆへわか木の花をちらすかな
 しさつら／＼世上をくわんずれば合うんしやうの花
 の宴春のあしたの御遊びに仙洞の合もみち秋の夜は
 月にたはむれいろ香にそみはなやかなりし身なれど
 もおとろへぬれば朝がほの合ひかげまつまのおもひ
 の露。恨みをはらさんそのためにこれまで顯れきた
 るぞや。カ、世の中のなさはけは人のためならずわれ
 人のためナナスつらければかならず身にむくひのつ
 みや数々の合千束にあまるたまは、きあだになした
 るはらだちやととびしり立あがりフシヤトシヲ、さ
 りながら合ノ手「みめやかたちや合入カン目もとにや
 ほれぬ合心ばせにぞしよしまよへ合おしやればそれ
 もそふ。それもそふ合ノ手「かわい／＼と合カン入口に
 はいへど合なせるしわざにやきにやいらぬ合おしや
 ればそれもそふ／＼。ナナス忘る、隙もないわいな

「うらみさらしに盡すまじ。思ひをはらさんまち給へと
うかひよれどもこはいかに合人々眠ればよきひま
ぞとて立まふやうにねらひよつておもへばこの鐘う
らめしやとてうづに手をかけとぶぞと見へしがひ
きかづいてぞうせにける。

○女伊達姿花

前彈やえがすみ。レンホナチたつやギンやよひの。さ
くらがり合ゆきかふ人の山ぐちやみうらうらう川
竹の。合ながれもぬるむうたがたの。合ほどけぬ文の
かすくもチギンきのふにかはるあすか川なみのう
ねくだてくらべ。そのかよひちのおひ風や菊の垂出
半太夫ガガリひとめのせきのゆるしなく。かきのしづ
くにそぼぬれて地あめのみわやチナスはなかはど。
あゆむすがたもはすはにておとこなりけりをんなだ
て。半太夫地このはちまきのむすびめも。かたきち
ぎりのチナスゆがりの歌いろやむらさきにほふつぼす
みれ。三ツピヤウツみ八町くさそよぐ草に。おと
せぬぬりばなを。チドリ歌ひとつふんらうひとつまへ。
合ふたへまわりのくものをびふじとつくばのやまあ
ひの半太夫スエそでなりゆかし。きみゆかし。菊之垂せり

ふ「きみならし」ナゲアツしんぞ半太夫トメいのちを助
六にコレあげまきのまへわたり歌トメふせいなりけ
る次第なり。

○狂亂情姿繪

「はづかしやわれがおもひのいつはる、やらギンあ、
さだめなきうきよぞとらみかこちてしどもなくく
るひめぐるぞ合はかなけれ合きちがひよほうさいよ
と合わらふひとこそきちがひよとしやうたいなくぞ
見へにチトシける合さなきだにわがすがたチシチヌみ
だれ心やむすばれてとけぬおもひをいつかさて合た
れととりあげてかわいともとふてくれはのかねのこ
へ合げにあさましや合上われはかひなきすてをぶね
よるかたもなきうき身ぞとないつわらふつあれく
あれそれくそへぬしさんの合にしきいろどる合
そのふうぞくのいとしゆてならぬこちよらんせなん
ぞいの合はなもみちも月ゆきもなんにしよはい
はいよわらをとまよ合七つおきして別れをおしむ
合いとしのごと手を引あふてゆこやれく合あ
すは山王まつりじや合だいがさたてがさぎやうれつ
そろへてあか坂やつこのつりひげ合もみひげ合す、

すすいたとりなりいろく／＼にだてをかざるや一おど
りこれをきてみよかしのへチドリ「あめのふる夜も
ゆきの夜もいと合かよひつめたる戀のはしわた
らばにしき中橋の中やたえなんうわきはいやよ合さ
りとは合川のふちせと人の氣もかわるこゝろの大
はしと合ほかへなびかぬやなぎばしほんにせいもん
かみかけて合さりと合三ノギンふたりが中はまるき
橋うれしからふじやないかいなそんなもまことに
よふいふたチトシしやほんに「それくくくくニチ
ロシきやうじんはしればふきやうじんもはしりく
あそんだ合うらまでござれあしのつめたいにざうり
こんく／＼よゆきやこんく／＼すそもこづまほらく／＼合
ほらく／＼合あなたへはしり合こなたへめぐりくるり
くるりくるくくく／＼合くるひめぐるぞいたはし
き。

○すゑひろ冬ぼたん

二上り「ふゆ木立わきてこすへも色かへぬ松は千とせ
とゆや御せん「ゑもんつくらふすがたかもぬふてふ
袖のふりあわせ他生のゑんをむすぶの神さまといの
るもきみの戀風花のあたりをゑ「よぎてふけかし風

だにも匂ひほしさよ六つの花つもりし思ひを我つま
にしらせたいとは思へども入めのせきのつらかりし
「おらがおむすをはむるじやないが「こともなりそろ
こさうさみせんうちはやし「まひはおいゑのもの、
ふもこしをぬかすはこひざかりしなもののめにまよふ
てわれらもちつくりこゝろが有明の月雪花のむすめ
くどくはいやましのおもひ草「つまのためにとて天
神様へぐわんかけて「梅をたちますめいはくさあわ
れ一代たちますめいはく梅をく／＼たちますめいはく
さあわれ一代などしやうかどしよかいたなかわゆがら
んせこちの人「萬代までも天下たいへいこくどあん
おんこのところひさしかれとぞいわぬく／＼「まひお
さめたるすゑひろのく／＼「ひらくやはなのふゆぼた
ん。

○所縁の茶杓

「やあれハル見事にく／＼かざり立たるハル花だし合は
やしの笛太鼓「いちやうにいづれおとらぬはなやか
に扱もそろたへやんれそれ聲かけてはやさんせけい
この衆合あか坂奴のふり出すく／＼合ながさてなさ
てな合やんれそれ聲かけてはやさんせけいこのしゆ

合いさぎよや合カン伊達をかざるや色々「わけてめに立ギンガハリ風流出たちしやんとこぎりめに合茶せん茶杓のしなもよく帛さばきもナアかはゆらし三ッギンとかく浮世は戀の世の中合君と我とはこいちやのはなが合人が水さしやうすくなるゑにくてらしさよいたづらわるじやれお手紙じつともひかゑたお茶のギンくちきりたざらすめもとなさためハシルまだ初秋のみじかさよ情うすちやはいやで候おちやまいれ合ッパミウタおよばぬ戀さゑかなふぞや合そもく大カソお茶のはじまりは合天ちくぎばかそく女にて合ニッギンはたちにてみまかりし合たいのしははたの人の木とかけり春すぎゆけば宇治の里の女郎衆てんでに茶かごを手にもつて歌カン「あかまへだれにあか手ぬぐひ小づまをしやんとやらせてしやんならしやんなら〜とやらせて合はしの下を見てあればニッギン水車がくるりのくるりの合くるりくるり〜のいせぎにかゝる白なみ「どつとつてはさつとひくはや瀬の水こそお茶の湯にはあぢがよいとの茶たつる音はちやつきりやこつきりちやつ

きりこつきりちやつきりや合しなもよく初五郎「二八さかりのあき人もしやれた風にははかどらず合カンとる手合はづかし文月もはや候べくになら團扇合三ッギン螢こひとて小手まねくかふて下んせかはしやんせナドリ「戀といふもので合身にしる秋のかせ吹に妻戸の音信はてもしんき合はぎのなびきにまねきにだまされて露のこの身の獨寐に合いつそ心にあいそもこそ月は思ひを十寸鏡「くもらず代々もすみのえのまつにもゐます神あそび合五こくゑんまん民安せん合こくど成就のまつり事合げにおもしろさけふのにぎはひ。

○旅寮の小蝶

三下り「道のべにしみづ流る柳蔭しばしとてこそ旅まくら「夢おどろかす「鳥の聲〜何々わがつまのゆくゑをしらすかうれしやとさまよふ姿は狂氣とも三重四五重七重八重「花の故郷にひとりかもねん「戀しゆかしさつまの跡をしたふてくる〜しやんとぶくさ帯「むすんだりとひたりてふのいもせごと「うらやましげにうちながめ蝶こてふ「しほらしぬふてふわれもこがるゝ戀すてふ君にあを葉〜と行もが

な「しらぬ山路や里越へて「旅は道づれ世は情戀のさかりの小娘はしゆくで一ばん名とり草よいこの〜よいかほよ花色ならば一夜も二夜もとまらんせと袖をひく襦をひく「おなぐさみならさかなほどひく夜もすがら〜おうさてのふ「關の小まんな龜山通ひおう扱のふ「興作思へばてる日も曇る鏡山「いざ立よりてくしげ鏡臺化粧がほつまに見しよとてべにかねつけ「春はござれよ「かみじ山「ゆくもかへるも伊達な出立の「三寶荒神「駒もいさむや鈴の音色も染わけ手綱面白の一ふし「坂はてる〜「鈴鹿は曇る〜「あいのつち山雨が降〜「袖ふる鈴ふる「天津乙女の舞の曲にもまさりし舞の面白や鈴の音「さつさ時雨か蟬時雨濡ていとほし夏衣「すげ笠と「女房は新のがよいと皆おしやんすけれど古わたしはすいじや「もの里の夜ざくらとうろうの月見初雪つもるたのじさかこはれてからさふねこはがるうはきがちなるともじ様二上り「かぐら月まづ新しきやぐらまく嬉しいやら心いそ〜手を引幕の「女づれひいきぐみじやと名もあげ幕の内ぞゆかしき金屏の「祭の幕のにぎやかさ「波のつね〜船の幕「それかあらぬか

菊桐紫の幕「勝どき上る陣幕も「花を飾りて五色の幕は詠なりけり梅の東風ふかば吉野の花見幕「春は嘘なん今は葉ざくら。

○めんかぶり

「とかく子どもたちやいたいがよいものじやおろろとあら〜あら〜とおろ〜あだにさむればてうちてうちあわ〜かむり〜しほのめあたまたん〜よこまどりす〜めのおどりそのをにとりつき太郎松よね松たん〜かいつきとりつきひつきさほになつてぬふてふ鳥の花にくる〜〜〜くるるりとはなをふり袖いたづらやまつり〜ちんがらこ〜までござれ手ぐるまにのせてありやこりやおきやがりこぼしいぬはりこさるのすまふにあがつたりさがつたりゑ〜〜いかなるわるさ盛もこちのてうへござれのはつて〜はい人ぎやうきんびらだんべいさがたさくらにさるが三千ぶらりとささがつてたわらころびにころりや〜やつころりとぬめらしやんすなのふやれ〜さてももの〜つくにまさるがしほらしやこさるめが枝にたわむれあそぶわしにこがるゝ夢を見たまもりをかけさへよけのまもりを

サまもりをサかけてまいろそれさまへばさま〜と
 名ばかりぼさまころもいやなり女郎しゆとねたしそ
 れでぼさまといはれふものかそれじや〜そふさん
 せかぶろ〜となばかりかぶろなじむおきやくにち
 わするめもとそれでかぶろといはるゝものかそれじ
 や〜そふさんせいまのこの葉くちん〜にかもの
 けいばもひざくりげあかがいの〜しんくのたづな
 にあをりをうつてかけぞん〜のりかけぞんおむま
 が三びきのりてはひとりはいどう〜かけつかへ
 しつはいおふてば〜ささくらの花よなみうちぎは
 に〜ざんぶとよせてはえい〜わいとつばいひや
 ろのひのんほのんよいさむ春ごま。

○さころも

「はなのまをちとせのさとかくれすむ忍ぶにたへ
 むみだれざき菊の白つゆをきふしのあさげの風のそ
 よふけばをばなうなづくやえむぐらしげれるやど
 をたましきのくさ枕にくさむしろおきつまろびつさ
 さめごとしらんのともとむつまじくちぎるあかつき
 ほしあひの空もわかれのふくる夜ごとのかねのこゑ
 またはいろよきまがきのきくにてふもこてふもたは

ぶれあそぶわれもよねんの人つれおりつあがりつひ
 とりおのがは風のをやかく花をみやげにいゑざ
 くらそもはやくれてひざくらのかけ夜ふけて月もを
 そざくらかよふほそみちこへすごきいぬ櫻ぞつとし
 た風におとせしつん〜つまどきり〜ふたりが戀
 の山ざくらやみにあをとはくらがり様すいさまは
 てそふじやへさいな〜むめのはなのかいよか
 めたゑんと月日をたのしみにしやうがへわしが中だ
 ちくらがりさますいさまはてどうじやへさいな〜
 きみをおもへばありあけの月あけていはれぬこひな
 んとしやうかへ〜ろづくしの身ぞつらやくさばに
 すたくむしのこゑまつむしす〜むしわれかうろぎの
 きみとふたりがもらさぬ中はつりさせてふはたを
 りむしのそりやくつわむしそりやこそひをむしつね
 になかぬはたん〜たん〜たるらむしわがふるさ
 とへともなはんなをもじさいのすがたとなつてこゝ
 にあらはれかしこにかくれてんにあらわれればつ
 きうでんまでおつかけおつつめ世にまたいらばこ
 んりんならくのそこまでもおもひつめては中々に
 うらみつないつらんぎくの花のすがたもはづかし

や。

○風流廓萬歳

あやめ〜とくわかに御せんせいと女郎もさかへさふら
 ひける傳九郎「あいさやう有てぼつとりものとしたち
 かへるあしたにはきやくをおくり大もん口あやめ〜あ
 さひかやく玉のかんざしつむりにさいて傳「しや
 ならしやならと中の町をあるさしはまことにてめで
 ふさふらひける京五郎「こりやほうるんをちややもち
 やにしたな傳「小林はさぶらひそれだによつてじや
 まになるほうずめをばま〜とにめでたふさふらひ
 ける〜けるはやいあ「これさいわか此ごろ五てう
 町を七種のひやうしにあはせて女郎の名よせ歌をう
 たふてとをるがしらすかや傳「そりやまた何をあ「そ
 もそも女郎のなよせ歌させ川龜ぎく傳「まひづる若
 竹わかむらさき名も高をあ「さてまた太夫といふわ
 けはしんのしくわうのあまやどり傳「そのときつけ
 た名といふはこれ大きなうそ八百あ「第一にけい
 せいはなじまぬきやくもおもふふり傳「大かた涙で
 やるうちに新ぞうなどは中なみだたいめそ〜〜
 めそ〜となくばかりあ「太夫のなみだは大なみだ

大きなあめのふるごとしざるによつて大雨とかきな
 らべて太夫とよますかなづかひ傳「そのうそなみだ
 をほんにして二てうのをぶねなしおふおせやれお
 のこ椎の木じやしちやつぼはんぶんじやはらつほ
 ういたなみや花川どこ、淺草のくはんせをん三社
 こんげんうちすぎで今戸の橋をくゝるはゆめあ「ど
 てのてうちんやみのよはよしはら計月夜かなり〜
 のちはぶみをまがきにのぞいてこれたゆふかほが見
 たさにまたきたはいのふみさんそのやうにごさんし
 てもおやごさんのしゆびはよいかへばんとうさんの
 しゆびはよいかへよふてもわるふてもくるはづじや
 はいやい京なせにへ歌さてもくるはといふことは
 いかにおやのいけんもわざくれとまよ通ひあみが
 さ夜も目もわかすさまに迷ふてそれでくるはといふ
 はいな傳「ゑ、だんな大じん様の御來りんお出のほ
 どをまちかね山のちい〜だもさあ「こりやてい主
 そうたい太夫がかぶろがきてんがきかぬぞやじたい
 かぶろといふもののおこりをしらぬによつてきてん
 がきかぬぞやそのわけをなせといや京「どふじやい
 な歌「さてもかぶろといふはいかに女郎さんたちの

まぶぐるひはまよやばなきやくしゆをしこなしぶ
 りのしなのあしきをわしがかぶろといふはいな傳
 「かぶろのいわれをもしろいと中々かんせぬものこ
 そなかりけれあ「ていしゆ此間たのんでおいた太夫
 が身請のさうだんはどうじやいのてんとぶせいじや
 ぞや傳「ちかごろこれは御めいわくか様な事のさう
 だんにはかみほとけをたのむがよいとりんおつ取て
 だいがはんしたてまつる芝あたご上野ぐわん三大じ
 ならびにかさもりいなり百日日參かないあんせんは
 だかまいりのぬればうすあつめたかろ傳「おさ
 い若でかしたくまんざい傳「まんざいくくこ
 れ太夫どのまんざいをやしかけてどこへゆくのだ
 あ「はておくへいてうつはいな傳「うつとはつみか
 傳「波のつみか七りがはまのどうくくとおと
 たかきやつ七ごうのほうらい山つるが岡のはをのし
 て松ばが谷にさゝめが谷かめがやつなる壽は百まん
 ねんの御祝ひとほらうやまつて申す。

○寒紅梅行列丹前

「花のかほみせいさんでく「花のぶたいのはなやか
 さ「やつこのくふりこめく「花を飾て大鳥毛「や

りはさまくあるが中にさがるきみへ文をやり
 思はれたさにびんつけつくり品をやりつ戀にこ
 ろもみだれがみ酒に心もみだれあしさまに命もや
 り梅のかほり「わすれぬくおもひやりゑんはいな
 ものふたり花やり「見たせば野も山もすみるに「な
 るや冬げしき「中に色よしさわべにあやめかきつば
 たのかへりざき咲たりく長がたな「男とも見へを
 んなとも「三え四重五えなえ八重花のすがたのよ
 し岡ぞめやあさぎちりめん茶ぢりめん黒いはをり
 くるくくくるわがよひ「よいく中の町で見つ
 けられたかおいとしやおもひのたねじやいなつき
 はしんくのたねとはいへどまつの葉ごしの月みれば
 しはしくもりてまたさゆれどもこひには月もいやま
 しのおもひぐさ露ふみわけて「しのお夜はやみこそ
 よけれさしあしそろくつまどをたくはたれさん
 じや「さまならあきよもの夜半ふくかせにだまされ
 たねもせでまよふたわがおもひ「そらにこひすりや
 うき世じやいな「みなひとごととにまるい中じやとい
 ひたて「わしは月見のやくそく「きながらにせふ
 かへ「里にこひすりやうきよじやいなみなおもひご

と「つもる中じやといひたて「わしはゆき見のやく
 そく「ゆきのやなぎにしようかへさかりめでたきふ
 ゆばたん「とのおたちかくぎやうれつそろへて
 ふりこめさつさふれくいさぎよやいさんでふれ
 さふれさふれくふれさ「さつさふりこむ御くにへ
 いる。

○小林の朝いな草すり曳

曾我の五郎

「はしりか、つてくさすりを。はるのはじめのことぶ
 さと。ひつびくともひつちようべい。かつびくとも
 かつてふべい。ひけど。うごかぬこんりんざいよりは
 へぬきの。しかも。だいくかぐらで。あまのいわ
 とを。ひきすてたまふおもしろや。「身はばんじやく
 の。おわかしゆなりともあくまで。ひかばうごかじ。
 「うごくけしきはなかりけりあさひなほつともてあ
 まし。しやれがこうじてけんかのたねよ。あつかひ
 になりすましたせりふ「しやんく「したに見へるは
 やつこでござんすかの。てもよくにたつりひげじや。ひ
 げがにたとてやつこでござんすなら。どちやうなまづ
 が。みんなやつこでくござんすかの。しや。ほんに
 おかしなことでござんすかの。「べつそくふみしめと

きむねははやかけいでんとするところを。あさひな
 なをもせきあがり。ひくにとまらばこらゑて見よ。
 せりふ「モサくくく「もつたるうでばねひきぬ
 つか。お力じまんのおわかしゆさま。こんくこぶ
 しがやれくさてくくくじてのくかや。そこはな
 せ。なりやせぬじやまなる。つらにくや。はなせ。と
 めたとめた「ばんじんのあらくげて。くさすりさん
 まいひきちぎつてさうへばつとぞのいたりける。あ
 つばれくんのゆうりきやと。きせんじやうげおし
 なべてみな。おそれぬものこそなかりけれ。

○曾我まつり躍盡し

三下「けふはきち日そがのりやうしやのじんじとて
 めでたくかしこだしうりやはなだしだしおもひお
 もひの神いさめおどりづくしをかきつばた「花のみ
 やこの町おどり千代のはじめのひとおどりまつはま
 つざかおどりこへさいなくさあやつとせ「はくじ
 んおどりばんおどりなりよしふりよしみよし野の花
 見おどりのおもしろやさいなくさあやつとせ「さ
 らりとやなぎにやらしやんせ「わしもおまへも伊勢
 おどりかしまおどりのかさおどり夏はやかたの手お

どりやさいな／＼さあやつとせ「見にきそおどり嵯
峨おどりむらさきばうしをしやんと着てぎぜんおど
りのしほらしやさいな／＼さあやつとせ「さらりと
やなぎにやらしやんせ「おくにかぶきのあさおどり
かさいおどりのうたねおつぼさつおどりにうつたい
こさいな／＼さあやつとせ「だいまくおどりあまご
ひのおどりにぬれしもことわりやこまちおどりと
ほめらるゝさいな／＼さあやつとせ「さらりとや
なぎにやらしやんせ「のきのとうろうおどりみや
こそ。

○乗掛情夏木立

「旅人をとむるも關身を忍ぶ。人めの關や戀のせ
き。關のこまんもその昔ハルいろはといひし舞扇指
手引手にまねくおじやれのうきつとめ。愛蔵出「跡を
したひて。都よりツナゲはる／＼きぬるふる郷の二ノ
ギン松は見しりしアタルふぢなみやびらりばうしに染
浴衣ハシル 關路はあとにあり明の合ヒヤウツきげの
合駒をみちしるべ合中ギンしやんと乗たる横た村。チ
クリ、アミドガカリおやざとさして行道の。羽左衛門出「お
なじおもひはあとやさき。道に後れてみち芝の合さ

せもが露のそめたづな合二ノギンかたなにかはる竹
のむち合ふしぎのゑんにつながれし小ナツリ戀の。お
も荷を文セガカリ打のせて合二ノギン 興作々々と招か
れて合ヒヤウツとまるなら合泊らんせ京へ通しかよい
のを乗た合本ツキユリあやかりものと夕時雨。合二ノギ
ン千兩取とも馬追いやよ寒の師走も日の三ノギン六月
も二ノギン 駒の手綱で日をくらすヲ、しよんがへ。フ
シナトシむかしがたりとなりふりも。「さつてもこち
の品者め義大夫ガカリ吉次「抱きおろせば。フツ襦から
げ。道はか行ぬ女旅。二人坂はてる／＼吉次「すいかは
くもる。鈴鹿も我もくもる身をスカシ「はらすちかひ
は觀世音山より合山に行道はゑいさつさ／＼ 二上リ
吉次「箱根八里は馬でも越がこすにこされぬ大井川ナ
アヨいせは津でもつ津は伊勢で持尾張名ごやはしん
しろで持ナアヨ三下リ「登り下りに手を引合て合ヒヤ
ウツあの人このれ／＼しやんこ／＼鈴の音。はなむ
まそろふてのんほのんいよ／＼うかれて／＼三度
笠。合フシ旅のうさをすれ草ツツミ歌吉次「名は
だてびとの興作とて。人にしられし戀おとこ。愛蔵せ
りふ「なんぼおまへがそふいはんしても男の心と歌

「秋のそら合うそをまことにいふておきおまへ。ゆ
へならどうなりといのちはおしまぬモツスカスこゝろ
から。アタルフシこのころたへて文もこぬ。合またう
るさゝのあだ心二ノギンわしがおもふ露ほども。とや
かぬおまへのつれなさと。びんとすねるもどこやら
が。たがいに思ふ戀中も。フシだてにはすはにふりも
よしチドリ「こちのおもはくちかの御げんとかいてき
た。きたのんし／＼合あふ夜うれしきその人なれど
あだし此身はまゝにはならぬさりと合戀のうは風
ふねでおせ／＼よふかよかのんし／＼ナナス「唄ふ小
歌もおもしろや「つゝ聞きて、ゆく道も市むら合里
むらヒヤウツ 早過て日かげも西にかたおけば合二ノ中
ギン 吉原すゝめさながらに。とやむるそでを合ふり
きつてヒロヒいそぐあしさへいさごみち合三重カ、ッ
すぐにはゆかぬ駒のあしよこた。川にウタトメ「しば
しとてこそやすらひぬ。

○川柳二つの竹

ツレミツタ吉次「いとやさへギンモツうき人もがなわれは
また二ノギンむねにせまりしかす／＼を。いふにい
まのこけしみづ。ゴサイガカリ水に。合ゑをかくギンガ

ハリそらごと。人はそれぞと。合ゆふ月よヒヤウツ
此間藤蔵せりふ花が「見たくばよしのへござれ歌「いまは
よしのの中ギン花もちりはて我つまの合カンはかな
きすがた見るかげにいとギンおもひは三ノ上ますほ
のすゝき合ヒヤウツみだれみだるゝわがこゝろうは
のそらなるこのむねに合二ノギンまくづがはらの風
さそふ。アタルさそふもつらしフシナトシふりすて、合
三ノギンあとに残りしかわいやギンアタルこぎくたらち
お戀しゆめにだに思ひあふてふいざ引つれてまいろ
まいろまつり見にまいろいや、合いふとも三ノギン
もどろともなにともそなたのおんはからひとアタル
いふてはこごしにとりついた藤蔵「いかにあんない申
候澤蔵「たれにてわたり候藤ほうかぞうにて候た、い
ままいる事よのぎにあらずわれらがおやのかたき候
ががたきはまうせいそれがしたひひとりおもふに
かひなく月日をおくり候月のためにはうきぐものた
ねと心やなりぬらん歌「おもしろのはなのみやこや合
ふでにかくともつきせじ合三ノギンひがしにはぎを
んきよ水をらくるたきの二ノギンおとはのあらしにぢ
しゆのさくらはモツギンちり／＼合ナスギンガハリにし

はほうりんさがおんてら合まはらばまわれヒヤッ
 ヒロヒみづぐるまのわのりせんせきの川なみ合かはや
 なぎはハルみづにもまるしだりやなぎは風にもま
 る合ふくらすめは合竹にもまる合ハシルみやこ
 のうしはくるまにもまるちやうすはひきやにもま
 る吉次ウタイ「げにまこと。ナチスわすれたりよま
 ヤッこきりこは合ほうかにもまるこきり子のふた
 つの竹に代々をかさねてよをかさねてゆくみち
 は合三重カ、見るめもなにとおもひ川合ヒロヒし
 づごころなきそのふせいことわりなりとぞしられ
 ける。

○狂亂手くだのすがき

ツミ歌吉次「しんよのモツハル月はくもらねど。ギン
 われがおもひはくもまゆく。ツミ相方あのとよりさへ
 もつがひはなれぬうらやまし。ギンわれがこころのも
 つれいと。ウタヒみだれくて風に遊ぶや。ヒヤッ花
 ぐるまさかづき投てきよくすいのゑんもむすびてた
 れときぞめしたひものニノギン「狂ひみだるなり
 ふりを。人がゆびさしわらをとまよち。ツミち
 つともそつとも大事ない。こちや大事もないよの詞

申し、あの人さん立てみや。合みてみや合さつても
 よふにたこの思わくとのこの顔にツッケツシにてに
 もつかぬやつこのくくくやつこめ興三三三有「ハ
 ハ、何のこちやく人かと思へばありや花じや花
 じやしかも櫻のてもよふ見ごとく咲たはく「歌「誰
 にみしよとてさく花のほんに野にさくあだ花よハル
 ひとへふたえはうすくいていよ合君を思へど其人は
 たへてとはせもまつ風のおとづれもなきチツシあだ
 ことの合かはいくはみないつわりよ合さの一夜
 もまことがあらばチンうきなたつのはわざくれと合
 おもひかこちてくどくくくとあなたへしやなく合こ
 なたへ合はしりくくめぐる合かせにてふの合ひら
 ひら合ひらと合はかせにはな合ちりくくくちり
 かゝるゆきかの合はなかのゆきも花もいやくこが
 る、三保のまつ身よりまたるもんびやくそくは合
 まつまゆかしきぬしさんのレイセイガカリこしまきは
 をりナチスひとめをばつ、み八町にほんざし丹前ガカ
 リ「さりとては合やるせないぞやとりのこゑツミウタ
 戀がはじめかおもひがまへかむかししのぶのかねの
 こゑチドリ「ひいふう三いいいっしかに合おもひあふ

たがゑんでがなある合といてくどいてうちとけてそ
 ひねのくゆめもなくふたりが中のおもひ川「われ
 こひしきおもかけをこがれくてもものぐるひよのも
 のぐるひよのすそにもつれてたもとにすがりとめて
 とまらぬそのきやうらんのみみるもいぶせきふせい
 なり。

○御所風俗籠丹前

二上「名どころのカンむめも櫻も冬ごもり春まつき
 ぎのかわゆらしさはやぎのカン「梅の花「あにと
 いはれてにくからぬそれなせに「まづふゆ木より咲
 そむる梅がえの「にはひくるく「花のすがたや花の
 かほみせにきて「おほもじながらさるかたへ「ほの
 じとれのじのなぞかけてとけてうれしさカン「ほれた
 げなやらあひばれに人のうわさも七十五日やんれそ
 れはへくけしやうがほなるふじのお山「三ごく一
 のおとこ山「いまをさかりのてりはいろく冬こた
 ち「よものけしきを見ゆ「おもしろたえの雪見酒「よ
 しののやまをゆきかとみればゆきではあらで花のふ
 ぶきか「そでやこづまへちりかゝる「をちばどきカン
 「うちがみさまもおるすゆへたのむかたなきわしが

みを「かわいくと思ひぐる露のなきけもとのさん
 へいふてくれないやつこさんがてんじや「がてんじ
 やがてんじやこれだんなこの戀かなへてたまごのふ
 はとおんのりあれとすがたもとをふりきればカン
 「ならぬぞいなしやせぬくさいわいでゆかふとは
 「かほどれどんかほ夕べの文見てはらが立「また
 にしへゆかふでのふよふしるとおもはんせにくいし
 かがわしやなをかわいと女心のひとすぢにきぶね
 いのるもことわりや「おくがだんなとあね様がいの
 せごとなるはこれさつてもおかしなことござ
 んすよの「おらもやんがてんぶくしててんもく酒
 いろとはこれさつてもおかしなことござんすよの
 「うかれてくくくくくあんまりおどればうき
 なもたつにいざやおにはにしばしとてカン「すきき
 つゆとねたといふはいな「露はすきとねたといふ
 はいな「かわいなかじやないかいな「ねぬといふね
 たといふ「ねたりやこそやれすきはたねをやどり
 てほにやいでぬらんほにいで「かへし「野ちもや
 ま路もしものはなさいたりくくくく大小さすが
 ものふも「きみにひかれてくるまたんせん。

○花錦嫩丹前

「おさきとうぐの花やり冷臺管壁傘合ついはさみば
こみごとにさ合ふりこめ／＼よいやさ合ありやんり
や／＼よい／＼／＼かほみせ「ませた奴の一
やうにこんのだいなしねぢからげ合きしやうでふ
れさ／＼合あさのでがけにや十六らんや合廿四か
うはさかしほ／＼けもない／＼合ハッッひやしゆ
かん酒きらひはこざらぬなんでもせい／＼よい／＼
よい／＼／＼ひつかけさんはいほろゑふたあぶ
ないセリふがてんじや「あぶないセリふがてんじや
歌」まかせておけるのやれ／＼さて／＼さつてもそ
ろふた花のかほみせ人ヨセガカリ吉次「やうしゆんのけ
いかはそらにたなびき「せいやうの合いろあを／＼
とうなばらの合三ノギンそのしまだいはなに／＼ぞ
ほうらいほうじやうゑいじうのしまにたとへ花のか
ほ三ノギン「かわゆらしさよたうせい合にしきいろ
どるうちかけの合それにはあらぬながばをりおとこ
とも見へまたおなごともみえのをび合しやんとさい
たるだいしやうに合こひにははまるふちがしらひと
のめぬきを忍びあふ合三ノギンくがるのなかのまぶ

ぐるひ合うそでもしんじつかわたけの合カンながれ
の里にきのふまでもつたいつけてさみせんにつるの
せられし二上りに合三ノギンのぼりつめたるこひの
やましもふみわけて吉五郎セリふ「ヲ、つめた歌ハッ
シ「ゆきのあしたのわかれざけ合ほのめくかほのてり
そふは三ツピハッッひのでいちりうふれやれ合ふれや
れふつてふりだすはつしぐれ合三ノギンいきぢにぬ
れしギンガハリあさがへり合またわるじやれのびんと
してびんともみひげくわんくはつすがた合さすがお
いゑの四花四よう合ゆるすてがしのすいせん花ひと
もとならぬふたばふりいづれおとらぬふうぞくはい
くよます／＼名をたちばなの花もみもあるときはぎ
やツツハッ吉次「かはらぬことはいつものこひことばナ
オス「それをたよりにとるふでの合ふかいあさいは合
すみいろにとふて見や合それがうそならかなでかい
てみしよか合二つもじ合うしのつのもじすぐなもじ
ゆがみもじとは君はしらすやなん／＼なさけのあた
まくらエ、合何ぞいなにくらしとびんとすねられて
もちぶさたにくゆるする合たばこはうきをわすれぐ
さくせつしらけてまことの中よ合カンこちよらんせ

おてまくら合ふたりぬるよのいろくらベナトッナドリ
「くらべこしとはわづつのをんな合をさなだちから
見へつ見られつ合心しれずばかんざしのうらまさし
かれそれさこれさ合なるかならぬかいふて見さんせ
とはしやんせうきよはいろのさかりまんなか「はな
のかほみせにしもひがしもみんな見にきたらうにや
くなんによゑいと／＼おせ／＼やつさ／＼／＼合や
ぐらたいこのおとは久しき。

○冬至梅雪濃空灶

「はなやかに合いろめくすがたはすはにて合三ノギン
こひとなさけを一荷にかたげ合よしやよしざはなが
れもきよくはなも香もありだてもさんさ合げにもし
んじつそふじやいな「おもしろの合のべのけしきや
そらにしられぬゆきのてい合中ギンゆきにこゝゑて
さながらにつぼみはんなりしやんとして合まださき
かけぬとうじばいはなにもいろはいやましのこゝろ
やわらぐカンナトッこひのみちナドリ「ひとしらぬほか
にあくしよの合ありあけの月合しのび合あふ夜はじ
やまになる「さいな／＼ほんににくいじやないかい
な合ならぬ合ことなしほれまいものか合おもひきる

ならなんのその「さいな／＼こゝろにさつぱりしよ
んがへこひはまよひのたねじやもの「いさぎよやは
なのかほ見せうつきにうかれてひいてきた合それさ
それさ合ひきづなこゑかけてはやさぬか合見ごとへ
「しんぞいとしゆてきみにひかれてくる／＼／＼く
るはなぐるまひかば合なびかんせ合てんと／＼ひく
そでつまかわゆうござれこれの／＼さりさりとては
三ノギンうきよじやへ「ひとのこゝろはハルはなぞめ
の合うつろひやすきよわたりにしなもよし野やはな
のやま合にぎあふさとのかぐらづき。

○冬小菊御乳女童

ナゲアシ「はつみゆきナナスよのみつきもやわらぎて
合三ノギンひらくこゝろのとうじ合ばいかほりギンハ
ルゆかしきはなごろも合きつ／＼なれにしつまこふし
かの合しやんとかたげし合もみち葉は「むかしのよ
しも合三ノギンありそのハルはまにひとりたやふと
もなしちどりハルつばさかたしくナトッしほらしや合
あさなゆふなにつきはなとながめあかせしあのごぎ
くかわゆらしさになあいざかりあいすればかぶり合
かぶりてうちしほのめ合さてもそなたはたれハルび

とのこなればていかかづらかはなれがたなやなふ合
 手ぐるまにのせて合いとしわが子をつれてまいるの
 ひがしやまや合にしやま合きたさんがのおどりは合
 ついのぼうしをしやんときて合おどりぶりがみごと
 へ合よしのはつ勢のはなもみちるはくちりくる
 はちりくくくくばつとたつ名もはづかしやッド
 キ三ノギン「ほんにせかいのこひするなかは合あふて
 いはねばとッかぬこゝろ合うそもまこともうちあけ
 てそひねのくまくらへギンナトッいつまでも「こい
 もうすいもしたもみちおほこにふりもしらにぎて合
 ちりにまじわるみやしろのかげもすしきをみごろ
 もこゑたのもしきさいばらの合げにあさからぬかみ
 がきや。

○雪傘積戀歌

「おもしろやく合三ノギンよものけしきもながめよ
 く合こすゑにゆきのはなさいて合よしや世の中「ちや
 の花のほひもおのがはつむかし合カンむかしく
 のむましどりたれおしへねどいもとせの合はづかし
 いのが戀のしよて合もふしあの人さんとほんばに
 ニノギンいひたいことも合なれくしうてニノギンいふ

もいはれぬなげしまだ合いろもかもあるおわかしゆ
 さんにわしが心でいわるゝものかア、しんき合それ
 合そのうつくしいそのかほでなさけといふのがない
 かないやでもおうでもそふじやにゑいとらしさ
 のユナトッはなむすめ「きみのこゝろをひくさみせ
 んの合いとこひしきおもかげは合カンひとめをは
 かるしのびごま合じつそふかへ「二世も三世も合か
 みごまかけて合すゑをたのみのかいらうび合カンふ
 たつまくらにねをといな合じつそふかへこひとなさ
 けをくみてしるながれもいまはうすごをりとけぬお
 もひをかすくゝの文にかなでむすぶのかみならめこ
 こそにざわふ花のかほみせ。

○濱衛幾世月

「こすへくも合色かへてみな白たへにうつろひて
 合ナゲアッしもせ友よぶナチス村千鳥合みどりをふく
 む萬よや「實に世々ごと合かはらぬ色は松のはの合
 こすへもしげるえだはもさかへいくよ久しきためし
 かや合むかしよりいまの世までもたへせぬ物は戀と
 いへるくせもの合カンひとりねさみしよさむのあら
 しさらに戀こそねられねさりとはいしんきへ「か

ほはもみちのあのしよしんさはくどかぬとてもほれ
 まいものかひんとしやんとかわゆらし合あのや小女
 郎は合いろよい小女郎合こちのおとこがてんとく
 よいきりやうならばほんに妻にも合なるはづの合ゑ
 んのあるのをまらばりの合なんぼおとこがつきは
 りじやとてよそのおなごにややしよまりものか合よ
 しんせのなんぞいのまゝにならぬはナトッうきよじ
 やヘナドリ「こひにこゝろはやんれみだればこかけご
 いはずとほんにくほんのこと合こゝろときぐしカ
 ハッひとが水ぐしさすともまよ合ふたりつれだち
 たうぐしさしてとびてばこやんれそれもこひじやゑ
 合ナトッしやほんに「はなもみちもいろそへてい
 ろそへていく代かはらぬきよくすいのかすくめぐ
 るさかづきのことぶきいわふきみが代の合ちよのこ
 ゑごゑおもしろや。

○縁結祝葛葉

三下リ「千秋ばん歳のちばこの玉をさげん「三國一
 じやむこになりすまいたしやんくしやんと小袖の
 色なをしはづかしどうしに枕かはすことばの二世
 三世かはるまいぞやかはらじとかたいやくそく「男

結びにゑんのつな「ひくに引れぬ悪性があるとりん
 きなどく「かならずくねざめにもとのご大じを
 わすれさんすなへとおせは申もおふたり様がいとし
 さのまゆかしさの「戀しくは尋きてみよいづみな
 るしのだの森の恨葛のはなを源のいへをまもらん守
 りのかみとも「しの田のやしろをたいたのめ。

○新そでづきん

三下リ「人めしのぶの。そでづきん。モッうはきもい
 まはほんになりどてをしつぼりゆきのさぎ。たッひ
 とりかよひくるとこやらの女郎衆は。かはい男を待
 わいな。すかぬこちらがしこなしは。もはやごしん
 にすめやらぬさらばわれらは歸りましよならんぞへ
 さりとはおとこぎな。合あはゞどふしてこふしてと。
 ますがも。合ねむいめをしらすなさけないほどいや
 まさる。こちの心はそふじやないものを。いなしや
 せぬ。合風に柳のしほたれて。さけが取もつわらひが
 ほ。くせつしらせし。月のかほ。

○おもひ川

「はるかせは。ニノギン花をいとふて入あいの。合ハル
 身にぞしられてあすががわ。カンモツタルしのおあふ

せのころにもこのはぐさのフタルかすくは。一ノヨおろのかゝみにつまや子のアミドガカリいとしギンガハリかわいとゆふづきのこのま〜におもひわび。やみにはあやもむめが香の。合二ノギンうつりもさぞなモツアタルいかにせん。たをらばつぎ紅梅の。かいこのうちのなぞかけて。とくとかれぬ。トメおもひ川。

○夜鶴つなでぐるま

「いとによる。ギンをかのやなぎのつなでなわ。ハルひけや〜ひけやこのくるま。合ゑいさら〜さらにおもひはやすまらぬ。ハルかたわぐるまのひきづなも。三ノギン〜ろもつれやありあけの合カドセツキヤツつきの合みやこをたちいでて。ギンよものはるべのあさむらさきやあづま路へ。ハルひとめせきギンガハリがさセツキヤツトシやれあふぎ。二ノギンかくれがさにもあらざればハルおやはそらにまのなみだ。あとにサイモンガカリのこせしは、そのもりの。合三ノギンもりてやそでに。ハツムはなかせの。ツクかわくまもなきくるまざか。「ひとひきひけばせんぞうくやうふたひきひけばまんぞうの。ツクくやうのにはときく

からにゑいさらゑいとひくるまひくやほとけのみのいと。ハルふぢさはでらのもんせんにしばらくするまを。セツキヤツドメといめける。

○おやこぐさ

三下り「いりあひにはなやちりなんあけぼのはギンはなもうまる〜こ〜ちしてカンながめにあかぬ子ぶくしやのめにもいれそだてあげてはめにあまりても子ゆへのやみのカンあとやさき合ノ手「おもはぬそのみひとさかり「いたづらものといはれうがあ〜ま〜よと〜さんやか〜さんゆるさんせとカンあどけないのもつね世たい氣のすゑを「あんするおや子ぐさ。

○ますかゝみ

三ノギン「すむ世なりせばうきよとは。わしやいはなくにいまの身は。ギンくらべこしたる身によそへ。ほんにたがいふたむりじやないわいな。三ノギンそのうきこともますかゝみ。合カンクルおなじながれをみちのくの。中ギンせきの下ひもうちつけにとけてみだれてもとゆひのすへながれとむすびてし合「ふたりが中の戀種はおもきがうへの露ならで。ぬれてすみちるのべがみの。あからさまにはいはばしのたえ

ぬ思ひはいのちげにまかせ候べく合トメ候かしこ。

○もみぢうり

「里の子どもがうちつれだちて合野道やまみちふみわけて合むすめ盛りやいろざかり合とて紅葉うりくるよい川もみち合「松にこととふうら風のをち葉ごろもの袖そへてこかげの。合ちりをかこふよ〜ところは高砂のをのえの松もとしふりてこの下蔭をおち葉かくなるまでのちながらへてなをいつまでかいきの松それもひさしき名所かな。合もみぢ〜もさま〜あれどわたしが折し花紅葉いろと情のふた道すがらかよふやしほのもみぢするかをはつ戀とのちはたがひの思ひ川ふかうなるほどうきなもたかを。合うらみつらみのすみとがなふもあ〜ま〜の紅葉のはづかしながら合まづきしやうせいしをかきもみぢ合すゑはふうふのせうとうじいづもでゑんをむすぶの神さまをいのるかいはんじもみぢ見に行つうてんの「おもしろやあれやまざとを見れば合ふゆがれにいろをそめだすにしきやゑだにからみし合つたかづらてり葉をちばのその中に合いろはかはらぬ松と竹合さ〜ん花のはなざかりながめひとしほの合す

いせんかんぎくはやぎきの合いろもかもあるむめがゑや「袖にふりくるしぐれたつたの川なみにぬれてもみぢの色もながれのはてしなや「なにをうらみに此たるだいてちぎりのうすごほり合中々戀はわたらじとおもひまはせばげに戀はつらい身にしもうれしさの「はなのかを見やわれも〜と花をかざりて「いりくる〜入ます〜三軒どころか「ぶたいは人の山々や「四季をり〜の花づくし合おみやに楓めされよと言葉に花をかざるも紅葉うり。

○名よせ草十番ざり

フシ「よせかけてうつしらなみの。おとたかくときをつくつてヨハリか〜りけり。ハルあらおびた〜しの人人や。なんでうかれらがさ〜ゆるとも合なき立。ハルおつたて。合ハコビやはかぬけいでおかふかと。こづま引あげかい〜しくゆかんとすれば。二ノギンござんなれ。合おはもじながらとのごさへ。くどきおほせしいちしといきぢ。をなごどしなら何のそのおくせうじ外記ガカリたとへならえにかこふとも。こ〜ろをつくすち〜のあだ。上あゆみのいたまできりのギン花けふうどんげのたうのてきかみのちからをか

りやのしゆび。そらもさつきのやみのよにギンラの
セツネ花そよぐ合まがきの風合おとづれ見んとてた
ちしは。合あいきやうありしさかきのはな。中上ギン
木ぶりもわかきこゝろから。つかつ山とゆひたて
て。合かついろ見せしはいくわのかほり。合ちりく
ばつとおくれがみ。これを見てあぢさいの。合はな
やかにひめゆりに。てうどうたれてちる花の。合う
て。合なにアタルのこるつゆハルはらふ合はらふじま
んも花がつみ。合かつて見せんといはつじひらく
てこむて十二のかゝり。合えだおろし。合水ぐるま。
合かぎぐるま。合むかふへおつめうしろをさる。合
どんとうたれしこしはがき。たかわらひしてひいた
りけり。合いちどにかゝるまこもがり。かまのにさき
にたまちる水。さつとたつては。合身をそむけ。すそ
をはらへばひらりとび。合ふたつたつたからし
しの。合ぼたんはとしもはつかぐさ。ヒロヒつゆふかみ
ぐさはらく。合はらはぎもすそもほらく。合
たがいにあらそふそのすがたさわべのあやめかきつ
ばたあをひにもまるゝふせいで。しほらしくもま
たいさぎや。ほまれをよゝにのこしけれ。

○琴歌夜の鶴

森田勘彌相勤申候

二上リ「子を思ふ道は一すじ行水のかはらぬことをく
どく」と人にはそれといわでの山の若をつらぬく男
の涙袖のてまへもはづかしく其おん愛のふかみぐさ
咲てしほれてしほれてさいてしんはなくく。亂れど
り合世はうたかたのあはざの鳥かはいく。のこへ聞
ば我みのうへのゆふ波ちどりはれぬしぎのはねが
きもうき身うきねのとりく。にうづらく。と思ひば
のこへなきをしの鳴むねはいろく。鳥の小がら山が
ら鷗めじろ心のこま鳥つなぎもやらすつなげば花も
散て行命はめいどのとりわけて子捨るやぶになくう
ぐひすのとまりかねたるおやの身はやけ野のきす
夜のつる。

○うすもみ地

中ギン「身をすつる香さとをはなれて山のおく合上く
わいろハル入かはるうすギンガハリもみぢりく。合
ばらく。落るなみだや身をするあめのかはりはてぬ
る世のならひ合すむかひもなきうき命たのむちかひ
やにしのそら。

○八重がき

中ギン「あかつきの。わかれがなくばなまなかに。く
やむこゝろのでやせまいあけのからすのハル聲ぞ
きのどく岩にせかるゝたき川の。ひとつながらのな
ア。水もらさぬをとんとギンいわすにすまそぞへ合
人にせかりよとおやがしかろとギンすへはめおとに
なア。なそきでおいてとんといはずにすまそぞへ。せ
どの八重がき中よかる。

○しきぞめ

「つんである。まではつみなきよぎふとん。合ゆうべ
はたれがしきたへの合まくらふたつをならべておい
て。ひとつはおまへまひとつはいはずとがてんでギン
ガハリあるぞいの夜なにあさなむつみてふかき。ふ
かきおもひをくれたけの。葉すゑにしづく。合つも
らばまつのはのいとでつないでしたてゝくけて。か
はすことばのもろつばさ合よしやにしきにおると
も。一わの鳥はいやじやわいな。合上ルギンをしと
つばめはどこやらかわい合をしにやおもひ羽つばく
らは子までなしたる中じやものすさみかさぬる。ね
やのしきぞめ。

○玉櫛笥寐よとの鐘

狭江節正本

二上リ「かみとりニノギンあげてときぐしの合中ギンち
ぢに涙のすきぐしもゆふにいはいれぬハルねなしぐさ。
合ハルとけぬ思ひを三ノギンあとやさきニノギンかみ
はちののかほとかほかわい合かわいと夕ぐれの。中ギ
ンモツかねはおしみてヒロヒ四つ五つむべやまかせを
あらしとも。合ちらばちれかし花ならばギンゆきの
こすゑはうらむまじ。三ノギンたえぬなみだのやるか
たもなみに。ゆるるゝあはぢしまギンかよふこの身
のうきわかれ。むねにせまるをいひのこす。トメハル
つきぬこゝろを。かへすくも。

○鹿のまき筆

「つまこぶるしかのまき筆いのちげにこひ路におも
きいとかくかたい中なるむすめごころのしどもな
くみてしはつごひきのふけふむすぶの神さんたのみ
てしどふしたぐわちなかみさまかこひしゆかしきそ
の人にあはすことさへそりやしらかみようつして見
てもうすみのそめてはづかしちらしがきみそじひ
ともじおきみやげ。

○よつのそで

三下リ「うき中のならひとしらはかくばかり合はなの

ゆふべのちぎりとなるもはじめのなさけいまのあだ
合いつそあはねばかふしたこともほんにあるまいよ
しなやつらや合あだにくらせしつきひのほどをい
ずおもひのなみだのあめにいとやくちなんよつので。

○ねこのつま

三下リ「みとせなじみしねこのつまもしこひしなばさ
みせんのかわいのものよ」いろにひかるゝなかつぎ
のさほはちぎりのたがやさん「あはぬつらさほどの
がみごまのばちあたり」三はきれても二世のゑん
おもひきられぬいとまきのたえてねじめはいちごわ
すれむ。

○聞のまくら

中「ねやのまくらがものいはゞこれまでものはおも
ふまじひよんな。おひとにおもひそめ。見そめし日
よりわすられぬ合まゝにならぬはひとごころギンな
さけのはなやちらしがきほんにいのちをまいらせそ
ろの合ノ手」とめてねまきのすゑはものかは。

○濱千どり

中ギン「ふたつもじ。うしの角もじすぐるよの。あか

つきかけしかねごとも。はやとをさがるつまと子の。
別れのとりとなきあかす合方上おやは空にてちのな
みだセツキヤガカリかのふさぎのおもひぐさうや
かいていの玉よばひとりゑんことはウツガカリふぢや
うなりとやせんかくやむねのうちせきとめられし涙
のふちせこがれカンこがるゝあまをぶねかひもなき
さのなみまくらつまをしたふやはま千鳥。

○かさねつま

「世の中に。なげきはなきによろこびの。あればこそ。
いま。なげきとは。なんのゑんぐわに。おもひそめ。
あさむらさきの。ちぎりなら。カン」かふはぐちにも。
なるまいものしらぬ。あづまのもりのひま。文彌もれ
てや。月のおぼろ氣に。なみだの。つゆの。たもとに
むすぶ。つまと。つまとの。かさねし夜半の。ゆめの。
うきよに。うき身のたねを。たがまきそへて。そだつ
かや仇にふきそふ重ねつま。

○ありあけどり

三ノギン「夕ぐれは合ニノギンかど田の秋にうづらなく
いかに久しきまつがゑの合上クルギンそのことの葉の
かへすがきまつ身はいやよつくゝと合ニノギンす

む入あひに三ノギンきみ戀しゆかしとばかりいひかね
てついアタルせなむけてひとりごと合方一申ガカリい
ふにいはれぬ身のうへは合世のぎりや月にくものわ
けにかはる人ごころギンガハリみすぢのいとのがか
れともつれていく千代をニノギンむすぶのかみのなか
だちさんかこゝろはなにとたらちおの合むねのせき
ぢはしら川のありあけどきのつぐるおもひを。

○そでの露

三下リ「いつしかにわがねぎめをさそひきて合」つ
まこふしかのこゑうはがれて「あきにあふてふあさ
ぢはらあさいこゝろとおもふはうそかまくらにとは
しやんせ。ほんにいらへもそらふく風よ合かせにみ
だれしたまくしげはしげかみしてあふ夜もありしう
つりなつかしゆかしやそでにかはくまもなしそでの
つゆ。

○雪咲心の花

三ノ上「ふりつもる。ニノギン雪のながめのそのすへは
とけて。ながれて。くだかけの。カンモツまだきになき
てひとごころ。ウツ三ノギンうきよのぎりをみねの松。
二中ギンみどりのゑにしひとすぢに「ねがふ文セガカリ

ちかひはわがきよきウツ三ノギンながれのすへをいま
こゝに。せひもなみだに中ギンくれのかね。むねの
せきのとひらくなら此いましめはなんのそのいふて
もいふてもかひなくたゝん名のみぞと。袖になみだ
を。をちちの「わかれは筆のニノ中ギンいのちげに
たへぬおもひを。きみやまつらん。

○袖の時雨

「はつしぐれさだめなきかなうきぐもの合こゝろの
やみにまよふ身は合いと。思ひのつらさはむねにキ
ンけむりぐさ合方ひとりおもひをギンガハリまくらに
かたりとこのうらはのしきなみの合はまかせさへて
なくちどり三ノギンゆられゆるゝすてをぶねかひな
きいまの身ぞつらやあゝまゝならぬさりとはく
のせかい。

○戀のぬれぎぬ 澤村國太郎相勸申候

「見あぐれば夜もしらゝとしらゆきの。中ギン身は
ぬれぎぬのいしよしかたきちぎりをも合みなあはゆ
きときへしわかれの。はかなさよ。合いとせめてこ
ひしきときはうばたまのよるのころものさむしろに
ともになげかんクリ上さよちどり合とふにやおちいで

よ。かたるまもなみだのたきのしがらみはたれかと
まらんわがおもひ。

右のけいこ本は遊里の音曲にして當世の模様をう
つし是を板するの正本也

明和二年酉正月目出度日

武江淺草里 伊勢屋吉十郎

萩江節正本終

常磐友前集

序

夫長歌の名は古今集に起りて今歌曲（うたもの）となして世に翫
も稍これが句法を摸せるゆへに其名ありとかや爰に
書林東郭堂のぬし此曲をたしみて予と絶絃の交ある
こと久し然はあれど其正本とするもの世になきを憂
て今其妙にして且艶なるものを集てものせんとする
ありそれを見るに予が曲節を盡したるのみならず皆
これ同好の秀逸なるものなり此巻を開て清冷たる聲
を發する時は颯々たる松風こゝにあり因て常磐の友
と題するものならし。

丙戌のとし阜月

松島庄五郎誌

常磐友前集

目録

新唱 常磐友

- 君がさらし三番叟（うたもの）
- 思ふ 思ふ 思ふ 思ふ 思ふ 思ふ 思ふ 思ふ 思ふ 思ふ
- 心 心の 心の 心の 心の 心の 心の 心の 心の 心の
- めでた 今様春駒
- 身にか 新むけん
- へて 小夜嵐
- めて 花がたみ
- 花が 花がたみ
- もり 松むし
- おきは 同名取草
- そだて 同名取草
- 上たよ 同名取草
- なにか 同夜玉くしげ
- とめに 同夜玉くしげ
- かみ 同夜玉くしげ
- 取上 同夜玉くしげ
- ながか 花の香
- れと 花の香
- さても 帯むけん
- 心 帯むけん
- じわかれ あいの山
- 君がさらし三番叟
- うれしめ 新春駒
- 思ひ 傾情無間の鐘
- 三つ かりまくら
- ゆき かりまくら
- 水と 姿の花
- さは 髪漉妹背鏡
- 鏡だい 髪漉妹背鏡
- 世の中 同夜撫子
- 人の心 同夜撫子
- むすほ 同夜撫子
- れむせ 同夜撫子
- すむ世 同十寸鏡
- りせば 同十寸鏡
- すい 吉野草
- てう 吉野草
- なれ 夜の鶴
- なれ 夜の鶴
- どいめ 龜の七種

三年なねこの妻
 おもひ川
 戀はく二つもじ
 千代 幸紋盡
 露し 男べし
 水の 姿亂菊
 これぞ 道中雙六
 うらめ 戀の空蟬
 千秋 いはふ葛の葉
 はなふ 羽衣の曲
 八重が 女助六
 おりく 賤のおたまき
 されば 百夜車
 につくばね賣
 久か 扇子うり
 たの 高砂
 高き 高砂
 たどり わんきう

入あ 親子草
 ふりつ 雪に咲心の花
 さかり あさがほ
 久しき 沙くみ
 よる 沙くみ
 かない 夜話の亂髪
 はづか 狂亂情姿繪
 おもし 雪の傘積戀歌
 より 寒梅籠の亂咲
 やれ見 ゆかりの茶杓
 風の 新羽衣
 一や 色見草
 よるに 夜鶴綱手車
 はづかし 紅葉の賀
 さとの もみぢ賣
 子供が 道行旅初櫻
 やこのみ 高尾さんげ
 ばのみち 高尾さんげ
 夜の 三勝道行

かねにう 京鹿子娘道成寺
 らみが 根元草摺引
 おへい 同春駒
 めでた 同鍵踊
 ふりだ 同山がつ
 けにや 同山がつ
 花とち 續新傾情
 りても 同さぎ娘
 もうし 同新草摺引
 どのほ 同新草摺引
 花飛 相生獅子石橋
 しにか 市松石橋
 に平家 糸太郎丹前
 仙の 娘丹前
 大手御 隅田川名所盡
 門前 菊慈童
 するが 菊慈童
 みねの 菊慈童

【増續】 舊本八十七番
 新所出廿九番

神と君 春調娘七種

なにはるさめ
 花に はるさめ
 なく はるさめ

だくと 玉章
 なみにも 松吹袖沙路
 まるい 春の曙
 はるき 春の曙
 すい 琴の段臙月
 てう 袖のつゆ
 かつし 鐘入解脫衣
 あらうら 鐘入解脫衣
 めしや 乗掛情の夏木立
 たび 髪梳霧の籬
 つゆの 髪梳霧の籬
 はなや 冬至梅雪の空炷
 かには まつかせ(新松風)
 あはれい まつかせ(新松風)
 にしへ まつかせ(新松風)
 おさきと 花錦嫩袖前
 うきく 花錦嫩袖前
 げにも 冬至梅誰袖丹前
 はなは 冬至梅誰袖丹前
 とかく 初童子戯面被
 子ども 初童子戯面被
 この 夕べめり安末の春

しよき 馴染相の山
 やうら 馴染相の山
 しらな 姿鏡關寺小町
 みや 姿鏡關寺小町
 あふさ わがこゝろ
 かは 琴の音
 れも 琴の音
 花や 戀の出雲路
 うけたま 絲遊花の紋盡
 はりて 結神垣繪馬賣
 かみ 結神垣繪馬賣
 風に 結神垣繪馬賣
 らべん 里花浮空炷
 花に 里花浮空炷
 心や 江戸鹿子男道成寺
 水に 二人わんきう
 名所の 御所風俗葦丹前
 むめも 袖柳名所塚
 むさんな 袖柳名所塚
 おさきか 後稚子勇鐘踊
 たづけ 後稚子勇鐘踊

はなや 吾妻振花關札
 かには 吾妻振花關札
 そでひ むめが香
 ちて むめが香
 なにた 色鹿子紅葉狩衣
 か尾は 色鹿子紅葉狩衣
 さればか 初深雪都花
 やこの 初深雪都花
 はなひ 田舎娘念佛おどり
 らいて 田舎娘念佛おどり
 きやうりや 葉櫻園團扇
 ふうりや 葉櫻園團扇
 おもし 深見草咲分獅子
 うきふ たみざん
 しつふ たみざん
 うきふ たみざん
 戀す 道行女傘
 てふ 舞扇千草の色ざぬ
 らば 舞扇千草の色ざぬ
 な花が 鞠小弓稚遊
 まれく 鞠小弓稚遊
 うきを 旅路の勝杵
 浮世の 旅路の勝杵
 仰白拍 彈的准系圖
 子の 彈的准系圖
 子れば 曙舞鶴丹前
 には 曙舞鶴丹前
 おもし 梅紅葉娘丹前
 ろの 梅紅葉娘丹前
 花のみ 東掬賤妻木
 花の 東掬賤妻木
 花のお 狂亂若木花
 花のお 狂亂若木花

くしげき 髪かほよどり
 やうき 髪かほよどり
 さかづ さとさかづき
 きに さとさかづき
 けふは 嫩染分紅葉
 人の身は 嫩染分紅葉
 かのお 幸助道行由縁初花
 お菊は 幸助道行由縁初花
 うれしや 早咲賤女亂拍子
 さらば 早咲賤女亂拍子
 はなさ ちこざくら
 そふ ちこざくら
 ゆきふ ぬくめどり
 りて ぬくめどり
 しろい 花楓種出戀
 との 花楓種出戀
 むれば 春寶東人形
 むれば 春寶東人形
 こゝに 八千代の釣竿
 年々 八千代の釣竿
 おやは 露の玉くしげ
 らにて 露の玉くしげ
 のきばの 四季染軒花
 きばの 四季染軒花
 みゆる 渡染鶴丹前
 とのは 渡染鶴丹前
 花とび 冬牡丹五色丹前
 てふ 冬牡丹五色丹前
 いざさ 揚屋入曲輪袖
 らば 揚屋入曲輪袖
 かつし 初旅名取草
 かに 初旅名取草
 織ちを 行置雷尾花袖

新版 常磐友
増補

よろづ 御代の松子日初戀
はく 春の色鳥追姿

おのぞ 寒椿名所花
 みるが 道江戸櫻其偉
 すみ 善心駒勢草摺
 山わら 旅柳二面鏡
 きて 同鹿島踊
 しろや 同黒木踊
 やせや小 心の五文字
 つき 雲の峯
 さかづ 雲の峯
 きに 雲の峯
 ああい ゆかりの花
 じの 雲の峯
 むらさ さとざくら
 きと 雲の峯
 身ひと はつ時雨
 つに 萩の風
 おもか 萩の風
 げの 萩の風
 こをす 萩の風
 てら 萩の風
 なもた 初戀心竹馬
 か尾 初戀心竹馬
 そもく 末待誓言葉
 かみ代 末待誓言葉
 さつき 末待誓言葉
 みだれ 末待誓言葉
 はなひ 末待誓言葉
 らいて 末待誓言葉
 同蘆葉の達磨

ちよの 丹宮つゞみ男風俗
 はる取 楓葉戀狩衣
 およそ 教草吉原雀
 けるな 曾我祭初花踊
 の花 曾我祭初花踊
 こひぐ 同鶴踊
 さの 同鶴踊
 みづから 山櫻姿鐘入
 と申は 山櫻姿鐘入
 うつく 色競梅玉垣
 しやく 色競梅玉垣
 さくら 梳春の袖
 さくら 梳春の袖
 花の江 大鳥毛嫩緑
 月入 大鳥毛嫩緑
 さのう 神ごころ
 さば 神ごころ
 あぶま 一奏廓羽衣
 遊びの 一奏廓羽衣
 ふくも まつ夜
 おまへと 里の雪姿八景
 わしが 里の雪姿八景
 かくわ 壽妹背萬歳
 ちはや 續七變化住吉踊
 ふる 續七變化住吉踊
 たどり 同わん久
 ゆく 同わん久
 月はむ 同わん久
 かして 同わん久
 同こも僧

まくらも 狂亂須磨友千鳥
 のにや 狂亂須磨友千鳥
 ふりやれ 初歌舞妓女花鎗
 とちしつ 水仙對丹前
 御いた 同愛護者馴染の段下
 はしや 同愛護者馴染の段下
 ひらいた 同花傘踊
 らいた 同花傘踊
 づに 同神子
 のもや 同切かむろ
 すみな 平戸名所談
 れしつ 月黛片摘姿
 いてつ 月黛片摘姿
 といれお 咲分籠
 ちよや 初戀富士太鼓
 ちよや 初戀富士太鼓
 ちよや 道行法盧分舟
 へるや 道行法盧分舟
 へるや 戀の掛針
 かほみせ 戀の掛針
 つゆし 初霜信田笠
 ぐれ 初霜信田笠
 みちの 月都誓鹽竈

いさむこ 春遊驛路駒
 つて候と 曙鎌倉名所
 のなほ 道行初鶯上
 ひげや 同續七變化花車
 けく 同續七變化花車
 うきよを 同くわいらい師
 わたる 同くわいらい師
 はつあ 同娘踊
 きや 同娘踊
 しきし 同ねこ
 まの 同ねこ
 あきの 仇浪鴛鴦思羽
 よの 蝶衝曲輪丹前
 はるこ 蝶衝曲輪丹前
 にく 花鞠稚猿曳
 たにのし 花鞠稚猿曳
 みつで 昔々楓信樂
 やあんや 昔々楓信樂
 らりう 昔々楓信樂
 うきこ 姿亂咲
 とを 姿亂咲
 はなや 鶏合稚角力
 ならさ 雄舞縁寒菊
 かの 雄舞縁寒菊

常磐友前集

唱歌 常磐友

○呼出し三番叟
 「ちはやぶる。神のひこさのむかしより。その君ひさし。久しかれとぞいわるそよや。いちやどんどや。およそ千年の鶴は。萬歳樂とうたふたり。又萬代のいけの龜はかうに。かうに三きよくをいたいたり。たきのおとはれい。と落ちて。よるの月あざやかにうかんたり。なぎさのいさごはさくくとして。日のいるこそ有がたや。天下たいへいこくどあんをんてう久と。君をいわるてちはやぶる。一トさしまはふまんざいらく。ア、おさへ。悦び有や。わが此所よりほかへはやらじとおんもふ。いつもよりけさうつつみのねのよさ。あまのいわ戸のはる。心や。扱はまた四しやのおまへのあのみかぐら。ちんりか。りひやうろうと。ふいたるふえのねのよさ。きけばまことに。ほんに。まことに。君様もわれらもう

かれたとりなりじや。おもしろや。さてめでたさよ。あゝらめでたや。ものに心得たるあどの太夫殿にさあどげんざう申さうよ。てうどまいりて候「たがおたち」あどとおほせ候ほどにこん日の三ばさるがく。きり／＼たづねてつねにまふておりそへ。おほせのごとく。此せうが千秋萬歳所はんじやうとまひつるよ。何よりもつてやすう候。まづは。あどの太夫殿はもとのざしきへおも／＼とおなをり候へや干さう「それがしざしきへなをらふする事せうどののまひよりもつてやすう候。まづせうどののまひを見申し。其後ざしきへなをらふするにて候三ば「いや／＼おなをりなふてはまひ候まじ干さう「たゞひとさし御まひそふらへ三ば「おなをりそふらへ干さう「あゝらようがましやさらばのすゝをまいらしよ「すゝはるきろのやんいよゑ。それよのがくのおとじやへ「いゝいゝ／＼しやんこしやんこ／＼と。ふればのたいこのおとじやへ。して／＼んからよふうつのやんさして／＼んからよふうつの。かみかぐらみかぐら。いつもどんととなるがよい。「鶴の羽がさねちよまでも花はこうはくゑだをたれ。龜はばんだいのいけのあをなみ。なみをちら

してどうどうつ。いり日をまねくまひの袖。めなみとなりおなみとなり。まつふくかせにじゆみやうをとなへ。とぼしないたる世の中やと。ひやうしをそろへて千はやぶる。せんしうらくこそめでたけれ。

○さらし三番叟

(本外題、今様四季三番三)

「君が代は。ちよをかさねしきしの松合こすへ／＼にすごもりて合鶴の羽をのすそよや合どんど。なるはたきの水。れい／＼さら／＼。あざやかに。うかんだりや「あめが下懸となさけはうらおもて。ほれてみさんせ。いとしけれどもかとしさる。よしやれうき名のたつ田川。ながれもあへぬもみちはは。たへすこよう。たへすとうたり。ありうどふあり。ありわらの。なりひらさんにもまきやせまい。あゝ。まきやせまいかりぎぬの。すがたゑはそらごとよなふいたつらやす／＼おどり「なるとならぬは袖ふる手のうち合どふじやへ合しめてしやんこへ合ゆるめてにこ／＼合あふよ。あはぬよ。ちはやぶる合神のむかしは二ばしら。あまのいわ戸をひらくや。梅の見事へ。花のすがたの。いとらし合「春はよろづよ。花のさんさか

りは合よしの山。おむろの御所のよいさんさくら。ぐんじゆのなかをきた山いなり。山のはつむま合ごんせごんせ夕すゝみ合かも川の。川のせぬれにぞぬれしぬるゝ小女郎こむすめだてものとほめてはそれ。それ／＼／＼と。袖をひく「秋は野山のいろづくもみぢ。ゑだにさりとは鹿もこがれてつまこふる合さりとほ／＼ほんにへ。思ひきるせときらぬせと。そのつめたいゆきの上や合さりとほ／＼ほんにへ。さをなぐるまのよるへなき此間せりふ。布さらし「なふなふ。ぬのはいろますさらしのや。さらしてふりを。みせまいらせふ。みせまいらせふ合さつさくるまのわがきれて。さつさくるまのわがきれて。いづれおもひはどなたにも。どなたにも合「さらすほそぬの。手にくる／＼と／＼いざやかゑらん。しづがいほりへ。

○けんゑぼし (本外題、劔鳥帽子照葉盞)

和歌山ガカリ「おもふこゝろのあればこそ。あどのあどのあどの太夫どののおかはのいろがほにいでた。合ほにはかさねてめでたふこそは。ヲイ候。翁かへし今日の御しうぎを。まふておりそへかん梅の。白きは

おきななきさきくのギン葉もりのかみありてモツしもにもまけぬ。はななれや合花となさすばさくらといへど。合カンアルふゆの花にはなに／＼ぞ合すいせんさんくわびわのはな合はるまちかねて。うぐひすの。三番叟かたイロことながら此せうが。おさへたおさへたこのは合ほかへはやらじとやりみづの三重カマリ和歌山おともとうたりたへすとうたり。カマリたえずにくるのがアルまことこのころ。ヒヤウシこつちにおよさいはなけれど。そつちの心にいちもつが。ありそふなくせつするのめやぼらしい合和歌山聞すにめでたふもとの座へ合おなをり候へあゝらよふがましやこなたこそ。ヒヤウシ合段切せんしうばんせいばん／＼せいとうたひはやしてまひにけり。

○新春ごま

「うれしめでたの。春ごまみごとにかざりたて。合かどいでよし／＼おうそれ／＼じや。それ／＼／＼おつづらむまよ。合ふとんかさねてあややしきやきんらんびろうど。しゆす。ひじゆすふとんはづしてな小姓衆を。乗せて。うたふ小歌のおもしろや「うら

らかにそのの花の春ごまは。ゆめにみてさへ。物よ
 いとの。はつ春のゑほうまいりはみないせさんぐ
 う合だうしやむれしらすぎなんどのまひまふやうに
 ちらり／＼とすげがさきつれてつれてゆこもの花が
 さ「かさをめそならばみかさ山。かすが山。これも
 合かみのちかひとて。人がかさをめそならば。ゑい
 ゑいわれもかさを。きつれて。花の合みやこの合御し
 よぬりがさよ。二かい。さんがいしなをやらせてお
 せおせ。どつこい。おせ／＼どつこい。はるはござん
 せ。ちもとの。はなのへ花の合みやこの合御所ぬりが
 さよ二かい三がいしなをやらせておせ／＼。どつこ
 いおせ／＼どつこい。春はござんせちもとの花のへ
 「さかりはな。さかりはみよしの。色もうつくしこき
 くないのだて小袖。合身せばかく袖古風もあれば
 今風も。ちんちりめんのかゝゑをび。うしろはこひ
 のおもにかや。きせんなんによのこゝろはほんには
 なのやま「つなぎとめたよ。つなぎとめたよさくら
 のばゝに合こまがいさめばこすゑのはながさ。ちら
 りちらりちら／＼合さてもせいやうひがしより
 きてあめじやござらぬてん。てんでんきのひでりが

さ。さしかけよい／＼／＼。きせかけありやあ
 りや／＼／＼。これのおにわへとびこみはねこみ。春
 ごまはながさ。ひらいた／＼さあひら／＼。い
 く千代かけて。いさむ春駒。

○いまやう春駒

「めでたや／＼。はるのはじめのはるごまなんぞは。
 ゆめにみてさへよいとや申す。花のやさかりはナ
 ろくらべ。しなよきふりの。おんたいこのひやうし
 でさうちつれ。ひきつれて。合いさむゑがほやなりよ
 く。ふりよし。せめてひとよはなびけと申す。お、お
 おそれよそれよさふでにはかりは。文とはよまぬ。
 ことばのへんじをよいとや申す。お、／＼さりと
 よいてさ。九十九夜々々々々どかばおちやうか。な
 さけないぞやあたどうよくや。どうぞしばしはなび
 かんせ。しんじつ。せいもんでのござんすかマアお、
 うらしい。せんどだまされたひとのこゝろと川のせ
 は合さだめなや合ゆきつもどりつ。はなのこかげに
 よりくるは。ゑだにうつりし鶯のさへづるこゑのし
 ほらしや。たわむれあそぶそのふせい。あなたへさそ
 ひこなたへつれて。みねのあらしのさら／＼さつと。

かよふあふよはいとはであめの。そでうちはらひす
 そふきあげのそらいろも。ほの／＼とあけゆく春の
 山みへて。ちよのこすへもおもしろや。

○むげんのかね

「おもひには。どふした花のさく事と。身にぞしらる
 るうやつらや。いかにならひじやつとめじやとて
 いやなきやくにもあわねばならぬ。やばならかうし
 たうきめはせまじ。いとし男とあゝまゝならず。し
 ゆびのあいづや手くだのまくら。むりなことでもど
 ふやらかわい「なじみかさなりたのしむなかの。あ
 わぬつらさにながれしよりも。あふてわかるゝか
 ねのこゑ。わかれてあふてあふてわかるゝかねのこ
 へ。いつかくるわをはなれてほんに。ほんのめうと
 といわるゝならば。今はむかしの。かたり草。

○新むげん

「身にかゝるてもおもふ人にはとをさかり。おもわぬ人の
 しげ／＼にくるわのさとのうきつとめ。しやうこと
 もなきあだまくら合ねてもさめてもくになりて。む
 ねのかいみのかきくもり。ういぞつらいのしんぼう
 はかわいおとこにあひとうてみとうてどうもならぬ

わへ合このよにぐちになるものかいな。わしに。ば
 かりはまこととおもひ。はまりやすきはすいのふち。
 しづむものなればおもへばさいなほんにぶすいが。
 ましじやものこゝろしらすや。あけのそら。

○かりまくら

「三つぶとんつらやまくらがふたつある。ざりとなさ
 けと世のうさをかたるまもなきみじか夜に。とめて
 ねまきのしろこそで。はじめのまことのちのうそ。つ
 とめばかりにあふきやくさんの。ほんに誠とかさな
 るまくらいろぎぬの合つゆのよるべやさだめなき。
 さりともしんきなことかいたつらいつとめのまゝな
 らぬ。

○さよあらし

あひそめて「いまのこの身のものおもひ上「はるゝ
 まもなきしたごころ合たがいろそめて戀ごろも。む
 つごとまでもハッうらやまし。よいなかどうしのさゝ
 めごと。さだめなきかなうきとりの此間せりふ「かよふ
 つばさのかをとめて。いもせひとつに戀のたね。ひ
 とりこがるゝ夜半の戸に。おとづれてふくさよあら
 し。

○きさすの雨

「ゆく水に。ながれのくがひはてしなく。合いとしおとこをゑんならば合たとへこの身はしづむとも。ゆられゆるゝはまちどり合なきさもちかの。しほしほと。合あゝなにとせんわが思ひ合いふにいはれぬさぼしがみ。かわくまもがなあんじわび。いつかめうとにならるゝならば。はなしあかさんよすがもあらふ。まつはひさしきものにぞ有ける。

○花がたみ

「花ぐもり。のちははれゆく名どころの。花はさけどもわしやおもひのますかゞみ。くもりがちなるをんな氣の。こゝろはふたつ身はひとつ。なればいひわけするすみに。ふでのいのちげこよひかざりとさとれども。合なみだにはげしげはひざか。しやうくよるのあめ。ふる夜はひとしほなつかしや。風のたよりにそがのさと。あんじくらししているさのしやうじ。明ていはれぬことの葉に。かへすくもそがを。御ぶしと。いのりりしし。

○姿の華

「さりとはひとりこがるゝこゝろのやみは。はれや

らで。うつらふものはなのいろ。むめがかほみんうぐひすの。たによりいでてまださとなれぬ。しんきこゝろにやるせがほんにないぞへ合「水のかゞみにかげ見れば。みかはすほどのかみかたち。ざりとはいかかならん身のゆくゑ。なにをしのぶの。しのおのみだれたれゆへに合「あさなゆふなものおもひ。たれくみあげてとをひと。わが身はひとり物思ふ。おもへばゆめの世をしらで。戀のしがらみ關とめよ。

○松むし

本調子カ、リをぎはぎの露を命にまつむしの。はな野になきて戀すてふ。わがいたづらによすがらも。子ゆへのやみにたゞひとり。合ひろきうきよをざりといふ合うそもまことにいひかねておほせを。いなにゆくふねの。しんていづくじやないかない。またゆく月にめぐりあふ合わかれはそでになみだ川つゝむるにしもひとすじに。とけぬこゝろをさよぎぬた。うつとうたれてこるびねの。ゑがほもねがふ神かけて。つきぬ思ひを。わすれ草。

○長五郎かみすき(本外題、髪梳妹背鏡)

二上リ「くしげきやうだいとりそろへ。中ギンことばにいわぬみだれがみ。いたづらがみのばらくとも。もつれてとけぬときぐしの。男こころをおもひやる。中かほとかほとのかみ山。人のしがチンからさきみへて。ナトシわがみほのうみしらなみや合

廣治「そちはなきやるか喜代三「なんのいのなかふぞいな廣「でもこれなみだが喜いゝゑそりやくしげの露じやわいな廣くしげのつゆか喜つゆよりもろきは人の命長五郎さんいまあ彌左衛門にたゝかれさんしてはさぞむねんにござんせうの廣「いゝやむねんとおもへばむねんそのむねんじやといふてたゝかれたあとのまつりなんのやくにたゝぬ事をなたはよふかんにんしやつた喜「長五郎さんいまあれおやごさまのゆげんした事をかならずわすれさんすなや此夜道をおとしよりのとぼとぼとあの長まつをつれさんしてござんすのもみんなおまへとあの子がかわいさちつとは此しのわらもかはいゝとおもはんすならかならずたなきなこゝろをもつて下さんすなやいの

とこゆへ。たがいのこゝろみくまのの。かみく様を中だちに。せいもんくつされのちのよかけて。ギンガハリかはるまいぞとくりごとながら。かへすくもたのみてし。いふにいわれぬわがなみだ。ナカシぬれてすみちるのべがみの。中あからさまには人しらす。おもひりしし。

○髪すき名とり草

二上リ「名とりぐさそだてあげたとつゆのおん。ちすじとなでしくろかみも。びんのおくれのばらくばらと。ふるはなみだか五月あめ合「かゝるうき身のくしゝ思ふぞやなきがみ「とくととかれぬこゝろのいともしんくゝのあらひがみ「もとゆいかけしうわきさへまことゝになるふうふすゑつむはなのすへかけてほかへなびかぬしたひもしやんとむすびがみ。

○髪すきよるのなでしこ

「世の中の。ハルひとのこゝろはさだめなき。レイセイうつるかゞみにナナスくもりなく。子ゆへのやみにギンガハリみだれがみ。つげのをぐしもあかなれし。こころのうちをあらひがみ。ゆふにいわれぬときぐし

の。ついなげしまだあゝまゝよ上「たれにかみせんし
まだわけ。ハルしまだのふちはせとなれど。こひのふ
ちせはやるせなや」とにかくにものおもふ身はせひ
もなき。いつかあふ。チャンもりのこがらすくちすさ
み。ヲ、それうきおもひ。むかしがたりのあすがが
わ。

○髪すき夜の玉くしげ

「なにのつとめにひまをなみつげのをぐしもさゝで
やと合とりちらしたるみだれがみ合すいて合おとし
てゆひたてらるゝあだし身の。まぶじやゝのうき
名のかずは。はまのまさごやそらのほし「よむとも
つきぬなが文に。かきほどかれぬわがおもひ。もつれ
あふたるかみならば。そのいひわけにかみさん。た
のんでそしてまことをば。千すじにわくるひとすじ
のちかいをいのり身をそへて。しばしかみをぞ。す
きにけり。

○いもせの玉くしげ

「むすぼれし。ちすじをわけて亂れ髪手にとりゝの
物思ひあはせ鏡のかほとかほうつせばかはる身の行
衛合半太夫アシ」とらが涙にしやうゝの。夜の雨ふ

る水ぐしのもらすまいともめおとあひ合「あふてぬ
る夜の嬉しの文は。夢も結ばぬ枕のあだよ。夢も結
ばぬ枕のあだよ。おつる涙の玉くしげ。

○玉櫛笥よとの鐘

(狭江節正本集に出づ)

○ますかゝみ

(同上)

○花の香

「ながかれと何思ひけん世の中の。うきを見るは命
なり。思へば夢のよに知らで。かひなくすむ月の合う
つゝのやみに見る花のおぼろゝと見もわかぬ。あ
けてちりなんくれてちりなん。散ればぞ花の色も香
も合いづればかなき春の風。吹かぬその間のひとさ
かり。おしやしはしの花のゑん合名残を雲に吹きと
めよ。とめてかひなき花の香を合袖につゝめど小ざ
さのあられ。こぼれやすさのわがなみだ。合ともに
なきつれかへる雁。よそに見なしておもひこそやれ。
などか心の。なかるらん。

○吉野草

「すいてうこうけいに。まくらならべしとこのうちぞ

ゆかしき。ものゝふのなさけまじりのいつわりぞ「う
き川たけのながれの身合「草も木もねるにけいせい
ほとゝぎす。月ならば十三夜。花ならば初櫻。さか
りある華のいろゝに。すゑの約束吉野草。

○おびむけん

さてもこゝろのはかなきおもひ。身はつきだしのは
つひよりくるはの。水に。すむもにこるも。ながれ
のすゑは合いとし。おとこと心のまゝに。そふをたの
みの。うきつとめ。ねんのあき日を。ゆびをりかぞへ
合「くらす月日をゆめ見るやうで。すゑのひさしき。
わがおもひ。いやな人にももしつながられておもわぬ
ゑんゑんあるならば。いつそしんだがましじやもの。
さりとははてしなや。

○紅梅夜の鶴

ギン半太夫ガカリ「くれなるは。うへて浮世をくらべこ
し。中ギン二十餘年のふたむかし。三ノギンすぐるよは
ギンガハリひとちるはなの合アゲアタルあかきは花のだ
てをいふ。一ノギンガハリその身すがらもいまははや。
二ノギンやけ野のスカスキすよるのつる。いづれお
しまぬおやごころ。合方「やみとはうきをわすれしな。

中ギンゆくさきわかす見るはなの。合地蔵キヤウガカリ
一りん風にちゝのため。ハル二りんはなみだのたむ
け水。つぎほのハルむめのかたしくも。中ギン二ノヒヤ
ウッスゑながかれと三ノギンいのるのも。三ノギンたは
れのかほのおもひねを。トメイまも見るか。かこち
草。

○卵の花相の山

「わかれちは空なつかしき夕まぐれ身にしるあめの
ふりすてゝ。のこすこと葉のあとやさき。かなでそ
れぞといわつゝじ「散もちられぬ身のうゑに。わき
てねがひのありま筆。すみよりふくむうきなみだ。合
のちにつれなきこゝろぞと相ノ山ゆふべあしたのか
ねのこゑ合いとゝおもひは十寸鏡うつればかはるわ
がすがた戀とむじやうの相の山。

○穠七種

トメカハリ「つゝめども。中ギンガハリ出てそらゆく鴈が
ねは。合あんとさきとになきつれて。ツナケモツいく夜
ねざめんうたかたの。文セハルギン世のならばせはみち
とさく。二ノギンそのほだしとはつまや子の。つれな
く見へしわかれより合サイモンガカリ月のもる夜のユリ

ヒヤウシ物おもひ合秋の七くさ。さきそめて。合方葉
すゑにむすぶ女郎花合サイモンガカリ男のききやうわ
れもかう。合いたゞくハルみちの一すじは。三ノギンた
れにうたはんハコアやもめヒヤウシどり。いつかあふせ
の露ほども。アタル身にしる花とながめなば。タムムよ
しやいとほじ。ハルギンうき名たつとも。

○ねこのつま

○親子草

○おもひ川

○雪咲心の花

(以上四段、萩江節正木集に出づ)

○ふたつ文字

三下り「戀はくせもの。戀はおなごのしやくのたね。
タル人のおもひをいまさるに。カンハル我身にうけて
はづかしのもりてよそにやかほもみち。ふかふなる
ほどしよしんらしハコヒハルせめて軒もる月だにも
姿の花の香をとめてかはひとといふてくれは鳥ないて
あかしてくよくと。三ノギンみやまにさきし花の實
のたれおとづれんなみだがは。いふもいはれぬ我心。
トメ願ふ逢ふ瀬を。カハトメまつにかはらじ。

○あさがほ

「あさがほのさかりひさしきものにぞと。いひならは
してつゆの身の。かきねにそだつ秋ふけて。いとし
かはひも。すて、うき世をものかはと。おもふもつ
らやざりと義理。身ひとつにふるそでしぐれ。ぬれ
にぞぬれていろも香も合うきをかさねてなきな
に。ア、おもふまじまたゆく月のめぐりあふまで。

○爪音幸紋づくし

(萩江節正木集に出づ)

○しほくみ

「しほにもまるしほごろもきつれてつれてしづの
をしづのめ。世わたるわざのしほになひ合「わたり
かねたる。ゆめの世に合「すむとやいはんうたかた
の。しほくみぐるまよるべなき合「身はあまびとのそ
でともに。思ひをほさぬ心かな。合「すそもこづまも。
ぬれそろく。をきのかもめやいそちどり合「あれ
あれむかふはあはかづさ合「沖こく船のかすくも。
あさなゆふなにながめてし。ゆゑがはまべによする
なみ。合「おとこあみひくしづのめは。月をになひし
かげふたつ合「ふたりつれだつともちどり。ゆられて

もまれて。ばつとたつなみひくなみに。「いざくし
ほをくまふよ。あづまからげのしほごろも「なれし
手わざのしほらしや。

○男べし

「つゆしぐれや。かゝるうきめにあふことも。おもへ
ばこれもせんせのやくそくと。うちしほれたるおと
こべし合「いわすかたらぬわがむねの。ほんにふねに
もくるまにも。それはそのくつまればせまい。ひ
ろいうき世を。しのぶぐさ。

○夜半のみだれ髪

ツヰミ歌「かたいとの。みだれごころのやるせなや。い
つかまことの合「逢せとならば合「アケクルフシくにはお
もはじうき世の中に、うきもつらさも合「くみわけし
三下り「歌ガカリ「すいのこんばん戀しりと。ひと手
をおくくしもの。しろきくもかと三ノギンアタルうた
がひし。一中ガカリ花はむかしになのみして。三ノギン
今は野中のくさにしき。義太夫おるてふ色のゆふづく
ひ。あれく詞アレくまたひぞるのか。二ノギンわ
しにいたづら有とのことか。ヲ、きのどく。クルアゲ
そんなことはしら菊の。黄菊とよるはギンまがふとも

うそといふじはモツかきよもしらぬ。合「三ノギンにく
ひこのくちどうする見さんせ。こすへをけさは下も
みぢ。たいたづらにふきちらすかせのまにくゆ
くみづに。合「しがらみとめよ君とめよ二ノギンハコア
とまらぬものは合「本ヱリカ、りうき人の合「ひとめにた
つもいぶせしと。やうくいたわり。ハルトメまいら
せし。

○姿のみだれ菊

ツヰミ歌「くも水のさだめなきとはあきのそら。ゆふべ
にかはるあまのがは。ほしのかすくかぞへても。ど
れがめうとか白さぎの合「ゆくゑたづねてけふもは
や。くれはあやはのおりひめの手をりのにしきくさ
にしき。野すゑにすたくむしの聲。ちやにかなしさ
ますほのすゝき。みだれごころやはづかしき。野中の
しみづかげうつりかみもかたちもとりなりも。しど
ろもどろと合「世の中に。合「むりなくせつもかわいが
あまりはてはなみだであけのかね。こんくくくと。
つくおとにとなりのかぢやが。合「でんからりからり
ころり。合「からころりからり藤蔵せりふ。あれくむ
かふからてんわう様のおまつりがさか木はしやんと

まつさきにそのつぎははな高様みこしかたげて歌
 「ゑいむざんなるかな石どう丸は。ちゝをたづねてか
 うやへのぼる。よい／＼よい／＼ありやこりや
 りやよをいとな合みこしあらひのきよめのみづは。
 みよもわかさの水もわき候。わかさ小鯛が九つ狐が
 三疋尾が七つ。きつねが三びき尾が七つ。狐が三疋
 尾が七つ。わかさ小鯛が九つきつねが三びきおが七
 つ。てうさやよいさやはやせや／＼わい／＼よ藤藏
 せりふ「わらははわらへ歌うき人の藤藏「おもかげな
 りと歌みねのまつ。はごしの月のかげうすき。ちぎ
 りなれとやかねておまへのおこゝろを。くにおもふ
 わしが身の。きのふのおふせあすか川。ほかにりん
 きのそのそぶり。いはせまいとて前おきの。手くだ
 のしかたがにくらしい。「かつらぎの神の心もまかせ
 なき。戀のおもにを船車。ひきぞわづらふよどづつ
 み。つゝむにあまるおもひぐさ「生にそめてあだ人の
 「わすれ草とは脚もいや心づよさは男べし。桔梗荳
 われもこう。身はうつせみのからごらも「どぬけし
 心うつとりと。いつまでぐさのはてしなく。草をし
 きねのひとむすび。いかなるゆめをや。見るぞかし。

○狂らん情の姿繪

○道中雙六

○雪傘積戀歌

(以上荻江節正本集に出づ)

○戀空蟬

鼓歌「うらめしと思ふも君がいとしさの。あまりてわ
 れは身をこがすフシ「さはべのほたる草がくれ。チンあ
 りと見へてもまぼろしの。ハルみだれごころぞナトシ
 あさましき合過にしことを思ひだし「いふても／＼
 ほかごころ合あだな戀ぢがえてもので。くどきおと
 すが御じまんか。ハルおのしやうわるな男めと合む
 ながらとつてひきたつる合そのふせいおそろしや。
 此間せりふ有り「おかしやんせなんぞいの合上フギンよ
 ふも大事のすけなりさん合おまへのとのごにやわ
 しやどごまでもあゝならぬぞへ仙四郎ア「みらいを
 かけて神かけていふて。置いたはおわすれか合わし
 やわすれはせぬものを。さりとては合上おまへのは
 だのこのやゝはいとしのごと二人の中に合めまつ
 ひめまついく千代かけてうらやまし合われはうらめ
 し戀しき人に合おもごしの合によふた／＼花あやめ

合いたいげざかり手をひきつれて合ねん／＼ころこ
 ろ合のゝさまいくつ。十三七つ。月のかつらやな
 おりきせて合てうち／＼しほのめ。がん／＼三つ／＼
 ち。あとながさきへまはれ／＼くる／＼と合水ぐる
 ま合風車。めぐれやまはれ合ところ／＼おまいりやつ
 てとうげこめされよ。とがをばいちやがおひまいら
 しよ。月げのこまのもろ手綱。ぎやうれつそろへて
 殿様お馬合はい／＼どう／＼合さきのけ／＼のけの
 け／＼／＼「身にまとはる。しんゐのほむらは。
 ひらり／＼。れん／＼とわきかへるうらみの数々。つ
 きすまじナドリ「恨とは其品わけて夕まぐれ合待かひ
 もなき合あだ枕合それも戀ならなん／＼情の下にす
 む合それさ合これさ眞實うやつらや／＼ナトシ「なを
 もさか立つ其有様合ふた道かくるあだしおとこを合
 つれ行かん合こづまかいくりしやんな／＼合うしろ
 かげ「見るにするとさ亂髪合かたは車のかた思ひ。
 たゝあぢなき世の中や。語るも涙。なりけらし。
 ○寒梅籠亂咲
 鼓「セイ「元よりみやびたる若むしやの。かざしのナト
 シ梅のみだれ咲歌上「うしと見し夜はものゝふの。つ

ねクルならぬ。チンきすて合の合ゑぼしかりごらも。
 ハルじつと引よせ引しめて。ギンしらべの絲のフ、しん
 き合 仙四郎 ヲギン しんくしやるかかほのやせ一中ガカ
 リしよてはうはきであいかゝり歌それから後はいろ
 いろのりんき手くだがいくさのかどで合 扇次 新ハシ
 ルいくたの森のはまれは梅よ。きき。き／＼／＼き
 つとした。ウ五人顔はそれ／＼合その合奴め／＼。
 クルやつこが顔はへ合上花のかほ見せ申錦いろどる
 顔はいな 仙詞「にた／＼／＼にたはいの三八「何が
 菊五郎「此顔が三「たれに菊「行平様に三「どごが似た菊
 「このはなが。言次「つみ歌「いととしのごのなりふり
 は御たてゑぼしかり衣を。クルきやしやにきなして。
 ウギンかはゆらし五郎次歌「行平の中納言。三とせはこ
 こにすまのうら。みやこへのほり給ふならハヤメルと
 もにわたしもつれていてはくれもせで。あだしあだ
 なみすまのうら下よせてはかへすなみまくら。中ギン
 いその千どりとよもすがら。ないてあかしてハア上
 クルゐるはいな。合五人 ハヤメル かたみこそ今はあだ
 なれ。あだなるちぎり合上いまはかたみをとんと捨
 よ合すてゝもおかれすとれば。とればおもかげにた

つとの合こひのこの小つみのねみだれ。がみ。いつ
わすりよぞや。うやつらや合しめつゆめつ。ゆる
めつしめつねもよけれ。君ゆへまよふ我すがたハ、
ハ、くく三入どこへくまだせんぎがある外へはや
らじとおんもふ。合ナドリしやんと合ハルはづんだ
りや手まりぎく。黄ぎくはしらぎくなれどわつばぎ
くから。ア、くすなをにそだつ合手いたいけな
小ぎく小ぎくはかはゆらし。君は心のみだれぎく。し
のびくくくるまぎく合黄菊はしらぎくなれど。わ
つばぎくからすなをにそだつ合いたいけな小菊小
菊はかはゆらし。君は心の亂れぎくしのびくくのチ
トシくるま菊合手チラシ亂る心取直し。亂る心
取直し。中あなたへ走り合こなたへ走り合上狂ひ亂
れし有様は。月と見よ合花と見よギンたつたに紅葉よ
し野に雪合鳥はふるすへかへるゆめの心亂れてふし
まろぶ。

○縁結祝 葛葉

○ゆかりの茶杓

(萩江節正本集に出づ)

○羽ごろもの曲(天人羽衣)

三下り「花ふりてたへなりや。れいきやうよにくん
ず。おもしろのいまのおんがく。おもしろのがくの
おと合「あまのはらふりさけみればかすみ立。そらも
いつしかゆくくもの。うらやましげにうちながめ。か
れうびんがのなれくし。こへさらにかりがねの。か
へりゆくあまちときけばなつかしや。げにおとめ子
のげいしやうのきよくをなし。あまのは風のひ
らくくくと。あめにうるをふ花の袖。あづま遊の
するがまひ。このときやはじめなるらん。花の色か
もよいうば櫻。すがたやさしやほらくくと。ふた
へのおびをきり、としやんとゑんむすび合「おちや
めのとのくせとして。せなに子ををひねさせておい
て。いんのこくとゆたもなめなかけそよかはゆら
しさにな。あいざかり。あいすれば。かぶりくつてう
ちしほのめ。さてもそなたはたれ人の子なれば。て
いかかづらのはなれがたやのく。手ぐるまにのせ
てまいろの。ひがし山やにし山きたさのおどりは。
ついのぼうしをしやんときて。おどるふりがみごと
へ。花みてもどろく。はなにはうさもうちわすれ
おもしろや合「このゑのみやこがゑりの江戸ざく

ら。瀬川ぼうしを菊ざくら。にはひ櫻や。八ゑひと
へ。君がなさけのうす櫻。そんなれはまことによふ
いふた合「しのぶよの。月もすこしはをそざくら。有
明ざくら戀のじやま。やみにてらすはひざくらや。は
までこがるしほがまや。そんなれはまことによふ
いふた合「たとへく野のすへ山ざくら。とらのを
すみしおくまでも。ふたりちかひしいせざくら。き
しやうせいしをすみ染や。そんなれはまことによふい
ふた。よし野はつせの花よりも。もみちよりも。戀
しき人はどれく見たいものじや。ところくおま
いりやつて。とうげこめされよ。とがをばいちやが
おひまいらしよ。しほらしや。見れば五しきのあや
の竹。あやのしとねもへ。君とわれふたり。ゑんをむ
すぶのひだちをび。あまつおとめはたが袖ふれし
がたよし。ゑきろのすいふればなりもよし。いゑい
いゑいく十二の子だからそろへてくさつさしぐ
れか鈴のねか合「日本めでたいかすがの山は三かさ
よいやさ。まてばかんろの日がらかさ。月のかさほど
ひらいたく。秋はなをもみちがさ。それくそれじ
やいの。まことにかさぎのはしをわたしたく。と

けぬ思ひの戀もあるに。かすくの文にわしやだま
されて。しのぶその夜はやみこそよけれ。こんくこ
ぬ夜はつんくつらにくわれひとり。まくらかたし
きよもすがら合「まくらならべてさんざあまつ夜
はまれに。あふときはばかりかわいくとだましてお
いて。にくやくだかけまだよひながら。きぬくつげ
て。ほんににくいじやないかいな。うやつらやく。
そらもなつかしくものなみか。てうとびかふくもの
とで。かけめぐるかへすおとめ子の。こもたへな
りあづまうた。合「さまはてんにんなそれとんとり
をとめのすがたくものかよひち。ちらと見た。見そめ
た見そめた。天人女郎しゆのしなもよく。かぶのぼ
さつのおそびもこくにかくやらんさるほどにときう
つつて。あまのはごろもうら風に。たなびきく三
保の松ばら。合うきしまが。くものあしたかやまや。
ふじのたかねかすかになりて。合あまつみそらのか
すみにまぎれて。うせにけり。

○相生羽衣 (本外題、壽相生羽衣)

三下り「朝風の。まつはときわのこゑぞかし。なみは
おとなき。あさなぎに。つりびとおほき。小船かな合

「時しも春のけしきやと。みほのく松原に。はくりやうもいざやかよはんく合「あまのはら。ふりさけみればかすみたつ。そらにもいつしかゆくもの。うらやましげにうちながめ合「かれうびんがのなれなれし。こへさらにかりがねの。かゑりゆくあまぢをきけばなつかしや。ちどりかもめのおきつなみ。ゆくかかへるか春風の。あまの羽風のひらくと。あめにうるをふ花のそで。あすま遊びのするがまひ。此ときやはじめなるやらんむつの花。つもればつもる戀ばなし。かほのみちもす色の合「たばこはしんくわすれぐさとはみないわしやんしても。わたしやおまへにとふもならぬほど。せいもんおがむほどにへ。おおはづかしやはづかし合「男のくせによいさよ。うたがひのふかいあさひは誠とまこと合「ゆびきり。かみきり。よいさよしんちうだて。およいことのかつと。つもられても戀のみち。まよふわたしをかわいといふてくれなるにそめて見そめて新まくら合「ふたつまくらはあいをいの。まつ夜はつらいながまくら。いとしかはひの文枕。合かはらしやんすな木枕の。よそへはなびかぬしたひも合「しやんとくくりまくら

や袖まくら。合こんなゑにしがからにもあろかいなあゑうらやむ中。ふたりねる夜のひちまくら合「あづまあそびの。まひのきよくその名も月の色びとは。三五夜中のそらにまた。合「さるほどに時うつつて。あまの羽衣うら風に。たなびきたなびく。みほの松原。うきしまがくもの。あしたか山や。ふじのたかね。かすかになりて。あまつみ空の。霞にまぎれてく。失にけり。

○女すけろく

(萩江節正本集に出づ)

○色見草

「いちやうにみないろもみじ合いとしらし合雪のうちよりさく梅の。ゑだをたをりていゑつとに。とふてたもとはなをりそへて。おもしろや「いつもかはらぬな。合よいくよいと合此神がきにとしふりて神の合めぐみになびけやなびけ合柳ごし。とんとこの身をすいせん。合はなのすがたもかんばしく「わかむらさきや。こむらさき。ゆかりもとめんしばしまも。かりにゑぼしをうちかづき合すがたすいなりみな人心合いともやさしきうらもみぢ。さきはひ

としほあかねさす。もみいづるなるあさひかげ合あふぎとる手のかなめのちぎり。さす手もひくても。かわらぬ中の。ながめよや。合「ナド」すまとあかしは合どれが月やら合めいしよやら。どうやら合かうやらわきていろわかちなく合どれが月やらめいしよやら合こちや／＼なんのわしらがしろぞいの。花とゆきとは合どれがよし野の合ながめやらどうやら合かうやらわき色わかちなく合どれが芳野のながめやら合こちや／＼なんのわしらがしろぞいの。はづかしや。いまをさかりのはなのかほ見せ。

○しづのおだまき

「おりく／＼ごにそめいろく／＼に合あさぎす。だけ世をはないろのいと花もかもあるあき人の「いろこさうすきうすがきや合戀しき人にあい見るちや合いとのかす／＼あふもうれし。それれもほんにうれしへ「戀のおだまきこ／＼ろももつれ合いとよりほそきこのむねも。ぬしにそめなすしんくのいとも。もつれし水のあすか川。「かわりやすきはきぬいと。合ほんにそれのみ神さんにヨ「手をあわせいと。そのつぎいと合し銀しの中よいめをと。合ひもときあわ

せいつしかに。かはゆらしげないをだいて合たのしむ心でいたわいな合おまへは思ひのあさいと合たがいにうらむかたいとのいろじやといふもむすびぞめあやのとけぬが戀のなぞ「いわすかたらずナアみな心でさばいておくわいな合のふわらのいと合もつれたすじをナア。みな心でさばいておくわいな。のふあらひがみ戀する身にはくはいろく／＼の。人の身のうさはづかしや「うさもつらさも戀ゆへ我は。いまはこ／＼のやるせなき。しばしは爰にと寄そふたもと。ふりきる手もと合はらへばはらふ戀風に。すそも小づまもほらく／＼。ちらく／＼。下もみぢ夜のまのつゆやそめぬらん。

○綱手ぐるま

(萩江節正本集に出づ)

○百夜車

「さればにや。少將は合百夜かよるとゆふ月の。合かさなるゆきつもる雪。戀のおもにとうちかたげ。なみだのつらくとけやらぬ。きみのこ／＼はうき世川。合方「わたりがねたるすな川や。こわたのさとし馬はあれども君を思へばかちはだし合ゆきてはかへ

りかへりては。雪にふられてゆくもたれゆへぞや合
いやふられてといふこゝろきみのわるひといひなを
し。おなじ事ならつる雪。しのはしがき百夜ま
でとかよひしに。九十九夜にもなりたりけり。うれし
のこよひやまたはてしなのあすの夜や合明まつ鳥の
なかぞらは。まだきにないて。やまかづらあめの月。
合かさの月。のきにもる月時雨する。合袖ひきかへ
しからかさの。これも車のわれからとくるくくく
くるくくくくるくくくくるりとふりかたげエ、
たつかいもなき神やしる。ゆきまよふ身はかわちど
りないて。たつこそあわれなり。おりふしはげしきひ
ゑおろし傘をとられじはなさじものと。かさと時雨
ともみあひて。おのとはいわじきみゆへと。合ひと
りごちしてゆくほどに。小町御せんのみすもふ車
の。もとにぞつきたまふ。

○紅葉の賀

「はづかしながら立上り。ゑもんつくろひおほやうに
合ふるふり袖のいとしらし合君がよの久しかるべき
ためしには。合おさまるみよのゆふからや。中にか
つこのひやうしをそろへて合うつやうつくうつね

ししげき川竹の合こゝろとめたることの葉に。かは
るまいぞとやくそくせふものじつにほれたら合う
れしかろかわゆらしいじやないかいの。てんと八ま
ん。合おてんとひやくらい。合あつたものではないよ
さ。だてらしや合キョ「君が三國のこまもろこしも
なびきしたがふ草も木も。ことばのはなの花もみぢ
合いろかもたへにぞ見へにけれ。

○つくばね賣

「うらゝかに。としもわかやぐべにかねつけて。合見
ごとにさした華のくちべに。かんのべに。合ゑざうし
すこ六いちまいゑ。まりやはこのこはこいたや。合と
の様かみ様さんざさよへゑんじやへ。合にほへかよ
ふやのきばのむめに。たもとにうつる袖のかも。け
ふぞはるめくこゝちして。こよひあふとの。ついでし
せふみ。合かしの梅の。はなの一筆。しきしにかい
て。おくりりくくくべくの。筆にかくともみないつわ
りよ。さりとては。うそつくおとこはこちや。こち
やしらぬへ。合いやでもおうでもこの返事。きかねば
おかぬ。それさくく。しつぽとくくはるあそび。合お
ひばねしよくひとごにふたご。見ればすがほのあ

もさすがおもしろや合五日十日あめ風もめぐみもよ
いくさかづきの。かすくくめぐるきよく水の合か
ざりしほうらいしまだいに。つるかめのせてざん
ざの合こゑぞ久しかりける合けふぞつれだちきせん
のなんによ柳ごしのたよくと。風になびきて合ふ
りくるあめはさらくさつとぬれて合たつかさぎ
のはしをわたろか合もみぢのはしか。いろみぐさ。く
れなるそむるやまく「ナドリ」てりにてりそふひでり
ぐさ合はりもつよげにいきぢもさんざ合しんじつへ
合つばめかへらばふみことづきよぞ合それがどふし
ていなおほせ鳥合おはらたつとはゆめにもしらはせ
いもんいふたはほんにく「ほんぼにさら合まことへ
げにまことナドリ」ゆふすみさしだすきしの合みな
と丸合さほのしづくもひやゝかにぬれてよしのかた
かを丸合ふねはさほかちになかして合みぢひだり合
こゝろまかせのかちとるおとこ合われが思ひもかち
にたのむへ合「かちにたのむへ合まゝならぬ」とき
にやつこのそのだてもやう合ともさきはらつてひと
つまゑすいのやつこの見事にく「きりくくくく」
きつとした合手ふりそでふりふりてのし合うきふ

さげしき。まだねもやらぬたまくらに。春の。手まり
やつくばねの。それくくや風。ちらりくくと。花
のすがたもいとしらし。それくくくかわゆらしい
じやないかいの。みやこの春ぞおもしろや。かすみ
をわけてかへるかりがね。みちもはるかにかいまん
まんと。合なみぢはるかにいくせのおもひ合こひの
おもにのかたかへて。しやならく「とろくじやうの。
やしきくくにはこいたはごの子ゆみやほま。合いつ
もかはらぬ。いはふかどまつ。

○紅葉うり

(萩江節正本集に出づ)

「ヤアひらくや君が袖かほる。あふぎあきなう
しだしおどりがしよもふじやががつてんか「久かた
の合そらふく風に世をしのご合なつはさまんくよわ
たりの。人のあつさをあふぎうり合しやんとむすび
しほうかむり合すいたすがたのはでらしや合ぬしは
たそたれぞと。つまもなつこたち。たちよるかげに
涼しさの秋の山草。すみゑのほせつ合みなそれく
の。あふぎのゑ合「あるがなかにも兩國の合やみも月

よのすゝみぶね。その名。なにぞと宮戸川。合花のよし野はなア「サイナ／＼さくら丸うつり合ごころはしよての事合かはらぬゑんのちとせ丸。じつならしんぞ川一の合しのぶてはづをゑびす丸。サイナ／＼高尾丸かほの合もみぢはしよての事。ぬしのゆくすへしゆつせ丸。ばんせい丸とちかいてし合神も納受をたまよ丸。サイナ／＼これもすゝみの一おどり合「まれにあふ。戀ぞ合まことの合戀ならぬ」それへそれへ「君にあふぎの。じやまするかきね合ひと合それぞとみゑいどうあ合まよとおもへどこゝろおりあふぎ合どふなりとよいわいな「あたは花合ちれと合啼つる合ほとゞぎす合ねやのかなめをじやまするそらね合ひと合しらじのあふぎそへあ合まよとおもへど。かほにひあふぎの。どうなりとよいわいな「チラシ」いわぬかなでしまひあふぎ。いくちよにぎわひするがなる。その名もたかき。ふじのたかねぞ。

○旅の初ざくら

「花のみやこを」いでそよひとりたびのそらあづまからげのあづまぢへ。はる／＼きぬる旅ごころも。「しや

んとこすまも春風に「もれてやにほふはなの山。のぼりくだりの。みちのべに。くさつむそでやかざし草。合「見たせば。柳さくらをこきませて「いまをさかりのおもしろや。いそぐ心かまだくれぬ。大いそのしゆくにつきにけり「そのにいろよく「さゝやさきそめし「花にうつろふ」てふよこ蝶たはむれ遊ぶへ「しだり柳に「つゆのたまやなぎ川ぞひ柳」つばめ小とりたはむれ遊ぶへ「あゝおもしろの春げしき「ひとしほのながめとてしばしやどかる花のもと「むかし／＼のかみさんも「鳥がおしへしいもせごと。いまのむすめは六つ七つからげに戀はくせもの「空にもあまの戀。あわれあわびのかたおもひ「そのまんなかの戀すてう。わが名はたちし。里の戀あのせうわる性わるじやぞへ「道のじやらくらしほらしや。にはひざくらの「ちり／＼／＼／＼ちりかゝる「ゆきか「花のふゞか「散かゝるへ袖がさの「うちぞゆかしき花むすめ「旅はみちづれまねけばまねくほうかいばう「ひよくりひよ／＼ひよくり／＼／＼／＼ひよくりひよつと出て見れば野でも山でもはたけでも

田でも戀の世の中々そでひく「つまひく「しやみをひく「大いそ小いそのさと／＼も。入相おしむ花ざかり。げにあさからぬ歌枕。

○高砂

「高砂のまつのはるかせふきくれて。尾のへのかねの響くなり。すゑはる／＼のみやこぢを。けふおもひたつうらのなみ。ふなちのどけき春風も。幾日きぬらんあとすへも。これやこの。あねといもと中のよいどしゑつれ立て。いさしらくものよものそら。こまのたづなをちからをび。しめてむすんできつとして。しやんとしめたるのごぶり合おとこまさりのみちすがら。すれつもつれつちやらくらと。おもしろげなん合こゝろのいさむ春ごまは。ゆめに見てさへよひとや申す／＼。あしなみそろへて二つ三つ。五つや三つの時よりも。ねがひをむすぶたまがきの。神にいのりをかけまくも。たのもしく。高砂のうらはりまがた。尾上のはまの一ふしに合高砂や此うらぶねにはをあげて。やんさ／＼それこそ。月もろともにいでしほの。そんなはへをのゑの松に通わんす。すみよしさんまのまつがえは。どうでもあくしやう

でさまごんざんす。ふうふのゑんこそしほらしや合しよてうむれゐて羽をやすめ。心もいかですみよしの。松やぎんづるきん鶴からごころもおまへのそりはしや合ばんにやみやまいり。よるのつゞみのひやうしをそろえて。すしめたまへかみかぐら合さてばんせいのをみごころも。さすがいなにはあくまをはらひて。おさまる手にはぢふくをいだき。せんしうらくにはたみをなで。ばんざいらくこそ。めでたけれ。

○高尾さんげの段

三下り「しやうごのおともすみわたり。名もなつかしきみやと川。みやこ鳥も聲そへて。なむあみだぶつみだほとけ。あさぢがはらのさう／＼と風ひや／＼かに身にぞしむツゞゞ「ふしぎや紅葉のかけをひて。つかのうしろにすご／＼と。高尾がすがたこれまであらわれ出たるぞや「紅葉ばの。青葉にしげるなつこだち。春はむかしになりけらし。世わたる中のしな／＼に。われはおやはらからのためにしづみし戀のふち。うかみもやらぬながれのうき身ういぞつらいぞつとめのならひ合「たばこのんでもませるよりのどがとをらぬうすけぶり。ないてあかさぬ夜はとでもなし。

ひとのながめとなる身はほんに。しんくまんくのく
 のせかい。四季のもん日はおぐるまや。合まづ春は
 花のもと。たおりしえだをたのしみて。とこにながむ
 る春のかせそより／＼とはなふきちらす。ちらりち
 らりとさくらのかほりの山をうつす。里げしき合な
 つのあけぼの有あけの。つれなく見へし別れどり。ほ
 ぞんかけたとさゑづるは。しでのたをさやめいどの
 鳥と。なきあかす。ながれてちしほの花の色。さつ
 きさみだれふられて／＼。ふる／＼／＼。ふる夜
 は物をおもはする。かごの鳥かやうらめしや。秋の
 夜中にぼたんくわの。とうろうおどりの一ふしに合
 のこるあつさをしのがんと。大もん口のたそがれや。
 いざすむしをおもひだすつらいつとめのその中
 に。かわい男をまちかねて。くれまつむしのおもひ
 だす。むしのこゑ／＼かわゆらし。われがすみかはい
 さ葉にすたく。つゆをまくらにさはらはおちよ。ない
 て夜ごとのつまほしそふにとのこ戀しきはたをりむ
 じよ。露をまくらにさはらはおちよ。ないて夜ごとの
 つまほしそふに。とのこ戀しきはたをりむじよ。ひ
 るはものうき草の蔭。あゝかなしやな。くるしやな。

ゆきのはだゑになさけなく。こほりのやいばにつら
 ぬかれ。さながらふゆかはつかんのくるしみふかし。
 ものがたり合セメはやとききぬといふこへも。ふる
 ひわなき身にしみわたりどろ／＼。あだとうらみ
 となさけのおもひ。おひめぐり／＼しんどういなづ
 ますさまじく。むざんや高尾は世の人のおもひをか
 けしなみだのあめ。はんら／＼はらはら／＼。ふ
 りかくれば身にしみたへて。こかげによれば。やい
 ばのせめにほんのふのいぬはあつまり。きばをなら
 してとびかゝる。こわなさけなやごわうのからす。は
 しをならしはをたゝき。まなこをぬかんとまひさが
 る。げにおそろしきものがたり。

○わんきう

「たどり行。いまはこゝろもみだれ候。すへの松山お
 もひのたねよ。いつのころよりあひなれそめてかよ
 ふこゝろをかはいとおもへ。さりとは／＼しのほか
 の。はてどふもせ。これ／＼／＼。うけたとさあ
 のやわん久はこれさ／＼。つゞみのかわかほんへ。
 しんぞこの身はこれさ／＼うちこんだとかく戀ぢの
 ぬれごろもほさぬなみだのつゆしぼりくちなば袖よ

もあてられぬ。ふせいなり。

○三勝みちゆき

「はるの夜の。ゆめばかりなるたまくらに。二つまく
 らのゆふべぞかたみ」はなのやど。かりのちぎりもさ
 アよラ、いさよ「ながかれとゑんをむすびしかみ様
 へいひわけもなき涙あめ」かさや三勝しのびぢの夜
 もはや四つ半七は。れんぼのやみのとぼ／＼と。合心
 はゆけどあしもとは。あとにのこせしおさな子のち
 ぶさ。たづねてさこそたづねんかわいやと。合せき
 くる涙のあわれなり合をだてあげたる小櫻も。合二人
 花かとながめしに。そのかいもなきすて小ふね。ア
 アうきよ合うきよ「おもひきらしやれもふなかしや
 んな」わしはなかねどそれこなさんの。合い／＼やこ
 なたの。いやこなさんと。合かほとかほとを見あわ
 せて。おもはずわつとなげくにぞ。合はや寺々のか
 ねのこゑ。手に手をとりてしでのみち。いそぐ心かま
 だあけぬ。千日寺にぞ。つきにけり。

○京鹿子娘道成寺

「かねにうらみはかす／＼ござる。初夜のかねをつく
 ときは。しよぎやうむじやうとひやくなり。ごやの

今の身は。せいしがのべのおもひぐさ。むぐらのや
 どにたゞひとり。とこはなれゆくあか月の。そのきぬ
 ぎぬのおもかげを。とへどこたへすしよんぼりと。き
 のふはけふのむかしなり。ほうし／＼はきはしと。
 おもふはやばよわけしらぬ。心の花のかほりをば。し
 らせたいぞやあゝはつち／＼。此十徳はすぎしころ。
 ゆかりほうしが一ふしか。ちゑもきりやうもしんだ
 いも。みなあわゆきときへうせて。かはせしことの
 かわるをば。はなれまいぞやきみこはく。われはち
 りかや身につもる。こゝろのあくたむねにみち。そ
 れがかうじた物ぐるひ。とてもぬれたるや。やんや
 みなれどもひとむらさめをいとほじと。立よるのき
 のこすごとく。きむくひむくのそらだきも。もれて
 見へしははくじんか。いろでまろめしよるのつま。ほ
 り江のふみのたよりさへ。はしがなければわたられ
 ぬ。戀のねがひのあみだばし。うきなをとへどあわ
 ざばり。ぬれてかよふかいたちばり。じやこばあぢ
 かはふくしまの。まよひ行ども松山に。にたる人なき
 うきよぞと。ないつわらふつきやうらんの。身のは
 て何とあさましやと。しばをしとねにふしけるは。め

かねをつくときは。せしやうめつぼうとひやくなり。じんじやうのひゃきは。しやうめつめつ入あいは。じやくめつわらくとひやくなり。きいておどろく人もなし。われもごしやうのくもはれて。しんによの月をながめあかさん「いわすかたらぬわがこゝろ。みだれしかみのみだるゝも。つれないはたゞうつり氣な。どふでも男はあくせうもの。さくら／＼とうたはれて。いふてたもとのわけふたつ。つとめさへたうか／＼と。どふでもおなごはあくせうもの。みやこそだちははすはなものじやへ。戀のわけざと武士も。道具をふせあみがさで。はりといきぢの吉原。花のみやこはうたでやはらぐしきしまばらに。つとめする身はたれとふしみのすみぞめ。ほんなうばだいのしゆもく町より。なには四すじにかよひきつぢにかふるだちからむろのはやぎ。それがほんにいろじや。一二三四。よつゆ雪の日しものせきぢも。ともにこの身をなじみかさねて。中は丸山。たゞまるかはいづれあにやらをとゝやら。わきていわれぬ花の色へ。あやめかきつばたはいづれあねやらいもと

やら。わきていわれぬ花の色へ。にしもひがしもみんなみにきた花のかほ。さよをへ。みれば。戀ぞますへ。さよをへ。かはゆらしさの花むすめ「戀の手ならひつるみならひて。たれにみしよとてべにかねつきよぞみんぬしへの心中だて。をうれし／＼。すへはかうじやにナ。そうなるまでは。とんといわすにすまそへと。せいしさへいつわりか。うそかまことか。どふもならぬほどあいきた。合ふうつりんきせまいぞとたしなみでみても。なさけなや。女ごには何がなる。とのご／＼の氣がしれぬ／＼。あくせうな／＼氣がしれぬ。うらみ／＼てかこちなき。つゆをふくみし櫻花。さはらばをちんふせいなり「おもしろの四きのながめや。三ごくいちの。ふじの山。ゆきかと思れば花のふきかよし野山。ちりくるちりくるあらし山。あさ日山々を見わたせば。歌の中山いし山の。末の松山いつかおほ江山。いくの道のとをけれど。戀ぢにかよふあさま山。一よのなさけありま山。いなせのここの葉あすかさそ山まつち山。わがみかみ山のりきた山。いなり山。えんのむすびしもせ山。ふたりが中のこがね山。花さくゑいこの

このおばすて山。みねの松風おとわ山。入相のかねをつくば山。とうゑいざんの月のかほはせ三かさ山「たゞたのめ。うち神様がかわゆがらしやんす。いづものかみさんとやくそくあればつるにゐまくら。さとにこひすればうきよじやへ。ふかい中じやといひたてゝ。こちや／＼よいしゆびでにくてらしほどいとらし「花に心をふかみ草。そのに色よくナ。さきそめて。べにをさすが。しなよくなりよく。あゝすがたやさしやしほらしや。さあ／＼そふじやいなそふぢやいな。さつきさみだれさうとめ／＼。田うへうた。すそやたもとをぬらしたさつき（さき）「よし野はつ瀬の花もみぢ。さらしなこしぢの月雪は。しゝとらでんもときをしる。げに有がたきのりのには。しやうちやくきんくご夕日のくもにかやきて（校訂者曰、「よしのはつ瀬……かやきて」迄の文句は流布の稽古本には「花の姿の亂れ髪。思へば／＼恨めじやとて龍頭に手をかけ飛ぶよと見えしが引かひ。」「うたふもまふものりのこゑ。でそ失にける。とあり。）」なんでもせいア、なんでもせい。春は花見のまくぞゆかしきなつはやかたのふねゆかし。よい／＼よいよい／＼ありやゝ。こりやゝよいとな。秋はむさしの月ぞゆかしき。ふゆはゆきみのちんゆかし。よい

よい／＼／＼ありやゝこりやゝよいとな。うきにうかれてだい一中有にまよふた。さんげ／＼六こんざいしやう。なむふどうみやうわう／＼。あゝなんでもせい／＼。うごくかうごかぬか。曇謀三蔓陀縛日羅南。こりやうごかぬぞ。しんごんひみつでせめかけ／＼。じゆすの有たけやつさらさ／＼。施多摩訶嚧遮那なんのこつちやゑ。そわたやうんたらなんのこつちやへといのりける「きんせいとうぼうしやうりうしやうん／＼。きんせいさいほうびやくたいびやくりう。一だい三千大せん世かいの。ごうしやのりうわうあいみんなうじゆ。あいみんしきんのみきんなれば。いづくにうらみの有べきぞと。いのりのられとびあがり。みのりの聲にこんじきの。花をふらせしそのすがた。げにもたへなる。きどくかや。
○百千鳥娘道成寺（さなきだ道成寺）
次第「つくりしつみもきへぬべし。かねのくやうにまいらん／＼」「さなきだにおもきがうへのさよごろも合わがつまならぬ。あだ人に合まよふハル心の戀のふちしづみも。やらぬものおもふチン人めをしのぶそ

めぎぬのこひしゆかしきねんりきの合つくりしつみ
 もせめてハツミさて。れんぼのやみのはれやらぬ。月
 はほどなく入しほのく。けぶりみちくる小まつば
 ら。春の目ながくまだくれぬ。ひだかのてらにぞま
 いりける。此間狂言あり「うれしやさらばまはんとて合
 チンゑぼしをしばしかりにきて。あふぎおつとり
 いろ／＼の。すでにひやうしをウツサすゝめけり合
 「さてもなだかきしらびやうし。天のうすめのみこ
 とより合ハルなさけいろねにひくい竹の。さゝの
 ひとよのちぎりもあろに合かわい／＼もみなひとモ
 ツさかりつらいこゝろをつゆほどもしらいで。月な
 らば十三夜。モツ花のゑんとて。おもひを合戀の
 手ならひチンつい見ならひて下ルふかき合ハルとの
 ごにいのちもほんに。三とせ四とせのおもひをすて
 て合ものもいわずにいや／＼とせひにいやならのき
 もせふぞもとのしらぢにしてもどしやむかしおもへ
 ばいまさらによしなのうらみ。うらみフシかこつも
 はづかしやウツイ「花のほかには松ばかり。くれそ
 めてフシチナスかつこひ。くらくらん「此間舞かつこ「やよ
 ひごろや。はる風の柳のいとのとよ／＼と。しだれ

やなぎかつゆのそひねのたま柳「玉のふへのねこへ
 すみて合ハルぼさつもこゝにゑうがうのあまのつ
 みかうちなり／＼おもしろや合「よるべきだめぬハ
 ルフシなみまくら「戀しき人のねをやいださんし
 べもゆめかまぼろしといまはたいこのうつ。なや
 合トリ「うつやたいこのねもウツサみて「さつさめ
 ぐれやモツ二つたいこのねもよしウツサ「さつさどん
 どんど「どん／＼ど／＼つく／＼でんづくどんづく
 どんがら／＼。これはさておき「たつた川にはちん
 ちり紅葉をながす合われはきみゆヘナアうきなをな
 がすのほんほさどなどさよいよへ「さあ／＼合「すま
 やあかしのまんまる月のめいしよ合松はからさきナ
 アかすみはとやまのほんほさどなどさよいよへ「さ
 あ／＼合「しのおよの／＼さまがつてかとはしり
 て見れば合よはふく風につん／＼つまどをほと／＼
 きり／＼／＼やつきり／＼合みねはあらしのお
 とばかり合チン「君とわれとがキン中はむすぶの神様
 ア、じたいとりはものかはつらいはかねよの合ひと
 りまつよはにくてらし。モツかはるまいとの合いふた
 ことばがうそかいなア。それれもそうだか合うき

名はまよむすぶのかみ様ア、じたいとりはものか
 は。つらいはかねよのヲ、合モツひとりとまつよはに
 くてらし。かわるまいとの合いふたこと葉がうそか
 いな。それもそふだかへ。かねをうらむるつみふか
 し「げに有がたきのりには。しやう。ちやくきん
 くご。ゆふ日のくもにかやきて合ぼさつもこゝに
 らいごうのよそほひは。もくせんきどくたへなり
 や合此間石橋あり「さる程に／＼。てらでらのかね。月
 おちとり。ないて。しもゆきてんに。みちしほほど
 なくこの山でらの。かうそんの。ぎよくは。うれい
 にたいして。人々ねむればよきひまぞと。ハル立まふ
 やうにねらひよつて。つかんとせしがおもへばこの
 かねうらめしやとて。りうづに。手をかけ。とぶと
 ぞみへしが。ひきかついでぞうせにけり。此間かれの
 かり有とうぼうに。ござんせ／＼とみがをかには二
 けんちや屋の花ざかり合なんぼうに。しな川入江の
 いろはつきせぬふなあそび合「西ほうに。しかもか
 しわぎゑもん櫻のさかりへ合「ほつぼうにわけも吉
 わら太夫がうしに合さんちやつねにはし女郎「う
 きにうかれて第一中有にまよふた。さんげ／＼六こ

んざいしやう。なむ。ふどうみやうわう／＼「うご
 くか。うごかぬか。なまぐさ。まんだばさらだばさら
 だ。こりや。うごかぬぞ。しんごんひみつで。せめか
 け／＼。じゆすの有だけ。やつさら／＼合せんたまか
 ろしやな。何のこつちやへそはたや。うんたら。な
 んのこつちやへ 此間のりあり「きんせいとうぼう。し
 やうりう。しやうん／＼。きんせい。さいほう。びやく
 たい。ひやくりう。きんせい。申わう。わうたいわうり
 う。一だい三千。大せんせかいの。ごうじやのりうわ
 う。あいみんなうじゆ。あいみんしきんの。みぎん
 れば。いづくに大じやの有べきぞと。いのり。いのら
 れ。とびあがり合身はひざくらの。ほのふとなつて。
 おひめぐり／＼／＼ゆきちがひ／＼くるり／＼くる
 くる／＼合よぶもさけぶも。うらみのこだま。かす
 みにまざれて。うせにけり。
 ○根元草摺引
 「おとにきこへしときむねが。ひつさげたりしさかお
 もだかに。とりつくすあうは鶴の丸。女ともまたお
 とことも。ひきぞわづらふくさずりびき。合ぼたんに
 くるふてふ／＼の。風にもまる／＼ふせいなり合「時む

ね大きにむつとして。合およそばんどう八かこくが
そのうちに。合ちからじまんをするものは合あさい
なならではおほへなし合いらぬさまたげしようよ
り。おいたがよい合をこをとめるがとめきのかほり
合きやくといふじをうのじにかいて。うるもつらい
も。こちや／＼するものを。とまらんせゑゝめんど
うなそこはなせ。合「てん／＼てんきよくてまりや合
きよくばちのかずはひいふうみいよ富十郎せりふ」ひや
うしにかゝつてひいてくりよ歌「ひくものにとたとへ
ては合だいににんじんごぼうじやへ合あやめせうぶ
かきつばた合これらは女子の手でもひく。ひくにひ
かれぬおとこのいきぢ合あめのふるよも風のよも。
かよひあみがさ花あうぎ合あふてもどればせんりも
一り。あわぬそのよは。一里も千里。あゝなんとしよ。
わしにばつかりきをもませずと。ひらにきげんをな
をさんせ。こわいかほすりや正月とおもふてか。正
月はふくびき。いやでも合おうでもひかにや合かぬ
なん」じやれがかうじて時むねも。ひごろのたんきに
つきとばし「かけ出さんとする所を」又おきあがつて
とりつけば。またふりはなしとびあがる合こちりを

つかんでひきとむる「女にまれなるりきりやうはや
わざ。ときむねすこしもうごかばこそ」げにめざまし
きありさまやと。きせんじやうげおしなべてみな。か
んせぬものこそなかりけれ。

〇七へんげ

- 第一番 官女
- 第二番 春駒踊
- 第三番 杜若 (女なり平)
- 第四番 鎗踊 (みだれびやうし)
- 第五番 傾情 (くせつのだん)
- 第六番 山賤 (しばかりおきな)
- 第七番 布曝

(萩江節正本集に出づ)

〇柳雛諸鳥囀

第一 新けいせい

「花と散てもきへのこる。雪にあしだのあともなく合
まよふ心にむごやつらやさりとては。おもひくらせ
しなみだ川合ながれの身にもはじめから。ほんにま
ことをつくしたわしが心もしらす合よそにいろます
花ながめ。そしてまたせてそれ／＼／＼そのかほで。

むりなことゆてはらたてさんす合にくいしやうじや
ないかいな。合わしばつかりがあやまつても。びん
とさんさんしてあちらむき合よひのくせつもあかつ
きのわかれに合なをるさ／＼ごともさいつさ／＼れつお
さへの手元合ほろ／＼ゑひのきげんがほ。いふもほ
づかし又いわぬのも。しんき心のひとすぢに合おま
へとわしはその中は合神さんやほとけさんとがせわ
やかしやんす中々を。へたてられたるふすまへ。明
ていわれぬうきよじやへと。うたふもおくのさはぎ
歌しばしはうさをわすれぐさ。

第二 華笠おどり

「さても見事にそろふたとりなり合きつれてつれた
花がさやうちぞゆかしき花のかほ合どれがあねやら
いもとやら。よふにた／＼さつてもよふにたしやな
しやな合どふともかうともいふにいわれぬふうぞく
や」かまくら風のいまやうを合またやはらぐるさゝ
めごと九十三ぎの大一座。大いそこいそけわひ坂。名
ある女郎衆をひきよせて合おもひ／＼にさすさかづ
きの。まだみ／＼なれぬ女郎の名も。菊川のすみれ草。
にごらぬ戀をあげまきの合歌川小式部半太夫。此お

もしろきこの中に合とらさんひとりござんせぬわけ
に合こゝろもすまぎぬのいとくりかへす口々に合和
田さんもひづき。三度むかひにやりてまで。ゆけど
へんじもしら玉の。さはらばよし野といひすて。あ
ささんをつかひにたて。いまや／＼／＼とこの返事。
まつざかへてこれをきて見よかしのゑチドリ「こよ
ひしのぶと合さんさくる文まくら。しゆびにあふよ
は袖まくら。ふたりねがちに引よせて。つゞみまく
らのしめつゆるめつ合ながまくら合うたゝねまくら
のしみ／＼と。かわすまくらのひちまくら合ひちま
くら合すへはまことのもいもせ中「つもあるおもひはそ
つちもこつちもものおもひ。いふかいわぬかせいも
んかけて。神にちかひの二世まくら。ちぎるもうきよ
の戀ぞかし。

第三 さぎむすめ

吉次ツマミ歌「まうしうのくもはれやらぬおぼろよの
戀にまよひしナトツわが心セツキヤウ」しのぶ山。ハル
せつの。たねの戀風が合「ふけども笠にゆきもつて。
つもある思ひはあわゆきの。きへてはかなき戀しとや
タキ」思ひかさなるむねのやみ合「せめてあわれと

ゆふぐれに。合ちら／＼ゆきにぬれさぎのしよんぼりとかわゆるし合「まよふ心のほそ流れ合」ちよろちよろ水のひとすぢに。うらみのヤンほかはしらさぎの。水になれたるあしどりも。ぬれてしづくときゆるもの合「われはなみだにかわく。まも。袖ほしあへぬ月かげに。しのぶ。そのよのはなしをすて、合上「ゑんをむすぶのかみさんに。とりあげられしうれしさも。あまる色かのカントシはづかしや合「すまのうらべでしほくむよりも。君の心はとりにくいさりと。は。じつにまこととおもはせん合「しゆすのはかまのひだとるよりも。ぬしの心がとりにくいさりと。は合じつにまことと思はんせ合しやほんにへ合「しらすぎの。合はかせにゆきのちりて。花の散しく「けしきと。見れどあたらながめの。ゆきぞちりなん「ゆきぞちりなん「トシ」にくからぬホッ「戀に心もうつろひし。はなのふいきの散かゝり。はらふもユリおしき。そでがさや合「トシ」かさをや合「傘をさすならば。てん／＼／＼ひでり傘「それへ／＼さしかけていざさらば。ハル花みにごんせよしの山合「それへ／＼にほひざくらはんがさ合「ゑんと月日の。

めぐりくる／＼「くるまがさ。それ／＼／＼そふじやゑ「そふじやゑ」それがうき名のナトシセメはしとなる合「そふもそはれずあまつさへ。じやけんはやいばにさきだちて。この世からさへつるぎの山合「ちじゆのうちにおそろしや。ちごくの有様こと／＼く合つみをたゞししてゑんわうの。合てつじやうまさに有々と。とうくわつちくしやうしゆじやうちごく。あるひは叫喚大叫喚。しゆらの太鼓はひまもなく合「ごくそつよもにむらがりて。てつじやうふりあげくろがねの。合きはかみならしはつたて／＼合「二六。時中がその間くるり合「くるり」おいめぐり／＼ついに此身はハルひし／＼「あわれみたまへわがうき身。かたるも涙なりけらし。

第四 布袋

龜藏 七重郎 吉五郎

「ことわざにいふ。もろハルこしの。合「ヤンガハリさくらととへば。チンかいだうや。ハルその花のかはナトシ和國まで合かくれなむをみ經山寺合ほていおしやうの朝づとめ。もくぎよのおとも世にハル高き合山々こゑてたに水の。さよくもすめる。のりのみち。合ほとけのおしゑにしものそら合山ほとゝぎすくもがく

れ。さすればものつちくれや。つちにすをくふつばくらの。口をひろげてたからをみせん」とらのナアとらのナア。とうぎんとうぎんとうすいとうりうとうがのとうけん合とうみんがたうくわのさかりをみんとて。ハルくんじゆんすんべんするといな合するといなハル「おさなおどりにうつかれうかれてに／＼。子どもハルこい／＼。もちやそびやろぞ。ひけや／＼此つな「いちにたはらやがら／＼小づち。ハルびんとはねだいつりざほつけて。申ケンわたすうきはしふた神の。合中におかほも西のみや。ゑびすのわざはわだつみの合いわにこしうちかけだいの。ひれます合ひます大こく天のうつらせ給ふそのいへに。うれいのうのじあらがねの。ハルさちにたからをこめぐらや。まづ大こくはみぐるしい。そりやなせじや。はて合くどいぞよきいてみや。合「ハッハッマヒせいひくうて色くろく合しんきせうしななりじやへ「それならこつちもいふてみよ合さあいふてみや。まづおゑびすはぶしやうもの。そりやなせじや合そなたもくどい聞てみや合なみにこけむすいわにのり。ハルあ

ゑ。おさな遊びもしほらしや「すいしやうのな／＼じゆすのいとまは子どもにうかれ合ふくらすやめの合ぼつた／＼合はらがでつかい山坂たいぎ。もゝがすれたであるきにくうござる合あるきお／＼せてひといきつけば口がかわいてならぬゆへ合びつくりしよつくりしんきな合「トシ」やばせかい「トシ」さんさそれ／＼／＼合うつや太このてん／＼つく／＼どんがらり。ひやうしどり。合きけばねもよや。たんたいこのおもしろや合あさとくをきて合「ハルおきてなむあみ／＼どうぶ合どうぶ合さとひらいた「いさぎよや。ちやつば小太鼓ふへ竹の。ひいやひ「おさへ／＼。合よろこびゑがほや合ふうきじぎいの。福和尚。そく才合ゑんめい。合子だからの「つきせぬみよこそ。にぎわしき。

第五 新草摺引

人よせ「さる程に曾我の五郎とき宗は。さかおもだかの大よろひゆつてうはおびてうどしめ。獅子ふんじんのいきほひにて合かけだすこしにひつそひし合いきほひ和てうにかくれなき。母のちからをつるの丸まてと一トこへかけゑぼし。じまんのひげのちりと

らぬ。これもがまんのわんぱくもの。ひけども合ひ
けどもうごかばこそ。時宗どうせすから〜と
うちわらひ。まへがみなれどわがからしつてとめ
たかおしやうしや。いらぬうでだてしやうよりそこ
はなせ。ならぬぞはなしやせぬ。さいわいにいかふで
のかほどれどなほ龜「ヲ、こわ歌」そりやまあな
んのかほじやいナアナス「ちからあるとてじまは
ならぬなせ。それわいな合いろもうつくし女郎衆に
あふては。いつかな〜こしをぬかしてあつて夜
みせのすがき合てつとん〜とうちこむ色ざ
とへ。てれん手くだのまがきのしゆびも合やりてに
せかれてくせつのはてはたばこがなをすみちか夜
や。なむ三ぼうかねがなる合いのうよもどらふよと
いふてはこしに取つて。ゑいや合ゑいや合ひけど
おせどもこりやどうじやなん。あさひなちからはそ
れざりか龜「うんゑい歌」ヲ、はづかしやはづかしこ
れじやならぬとひやうし歌「アドリ」しのぶその夜は合
ハルさくら戸あけて合庭さくらまつぞへ合とけてねて
見よゆめみ草合あだな草ならほんによしの合よしの
ぐさ合うらむことは山々櫻あさぎざくらにいはいし

やんせ「此間くさすり合方あり歌」たがいにいとらぬその
いきほひ合くさすり三まいひきちぎつてさうへ。ば
つとぞのいたりけるハルかの兩人がその有様。こゝ
んにまねなるわかものやと。きせん上下おしなべて。
かんせぬものこそ。なかりけれ。

第六 うしろ面

「いちねんたしやうむりやうごう合ほとけのちかい
ありがたや合あさましやわれながら合たま〜しや
ばにうまれきて。人をいつわることハルのみ合上
うきわざとするちくしやうのいつかカンるてんをの
がるべし合なまうだ〜なむあみだ。うつやしやう
ごの合しゆしやうさよ。きいてほとけになりたかろ
吉次「たかのふチャシ」水かッみ「うつるすがたもは
づかしやナス」我はばけたとおもかげを。それぞと
さとる。いぬの聲。ぞつと身にしむ合なる風吉次ッ
ツミ歌「さむき」夜あらしハル身にしみ〜と野寺の合
かねに憎くやまくらをおどろかす合ハルいや〜の
いたづらや。さとのわらべがいしなごを。てゝに合
なげうつこわもの歌「しんきしんくのくがござる」アド
リ「こゝはまつちのな」山中なれば「筆にやことかく

すやりすみやもたす合ウハケンもしもわすれずおた
づねあらば合もりのこかげに此身をよせて。やがて
あはふといふてたもれた。姿はづかしヲッなつかし
や「花のゑにしのかのまにあをぞ。「あせみちほそ道
まはれ〜。くる〜。鳥のはをとななるこの
なはに「ひらりと」くるりと。こしをこなへておどり
まふていなふよ。わがふる。さとへかへらん合「たに
みねしどろにくるり〜」すがたみまがふくさかく
れ。

○相生獅子石橋（相生獅子）

「花とび。蝶おどろけども人しらす。我もまよふやさ
ま〜の。四季おり〜のたはむれは。其ものごと
にあわれなり合蝶や胡蝶のせめてしばしは手にとま
れ合見かへれば花にまぎれて見へつかくれつ。いろ
いろのすがたやさしき夏こだち「こゝろづくしな。こ
のとし月をへ。いつかおもひのはる〜やら。心一つ
にあまるやら。よしや世の中花にたはむれえだにふ
し。お獅子め獅子のあなたへひらり。こなたへひら
りひらり〜とまひあそぶ。八しき九しきのふ
んじんの亂びやうしは合それであれ〜も心みだれ

てあしもたまらずたきのおとのしたはないりもしら
なみの。こくうをわたるがごとくなり。なつの夕ぐ
れに山々をみわたせば。おりしも松風に青葉すッし
くふきさそふ。ばら〜。ばつとりのむれかるは。
ときもこそあれひとしほの。さてもおもしろや。又
はほととぎす垣根にむすぶ卯の花や。ぼたんしやく
やくあつちりな。こつちりな。あちりこちりすぢり
もちりてゑりくりゑんじよのおく山のかげも。戀と
いふことはたれもしる物をむごやな。何ものか月も
かたむくほの〜かねの。つらやうらめしわかれ山
ざる。なみだ玉ちるあさばらけ合人め。しのべは。
うらみはせまじ。ためにしづみし戀のふち。心がら
なる身のうさを。やんれそれは〜へ。まことうやつ
らや〜おもひまはせば。むかしなり。ぼたんにた
はむれ獅子のきよく。げにしやつきやうの有様は。
笙歌の花降り簫笛琴篋夕日のくもにきこゆべき。
もくせんのかきどくあらたなり合しばら〜またせ給
へや。影向のじせつもいま。いくほどによもすぎし。
獅子圖亂旋のぶがくのみぎん〜。ぼたんの花ぶさ
にほひみち〜。大中利巾の獅子頭。うてやはやせ

や牡丹芳々々々くわうきんのすい。あらはれて。花にたむれゑだに。ふしまろびげにもうへなき獅子王のいきほひ。なびかぬくさ木もなきときなれや。ばんせいせんしうとまひおさめ。まひおさめ。獅子の座にこそ。なをりける。

○富十郎石橋 (本外題、英執着獅子)

三下り「花飛び蝶驚けども人しらす。我も迷ふやさまざまに。四季折々のたはむれば蝶よ胡蝶よせめてしはしは手にとまれ。みかへればはなのこかげにみへつかくれつ。はをやすめ。姿やさしき夏木立。心づくしのな。此年月をへ。いつかおもひのはるゝやと。心一つにあきらめんよしや世の中。短夜の夢はあやし其うつりがのにくて手折ろか。ぬしなき花をなんのさら〜。さらに戀はくせ物。つゆ東雲のくさ葉になびく青柳のいとほらしく。二つの獅子の身をなでてかしらを。うなだれみゝをふせ。花にやどかるうき世の嵐あなたへさそひ。こなたへよりつ園の小蝶にたはむれ遊ぶおのがともよぶ獅子のこま「花にうつらふ戀の小蝶のまひの袖戀すてふひよくれんりのかはゆらし。」「大みや人の庭櫻。ひあふぎか

ざすひざぐらの。ちしゆの櫻やたき櫻。月のかげさる明石がた。人丸櫻袖すゞり。筆の命げ墨櫻。たがこ櫻やにくからぬ。姥櫻花櫻「名とりの里にひくしやみの。手鞠櫻のはづみよし。おもひそめたよ絲櫻。吾のなのみきく櫻。ふたりが戀の山櫻。いのるちかひも伊勢櫻。色もかはらぬむらさきの江戸ざくら。いへ櫻おもしろや。時しもいまは牡丹の花の。さくやみだれてちるは〜ちりくるは。散は〜ちりくるはちり〜。」「散かゝるやうでおいとしようてねられぬ花みてもどろ。花にはうさを打わすれ。」「人めしのべばうらみもせまじ。ためにしづみし戀のふち。心がなる身のうさを。やんれそれは〜へ。まことうやつらや。あさな夕なにつすかゞみのよいかね性と。わしは水性でおまへとふかい。」「それをうたがふことかいなさりと柳にやらしやんせ。柳に〜やらしやんせ。おもひまはせばむかしなり。牡丹に戯れ獅子の曲。げに石橋の有様は笙歌の花ふりしやうぢやくきんくごゆふ日の雲に。きこゆべきもくせんのみどくあらたなり。」「しばらくまたせ給へや。ゑうがうのじせつも今。いくほどによもすぎじ。し〜とらでんの

ぶがくのみぎん〜。牡丹のほなぶさにほひみちみち。合大市利市のしゝがしら。打てやはやせやばたんほう〜。黄金のすい顯れて。花に戯れ枝にふしまろび。合げにも上なき獅子王のいきほひ。合なびかぬ草木もなき時なれや。合萬歳千秋と舞おさめ〜。獅子の座にこそなをりけれ。

○市松石橋

「花飛び蝶驚けども人しらす。我も迷ふや様々に。四季折々の戲は。蝶よ小てふよせめてしはしは手にとまれ。姿やさしき花の蔭。よしや世の中。」「しかるに平家よをとりにて廿餘年は一むかし。かたるもきくも袖たもと。涙々の春さめや。いにしへにかはりすがたみやぎの。萩やすゝきの露しぐれ。野べにかはすの聲さへきげば。有しむかしがおもはるゝ。朝がほのあさな〜にさきそめて。さかり久しき花にぞ有ける。かきね人目のべばうらみはせまじ。ためにしづみし戀のふち。しばらくまたせ給へや。富士のすそなのちん屋〜に。いへのぢやうもんだ一萬大吉日とゆふ日のくもにきこゆべき。もくせんのみきどくあらたなり合。」「しばらくまたせ給へや。ゑうがうの

じせつもいま。いくほどによもすぎじ。し〜とらでんのぶがくのみぎん〜。ぼたんの花ぶさむひみちみち。たいきんりきんのしゝがしら。うてやはやせやぼたんほう〜。くわうきんのすい。あらわれて。合花にたはむれ枝に。ふしまろびげにもうへなき獅子王のいきほひ。合なびかぬ草木もなきときなれや。萬歳千秋とまひおさめ〜。合獅子の。座にぞなをりけれ。

○高砂丹前

「高砂の。松ふく風もふきくれて。尾上の鐘もひやくなり。」「なみはかすみのいそがくれ。音こそしほのみちひなれ。」「たれをかもしる人にせん高砂の。」「松もむかしのともならで。」「すぎこし代々はしらゆきの。つもりつもりてつゆの玉。一ふりさつとしぐれしめやる。合しやんとさせ。つまどほと〜た〜くはたれじやと。とはでやみなんやみならしのべ。じつかうそかのうきよにまことほうれし。戀にたはぶれ情とくどく男山。」「おち葉かく木の葉のふねやこの葉ぎぬ。青葉はちりてこがらしの身にまとはるゝ戀衣。ちらとみそめし縁のはし。」「いわふならかたらならひろいせかいに

またとあるまいお若衆さんを「ほめてくだいてむすぶちわ文。ちよつとたんざくしきしにかいて。おくるたまづさ神かけて「戀と思ひと情のいろと」かけて見たればおもひはしづむ戀はうく「たもとひきやまた。をばなもなびく。たがいの心うちとけて「くものはだへに添寐して。わすれがたなきいもせの中。はづかしや」扱も見事にふりよいおともさきのけ。さきのけともさきおぼへばあり介しつかとふりこめさ「そつちもこつちもそこらはのみこみてん／＼のやつこ。人の見るめもしやおかし。たれも戀ぐさ花ぞかし。うたふ小歌はさま／＼に「よいにやさかづきもさそよにいふたがのんやい。くせつしらけてなかのなかの「中のよいのでみだれがみ。いちぎのきみたちその名をあげまきみちしはおほよど「此君たちのあいてそこのけなんでも「かんでもひやうしにかゝつておともさき」だてらしや「戀はさま／＼有が中にもなるか「ならぬかいふてやらんせしゆびのまつげに戀はくせ物／＼。あふてねた夜は「うれしかるもの。合「かわゆかるそれもあくしよはにくてらし。つらにくや合「鳥もなきそよかねもなりそよ。夜明の太鼓合

「一番太鼓三ばさう／＼入くる／＼ひとの山。合はるはなを／＼いさむかちどき。
○水仙丹前(大外題、門出京人形)
丹前「水仙の花のすがたや若衆ぶり。女子なりけりむろの梅合むろの梅。あらおもしろのけしきかな。山も色めく花紅葉。ちら／＼袖に。袖にちら／＼散る紅葉。情もあらばちよと一筆合かき紅葉／＼／＼べく候し。若しやおこ／＼ろ。お心。こ／＼ろかはらば。わしやうす紅葉。げに戀はくせもの。おとこ出立のいたづらふうに。しやん／＼。しやんとこぎりめにおび引しめて。とんとんと乗太郎「せりふ「どつこいと／＼とせりふ「どつこいと／＼と。との様。との様／＼／＼としよながいかたなに。ながわきざしをまあ。十文じにほんじやりと。さしてしこなし里がよひアしほらしや合君にあひたくば合まい日そうしてかよはんせ。さりとは。エ、どうじやいな。わする／＼ひまも。ないわいな。合戀はさま／＼あるがなか中にも。わけて戀ちはあふ戀。まつ戀。忍ぶ戀。我戀はかならずこよいはがつてんか。がつてん／＼。そなたもがつてん。われらもがつてんあいづの手くだのみこんだ。ゑい／＼ゑ

いやつとも手をうち合いさみいさんで。くるは大よせ合

「リチドリ」ふれ／＼ふりこめさ合ふりこめさ。おさきをそろへてこれはとき。ありやんりや。こりや、んりや、合いさんでさ合す／＼んでさ合行列そろへてぼつたてろ。行も。やれ扱。通ふもしのぶのみだれ。合風がふくやら戀風が合つれて合つれてさつさ。おちよ物さつさ。我里のみなとながめん合ゑいやらさらさゑいやらさらさと／＼んとんと此身を。なげかけゆりかけ。しと／＼んとん。しと／＼んしだれ柳の。ほつそりすはり。くろじゆすのおび合おびきり／＼としやんと。しやんと結びしめたよやれさてなふ。花は九へ道行「あれごらんせよ都ちへ。けふ思ひ立旅衣。花のあづまを立出て。日も行さきのそらとをく。すそはちらほら。ちらほら裾は。もみうら小袖ぞべり／＼と。だてらしやハアゆかしさよ磯に合鳴ちどり合明のわかれのつらさをつけてちり。ちり／＼や。ちりちりちりとぶは合ちりとぶは。つがいはなれぬ川千鳥。ハアしほらしや
笠の段「見たせば。月のかも川はながれも冷きよしお

もしろやしんさらしなの。月は合ひとしほ合月のさる澤の月よの。さがの月よなを／＼合ひろ澤の月花山の月石山の月おは合すての月こよひこやの月は合松島の月すまや明石の月の名所や。よせくるなみの合みや島の月合さらしなの月合けしきはつきじ合ふわの月きて三井寺の月よのよのあづまに名高き武蔵野の月合よもにてらすや月の笠。きて見よかしの紅葉笠
程々「月のもん日に。月待遊ぶ下戸も上戸も三つ盃で重ね／＼し八重九重「老せぬや／＼薬の名をも菊の水。盃もうかみ出て友にあふぞ。うれしき。又君にあふぞうれしき「戀と聞／＼猶きくにつけても。たのしみのウツイ「ことはりや白菊のきせ綿をあた／＼め酒をいざやす／＼めんウツ「あしの葉のふへを吹ウツ「なみのつみどうど打ウツ「よもつきじ／＼よろづ代までの竹の葉の酒。くめ共つきすのめどもかはらぬ秋のよの盃ウツ「かげもかたぶく入口にかれたつあし元はよろ／＼とよはりふしたる枕の夢の。さむると思へばいづみは。其ま／＼つきせぬやどこそめでたけれ歌「つきせぬやどこそめでたけれ。

○まくら丹前

「花のあづまへ。歸り咲。はなの顔みせ早咲の。梅の顔ばせしんぞよい子のく顔ばせ。花の盛りをにしきにかざる色の姿の後おび。合しやんと小袂を取り取りに。氣ちがいよほうさいよと。わらをとまよ。大事のくのごへ。縫てふ袖の長ばをり。出たちばへよき大小も。さすがみやこの風俗は合なびかぬ戀はあだしのの。露の情もあるならば。うれしかろうしれかる。合わしに計りはおもはせて。思はぬ君のにくらしい。にくいほどなを思ひのますかみ。くもりがちなる時雨時合「ふり出せく。やつこのくげんくわん前。しゆく入下馬先がてんじやく振こめくよんやさ。花も吉野。かわ千鳥。心いそく磯衛。すそは村衛を金しでぬはせ。伊達なうら衛。戀と情を衛がけに。かけてめぐり。おふく。合しゆびのなる夜は淡島衛「鳥はものかは。別れあさ衛。合戀は様々逢ふ戀待戀忍ぶ戀。てもそふじやかへ。合さまを待夜はひとりうらみのたみさん。合すぎし月見のいざよひに。おまへとわたしが。くせつした事おもひ出す。中をむすびしさくことも。そのにひ枕を思

ひだす。思ひだす。「ゑんの有のがまことなり。合大入。あさはとうからく入くる大木戸鼠木戸おし合く。合花にゆく男女の花をかざりてさじきまで。やぐら太鼓のおとによせくる。

○娘丹前

「大手御門りつばにきれいにそうじの衆合をつこで水うてさつくさついのやつこのみ事なくかはよ花合しやんとさいたる合水仙の合花の姿のいとしゆてならぬ合戀ならござれ合かわいかしめよ三重の帯。きりくく。やつきりくくきりとしめたかるたむすびの伊達らしや合それくくくとののおいでじやおともまわりをそろへてさ。二行にならんでふれくふりこめさ「おさきさきくありやんりや。してんやつこのつりひげ合もみひげきじやうにふれさありやんりや合お江戸一番かくれないくたうせいやつこ合ありやんりや。よいよいくくかはみせ「鶴の羽をのす大鳥げのふりての衆吉五郎「ぎやうきなくつぎがつてんかはなの合花の道中のばりくだりにめにつく色の合あかまへだれで合しやならくくぬめらんすしゆすの帯。かわゆら

しいじやないかいな合ほんに命をてんとせいもんなげざや合しやれためもとでひとひねり合いしづきつかんでふれとんやそれくくよいやさ。花のかほみせいさぎよや「たまだれのうちぞゆかしきくものうへ合そらく月にくめぐりあふつみ歌「あるが中にもうきことの合なかをなすやナチス長ぎせる合けぶりはそらに立のぼる合戀の山坂何のそのく百夜もかよへ男山ミダレ「みきときく合なもありがたきあけの玉がきあけておかほも。おもしろじろと。ひろいうきよにせまい氣な小娘合ふりく袖のひらしやらと。ひかばなびかんめもとでしれる。情ざかりのしほらしや「花のかほばせ合いとしらしさのふうぞくは合あしたの花くれの月。露にもうつるやさしの合戀のふか草しよわけもさんざ。いきちもよしや長羽織またとあるまい娘丹前。きやしやふうりうのつかみざし。花にあらしのけしからぬかさの柄たゆむ。サアよこふりひとふりふつてみちのせきとめた。かほりのゆかしさもさすがそれぞと見もわかぬ。しよしんに袖のすりちがふ。ゑんで候ものあしんき。何のわしらに色ではあるぞ。いと心のわくせきと。又

のゑにしのかたしくも。そるにくものさだめなや「なんぞくこりやなんぞ合花の酒合ひつかけ三ばいつけのみ合いやとおしやろとナアよいおさへの手もとゑく何じやいな。さいて着はなけれども二つ枕のそのにいまくら。およりたかおよりませさんよ。このゑこのへくさりくくとはやばらしや「ヲ、それくくお江戸町くつうらくまで御ひいきかはらす入くるく。かほみせ狂言ゑいとうさつさく千秋萬歳合とこよの橋合たからの市村いづもはんじやう。

○法樂の舞(本外題、初咲法樂舞)

ツマミタ「大和歌やわらぐハルふうぞくいつしかに。ゑほしかり衣きそ初合マヒガカリかざす袂の舞の曲カン「錦の袖や。チンかはるらん合花のカンかんばせ。ハルしほらしく合出立合はしがかりのらんかんを合しとくあゆむ柳ごし。げにせんだんは二葉より。すぐなるみよぞ。久しけれ合あおもしろのはる景色。ながめはつきぬ君が代の合いく千代かけて色はギンガハリ替らし松の葉の。すへも久しき。ためしかな。ためしにいまは有あけの合ゆめばかりなる手枕に。君と。

われとが。うき名やたゝんあゝしんきさりと合「今宵忍ぶと。やくそくあればふけて。合ハル妻戸のおとづれは合たそやたれぞとせかれても合ほんにうれしのうき世の中よ。ふたりぬる夜は戀の花。ちらすな嵐。花のあたりをよぎてふけ合「ひらくや梅の。花あふぎ合ちよつと見扇合ちらり合ちらり合ちりかゝる花のふっきはにくらしやハル」はらふ扇のひらり合ひらりくくくるくくく合ハルあふぎぐるまの合しなよく。まはれ。水車カンよどの川瀬の合水もにごらぬ君が代を合いわぬかなづる。ハルチッまひ扇「魚と水とはさんざ中よいはづよ。それなせに合いつもはなれぬ中じやもの。それも誠にそふじや合「花と嵐はさんざ思はぬ中よそれなせに合いつも梢にさはる物。それも誠にそふじや合しほらしや」かさをさすなら合かすが山合是も神のちかひとて。合いとしのごと合あいやいがさのしつぱりと合雨にぬりよならひよりにひらく詞「それへく」げにもそふよの。やよげにもそふよの合げにチッまこと「いわにあそぶや萬代の合ハル龜はみなかみきよむなるタイコヤ「鶴のはがさね千秋の鶴のはがさね。千秋のゑだを

ならさぬ御代なれや合ハル萬歳らくとぞまひおさむ。

○兩洲隅田川 名所づくし

「扱もするがの。名所をいは合三國一の。富士のみね合わかにつらねしくものうへ合大宮人も合しるぞかし「いづれ名所はさまん」に。あるが中にもあづまのあそび合三ごく一のさつちやぶね合ななる、水は隅田川合うち出みればまつち山。合むかふにみめぐりしらひげは。じゆめう目出たき合みやしろや合それにもおなじ。みほのめうじん羽衣の松合武藏に久しきたのやくしは合みやいの松。合するがにあべ川武藏にふか川合きよみが關。合霞がせきはゑど見坂合ところかはれば川の名も。かわる川々。おもしろや「みもすそ川やせんぼんのまつ合かたそぎのみや川や合ながれもきよきやせ川合みねのゆきげのふじ川や合水せきとめよすくいとろもの。櫻川心のちりの合あきた川戀のおもにのうき名たつ合「それも色ならまゝのがわ。よし野は花をながすらん。こよひたつなら。あすか川に。あふかはめぐれやめぐれ。水車。合よどの川瀬の水すみて。そこにもみゆる石川や。はまのまさごはつくととも。つきせぬわか

の。道ひろし。「いふたくよふいふた。それも。そふじやへ。合ひやうしにかゝつてまいろかの。とりは合くじやく。ほうわうたか。こたか合君とわれとは。合たがいちんくちがいの。ひよくおし鳥。おもふが中にごら山がら。よぶこ鳥。空に一瞥。すがたかくして。ほととぎす。あちり。こちり。すじりもちりてちらく柳に。つばくらの風合かせ吹ばいかにせん。花にやどる鶯「ゆききて。花を今宵のあるじとは。いとさくら。花のもと。合花鳥風月はよい中どうし。それへくそれなせに。合花の梢に。よるよ

どうし。それへくそれなせに。合花の梢に。よるよるやどる。ねぐらうれしき。花の色合「いとし櫻の。花のもと。合くわてう風月はよい中どうし。それへくそれなせに。合花のこすへによるくやどる。ねぐらうれしき。花の色かほりゆかしき。花のゑん合「戀はくせものまよひのふちよ。とんとはまらば合やうきひ櫻合りんきしや合たき櫻。ひ櫻合あさぎ櫻こいは合いやよ。合こくもすみぞめ。あだな草。ほんにへ「まよひのふちよ。合とんとはまらば合「ちもとの櫻。合りんきしや。てまりしほがま合うすい櫻こいは合いやよ。合八重九重ぞ吉野草ほんにへ。しほらしや

「うたふつ。まふつ君が代を。合あをぐもおろかさつさつの。五じつに一たび風吹て合雨はしうじつたみゆたかく。おさまる御代の鎌倉山。合萬歳樂とぞかなでける。

○妹背の柱建

「やんれかつかれ。かゝれ引づな。たのむかけごへ。小びやうしそろへて。川なみきやりの水あげ。けふ吉日のはつしもに。うきくにぎく嬉しめでたの。かほみせ。つらりと。いわひおさめた「そもばんじやうの出立は。すみかねとつてりつばふう。一きはすぐれて。あいきやう有けるあらしこかな。すあうははをりかけゑばし。ゑぼしひつかけしやんとめされためされた「扱とつりやうの大やうに。しかし戀にはぬれころ衣。おれとそなたは。手じやくあいじやく。おさゑた手もと。おさへた手元。ちやうどのみよきかんな。中を引つきり切りくくくわらひ上戸の口すさみ。むかひのや小まん女郎わいの。かねをつけたよサアいよへひよく枕にこのくくくくよこのしげれ松山ざんざの。いとまかしこきみことのり。ぶつかくさいしよの柱建。てうなはじめのいさぎ

よく歌にやはらぐ大内の。宮も葦屋も戀の歌。はふ
にはげきやうかいるまた。水をかたどるこうりやう
の工が家の口傳なり龜藏 兼太郎せりふ。そも佛閣の礎に
は四天の柱を名づけたりウツヒ「びしやもんぢこく。
ぞうちやう。くわうもく。しゆみの四州をかたどつた
り。龜兼「中央の柱をばほんぶつほんくわをどつく
わとすゑ 龜「右に金色 兼「左に赤色 二人二本の柱を
ふとく立て福壽圓満大黒柱 兼「ゑんめい小ぶくろこ
れものにかまいて 龜「うち出の小槌を振上げて二人天
長地久とうちおさめウツヒ「天長地久と打おさめく
歌「誰がまことより神樂月。豊のはらひの神の子御子
町や／＼のかまどの清め。高まの原の神かぐら歌「や
んもしろや。くわうじんの。神のおまへに松うへて。
松諸共に氏子繁昌「あんもしろやくわうじんの。お
かまの前でみそすれば。味噌もろ共に旦那繁昌へ。歌
「あんもしろやこのしろや。こはだもよいものじやあ
かいはしにしほがつほもうまいものじや。ふぐじる
はあつたまつてうまいものじや。打てば響く神樂の
太鼓。かつこほろくはやしだな歌「みよのさかり
はナ八つむねづくり。ちうもん樓閣男女かいちうま

ん袖をつらねて。つらねて袖を。にぎはふ都。戀は世
界にたが種蒔きそめて。を、それれくく。そ
れがちやうか。まちやうか。二人比翼の初枕。妹背わ
りなき。女夫あひ「柱の数は三千三百三十本。眞柱。小
柱。見つけ柱。敷居。鴨居も水をたへる伽藍くみ立
て。百まんざいのつちのおと。合しつていてうく長
久と。御代のさかへぞいさぎよき。

○亂菊枕慈童

(歌集に出つ)

書寫

竹醉堂 鼎我

彫工

小川氏 勘助

明和三歳丙戌夏五月十有五日

日本橋南三丁目

書肆

吉文字屋治郎兵衛

弘所

本白銀町通三丁目

書肆

和泉屋庄次郎

新増補

○春調娘七種 (七種)

次第話「神と君との道すぐに。神と君との道すぐに治
まる國ぞ久しき歌上ケ「若菜つむとて袖ひきつれて。
思ふ友どち合よい／＼合キャン中のよいのをわきか
ら見れば。どれが姉やら妹やら。よく似たなアよく
似たさつてもよく似たしやなくゆけば合キャンふり
もよしカン今くるよねに見しよづもの／＼合袖ひく
な若き人あらだいたんな人じやへ。ツマミ歌ギン「は
るは梢も一よふにハル梅が花さくとのづくりめざす
かたきは皆々せりふ「かたきとは歌カン「い、やハルかた
へに鶯のホ、ツマミ合方「ほうほけきやう／＼とさ
へづりてもゑばみもしらぬくもけら／＼そらうそ
ふいて辨藏せりふ「飛びか、つて高麗藏せりふ「はて歌中ギ
ン「氣をしづめて打はやし初若水のスエフン若菜の御
祝儀合ナドリ「戀のかなぶみいつかきならひせいもん
命も／＼／＼と留袖。とふにやおちいでか
たるにおちる合さまはいばらかわしやゆいかねて合

だいていたさよいつともせいもん命も／＼／＼と
／＼と留袖。とふにやおちいでかたるにおちる合
さまはいばらかわしやゆひかねてだいていたさよ
いつとも合むつまじと君はしらすやみづがきの久
しき代々のためしには。ひくやよるのつみのひや
うしをそへて七くさなな合カンごぎやうたびら
こほとけのざ上カンすいなハルすいしるせりなづな
合七しゆそへてゑほうへきつとなをつて合しつた
ん／＼どんがらりどんがらりどん／＼がら／＼どん
がらハルから／＼からハルどんがら合とうどの鳥と
日本の鳥とわたらぬさきにセクサ合カン怨敵たいさん
國土あんせん千秋らく／＼萬歳々々合中ギン今をさ
かりの心の花もひらくる／＼うんな天天長地久萬里
がほかも打おさめたるけふの七くさ。

○春雨

「花にハルなく鶯の。なれし梢に春かけて。君が定紋か
せかほる合カンあはせ鏡におもふ事中ギンつげのおぐ
しも去年のま、合三ノギンすきかへしたるたま柳二ノ
ギンみだれてうきをゆひながし三ノギンびんのすけ
は苦にならねど合二ノ下ルギン心のうちのツク水ぐし

を合カンいつかとき櫛いつはりなくば。うそから出
たがまことじやへ通ふ神さんたのみあんすにへ。ユ
モツするをちぎりの三ツノハルつもるトメはるさめ。

○玉章

「かくとき。硯ひきよせ一筆に。しととめて身
のうへを。合女ごころのやるかたもいわけでく
ちる。合紅葉ぬしの心のうらおもて合たッひとす
に縁のいと。きれてもきれぬおだまきのくりかへし
ぬるおんないの。なかふけいにある田鶴の雲ゐに
かゑるかすくを思ひあかしてつくくとかねにあ
づけてあまよ。いとし男をむすぶかみ垣。

○馴染相の山

相ノ山「しよぎやうむせうの鐘の聲じやくめつ。いら
くとひいけどもきゝておどろく人もなし合相ノ山野
邊よりあなた。友とてはけちみやくひとつにじゆ
す一れん歌カ、リ「うきといふ合二ノギン言葉は更に我
身にて。ついなれそめの言の葉に合三ノギン今はお
もひの淵となる合二世も三世もかわらぬよふに神に
ちかひをせいの言葉。此よはおろかさきのよもち
がはぬおもひは日に千たびわするゝひまはないわい

な。合しよ夜のかねをつく時は。しよぎやうむじや
うとひくくなり。ご夜の鐘をきくときは。せしやう
ハルめつぼうとひくくなり。是がめいどのともとな
る。

○松吹袖汐路

「波にもまる、汐ぐるま合めぐる月日のいくうらう
らの。かづくや海士のしほごろも。むすぶいもせの
かいとしくもおなみがさせば合女波がひくとのさ
しひく波にぬれく姿。合しほかせに。合さまがおい
ろがくろふになりて。かもめなくさへわしや氣にか
かる。のふこれなんとせうあだな戀路の縁結び。ウ
イしほくみくるまわづかなる浮世にめぐるはかなさ
よ歌「實や浮世のわざながら。ことにつたなき海士
小船わたりかねたる夢のよに、すむとやいわんうた
かたの。しほくみ車よるべなき。身は海士人のそで
ともにおもひをほさぬ心かな。合おもしろやく合
なれても瀬戸の夕まぐれ合沖にちらめくいざり火の
合かけかすかなる月の顔。いざく汐をくもふよ。月
はひとつ影は二つみつしほの。よるのくるまに月を
のせてうしとおもはぬしほちかや合「よいくに

ぬぎて我ぬるおりごろも。かけてぞたのむおなじよ
に。おなじよにナドリ「あさのよるからくからきぬ
おりていとしとのねまきにさしよと。おもやこ
そやれしんくもするに。ほかにつまひくそれくそ
れほどに。かわいゝものかいなくわすられぬ松に
吹くるかせもきやうじて。瀬戸の高なみはげしきよ
すがらふくやうしろの山おろしりの聲々しのゝめ
さそふ瀬戸のうらく。松風ばかりやのこるらん。

○姿の鏡關寺小町 (關寺)

ツミ歌「白浪やたよふ水にクルかみ山。ゆめかう
つゝかさだめなき。おもひがけなきつくもがみ我身
うるさし。人目はづかし。合係のかわらで年のつも
れかし。たとへいのちのかざりあるとも。ウタヒガカリ
たれはとめねど關寺の。とわれん身にし木がらしの
はては落葉の夕日かげ。洛中洛外町々をた何とな
く立出て。ツミはなからたべよ人々よ。ウタイ地もの
たべの旅人ちつとたべの旅人とあなたへささりこな
たへささりさなりくさなりくさつと。コトバノウ
旅人なんとたべぬかホ、、、そんなら色の踊う
た。合三下り待身なりやこそ豊さん忍ぶその夜のわざ

くれかじつそうでござんすかへ。たそやこの夜中に
さいたる門をたたくともよもあけじ。宵のやくそく
なければ。てくだも戀のならわせなり。ウタイ地こゝ
ろづきて聲かわり。けしからず見ゆればすごくと
關寺の庭にかゑるありさま。トメハルフシやまだのあ
せのかしよの。

○春の曙

三下り「春さめのふるかなみだか袖たもと合ぬれしし
づくのわかれにも。たほだしとはわがこゝろ。さ
てもうきよにぎりといふものがなければなんのその
合いまのうきめはせまいぞと女ごころのくどくと
あとやさきなる水ぐきの。硯のうみのうすきゑん合
「ほんにおもへば神さんもたのみにならぬ事はいな
ア合ながい此世にみじかうすめばわが身ひとつにま
だき曙。

○我こゝろ

三下り「あふ坂は三ノギン鳥のノルそらねかいつわりの
合誠とうそとしんじつは。ハルどれがどれやらこちや
わけにくひ。ナスひとのそしりはなんのく。そのそ
のそのの蝶合あふてわかれて。ギンガハリ又あいなき

て。ハズムそれよこすへで口説のもつれ合「りん氣す
ずめのねやの戸を。チシめうとのあしでこぼれ梅合む
りはみすくみすがみの合神をちかひにほとけをな
ぞにこゝろの關を。トメあけの鐘。

○琴の段臙月

琴、カリ「すいてうこうけいにまくらならべしとこの
うち合上ゲツクなれしふすまのあけくれは合もりの
こがらすなくからにかわい合かはいのむつこともつ
いニノギンきぬぐの三ノギンわかれちもしよてはう
らみし鳥の音も合三ノギンするのことりやつま鳥の。
たゝゑになきてかいどりの一ノギンゑにそだつのをハ
ルきかまほし合方ニノギンいへばゑにカンいはきりと
うし流ゆく合どうでもしげんさんすいじやものたれ
がやしない。トメうけざらめや。

○琴の音

「琴の音も合いとゝものうき身のうへは合須磨の鹽
屋のうすけぶり。たゞひとすじに女氣の。おもふ男と
そひもやくどく合むすぶの神さんすいじやもの合し
のぶやくそく妻戸のあいづ合たそやたそたれぞとい
わば松風の。おとのみのこるねやのしのゝめ。

○袖の露

(萩江節正本集に出づ)

○戀の出去路

「花やかに合たへずにぎあふ神がきや合あゆむ誓ひ
はみな忍ぶ戀をれへく。それくくいとしとの
ごと。ナア。そふて出雲の御やしろに合縁のたのみを
かけゑばし合戀のいきちを立ゑばし合たまに逢夜の
よい折鳥帽子合みな一よふにしやんとかたげしふう
ぞくは。いとしらしよいさぎよや合「おもひきやし
じのはしがきかきつめて。千たび百夜のうき戀も。一
夜情にとりあげし。その錦木を仲立とたのみたまし
きあふみやに合むぐらのやどの賤の女も。戀に心を
染木とも。まだ錦木共みちのくに。つもる千東の中垣
や。あけていわぬが花じやぞへ合「ひらきそめにし合
一陽の合めぐみにそだつ合冬の花合こすへくも紅
葉して。にぎおふざしきもふせんの花の顔みせさか
りひさしき合「いついづこたれかはわれが妻ならめ。
さだめなき世にさだめなき身を戀ゆへにやつすが
たのとらなりも。はでにはすはでまちふうに合かわ
れどそれとみやま木の。雪のうちよりゑがほして。こ

しやくらしさよ冬至梅。つんとすねたる下枝もわし
が心を見よふでの。いくよかよひて雪の下。ちいさ
い花のおなご氣も。おもひのつるについそのこゝろ。
しのびてさきし霜の花合「見ぬおもかげにあこがれ
て合はねうちかはす小夜衛。見てもうとましまア、ど
ふか合こふいふ内もわすられぬ。あふてあかさぬ心
根をいふてはなさん合おもひ人にこれ申何ぞいの合
きし噂にいやましの合此御すがたがわすらりよか
合見そめあいそめいつかさて合ほんのめうとと合い
わるゝならばヲ、うれしよそへあいきやうさんすな
へとぐちな心かいふて見たふてまたしかられたふ
て。いくせ思ひのそのたのしみもながきゑにしぞ戀
の水合二上「見わたせば空もしぐれし合冬さむみ
沖にむれいるむら千鳥。ゆられて合ゆられて合波に
ゆられて濱合千鳥のちりく合ちりやちりく。ち
りくばつともよびかわす磯千鳥合磯をまくらに
いもとせの合夜すがら冷なくねはさんささめごと
合見かはすく川千鳥合かみみにひとしきこほりも
いつしか合とくれは春の百千鳥三下り合「花紅葉合い
づれいろかはおとらねど合わしが。おもふよふにナア

うき世がならば合もみちの氣が合よいわいな合花の
はすははちりやすしそふじやないかいな合ほんにそ
れもそふじやへ「霜みぞれ合いづれ合しろきはおと
らねど合わしがおもふよふにナアうき世がならば合
みぞれは心が合さはがしく合霜のかよふは人じらし
そふじやないかいな合ほんにそれもそふじやへおも
しろや合「うかれくし神樂月いさんで入こむ供や
つこ合二行にならんでおせ合おせおされてもまれて
ひらくや花の。冬ぼたん合ふかきじぎいのなぶさ
にいろますいます御ひいきもますくこゝに市村の
合いつもにぎあふ。はなの顔見世。

○鐘入解脱衣 (解脱)

ツマキツ「あらうらめしやわれは宵のいなづまの。は
かなくきへし身のうへを。かわいと思ふてくれもせ
で。さがしき人の心やな合「めにはみへねどうばた
まの。關路にまよふ仇し野の。戀しき人の見やばはづ
かし此姿合「聲ばかりこそ松の風こすゑにのこる空
蟬の。もぬけの衣打かづき合「ありしその夜の仇契
り思ひ出すもあぢきなや合三ノギン「ねてもさめても
いなせのないは合とふじやいなく待かひもなき

よひ／＼宵月夜とこやらしよんぼりとかわゆらし合
ナドリ「かきねつたふやあさがほの。花のあたりをよ
きて吹け合横雲のにくいこつちやにへ合しんきしん
きそこを嬉しやふきはらふ。花の姿のおそろしや合
セ」思ひしらすでおくべきかと聲はそのまゝ夕嵐合
かたちのにこるうすぎぬの。おそろしかりける次第
なり。

○絲遊花紋盡

「うけたまわりて取あへず。あふぎおつとりたちあが
り合かまくら山や名も高き。大小名のもんづくし。あ
らましおぼへ候を。かたるをきくも興ありて。げに
おもしろふこそみゑにけり「まづ合くぎぬき松川木
村がう。木村がうと申はそも合三浦の平六よしむら
様の御役なり。わりびし。輪違はなうつぼ。うつけ
とりぼうは。しろもんじ黒もんじ。そつちでせ。
それ／＼／＼やはづ矢車きり／＼しやんと。いてみ
やれ。いたらがいはいわながと合いばくの内のひむ
ろぎは。わけてそれぞとしれがたし。神にちかひをか
けまかくも合かはい男とゑんあふぎ。ほんによそか
ら合三つびきやみつうろこがた。合みつへいじ合「人

○乗掛情の夏木立

(萩江節正本集に出づ)

○結神垣

「神風に園ぞしれにし合梅が香の合うつりにけらし合
我すがたちりにまじわるみやしろの。かけてぞたの
み繪馬をめせ合かはゆるしいじやないかいナア「お
もしろや合いつもめなれしながれさへまた青柳のか
げそへば合水かげだにも春でし合しるべの人に
ほそむけ合ちやにこゝろをつぐ／＼し。よふすみれ
草うき事も。花のさく日はうちわすれ。うかれうかる
る春げしき。いろもうつくし花柱。ひかりまばゆき
玉ぼこの。みちもいろどるさいたづま。ふみもなら

わぬはつざくら。こゝにぞうさを春の野に。しばし
ながめん花のもと合「ゑんなれば合うぐひすさそふ
花の香の合いとしのごにあふさかの。山よりもま
づ霞をむ。合おなご氣のほんにいくるか八重九重の
花まちどをきはつゑにし合わたしがおもふことのは
も。筆にかす／＼かきつくさぬ合まして色あるち
ござくら。どふしてまゝになろぞいな合花に入相わ
かれの八聲。あわをによれる風見ぐさ。いづれじや
まする千枝百枝。よれつもつれしつゝぐさ。はづか
しそふによりそへば「こゝにもじやまがいたどりの
合つみすてられぬ合にぬぐさの合つちけもない／＼
なんのゑんりよも猫の戀。ころり合ころりまん／＼
まろめししんぞつらくや合おらもむかしはいかな
る合ふりそでなりとくどきあふせた。いまでは忍び
かよふもならぬへ。たまにあふ夜の戀ぞしほらしや
「ふたりぬる夜はナア。さんざおてまくら。ひじまく
らながきゑにしをいろかはと合まてば心がせくわい
な。それへ／＼それほどにかはゆいものかいな合あ
だなぐさ。おそざくらながき月日をいろかはと。合ま
てどわらはぬはなじやいな。それへ／＼。それほどに

ひらきしものかいな。しやはんに合「たわむれあき
のふ道もじやらくら合しどけなりふり戀風に。ちり
ちり／＼／＼散かゝる。花のふやきにしつぼと／＼
とてもぬりよならもろともと。合ふかきあふせの浪
枕。ぬれにぞぬれし戀ぞかし。

○髮梳霧の籬

三下り「露の身の。そのあさつゆにぬれそめて合かき
ねにそだつあさがほの合よいはそのまゝむすび髪
とけぬ心もいつしかに。ひとめしのびて一ト重さき。
まだきにうすき契りぞと合しんくのたねの玉くし
げ。すいてすかれてあいなれそめて。とくにとかれぬ
なげしまた」といてほどけぬむねひとつざりとなさ
けのふたすじに。かみもくもる霧の籬ぞ。

○里花淨空梵

前彈「花にくらべて。仇名ぐさまぶの色香にくせつ
つぼみ。手くだの梢風俗の。そのゑだぶりもたわ
めに。なりよやみや三芳野の。花をうへしもいつし
かにけふあたらしくつくり花合誠がうそにならふや
ら。うそがまことなる鐘も。あかつきうらむかねご
とに合アレみさひなつくばの山の横雲。よこ雲のし

たこそわしが親里。さとのつとめもいつかはなれて
心のまゝに。すへのちぎりのふかみどり。

○冬至梅雪の空灶

(荻江節正木集に出づ)

○江戸鹿子男道成寺

ツツミ歌「亂れごころやくるふらん」花の姿の小櫻に。
かほりゆかしき花ざかり。こすゑくをたおらんと
はアラうらめしのひとごころウツタに。くやあらしもよ
きてふけ舎花のあたりをよきてふけ「ふけゆく鐘の
つく／＼とおもひまはせば身のつらさ人目をしのぶ
關の戸のあけていわれぬわがこゝろ合二上り」いにし
へにかはらぬ君がおもかげを。見るたび／＼にかは
ゆきの。おもひはいとゞます鏡。くもらぬこゝろ有明
の。つれなく見へしわかれより。わするゝひまはな
いわいなア。われが戀路ははかまのかみよ。そでも
ない事さアいひかわし。ほんににくひじやないかい
な。人のこひなれをいたもとに花の霜「お江戸一
ばんふつて見事な十文字。やりはお家のそれおてん
とてんとなげさや合「またとあるまいせかい一ぱい
大津やり。いしづきつかんでしつかりと。ゑい／＼

ゑいこのよいやさ。ゑい／＼このよいやさ合「ばん
にやかならずしのぶのみだれふけて合「つま戸をほ
と／＼た／＼は。あいづの手くだはくだやり枕やり。
千代も八千代もかはらぬ／＼くの大鳥毛合「あた
りに目をつけ見廻して。かねのあたりに目を付け見
まはして。鐘のありしをさいわいに引かいつてぞ。入
にけり／＼。

○松風

「あわれいにしへを。思ひ出せば」なつかしや行平の
中納言。三とせはこゝに須磨の浦。都へ上りたまひ
しに。此ほどのかたみとて。御立烏帽子狩衣を。のこ
しおき給ひしに合これを見るたびにいやましのおも
ひ草。葉すへにむすぶ露のまも。わすらればこそあじ
きなや合「かたみこそ今は仇なれこれなくば。わす
るゝひまも有りなんと。よみしもことはりや。なを
おもひこそはふか／＼りし合「みだれがみ。みだれご
ころのくるはする合われがすがたのあさましや。か
みはおどろをいたゞきて合日かげをまちし夕がほ
の。つるにか／＼りし引れ車合「よしやうらみもいとし
さに。つきそいめぐるおもかげの。にくかれとは神

かけて合「おもはぬつゆをはちやる。心のうちこ
そはかなけれ合「さはさりながらいちねんの。しんる
となつて合おもひしらすやおもひしれ合うらめしの
うき世やな。いまさら何とのたまふとも。こなたは
わすれじまつ風／＼合「立わかれ合いなばの山のみ
ねにおふる。まつときしば歸りこん。あらたのもの
の御歌や合「それはいなばのとやま松よ合これはな
つかし君こゝに合すまの浦はの松の行平。立歸こば
われもこかげにいざ立よりて。そなれ松のなつかし
や「松にふきくる風もけふじて。須磨の高波どう／＼
どうと。はげしきやすがらもうしうの。雲にかくれ
て失にけり。

○二人わんきう

「ゆく水に。うつればかはる飛鳥川。流の里にきのふ
まで。はてもつたいつたへ。せいもんほんにせん
せいも。われはくるはをはなしどり。かごはうらめし
心くど／＼わくせきと。戀しき人を松山に。やれす
へかけてかいどりしやんとしやんと／＼もしほらし
く。君が定紋だて羽織。おとこなりけり又女子とも。
かた袖ぬしもながめやる。思ひざしなら。むさしの

てなりと。なんじやおりべのうすさかづきを。なん
しよしよ戀によわみをみせまいと。びんとすねては
せなむけて。くねれる花と出て見れば女心のつよか
らであとより戀のせめくれば。小袖にひたといたさ
付。申しわんきうさんさつてもてつたりお日より様。
ふられず歸るしあはせは。松にはあらぬ太夫が袖。月
のもよりやみがよい。いゝやいや／＼こちややみ
よりもお月がよい。おまへはそふかと寄そへば。
月がよいといひぐさにする心ではらがたつわい
な。もふこれからがくせつの段。しさいらしげに座を
うつて。袖丈。着丈もん坂うるかうむりのなげ頭
巾。かたるもむかし男山つ、井筒。おづつにかけしま
ろがたけ。老にけらしな見ざるまにと。よみてお
くりける程に。其時女もくらべこし。ふりわけがみ
もかた過ぬ。君ならずして誰かあぐべきと。たがい
によみしゆへなれば。つ、井筒のをんなともきこえ
しは。有常が娘のふるき名なるぞ。おちやのくちき
りたざらすめもとに。ゑゝとりつけば。あゝなんぞい
の。手持ぶさたにひやうしそへてわざくれ。あんま
けん。びき／＼。さりととはひき／＼ひねる。じたいそ

れがしは。それがしは大坂もので。お江戸町中見物様の。なじみ情の御ひいきつよく。あんまけんびき朝の六つから日のくるゝまで。さりととはく。かたじけない。あんまみやうりにかなふて嬉し。あんまけんびきく。里の三浦女郎様。ちるこちへ。袖をそつそとひかばおなびきや。かんまへてよい女郎の顔を。おしやるなちへこちへ二人つれだちかたるものさといは。わがいへなれば。やり手禿も。一しよにつれ立いそぐべし。あそび嬉しきなじみへ通ふ。戀にこがれて。ちやくちやとく。ちやとゆかふ。やれかはいがつたりがられて見たり。むりなくせつの遊びの品よく。あなたへいひぬけこなたへいひぬけ。すにもつれて。ちやらくらく。わるじやれの花もかも有るしこなしは。ひとへ二重やみへのおび。ふとんのうちこそ。候し。

○花錦嫩丹前

○御所風俗鞆丹前

(荻江節正本集に出づ)

○冬至梅誰袖丹前

「げにも花は名にしおふげにさくたんの冬至梅。これ

より日かげのどやかに。さいたりくけしきじや合「いもせ千代ふる久かたや。見渡す野への雪げしき。白梅かはやぎの花のおひ風にほふやと。うつり香ゆかした袖。げに此はお君ならで。誰にか見せん長がたな。かたよりすそは千本の。松のうはかせ。しみんと合「君がゑにしをまちがほに。とのご出立のやあ風流せい。くわんくわつだて姿合おらがだんなはやぼじやないものさてせかいはおもはくみゆるくわんくはつすきやればおむくに。やはく。ぼちやばちやでござるすいなとりなりきのくすり。じんきのくすり。おともじやく。お先手をふれ腰を振れ。おかごをばやめてそろふ行列はなやかに合あすのとまりはどこがとまりじや。袖をしきねのひちまくらひちまくら合「君とねる夜はよもあけな鶏もつげなよ鐘つくな戀をしらせてみとござる合「だんな先に立て。やつこのたいこで。たいこがやつこで。心うきたつさいめのかぐら。むすぶちかひのゑんのかけはし。

○袖柳名所塚

セツキヤリガカリ「むざんなるかな梅若は。さがなきひとの手にわたり。合ならはぬたびやみちもせに。お

つたてられてあさましく。かほも手あしもかけそんじ。合なみだながらに母君を。したふみやこのそら遠く。合あしたの露も白川の。たみちのくとばかりにて。合はいのちもたへぐに。たへなばたへね玉ぼこに。合なくくつかれふしまよふ。御ありさまぞいたはしき。

○初日童子 戯 面被 (面被り)

二上「とかく子供たちやいたいけがよいものじや。中ギンはらゝとほろゝほろゝとほらゝ合めたにさむればてうちくあわは。かぶりくしほの目。あたまてんてんよ合こまどりすめの小おどり。その尾にとりつき太郎松よね松だんだらかいつくとつつくひつつくつくさほになつてのぬふてふとりの花にくるくくる。くるくるりと花のふり袖いたつらや合ハ「まつりくちんがらこく。こまでござれ手車にのせてありやこりや合 おきあがりこばし犬張子さるのすもふはあがつたりさがつたりゑいゝゑいゝいかなるわるさざかりもこつちの町へござれのはつてくはり人形金平だんべい坂田櫻にさるが三千ぶらりとさがつて合たわらころびにころりやくやつ

ころりとぬめらしやんすなきやれくさてもものくつゑにまはるはしほらしや三下「子ざるめが合枝にたわむれあそぶ合わしにとらるゝゆめをみた合まもりをさ合かけさいよけのまもりをさ合かけて参るののゝさまへ「彌生花月さいたりや花ざかりつばみ半ざきゑだおりそへてとふるかたげて誰人の子なれば花一本たもれなく子にとらしよいろうつくししほらしのちござくらたが袖引とて散そな花ふッキヤドリ「坊様坊様と名計り坊様合 ころもいやなり女郎衆と二ノギン 寐たし合 三ノギン それでばさまといわれうものか合それさくそふさんせ「かむろく」と名計かむろ合なしむおきやくにちわする目もと合 三ノギン それでかぶろといはれうものか合それさくそふさんせ今の子供は口々に合「かものけいばのひざくりげ合赤がいのくしんくのたづなにあをりをうつてかけとんくのりかけとん。御馬が三びきのりてがひとり。はいどふくかけつかへしつ合いさむ足もと。大手下馬さきさくら馬場に合「波うちぎはにくざんぶとよせてはゑんくわいく合トメのんほのいよいよさむはるごま。

○後日稚子勇槍踊

「おさきかたづけふれ〜ふりこめさ合手さきをそ
ろへてあれはとさ合ありやんりや。どつこいよいや
さ「いさぎよや合のこるさくらの花ふきかきねに
つもる卵の花も合雪とおもふてまつかせろ。氣じや
うにふみしめしゆく入じや合こよひ一夜のおじやれ
さへほんにねた夜のまくらやりしと〜んとん鳥毛や
大とり毛。しとんとん鳥毛や大鳥毛合こひにやか
たそな石づきも合じつとしむれば心のまゝに合しん
ぞ我身をやりじるしとけてあふ夜の手くだやり合ゆ
りにゆりかけゆりの花ひらく人目の關の戸もこさぬ
戀路のかにほふじつにかははひはどふしたものと
合いふてくらしつとなく戀路になれしわらんじ
に合しめてくはれてちへつけられて。今ぞまことの
かわゆいといふたこと葉にあいのしゆくチドリ「おん
らアがざいしよはなおく山のて、うちのでんぐり
んぐりくりの木の合木の根をまくらにひとり寐合こ
な小女郎は戀する山家のしなもので合おびといてご
ざれだいてころび寐「あさはとうから本ちん下馬さ
き合ぎやうぎくすさすいさんですゝんでありやこり

やさよい〜おしてくる〜きせんのためとは
な橋のやぐらだいこにうかれてふれさ〜ふれ〜
ふれ哈花のお江戸の日の出いちりう。

○末の春

二上「この夕べ。なか〜つらきわかれちの合月ま
ちてとはなにゆへに合とめてぞいまのものおもひじ
つと合まことをうちこしてしんていつくにはらから
と合こ〜ろつぎほのみさこぐさちるともとけぬ花む
すび合とくくしのはにつ〜みかねた〜よ〜とい
わつ〜じ合なみだはそでに水ぐしのそのときぐしの
かなしさはわれのみおしむ末の春かも。

新版 常磐友 増補

○御代松子日初戀 (小松曳)

上「萬づ代とハル三笠の山ぞよほうなるあめが下こそ
たのしかる事もあいおひよい子松まつま程なく鶴が
岡へくる〜〜くるまのつなをへさあゑんのつな
引手あまたのとのごぶりみそめてそめてきぬ〜
の。合色さく野べの戀ぐさや合しかたでしらせ目で
しらせてもがてんなされぬあのおかほ合ハルいかに
御きりやうなればとてわしにばかりは合おもわせて
合おもはぬきみがなさけなやまだ〜きいて下さん
せ合ハル袖はなみだかチトシはるさめか「女子のまこ
とと二ノチン玉子の四かくはなつけんけれどもゑんの
あるのがハルまことなれ髪きり合ゆびきりきせうせ
いしはまだなことうれしがらせてわらをとほよふし
るとおもやいの合二ノギンとはいひながら初戀の中
をむすぶの三ノギン神さんしだいたのみやんすおがみ
やんすハルかはゆがらんせこちの人合チドリ「戀とい
ふ字を合おしへさんした人はさぞすいであらふさぞ

すいならん合二ノギン朝な夕なにカンこ〜ろでおがん
でゐるわいなおうれしかろふ二ノギンうへ〜さまも
われ〜もおくる玉づさ三ノ上様まいるチラン「よわ
ひをさづくる君の行すゑまもりてわが神たくの合つ
げをしらする松風も梅もハル久しき春こそ目でたけ
れ合トメひさしき春こそ目出たけれ。

○春色鳥追姿

「君が代は〜合四海波風しづかにてしたゆづりは
にあら玉の合年は恵方のかたよりも合にこ〜とわ
らふかどへは福神や徳神やめでたい〜ゑびす三郎
合大こく上々吉日とたわらつみしはまことに御くら
のひらきぞめ合たからづくしをさもさ〜につけ合な
には十日はゑびす市花の上野のみつのおけ大こくゆ
ふ〜〜と二ふく神のありがたや合こがね花
さく室の山に合梅は白がねつぼみはしやきん合花に
まさりの〜合てんと庭のけいほんにささかゆるや
どとかや福人もうかれ〜て我々までもうかれこと
ぶきいわふ末廣や鶴龜松竹梅が枝に合「御所やま
まちさまや色里へ千兩や萬兩の鳥おいがまいりて合
お望しだいかず〜のうたもひやうしもしほらしや

合「ひとつひよ鳥合二つふくろふ合三つみづく四つよたかはかつしかへんよりたそがれにひとめをしのぶほうかむり柳のこしをなでさすりしはまたもほかにあらまじとしやんなら。しやんなら〜〜合ねらひよつて合こすへ〜の色とり鳥さいてくりよ合鳥さいてくりよさいてくりやうとおもふたについながしたまよしばしは花のかげ合「ナドリ」色めく三味の手ごととき合いとしかわいのばちあたりさいなく〜さくら合三はきれても二世の縁合一ごだいいじのとのごじやへさいなく〜さくらだいてねじめをいるのかみごま「千秋らくにはたみをなで萬歳らくにはいのちをのぶ合相生のまつかせさつ〜の聲ぞたのしむあきないはんじやうまもらせ給ふ神ののり初よしや寶船。

○吾妻振花の關札

「花やかに〜花のあづまのふりての衆梅のさきわけ霞の枝にとまるうぐひす春かけて江戸むらさきの色もこゝろもふかい中ではないかいな「振手に上中下三段「大手馬場先ふりわくる御駕籠にとつつき鶴の羽おとにひやうしとりふむ七くさの唐土の鳥も日

本のとりもわたらぬさきまがきのふみの返すがきおほろ月夜も戀のしなにくてらしほどかわゆさの君をまつ身をおもひやらんせあすはくわん東さへまかるべいにやなやれさてなぬしさわかれちやいせぢねあんちうちくだぶぬきやろさいけのどんがめならんぐるべいとはやされてづぼんばへ〜合いけすか女郎衆のたびだちにぬしさわかれてはいせぢねあんちうちくだぶぬきやろさいけのどんがめならんぐるべいとはやされてづぼんばへ〜「春のこまにはおぼろにみゆる月毛の駒よさまがなさけのたづなゆるさじ松もむかしにつなぎとめたよ合つなぎとめたよ戀の關札。

○髮梳かほよ鳥

與・鳳亭述
富士田楓江章指

本テウシ「くしげきやうだいイロモツとりそろへ合三ノ上チシことと葉ぐさのつゆにはあらで二ノギンなみだのつゆにぬれがみの合ハルギン三ノ下そのおもかげをうつしてし顔とかほとのかみ山合三ノギンひとの志賀からさき見へてたがくしのはの半太ムスビよるのあめふりみふらすみ定めなき合方半冷ガカリ「身のゆく末はかひなく名をやたとふ紙。三ノギンたとへてい

わばみやまぎとみやこの花のかほよどり。カンハルギン粹もぶすいもわけしらゆふの神々さまを。なかだちに。せいもんくつされのちの世かけていのりりし。

○梅が香

「袖ひちてむすびし水のこほれるを春の風にやとけてこゝろのおもひぐさあふたその夜のうれしさは千たびにおもひわかれてはしつこゝな花ちりてなまなかなれて苦のせかいそれもさまゆへわしやくにならぬ合方「花のなさけのちぎりとかけどまことなしとは世の人のつらにくやむめのかほりもやみがよいただひとすじにおだまきのくりかへしてはまきかへすこゝろのうちをおもひやらんせかはい〜となくやしのみめ。

○廓盃

「さかづきにうつすこゝろもおぼろ月三ノギンむすぶちかひは神かけて合むりな酒にもよいとのごぶりせくなすいしや浮世はくるまめぐる月日のツッ人づてにいふよしもなりふうは合方二ノギン「いやなきやくにもあはねばならぬいつそやばならしやうこともツ

クなにわのクルあしのしなさため三ノギンたゞまゝならぬはなに入相。

○色鹿子紅葉の狩衣

「名に高尾とがの尾たつ田川流れ〜て紅葉のいろもそのほと〜に合べにをさすがうつくしき娘ふうぞくいたづらがみの合むすび髪かほはもみぢあゝはづかしさ合戀しきのごとつし新枕かはすその夜はさぞうれしかり合女心のぐと〜とあどけないのも戀にはちゑのますか〜み合くもりがちな時雨月合出雲にまします神々をたのむおろふしよい男山合「おらがだんなを〜ほむるじやないが合れんがはいかい歌もよみ候おちやなども合いけばな琴の音合こきうさみせんうちはやし合舞はおいへのものゝふも戀にこがるゝ戀人さまをとりもつわれらにおれいとほとりつたもとふりきれば戀はくせ物〜合やつこの〜このこの文を御らんせよ合「手枕の合ゆめをさますもよしやあしや笠君のこひ茶といたゞきながらゑんのうすちやはこちや〜いやよ二世も三世もかはらじと合わたしやおもへどこのこのこゝろは白雪のつもる恨と世かいのむりもきぶねへたまり

し落葉とき合梅もへ櫻も春まちぬらん合花よめ花婿
 しやんとそろひしるもんつき色をなをしてきんびや
 うの内ぞゆかしき風情なり合「朝な夕なに合見るか
 がみやま合いざ立よりて戀ばなし合わしはすむせん
 おまへはぼたんか染にかげとひなたのふたつもん
 きたはいなくさりとはいすへのやくそくよし野
 ぐさ合いかいおせわもちからぐさ「冬のけしきにや
 まくを見わたせば合にしきにそまるなかにいつも
 かわらぬ松のいろ合いざやおち葉をかこうよ／＼里
 の子どもがつれだちてくさかるふへふくおもしろや
 合じやうとうばとのたのしみもいづれひさしきめい
 しよかな合にぎわふかどはすみよしのまついさみし
 ときは五葉の松君とわれとは相生の松小まつもふけ
 て合しゆびの松ゑだにも杖つく志賀唐崎のまつをみ
 に北野の七本まつもさかへつゝいまをさかりの若松
 の「なりよしふりよし三保のまつばらちよとこへて
 あづまにもみゆふじの空いろ三つのあけ合門まつせ
 と松夫婦松春のこゝちやいさむかほみせ。
 ○嫩染分紅葉（うはなり）
 本調子「けふは人の身あすはまたわが身のうへとしら

菊の露のうき世の戀むじやうつら／＼くわんする折
 からに「いとなまめいたる女房のそのさまけしから
 ぬふせいにてつま戸のわきにたゝすみしはいかなる
 人ぞと見てあれば二上り「われはこの世をさるかたさ
 まがうら山しづのおりてたくあきのみぢばはぎき
 きやうその女郎花かぞふれば年に一夜の天の川合あ
 ふ夜のかづも千もとせと楊貴妃のすご六もこひめに
 色のつまべにも君をたひて玉つばき「返魂
 香にさそわれてむすぶるにしの一筋に合おもひあれ
 ばひれふる石のすがたにも「させもがつゆを命にて
 ふかき契りに秋風はいやよあふせを松蟲の戀風とお
 もわんせ道理じやへ合月雪花のひよくもんうそじや
 ないわいなぼつとりとした袖のうつりが三下り「とも
 にながめしつきかげのツミ歌「うつればかほるあす
 か川はなむらさきの藤つばを追ひいださるゝはたれ
 ゆへぞや「思ひしらせんそのためにふちつぽのおん
 りやうこれまであらわれきたりたり「そのおもかげ
 のつらにくやあらうらめしのうきよやなく／＼おもひ
 しらせんまぢ給へと合いふこへばかりは合有明の合
 月にのこりしよそほひは合おそろしともなかく／＼に

トメもふすばかりはなかりける。

○初深雪都の花

「されば都の物がたりあらましお聞なされて下さん
 せめいしよこせきは筆におよばぬじんじやみてらに
 戀の里大うち山のおもしろや合「ぎをん清水おとわ
 の瀧に地主のさくらもそでやたもとへ散りくる合散
 りくるちりかゝる合花のふきか花かゆきかとみま
 がふてみよし野はさぞならんかちが茶見せのいそが
 しや合春は花見の二軒茶屋合いろめく賀茂川す
 みの氣しき合秋は月見のやすむへん合雪はゑいざん
 みやこのふじと詠むらん「花の姿の御所風ぞくは合
 雪の柳とみへの帯合きちやむすびは御やしき風ぞく
 松につもりし雪のかほ合まぢの風俗梅がえに雪合い
 なか風ぞくしはがきに雪のすあしはさと風ぞくのつ
 たに雪ふるしどけなまこまげたはく人にしちんにお
 りだすにしきのこしをびや合色なら品なら言葉なら
 都そだちのしほらしやきやうのくわんをんふしおが
 み大悲大慈のこうだいじそだてあげたようば櫻合さ
 かりひさしき尾上のかねのひやくらん合民のにぎわ
 いよろこびのつもり／＼てむつの花合梅のかほみせ

うれしげに御ひいたのみあげます。

○お菊道行由縁の初櫻

二上り「加賀のお菊は酒屋のむすめ合戀の中ぐみな
 かなかに色に出たるみさごぐさ春の行衛と身の行衛
 ちるをすがたの二人づれ出合方「ふけて人目はま
 なれど夜風をいとふほうかむりア、顔が見にくの星
 あかりそれも心のくもりてはやみ合まだし句し初
 櫻合なれもひとへにおもひそめもろきおなごのく
 せながらうそつくまいと末かけし文のおくがきかへ
 すがきほぐにせぬきのあいぼれはほんにうれしいこ
 とじやいなされどもそわれぬ身のいんぐわどの神さ
 んにむすばれてゑにしもあさきうき名川 合方「今か
 うたちのく身のうへをさぞやつらいとおぼされんい
 つその事にわしひとりかくごすればよかつたにとひ
 とりかこてばよりそひてあれまたあんなむらばかり
 たとへいづくぞ水のそこらふす野べをこすとも
 はなれまいぞといひかはしなんの心にじよさいが
 あらふむごいことをとなく涙野べのちぐさもかれぬ
 べし「あふ瀬のすへはかねてよりかくぞと身には白
 むくのおぼろ／＼と春の空しげみもふかきうぶすな

とさつたのちかひふしおがみたのみをかけてゆくさ
きはついのよるべのたよりやとくさにぞしばしやす
らいぬ淨るリトメくさにぞしばしやすらいぬ。

○田舎娘念佛おどり

二上リ「花ひらいてしめすカンまさにしんのちしき
たち法のはちすの歌念佛おやこうちつれかねたいこ
はやすひやうしのおもしろや合中ギン「きめうべの
おかたどの麥つく杵のかすとりにチンなむあみだ
ンアアなむあみだなむあみだぶつ合中ギン「何を思ふ
ぞやなきごししなやりあぢやり文をやりチンなむあ
みだカンなむあみだ南無あみだぶつ中ギン何とな
るみのゆかたぞめ手ふり袖ふりおどりぶりなむあみ
だギンなむあみだなむあみだぶつ合「みだたのみて
にしものそらにしのそらいさかへらんもとのすみか
へ。

○早咲賤女亂拍子

ツツミツタ「うれしやさらばまわんとて外記ガカリ 扇子
おつとりいろくしのヌエすでにひやうしをすゝめけ
りヒウシ ヒタヒ地「そもかぶきおふなのはじネリはドッ
グヤしまの千歳和歌の舞ひとかなでとて所望につれ

らはちるといふ二ノギン花のころにはおもみゆき二ノ
中ギンかづきのすがた入相のかねがりんきのヒヤツシカ
ヘシアタルはなさそふヒヤツシ「さすがそのほの出たち
ばへすへばもうれし水仙のにぎわふくトメはなの
かほ見せ。

○葉櫻團扇

三下リ「きやしや風流を團扇のもやう墨繪さいしき心
うき繪にもんづくしめせやめせく團扇めさんか
「夏木立青葉しげりに風やわらかにそより合をより合
吹風にさまがたよりかなつかしや山ほととぎす一聲
にさつとふりくるむらさめに合ぬれてうれしきまが
きの花とかざりたてたる團扇のもやう合五十三次に
かくれない名所名にしあふみの八つのけい合爰に
うつして風そよぐならの小がわにとぶほたるちらり
合ちらり墨繪にかいてくおくりし玉はききひくて
あまたのあだことに合「我がおもひは合砂やま合つ
つじ合ねいろとするをゆりくおこされてせうがへ
合すな川つらし合ねいろとするをゆりくおこされ
てせうがへ合いろくしの合なわばりしげくなるこな
わひけば合小鳥がはつとたつとの合ひわや小がらや

そのおりからの女まひまふは小てうか花によれ花は
うつろふ人心ヌエ文がやりたや室町筋へとりや違へ
てよの人にやるな花のかのさまのさて花のかのさま
の手にわたせリタ「さまを思へばかくしのべどもかい
ぞなきつれなき松にふるしぐれ情にへだてはなきも
のをつきすまじおもひはつんくつりのいとついた
所がかわゆふていとふてよもひもあかぬシバギ帯
のしやらどけ口せつたねよもふえいわいなかれ
鳥とかくたわぶれあそべ世の中二上リ「君にあいとふ
てかちはだしあさせもわたりふかい瀬もわたれ合日
かすかさねて瀬川になれてよふさよりよりあふてどぢ
やうふみなろふたふたりよりあふてとじやうふみや
れすべられ申すなすんべいともよこたにひんだ
けむかしの十七今での年まめきもがでんぐり合つん
でるこんたにチドリ「はづかしや是もあたらしふじの
ヘチドリクドキ「なせに梅をばあにといふなんじはじ
めてひらきそめ風の香のあるうぐひすのそのさへす
りのしほらしや「なせに紅葉はこうやうじやかほに
ほのめくさめごといひたひことをもみぢしてやば
ならほんに合しやうことがないわいな「なせにさく

四十がらすいめこまどりまめまはし合住吉も合こ
にうつして玉がきの神のみまへに合聲はりあげてひ
としほに團扇めせく團扇めせ合にぎわいうれし宮
ゐはんじやう。

○髪梳ちんぐら

二上リ「花にそふ。心づくしのあり明はつれなきもの
とかこちがほ。なみだのくしげとりそらへ合ギンハル
いたづら髪のはらくくと。といてもとけぬみだ
れぐし合三ノギン身のうきふしをかさねづまつくく
ものをおもかげの人のふりかと姿見の。あふはわか
れのほどしれて戀のふち瀬も水ぐしの合カンツルし
らはまこへししらすぎの千里が一里さだめなき。二ノ
ギンわれをうらみて春の夜の三ノギン月もおぼろにツク
クルむねのやみ合三ノギン今はつぎ木の嵐ふくひとの
こゝろの二ノギン花にぞとつろふものもそでにちる
モツなみだの玉のあぢきなくこゝろの二ノギンうち。
あらひ髪トメハルゆふにいわれぬまたのゑにしを。

○深見草咲分獅子

三下リ鼓歌「おもしろや時しかわらぬふゆばたん咲た
りな見事なことじやえいろをあらそふ赤白の枝をか

たげていたいけざかり合蝶や小てうもめがくる花の手もたゆくかじめでぼたんそのにねむれる風情ゆふなり／＼てふはぼたんにたむれあそぶはらへどおつる露の玉「うかれいでわれは夜ごとも夜すがらも花のこすゑを合かけめぐり女獅子男獅子のいもせの中もなかわろぞ神かけてかみにむすぶのゑんのいとみだれあひにし獅子のつま寐たりおきたり寐たりおきたり獅子のはなにたむれひらりくるりからりりん／＼から／＼から獅子のそのにあそべる姿やさしき合「むろにひとよはねん／＼寐たくもあるけれどあしたひらかばナアのふはづかしやひらかばあした／＼ひらかばはづかしや／＼「ぼたんにたむれ獅子のきよくげにしやつきやうもかくやとばかり千秋樂とうたひつれ／＼ばん巖樂とぞかなでげり。

○ぬくめ鳥

「雪ふりて木々に花さく梅が香のいづれをわきておらましとみちと義理とに世の中の人をも身をもしる人にしらすでかいなくすむ月のたゞ心のみふたみがたおとづれゆく小夜衛合方「うきはことばにいひながし

あんまりおもふぐちからは實と誠とうらおもてア、しんき女心のはてしなくまだ／＼聞て下さんせ合むねのやみはれぬ思ひをくど／＼と春まつ花のさかりひさしき。

○豊さん

ギン「うきふしの中ギン中にまことのこゝろなら合カン過にし一夜の夏のよのゆめばかりなるあだまくら寐がへりに聞くほとゞぎす合つい時鳥二ノギンたがひのむねの三ノギン有明のすへの世とてもふか草の露むしの音にあこがれて合ひたきこゝろタツツかす／＼のむねにあまるをいひのこすめいさくゆらすそのふしにわすれぬきみをたゝみさん。

○華楓穂出戀

「白絲のちすじの瀧の音羽やま、入相にちらぬは秋のもみぢがり「くさはなはそのほど／＼に咲みだれ花火めせ／＼花火うりこれお子たちのおなぐさみと夕がほ朝顔色々にさかせたりふぢだなから松しきもみぢ合すゝきの露玉やよいや／＼どつとほめことば嬉しかろもの花火うりの「あとをしたふてくる戀風はにくからぬうちはうり御のぞみしだいにしきゑうち

ねのまつかせさら／＼／＼さらにつきせぬ君が代の替らぬにぎわひ花火うりみやこはさやしやならうちはうりおみやにめされよいとさまへ。

○道行女夫傘

二上「戀すてふわが名はまだきうき名たつひとしれぬまとしのびぢは合「中アシカカリあいやいがさのしよんぼりとギンをでからそでへ手をいれてハッじつとはなれぬはるのてふはがひはあめにうちしほれこころぼそくもとぼ／＼といそげばあしもちにつかぬカンひとめづつみにたどりつく。

○春寶 東人形

「目さへさむればおさなごころのものがに／＼／＼にことわらいがほともどちつれてはなみせう／＼合あの山みさいこの山見さいとりの羽をとにちるはちは合ちりくるの雪かの合はなかのゆきも花もいややかふてもらふたもちやそびはびい／＼や風車おきやあがりこぼしふりつゝみかつこたいこの音もおもしろやうつやうつ／＼つんと／＼あの子は／＼何してあとからちやつと／＼おじやいの三人もちし子寶の總領むすこはおうようであのまへでもふとこ

はかぶき名とりのもんづくしうちわもそとも金銀うちわ合にほひうちわのよいかうちわだてなもやうぬいうちわのかわゆるし合あのやうなとごにゑんならうちわねがいかなへて合くれないうちはならこころもすみゑうちわじやとついでよりそへばあしんき合なんのこちや／＼しらすのうちわ合をなたうしろおびわしやふりわけ髪さんざ合あいおひのまつは千とせの心のたけをかひてみせばやもじうちわ「月をみばやといくののみちすがら合つゆしぐれ合むさし野は合月の合入へき合かたもなし合くさよりいでてくさに入けり合いし山はうたに合やわらぐ合けふの合月合まつ宵合いざ宵合須磨明石月の名所はかず／＼あれどわきてあづまの月まつち山隅田川の月はひとしほ／＼ながめなりけり月のとも「たれがまつやらしやらりととけしふくさ帯おかしいやらはづかしいやらでくせつの跡はだきかへ帯合人の噂もまゝのかわつたしもりんきのかどとれて合たゞ丸ぐけやむらぐけの合風になびけや柳のこし帯むすぶゑんなら神さんしだひ「たゞたのめ清水へ合われもわれもと合大じ大ひのゑいかのこへん／＼ひくくらんみ

ろ手ものをいふてもへんじせず二ばんむすこはせい
たかく三ばんむすこはいたづらでわるさざかりの六
つ七つ中でいとしきちのあまりかたにうちのせみや
このめいしよまわれくかざぐるまおさなあそびの
しどけなく「おぐらの合野へのひととすきいっ
かほに出てみだれあふ尾花こいとてまねく手もとに
露もたまらずちりんのくもすそもそでもぬれそ
ろくおたまこんがれこがれてあきはてつらいのつ
らいのそよじや「さくらぐもりにつふの日も合くれ
はあやはのとりくなくればあやはのとりくのみ
つぎものそなふる御代こそ目出度けれとてばこのう
ちにぞおさめけり。

○舞扇千草装

「いざさらばまわんとて扇おつとりいろくすで
にひやうしをすめけり「戀しゆかしのおとこ舞く
ちぶへふいてまひの袖合かへすくもなつかしや
「かたみと思ふ此かりぎぬをあさな夕なにぬしさん
と絶へてくせつの獨ごと合きく人さんがくしん中
ものめと笑ひ草「そりやまあなにをいわしやんすへ
合たもとはなみだか秋雨かしたつばりぬれてあふ夜の

うれしさはひろい世界にも唐にもあろかいなかる
もほんにはづかしの合もりのこがらすかわい
も一さかりにくやのふくくいくいほどなをおもひ草
「宵はまぎれてあわれもせうが合ふけてくるかた
たみざん合あわぬてうしや三味線のいとしかわいの
ばちあたりさいなく合あくしよな男のくせとして
わしをうたがふことかいなきながしにしよかへさ
まをつれだち行ききも「尾花がまねくく合風にも
まるゝ稻のなみ見わたすけしきやみも又よいむさし
野はひとまつむしのしほらしや合さらば合すむし
まいらせんとせんざいいさむおきな草合たへすとう
たりまひあふぎ。

○八千代釣竿

本てうし「こゝにとしへてすみよしの神かとまがふ白
はつの翁いち人有明の月合出夕べも日のあすも釣す
るわざをいとなみてこのうらなみのしまく合か
くれながゑのつりざほをかだけてかえるそのひとは
うらしまと世によびけらし「かゝる折からふしぎや
な見わたすおきのなみ間よりたまをのべたるよそほ
ひにあやしのをんなあらわれいで「くだんの龍女が

あたへたる薬をふくすと見へけるがそらよりしうん
たなびきてかうべにかゝればうら馬がおいたるかた
ちひきかへてたちまち兒童とあらわれしはふしぎな
りけるありさまなり「おりから龍女はさきにたちあ
らゆるかうかのうろくすどもわれもくといできた
り「おのくしゆごする有さまはめざましかりける
次第なり。

○鞠小弓稚遊

「尾花がまねく萩はうなづくつゆふみわけてこゝま
でござれの合かわい子供衆になにがなしんじよ合そ
のに合色よき花おりしんじよぼどに合みやこおどり
がしよもふじやががつてんかおどるひやうしのおも
しろや合「さがおどりをおどろよ合ついのぼうし
のはなやかに合いざや君たち見物しよせんれはく
見ごとへ合「ぎおんおどりをおどろよ合仲居小娘は
なやかに合いざや色たち見物しよせんれはくみご
とへ合おいの身もげに有がたやいつとなくおさな
姿になりふりを見るもうれしき水かみみうつるかほ
ばせあいらしいあゝさてはづかしや合ちぶさたづ
ねてくうばよおうばといたいけざかり合てうちて

うちあわゝ合つむりてんくくくてんとうましとし
ほのめ合わやくくを夕まぐれ合お月さまいくつ十
三十五夜まんまるござる友だちの合「仲間あそびの
かくれんぼくさあ目かくしへ合犬がりこまどりし
やうぶうち合土ひやう入してすまふとりぐさ名とり
草「子供大將是ならん「四季折々におさな子の合いと
いふくといかのほり合しやうぶ太刀いろとこゝろて
んく小だいの合くさぶへ合やたひぐるまにのせて
合綱をつなをへひけやひけくやれ引けや合ちから
ぐさ花火秋津蟲をおふて行くおもしろたへの雪ころ
がし合けしきよいく子だからや。

○髮梳露の玉くしげ

二上り「おやはそらにてちのなみだのつゆの玉くしげ
手にとりんものおもひおもひぐさなるおさな子
のおくれのかみや神々にいのる子ゆへのひたちおび
むすぶかいたきたまのをもたがみづさしてみづくし
のぬれてかわかぬ秋の夜のむしもあわれをさそふら
ん。

○旅路の勝軒

「うきをうき世のひとふしにうたふて今ぞかつぎう

りとつとつめたいるちこの水よその雪水のかんざら
しめうとごとならころびあい色でまろめしいしくの
いしくもやつすなりかたちいかなまりの聲そろへ
「今の世の中はなだちやいらぬしつちくばつちく
つぎぎせるきぎみたばこがなかうとするやれもさう
ややれ／＼さてなア」むかし／＼そのむかしかんせ
うせうのそのむかしつくしのはいしよへあとをおひ
此だんごがとんだるゆゑとびだんごとはのふそれい
かにもしろしめせ「おれとそなたはゆる／＼どつこ
い／＼ゆるわのだんごへまろふてころびあふたる
中なれどんとすてたよへゑい／＼／＼／＼／＼ゑ
いなわけある中じやへわけもなやこうじ／＼や津々
濱々もはやすひやうしはやれきねのおとん／＼と
ん／＼／＼とびでる／＼とびだんご名だひひや
うばんところはんじやう。

○四季染軒の花

三下リ「軒端々々にかわすかほの花をつくりしと
ろふのあづまおなごのしほらしくとらうふめせ／＼
きりこめさぬか「はづかしのもりてよそにやうきこ
とをしづがおだまきくりかへしまがきにまねぐあさ

がほの露のいのちのおきどころかざりたてたるとう
ろふはまづはるなれや櫻川ながれに花をすくはんと
みなはなうくるはなのあみもるなもらすな花のなみ
名のみのこりてさくらがわせのしらなみしげけれ
ど霞をながすしたみづのにこるもすくふもはなのな
みはなのみかさはしろたへのなみかとみればうへよ
りちる櫻か雪かなみか花かとうきたつなみのかわか
せにさればぞさそふさそへばぞちるはなかがらかけ
てのみながめしはなをやぎのいとぎくら合こな
たは夏にしてすあまにいけをほらせつ／＼いけのその
なかににはうらしま太郎がつりのふねとうなんかぢよ
がうつをぶね五色のいとにてつながれたりじやうら
くかしやうの風ふかばみぎわによれとつないだるは
いつも夏かとつくりたりみぎは秋にていたらぬ山は
なけれどもまして名だかき山かげの月みるかたへと
やまめぐりのとうろふもこゝろをこめし冬景色ゆき
はながちるはの空にはなが散はのちりくる／＼ちり
ちり／＼／＼ばつとちりくるおもしろや「四季のながめ
をとらうふにうつしてきて見りやひとのこゝろをナ
アいさむたわむれでござんすのんよへそれさそれい

てみりやうれしへしごもなや「行こうひとのたもと
をひかへ花をあつめしはなどうろふかす／＼かけし
あきくさにむしつくしぐさつくし貴せんのかゝろう
つし繪や半時はかり賣弘む。

○彈・駒・准・系圖

音感せりふ「そも／＼しらびやうしのはじまりはしま
のせんざいわかのまへとていまだ白はの大ふりそで
しらあやにしらさぎを白糸にてぬわせつ／＼しろさす
いかなたてゑぼししろきあふぎの手をつくしひやう
しをそろへてまひけるゆへしらびやうしとは名付た
り三絶大小入り仲藏「さてまた神代のいにしへはあまの
うずめのみことをして天の岩戸のかぐら歌神武の御
代には猿女の君推古天皇の御時には百濟のかぐらを
むかへやまとの櫻井村にて舞樂を奏す本朝舞樂のは
じめなりもろこしかんの武帝の時營きを置て軍士の
妻なきものをまつと有七鷲「されば歌にもつ／＼み打見
はやしけるもいちじるく月にななづる白びやうしか
な仲「きんしうだんにしけんしがふちよをふしたる
から歌にてんかうけつしかせのふかんことをおする
じやくたはじめてめぐらすやうりうのゑだ七「ゑだ

はしげつて今もその千歳のばつそんに萬歳のむすめ
とはさしわたしの他人多門天のおいもとご吉祥天女
とゆきあいきやうだい辨才天には九代のかういん仲
「によりんくわんをんの申し子にてほとけ御前は
またいとこしづか御前はお師匠かセ「ほんにそれ
れしせうもしせうあさな夕なのおしかりにもまひの
けいこをせいしやうなごんは名付おやいづみしきぶ
はおはぐろおや松風さんはちきやうだい仲「江口の
君やむろの君のがみのはな子はなんでもあるまい七
「いへ／＼それもたにんじやないちすじを引て大門
口あいにくるはのにぎわいは腰まきばをりいそ／＼
と仲「柳ばしからしやれのりに七「それ火なわはこ
ふなやどの仲「かゝあがつきだすちよきのはなさき
は七「じしやくのけんさき仲「北へ／＼と二人おせや
れおのこ仲「しいの木じやしつちやつぼう半分じや
はららつぼうおつとあふない首尾の松歌「二てう立
三てうだちおしてよつては臺見え／＼箱ざきくづれ
橋だんなすつべりおひさしやそこで花とれ／＼勘五
兵衛頭巾はいらぬぞあみがさもてこい／＼おせ／＼
おせさ浮た浪とや花川戸こゝ淺くさの觀世音三社權

現横になしほりからとろさになつておくれ／＼に新町芝崎うば女郎くさりのやしろでやつてくりよつちで打てどもまだ手はかるいおゆるしやれエ、勘五兵衛五町まものたからじやうはきに花の戀の中の町七藏せりふ「こりやなんとさんすへ仲藏せりふ」なんとするこれ太夫そのふところは可愛ひおとこのきせうかまぶめがきせうかこへだせ七「いゝゑいなアこりやそのやうなものじゃないわいなア仲「そしてなんだ七「こはな仲「みぢん丸か七「エイさあおまへにかざりみぢんほどもうそはいわぬ程にかんにんして下さんせいなア歌「ほんにおまへもうたがい深いよそなたつ名のにくらしやびやうぶに書しさままいるふたりが中は／＼の解た姿に夜着させてだかれねた夜のうれしさに外のあくしよはさせまいといふてせいもんたてておきながら七藏「これこの文は仲藏「このふみは歌「なんぞいな合いかにとおとこのくせなればとてチドリ「うらみかこつもなアしつかしんぞきにあたるとはゆめ／＼しらなんだみるたび／＼やきくたびにくてらしほどかわいさのきせうせいしはうたがひはらしヲ、よい事の／＼今は太夫のあげやい

り小づまそろへて八もんじはでな道中そのなりふりも戀に心はうつせみの七藏「うらみいふまもみじか夜のきぬ／＼おくるくたかけはまだきにないてせなをやりてが目のせきをしのぶもじすり仲藏「たれゆへに七「おまへゆへ仲「あれまだあんなうけことばてれんてくたもあやなしもまぶも地色もあだつきもさらりとやめてだゝらあそびのせんせい「おもしろのはなのくるはや世界の色のうはもり大門口へいりくるきやくはすいかぶすいはひとめで見てとるかぶろがきてんにあたつき女郎がてれん手くだにうらちや屋小茶やをたづねめぐれば二町目すが、き平にのこつてさりと／＼うるさい事だッ、歌「たとへ下戸でも上戸でもさけによふて世をみればたいいつすいのゆめのうき世にとかくたわむれあそべゑい／＼あそべえ仲藏「すいつけたばこのすいが身をくふ七藏「しまの女郎衆は仲「紋日におわる、七「かぶろは仲「やり手をこはがる七「げにひけ四つのひやうしぎは仲「しまきやくさかんとひやく也七「是をわたせ仲「こりやしらびやうしのしらすやまきかたなさいていなふよもどろふよといふて小こしをひんだいてまだき、

のこした事があるこなたのは、ごなんといふ七「サア一人ふたりの一つ家じやない百人一首のそのなかにも花の色はうつりにけりなとよましやんした小野の小町はわたしが母さん仲「おはごは七「さよひめ仲「めいごはあかすめ仲「はとこは七「てるて仲「みうらの大寄せ百六代のばつそんに七「今かめぎくと名によばれけふのおめみへうぢなふて玉のこしかたゆくすへのけいづがたりもおほもじやサアねやさんせさいわいこゝによぎもあり仲「いんにやおらアねられにないにらんでおいたそのふところの七「なんじやぞいなア仲「間夫をおさへた七「間夫とはへ仲「間夫さまぶをおさへた／＼おさへ／＼あやしみありや我くわいちうのこしを七「外へはやらじとをんもふ三番三ひやうし歌「花にさへづる百とりのあなたこなたのうけこたへべんせつまでもさわやかにげにおもしろかりし風情なり。

○渡初鵲丹前

二上り「とのはみゆる／＼きつとしたしやんとふりだすだてやつこだいがさたて傘大鳥毛合よじらすよぢらすこしをよじらすおともさきやりはゑながし大

長刀ぎやう／＼しすんずとのばしてくのない十文字さあ／＼ふれ／＼さ、あ／＼ふれ／＼さ風がしづいて合ふられぬ合しと、ん鳥毛はやつとりげとん鳥毛はやつ鳥毛ねてはくだやりまくらやりさ、んささ、やりしぐれのまつよそろふおともいさむぎやうれつゝいさみにきわふけふの下馬さき合「こぐにひときは戀と情の名とり奴のたてすがたこんのだいなしきり／＼きりたかつまふうぞくよしやわたりあふ瀬の天の川まれのあふせをまちやまたる、七夕に／＼わたせる橋はかさゝぎのはねはもみぢのてり／＼そへてしよしんはづかしひとめしのばしツミ歌花のすがたにあき草をぎ萩もすがぬる、歌いかな夜も日もひとこそしらね合なさけしらぬはあだ人とみへつそれなんでもせかくれつ合月のおもかげうつすかよふすがたのたてもやう合かたはふじなりすそは田子千鳥あし邊のたつなみは、うつ／＼うつの山邊の夢はいちふじナアンヲ、それ／＼／＼／＼／＼それ／＼きたのにそなたはあきのかせあだに吹きくる三下り花はみまし野や月はむさしにいづれをいづれとながめにつくされぬなをもよしよしわら戀のいち

さんや土手道もん坂「おもしろや」あんまり浮かれりやうき名もたつに「これもたせうのゑんのいとむすびといむる君が玉づさ。

○曙舞 鶴丹前

本てうし「さればにや小林の三郎は君の御遊の御座敷皆いへくのまくの紋一々次第に語りける先づ正面のまんまくに大一大方大吉の春めくひらくはなうつば大すながしのありくと三本傘雪おれ竹二つどもへ三つどもへ右とひだりへくくるくとくるふや戀のつなぎむままぶの手綱にからまれて矢はづの遊ふ其夜半は三下り「いつわりの合なきかの里にわしひとりないてあかして心もすまずたゞその人に露ほどもしらせたいぞやかたおもひうらみにうらみかさねてもりんきされるがうれしさにくせつのはては男からおれてかゝればあちらむきたばこのけむり輪にふいてこそぐられてもわらわぬをついわらわせてつめられてそれをよるせの三つぶとん「雲にはをのす鶴の丸すわふにあらぬ合くわんくわつ出立「ヲテキカ「ウンニヤ「マブカ「ウンヤイ鼓合方 鼓歌「恵方男の若若と歌通ひくるわのよせ太鼓土手の春風身にしむお

もひあれみさいなあつくばの山によこ雲戀ぞつもりてふちとなるゑいわいのくといふたら性も直らふかせうわるく「湊入合方「これはくしたしのまめやつこそなたがたもみやおりやこゝをひねろひねる旦那の機嫌い合「船とく「かごとは戀のわなのせてさんちやのすがきになびけく「薄はちにかけられてどうでもさかふでもさどふでもおもひは日に千度「むかいのやんぢり山でよめなつんぢりつむてんぢり女子こんぢりこやしもしんぢりしめたやよめなつんぢりもろともにしやらやく「すんぢりもんぢりよい女房くくく「てこしをなやいた宵は待ち夜なかはうらみあかつきはゆめにや見んとまどろみこそすれなあんまれにあふ夜はくだけさへもまだきになきて時しらぬまたの合おんどりほそかわかねつくぼうしがにくやのまた夜ぶかくもこんく「こうく「とつくにまたねられぬうかれてかよふく「君にはぢかれてしよたいなのわれはくすんで居ても戀する戀するにくい「は里のつりばりナドリ「みめやかたちやめもとにやはれぬ心ばせにぞしよじまよえおしやればそれもそうく「かはいく「と合文にはかけど

なせるしわざにやきにやいらぬおしやればそれもそをひかれたこれもだんなの御はんじやうへこれのやつこをくるまざしきにすらりつとならべてせきないせき介だんだん平じぐちまじりにふらりつとよびつれさんばそうひやうしに引すがきにさつさにさわふ春のことぶき。

○冬牡丹五色丹前 (五色丹前)

「花とび蝶おどろけどもケン人しらす「われもまよふやさまく「に合四季おりく「のはなのいろ咲みだれたる中にいわふや冬牡丹ハル今をさかりと合げに名もたちばなの枝葉もさかえちとせかはらぬ「ヨサイ男山合「おもひそめたよ五しき丹前のすがたもよしやハルみよし野の花にまさりしとのごぶりハルかはゆらしさの戀ぞます「はづかしながら女どし合ハルふうつりりんきせまいぞと「ハコビたしなんで見ても情なやなせおなごには何がなる合ぞうしがやへぐわんかけてざくろをたつのもわたしやおまへにそいたいばかり合小野さまへぐわんかけて梅をたつのもわたしやおまへとふうふになろと合ふたりこゝろもまるか

なれと三ノケン月と花とをハルみるにおもひぞつもる雪とけてむすびしるんの帯「君に合あふ夜は嬉し合下ひもときわの松の合さめぬ色かは末までとくく合初のせたいのひなあそび桃と柳のよい中をみわたせばみやこそ春のにしきなりナトス「いさましや「しゝとらでんのぶがくのみぎん牡丹の花ぶさ匂ひみちく「だいきんりきんの獅子がしらなびかぬくさ木もなきときなれや合トメ萬せい千しうと舞あふぎ。

○梅楓娘 丹前

「おもしろの冬のけしきや野山のこすへ白たへにふりくる雪と花のいろ合「われはみやこをナアはるばるすぎて合はなのお江戸のおくに入り行列合ついのやつこのしやなくく「しやなつくやなぎごし見事に「きりしやんくく「花のお道具きやしや風流をみてもみあかぬ君がおもかげ「扱もそののちむかしおとこの戀のわけ何あふみやのむらしぐれふつてふり出すくわんくわつ姿みざりへひとふり合ひたりへひとふりふつた姿のはなめかし「おもわせぶりのめせきがさひとめづつみにその出たちはナアどふもいわれぬおとこ山く「こゝなやつこはナア何たと

へんひやうご小つゝみなじよ／＼合とのごおもひに
むつごとしらべはよな／＼合しめつゆるめつ戀のこ
のこづつみの寐みだれ髪の合よれるつなには大象も
つながさるゝならいかやとはおもへども／＼ほれぬ
がそんじや／＼そんじや／＼そんじや／＼しやくそ
んもいろにまよひしむかしも有り合けふのおとも
ト、／＼とつた合「さまにあふ夜は合ねざさの
あられがよいわいな合そりやなせにとけてかたらん
我おもひ合かたらぬおもひしどもなや「きせんぐん
じゆのみやるにぎおふいこふます／＼ます／＼かみ
のきんじやうさいはい／＼／＼と山河草木國土おさ
まりところはんじやうけふのいまやう。

○揚屋入曲輪誰袖

「いぢやうばくろわのはなししなの梅にほふやれか
ほも紅梅と合われし梅のさ／＼きげん雨の夜雪の朝
ぼらけ居續けなんともきのふけふ二日ゑひその／＼
そでのむめ合小づまをしやんととり／＼にむかふの
ひとやたのみんすおがみんす御内儀さん御亭さんさ
るかたへ文をとけてくれないのしなをやり梅やり
てやかぶろしんぞ道中よい／＼中の町へ「うき名が

たとゝなんのその戀の仲だちくらがりさすいさま
合しのふ夜に合じのふ夜に合出て下さんすな御月
様とは又どふぞいの／＼合はて戀のじやま月をにく
むも戀なれや「かよひくるわのゑもん坂いそ／＼や
れ／＼さつさおせ／＼ふねもよしわらかごもよしわ
らおるもよし原みよし野の花さく中の町さくらどき
君まち合のつちのにぎわい。

○東誘 賤妻木

「花のみやこのしほらしやしづが手わざのくろぎう
り合黒木めせ／＼くろぎめせ御所や町々おとくゐさ
まへか／＼さんのことづて合四季にさきしいろ／＼合
おみやにあげる花などもほふてくるはたきもの小
原木かわい／＼と合とのさんたちのわるじやれもし
んき氣のどくあ／＼まよ合いやしきしづがまひなれ
ど御めなざるゝ身のはまれ心いそ／＼御座の間へ行
も有がたやと「妻乞坂女坂男ざかゆけば合よし野坂
江戸見坂こへて山々めぐり／＼てくる／＼／＼合車
坂びやうぶ坂人まつ坂やうかれ／＼て合いさみいさ
んでかぐら坂月みる坂は石山寺へ合のぼればさつさ
合くだればさつさ合あたごのさかの小むすめなんと

がかわらけなげ合見ゆさ／＼ごとにかほ赤坂のおいの
坂行ゑもん坂「名とりのぎをん町おどりへまづは松
坂おどりへさんさくら／＼合花をかざりてきそおど
りすみよしおどり合かさいおどりの品やる手おどり
のさんさくら／＼合うつやたいこのひやうしよさ
だいまくおどりたまのまつりの夜はとうろふおどり
「小町おどりをほめ夕立はげにことほりやみなかさ
おどりかしまおどりの合ふりだす／＼やりおどり合
見事に合そろふた合ついのほうしのさがおどり合春
はござれや伊勢おどり「なふ／＼布はいろます「さ
らしのやさらしてふりをみせまいらしよ／＼「さつ
さくるまのわがきれて／＼いづれおもひほどなたに
も／＼合さらすほそ布手にくる／＼とくる／＼とま
きぞおさむる千代のことぶき。

○初旅名取草

「いつしかにならわぬ身にし旅合ころも合そでや小づ
まもしどけないのはさあよい／＼いまをさかりのは
なむすめとみへのおび合しやんとむすびしかさのひ
もいろならだてなら合こと葉ならさすがみやこそだ
ちのかわゆらしまだきむすめのはつめみへばうしう

つくしかほよ花合「見かわす／＼おもかげの水にう
つらふくさ葉にはたるのちら／＼とこのもかのもに
ちら／＼／＼と見へつかくれつさてはあの合月がな
いたかほと／＼ぎすいづれがおん鳥めんどりとしれぬ
旅路の夏木立しはしやどかるせみしぐれ合「一日を
合よこにくらすや合渡し守合ふなぢをやすみひよ
つくり／＼ひよつくりひよつとくれば合みぎもひだ
りも戀の世や／＼われらが色はむめじるし菊じるし
合二日ゑひせぬせう／＼まさりと合いわるゝほど
の身なれども戀はくせものあのふうぞくの合やなぎ
ごしいのひとりとめとよりそえはおいてたもとをふり
きれどたびはみちづれうさはらしあれ／＼／＼里の
子供のひとふしにうかれ／＼てひとおどり合「ナドリ
「御所のおにわのあやめふく合みすのひまより姫ゆ
りの合かほりくる／＼くるまゆり戀に心もふかみ草
末つむ花のすへかけて合きせうせいしをかきつばた
合今宵あふひと夕顔の合うそとうそつく男べしむね
をなでしこ身のつらさわたしが黄菊しらすぐのつゆ
をふくみし朝がほは「あさな／＼に咲そめて合さか
りひさしき合花のかほばせ戀ぞます／＼よいやよい

やとほめことばうれしあづまの御ひいきをいのり
いる、や名とり草。

○狂亂若木櫻

「花のお江戸の町々さまが御ひいきなされてくれな
いはそのふにうへてかくれなしどへい〜とおこさ
まうばさまいづれもさまがたのふかみはかねて御ぞ
んじの此あめのきどくには一度あがれば叶はぬ戀も
かないはんじやうとあきない口のちやわ〜と元日
や竹にすゝめのはなし聲「かゝるおりふしむかふよ
り合みだれ心と三重四重五重七重八重合花のさかり
やよい子櫻のかほりゆかしさ御なつかしさにこと
わりやおやこごさ合かう〜のみち春の道すがら草
つむ人のくち〜にきちがいはうさいよ合さちが
いよほうさいよとわらふとまよ御衛行尋ぬる御方
はそれそこにそこにそれ〜とのさま御立合さつさ
ふれ〜さ合あれ〜あれをみや合むすんだりとい
たり蝶のいもせごとあ〜おかしなことごんすよの
戀はいなもの狂人もナドリ「おもしろの花のみやこは
合筆もおよばぬ名所古せきの合ぎをんきよ水合地主
の櫻もちりかゝるへ袖やたもと都は色ならこと葉な

らさあよい〜のよい合いざさらば二けんちや屋へ
合ゆくもかゑるも梶が茶みせは合筆とる歌よむ合さ
すがやさしき仲居むすめのひくさみせんの歌ならふ
しならてごとならさあよい〜のよい「梅にうぐひ
す榮たねに小てうのしほらしや竹に雀や合松にすご
もり合さくらにつなぐ駒もいさめば紅葉に鹿合牡丹
に獅子の狂ふらん合狂人くるへば不狂人もともにく
るひしありさまは合いとしどけなき風情なり。

○道行置霜尾花袖

三下り「爰にハル戀路をとゞめしは合ニノギン尾上の前
のいたわしや戀にハルあこがれこがれ〜て三ノギン
いつとなく合くるはたれゆへ君ゆへに合ならわぬ旅
路うさつらさの身合ハルもしもあふたら何からさき
へ合ほんにすぎにし花見の折からちよつと見せめし
戀ぐさ合三ノギン露のまもわする、ひまはありなん
とぐちなこといふ女氣は猶もハルあとにましますち
ちは、の吉次ドクギン「さぞやあんじてヒロロくれのか
ねつく〜おもふぞ道理なれ合ニノギンしほる、心
とりなをし戀しき人にハル尋ねあわんと合あづまか
らげの旅ごろもきてこそみよはたち山「雪になり

たや合ハルはこねのゆきはしぐれがちにてとけやら
ぬ合とけてながれて合三しま女郎衆のけしやう水べ
にかねつけてたれにみせうぞわしがかわゆひ人さん
にみせり〜し「返す〜もくどからず候戀に
は心も亂れそろハル野こへ山越里こへてうへの〜
あせみちはちかふてよい〜けれどもことにやみの
夜でまつくろ〜黒犬がおそろしやがつてん〜そ
なたもがつてんわれらもがつてんほんばにそれはの
やつくるりくるり〜合トメ森のこかげにくさまく
ら。

○寒椿名所花

「御のぞみにまかせ出羽奥州のものがたりわれ人さ
へも松島やおしま白石あだちがはらを見にきさがた
とゆどのさん名とり川水にうつろふ月山の端に合し
ばしはやどせ山里もきぬ〜山に朝日さすひかり堂
ありがたや鶴が岡ゆくすへいのるかみのみやのく
もらぬ〜そらいろ〜に四季のながめも今ははや
すみ繪になりてふゆげしきナドリ「戀路山のぼりつめ
てははかりの關忍ぶ山合さまにあふ夜のうれしさ
はるもんつくろふあねはの松いもと合扱も似よふた

はぐろさんじやへ合はづかしがるのもしよてのこと
すへを松山ふうふ坂かならず〜うはきはおきの石
かたいやくそくあふせ川「渡りくらべて世の中みれ
ば木々のこすへも合にしきおるおだへのはしにおく
霜の花さかり久しき出羽奥州合筆にもおよばぬ名所
かな〜。

○丹宮つゞみ男風俗

「千代のはる合野も山もその名ほど〜いろも香も
ある花ぞさく合春風の合ふかば花のあたりをよきて
ふけかし風だにも合さりながら合戀風がふかばなび
かん合吹かばなびかん青柳の合いとしほらしさやな
ぎがみの合いたづらがみのにくからぬ合花のすがた
よいやいやたまらぬ柳ごし合よい〜よい〜よい
風俗は合男とも見へまた女ともみへつかくれつ花の
山合下戸も上戸もはなにはうかれ合ながめおしめど
はや入相の合鐘つくほうしはにくまる、合にくまる
合さくらもさぞやにくむらん合「花がみたくば吉
野へござれよ合今はよし野の花ざかり雪か花かこれ
は〜とばかり花のよし野山げにおもしろや「花が
見たくばよし野へござれよ合今は芳野のはなざかり

雪か花か合是はくとはかり花のよし野山「おらが
だんなはくすんどだてしやでこんすや合どんすや
ひぎやちんちりめんおりだす合染だす合花のかほ合
いさみいさんで人の山く。

○道善 江戸櫻其儂

三下り「はるがすみたてるやいづこみよし野の山口三
浦うらわかきげにやふた葉の初櫻松のくらいもおの
づから女町にその名あげまきとはでなすがたも戀と
なさけの中の町「君まち合の辻うら茶屋にあだし名
もうきをわするゝよすがとはしる人ぞしるひよくも
ん「ほとゝぎすくもるをかけてひゃきそう鐘は上野
かあさくさか數も三とせのめぐりきて合「卯の花月
にちりし身をそのおまかげのゆかりとてなみだのあ
めにそぼぬれて傘のくしづくのしづくも此はち
まきはすぎしころ御ひいきのこるむらさきははつも
とゆひのまさぞめやうかむりぞわかまつの松の
はけさきすきびたい一つゐんらうひとつまへふじと
つくばのあい袖なりゆかし君ゆかし合「しんぞい
のちをあげまきのこれ助六がまへわたり「つきだし
のその日よりなじみかさねのしろ小袖宵にわかれの

鐘の聲ゆびおりかぞへまたの夜も「すいなどうしの
なまなかにほどけぬむねのなぞかけておもひそめた
るいつところこの手がしわのふたへおびめぐるせか
いは小ぐるまのうしとみし世のこくばたんうわぎに
くゆる空だきのうつり香ふかきそでの海「右と左の
戀のふち合せくなせきやるなうき世はくるまいのち
ながけりやおりやくめぐりあふなきおもかげもさ
みだれや合「かさにつけたる小人形其ひなどりのは
つ聲はいづれをわかぬかほよばなむかしをいまにさ
きかへるふせいなりけるしだいなり。

○楓葉戀狩衣

「手をとりかぶとかりぎぬをかたにうちかけふりか
たげ顔は紅葉のてりくそへてもみちいよこのもみ
ちながめんいろくのにしきおるてうとふやまの合
こがれこがるゝさを鹿のつまこひかねてうきねこが
るゝもみち葉をふみわけてゆくゆくも紅葉はかへる
ももみち葉紅葉々のかげにやどればつゆにもあらず
雨にもあらずましてゆきしもあられにあらすみだれ
吹おろし袂にはらりもすそにはらりさらりくさら
さらさつとおちばくち葉のいろもめづらしかざしの

ゑだもてりそへてあらおもしろのがくの音や鼓ッ々
「舞のたもとを引といめゑんががありやこそあふせも
あるに文はちづかにつもるおもひはしら雪ときへも
はてなんわがこゝろ「おとこもたすばせう葉にひ
とりねる合まつのおちばにこちやくふたり合ねる
ねるちるや紅葉もこゝろせよ「夜ゆふのぶがくもと
きうつり合ときうつりかゝるしらべはおもしろや合
たいこ合うつねのひゃきよやく千秋らくとまひを
さめ合まひをさめ興にせうするひとかなで。

○心駒勢草藤

「猿は山王まさるめでたきおどるか手もと辰巳馬や
春の駒はきぬまきそだち小石小川さほのみなかな
みをもてのせんすいらうか萬里があいだいるほうた
りさてこぐ船の御手をみればこがねのろをたて十二
のかつこがはらりくとうつては八つびやうしはそ
ろふたり「あづまくだりの殿はもたじなく合あら
しふけとはさあさらにおもわぬくしと申すはす
みくくくくく住吉八わたふげんもんじゆ
のめされたりいさましかりけるしだいなり。

○釣狐春亂菊 (釣狐)

ウタイ「我はばけたとおもへどもくたゞ淺間しきこ
の身なり三下り「とりは八聲をつげわたるいぬはおの
れがもんこをまもるわれはねがひもありあけのつき
ぬおもひはちくしやうのしばしははなれぬすがたは
おちのはくそうづみへつかくるゝほそみち「爰に野
すゑの狐つり合わなにねづみをとろくくくとくま
のあぶらや木のみあぶらくさアとろく付てね
づみをかけてあげてつりてのよいやさきをくばりま
だあきならぬ春の野にかけならべたるきつねわな
ツミ歌のふにくやうらみやかうらうどの野干のせうね
をたぶらかしきるにきられすぬけられぬぼんのふの
ふかきおもひにきづなをかけて身にしみわたる夜あ
らしにゑもんつくろいびんかきなでしのぶ夜のさ
わりはさるた月かげふけゆくとりがねそれにいやな
はいぬの聲ぞつとしたすがたはづかし人目はづかし
「いのふやれ常わがすむもりへかゑらんく春のこ
すへもおもしろや。

○抽子 教草吉原雀

藤藏せりふ「およそいけるをはなつこと人皇四十四代
のみかど歌ガカリ「くわうせう天皇の御宇かとよスエ。

「みづからと申はそもわけあるさとしすみなれてお
もかげよそおふけわい坂せうくよるのあめふり
みふらずみさだめなきかわるまくらもいつのとき時
宗さんにまかさんと女心のひとすじにふじと淺間に
あらねども多葉粉くゆらす疊ざんはやたそがれにぞ
なりにける「思ひいだせばすぎしころ合はこねにあ
りし兒ざくらはつとこすへに舞の袖うつす姿のはづ
かしや「あだしおとこのあだばなならばよそにちる
ともころのにはひ合とこのいろめとかほりくつさ
つてくせつなればでもどるのがさりとてはきくにお
もひはますほのすゝきみだれあふ夜はおとこのくせ
にかけてうつつのと引きみせんのでれんでくだにした
らいでヨアあの人はくちとたしなまんせほかにさ
わりもないものかなんぞのやうにアレあくしよへほ
んの事ならうれしけれどもうそじやあろもの合せい
もんくつされほんに我はとのごにくるふ蝶「わが姿
てうや小てうとなるならば合なねにあそぶ合君に
あふてふにいまくら雌てう雄てうの合夜はもろとも
にふせてう合てきにむかへば鏡てう合なをばあげ
羽の蝶のたわむれおもしろや「山寺のく合かねつ

くほうしの時しらぬ合わかれどり合春の夕ぐれき
てみれば合入相のかねにはなやちるらんくくれそ
めてかねやひくくらん二上り「さつさそれくく
はなのお江戸の宿入ふれく春雨に傘は三がいがさ
みかさ春日の山はもみちがさ合きよてなりよてなり
よてきよておつとりそろへてしやんく合花がさ
ぬりがさめせきがさしぐれ笠かさがさまではかんろ
の目がらかさもあじろがさ合むかひ通りやるおひ
ぢりのかさに梅のおりゑだ一重か二重か見ごとに見
ごとによふそろたはなのすがたのそろふ見事へ三下
り「さるほどにくてらくのかね月落ち遠近人に
たちまふすがたおそろしやめんしよくかわりていま
はうたではかなわじとしもつとふり上げうわなりの
かみを手にからまいて追廻りくくるりくくるく
るくく「ツミ歌「世の中はともかくにもゆめなれや
さめてのあとはしら露のきへてもこの戀のみちナ
ゲアツたなき人のしわざゆへそひはてもせぬ春秋
にだいてねた夜のわすられぬわしやわすれぬなせそ
のやうにぐちないナアわしやくほんばにいとしゆ
てならぬがいかなぐわ合おもほへてそでにみなざる

露の玉つらぬきとめよわがつま「きんせいとうぼう
せうりうせうくきんせいさいほうびやくたいひや
くりう一大三千大せん世界のこうじやのりうわうあ
いみんのふじゆあいみんしきんのみぎんなればいづ
くにうらみのあるべきぞといさごをふきたてこづゑ
をならしとうくさらくさつくとさだめなきよ
のあだかねにうらみやのこるらんく。

○心の五文字

三下り「いづる月三ノギンいづる日よりもわすられぬそ
のうきことをするすみの合中ギンふでのいのちげこ
ころのおもひわれのみしりてしらまゆみ引わかれつ
つすぐるよに三ノギンゆきくれて野にはふすとも山ざ
くら合三ノギンちるもあだなる武蔵野につゆのこの
身の三上おきどころ。

○色鏡梅の玉垣

「うつくしや花のすがたの色もかも戀ぢにあらそふ
ありさまはげに花いくさともみだれがみむすばれが
ちなる女氣はりんきねたみもありわらのなりひらさ
まにまけはなされぬとのごじやものをいゝやいやい
やなんのそなたにそはそふぞまけぬころのみへの

おびとけてあふたらふたりが中にもふけし子だから
の「花はおりたしこすへはたかしわしにあのこが花
おらさせたがりやるしよんがへゑいとくくくゑ
いとくそれはゑいくそりやとうゑいとく「今ま
で中よき女どうしもりんきくあさましやむりを
いのるが世かいの無理もたまりくしきぶねもふで
の夜もすがらほしかあらぬかはらくく水にうつ
ろふわがすがたみるひととき人これはくくとばかり
花のあたりをよきてふけく。

○雲の峰

「さかづきにうかむや秋の花すゝき垣の朝顔しほむ
きのどくいろにひかるゝあきくさのひとつながめ
なア見つ見られつもほんにいわずにすまそぞへ月に
さわりや雲のみね。

○髪梳春の袖

三ノギン「さくらさく。霞の間よりほのかにもみてしッ
ル人こそ戀しきと。ハルギンウツろふものは世の
中の。なさけとあだのこすじは。たれとりあげて文七
ときぐしの合三ノギンカハリぬれにぞぬれしびんみづ
に合レイセイガカリくせつの顔を花ぐもり。ハルギンウツ

すへはどうしてかうしてと二ノギンもし一ノギン水ぐしになりふりもツクモツ夜のちぎりの神さんにむりなねがいも三ノギン女氣の。やぼになるのも二ノギンすいの身に。くらべこしたるうたかたの。あわぬ夜半にはむりぎけもみんなおまへがいとしようて。ハルギンどうもならぬわへ。ちぎりをなにと三味せん。てうしあわせて三下りあへばうれしかほみては。二ノギン文のかしこもあとさきにくだけどりのトメながきあふせを。

○由縁花

鼓歌「遺愛寺の鐘は枕をそばだて聞くエイカンガカリ廿餘年のほるあきのウツギンはなはちりても春やさくげにはなかつらいろめくは春のハルけしきかや琴歌ガカリ「心づくしのあき風に合ハルツギンすまのうらわのなみまくら。ころもかたしきひとりねてモツゆめもむすばぬ夜なく合方三ノギン「すぐなることをよし野や一ノ中ギンまげにあしびきの山ならば柳によけよはなのかせハルギン秋といふじもよぎてふけ。いくトメ夜の月とながめくらさん。

○大鳥毛嫩緑

はいくせのものおもひ三ノギンほんに船にも車にもつまれふものか三ノギンカハリなんのそのひろいうき世をたいひとすじに合おもえはく合むねせかれないてもわびてもかなはぬはむすぶのゑんの三ノギンつなきて合三ノギンいとしおとことこすゑの花もナンちるかあわぬかたみさんハルうきかわたけのその中に三ノギンイロすへをたのみの二世三世かけてむすぶやかみごころ。

○初しぐれ

「身ひとつにふるはしぐれかなみだのあめかぬれてかひなきそめぎぬの合上「しほるまもなきそでのうみなきさもしとふ小夜千どりなにを思ひかあかしねつくくものをあんじてみればきみをまつ夜のおぼろづきはれぬころの初時雨。

○一奏廓羽衣

「あづまあそびのかすくその名もつきぬいろびとは三五夜中のそらにまた「みうらのまつかげ月もれてかざすおとめのはらんの袖たちもふこゝろうきしまが雲とみへしはうみづらののの花よと見るたぎつ波の合風にまかする合うき雲の合つちのくるま

「花の江戸入はなアつがもないけつかうなツメルはんじやうな所で色も品川しゆくいり合とのさまの御國入三ノギン目出度時代四海浪合しづかにおとのよきかなといさんでくみなどいりしんぞひきふねあげに入合小づまをしやんくしやんくしやんと手をうつ土ひやう入合三ノギンその名あげはのてうのまひひやうしとりくがくやいりカンわしもおまへもうけに入ます御祝儀いわうて今日は大入ハルさつさふれくいさぎよやいさんでふれさくふれくふりこめさトメはなの顔みせいとしさの川。

○里ざくら

「むらさきとけいせいなどはあづまの名とりほかにはないぞやノ此さとばかり合うそまもこと有あけの月かげのこまのくちとりおのこも手綱ゆるすや大門の「ゆくもかへるもさくらくとうたわるも合花かやさくら合さくらくとうたわれても曾我へみやげととらせうくもおくるにたまづささままる。

○かみごころ

三下り「世のうさは戀と義理とにまかす身のカンわれ

のわれらまできみがめぐみぞありがたき。

○萩の風

「おもかげのわすれぬ夜はのめぐとにしんきな髪のはらくみだれあいにははぎのかせ合ちりにしうき身おんあいの逢ふはわかれのはじめとしれど合々々ききのふのはなはけふのゆめまことにうけるつゆのたまみな秋の野のおとこべしいまはむかしの名とり草。

○まつ夜

「いつもふく風やひとしほわすれずまでどくらせどそのひとの合そよとばかりの合おとづれもはや九つのかねがなるさてはおもはぬさわりあり今宵のあふ瀬はかなわぬなよし／＼かこつもやばらしやいつそゆめこそましならめまくらひとつをたのしみに戀しゆかしき合寐やのうち。

○むらさめ

「子をすてるやぶしいあれども身をすつるふち瀬にかわるきのふけふあわれと見るやこれやこのまゝ子だてとはよびつたへよみおわりてもどれをどれともわけがたき我ばかりもおもふものはまたもあらし

やらじともおんもふ合神にちかひのふたはしら「いもせむすぶのこのさかづきで合いろめづらしくつまめづらしく小づまをとつてしどけなりふりたよ／＼たよ／＼とかがすあふぎもつゝみの音ふるふりそでのあいらしく二世のつまじやとおもひやれいく久しかれ「君をことぶきいゑはんじやうふたりづれもふ太夫さいわかい／＼萬歳はこのゐんねんごこくじやうじゆの秋つしま合くにたみ／＼の道いもせのみちいわるおさむる目出度さよ。

○末待誓言葉

「そも／＼神代のそのむかし合とりがおしゑしいもせごと合今のよまでもたへせぬは合おさなどうしも戀心合戀はくせものうきことも合しのおせきの戸あけていわれぬ戀のぐわんおはもじながらむりのかすかずいふだすきかけてぞたのむ神路山あさ日もさすがやさしのしかもかすがの八重花ざかり色もかもある男山ゆみや八まんいろならござれとやたけごころもよし田山いづもせかいの縁をむすぶの神あつまりてあまの岩戸のみかぐらや「初日かげかどまつ見れば二見がた合女なみ男なみの中にも／＼ちどりさんざ

合「八重がすみふもとの人はけし人ぎやう合花を手ごとにおりていゑづとにせんゆくもかえるも花のころチラシ「そでやたもとへちるは／＼ちりくるはげに合是は／＼とばかり花のよし野山合おたづねなざる、品々はせいもん／＼こもりかつてゝぞんせぬなりほかをたづねて三笠山／＼。

○續七變化（本外題、其容形七枚起請）

第一 住吉踊

千はやぶる神のひこさのむかしより神をいさめの御まつりあかまへだれについの笠みな一ようにしやんときてそではしらすつゆあさ日かげすそうちそろふくれないのなびくはかせのいとすゝきにつことわろふかほばせはさてもいつくし夜目とを月めしたるかさのうちびんのほつれのくもとなりあめとなりよしふりもよし。

第二 おふく女踊

二上り「五月さみだれことぶきいわふ御田うへうへいうへい早乙女らふにやくそろふてなわしろのはんにやちもりであそぶじよなめきもけふ九重のおどりぶりしなもやらんせ合あとのおかめがあじのおもさに

ひよつくり／＼ひよこ／＼とゑくぼの水にすがたうつしてほれたらごんせみそのひまよりこてまねきただありがたい山の神ではない合かまの神合ツユハラヒ「やんもしろやかうじんのおかまのまへに松うへて千よばんせいのきみがみかぐらさて／＼みな月の合てうさや／＼御神事なればうちゑみてまだねにいらぬおんとりぶりのおもしろやチドリ「わがおもふおとこのたてたにしき木をこゝろうれしくとりいれてまてどおとこのいなせなくあゝつれなこんこゝりきここまかりきしよかのさつさなどしよかどしよかいかいのみことかやさかいうらにはたから御船がつくとのもべには伊勢とかすがのなかはすみよし四社のかみ君が代は／＼久しかるべきためしにはかねてぞうへしきしのひめまつめでたさよ。

第三 わん久

二上り「たどりゆく今はこゝろもみだれ候すへの松山思ひのたねよいつのころよりあいなりそめてかよふこゝろをかわいとおもへさりととは／＼しのぼかのはてどふもせいこれ／＼／＼うけたとなあのやわん久はこれさ／＼つゝみのかわりのほ／＼んへしんぞ

この身はこれさ／＼うちこんだとかく戀路のぬれ衣詞「久しぶりでさかいすじを通つたがよなみもよいかしてかはらぶてたゝきつでのふれんに月もあたらぬよソリヤや／＼／＼そこな生薬屋のまへがみなにをきよろ／＼とよそみしてア、そりや手をきろふぞよア、それ／＼／＼そりやこそ手をきつたはいな何をかかなびらりぼうしにかづきのすがた供の女人もみつそふてあとのおうばもしほらしく本手そのこみたさについてあるくじやなけれどおうばどののこしつきがちよつくらちよいとせいハ、ハ、ソリヤ／＼詞太夫がかぶろを文使さけのきげんもないぎがはたらきあわねばすまや明石の月を見し時々はおきがとんどろめきやよのめもよふねられぬ太夫にあいたいあいたいわいやい三下り「ほさぬ涙の露しぐれくちなば袖よいまの身も合ツタハ詞カ、リ「ほうし／＼は木のはしとおもふはやほよわけしらぬ歌心のはなのかほりをばしらせたいぞや詞ア、はつち／＼此十徳もすぎしころゆかり法師が一ふじに地ちへもきりやうもしんだいもみなあわゆきときへうせてかわせしこ

とはかゝるともはなれまいぞやきみこはくわれはち
 りかや身につもるこゝろのあくたむねにみちそれが
 かうじたものぐるひ「まよひゆけども松山ににたる
 人なきうき世ぞとないつ笑ふこきやうらんの身のは
 て何とあさましやとひとりかこつぞせひもなやア
 こゝな子は笑ふはくはうしやしやくはうしやも
 たはうけぬす百くわんめにかふた大事の三味せん
 をひいてきかそほうしや／＼と牛々々つくつへのし
 ちくをしたんの三味せんに詞おふぎをばち地くち三
 味せんのとしらべ詞トサアッ太郎くわじやが申すや
 うこゝはなにあふむさしの園みやこにまさる花の江
 戸かたきたへまもこのところにしよびあるとうけた
 まはる左金吾さまにもめぐりあひならびに神社ぶつ
 かくやめいしよこせきのこりなくア、イヤ／＼これ
 はふるい／＼さらばこれから義太夫ぶしでやつてく
 りよ義太夫アッいやとよわれは世すて人野山にねるも
 いとはねどもこよひは大事のもうじやのためこゝろ
 ざすめい日なればちぶつのまへによもすがらついで
 んくやうがいたしたい所の名さへ三かさむらたびの
 やどりのかさの下一じゆのかけもたせうの縁詞ヲ

ヲあまごのことなりとがめもあるまい介八がきとふ
 のため地 おさくとめましやこなたへとはきとく
 きとくふろしきつみ介八がくびぞとはもちても
 しらすあるじもしらすもふじやのみちびくやどりと
 はイロカッリのちにぞ「思ひしられたり詞コレ／＼い
 てみや女ぼうとちがふてよねの着物はぶんなものじ
 やツゞ合きんらんどんすや綾やにしきやさややち
 んちりめん／＼／＼もんちりめんきやうの大ぶつお
 けいといへと天王寺には七どろがらんがめいの水
 や五重の塔しよまんの塔淺草とう門口の戸とんつる
 てんとんつるてん／＼でがはりやぶ入つるつるて
 ん／＼／＼芝居は市村羽左衛門つるてんつる／＼て
 ん／＼サア／＼三味せん所じやない行はく一てう
 二てう三まいがたておすはく詞スガキコリヤコリ
 ヤ若い衆くるわがよひの小袖はぶんにしや、ヒヤッ
 ツゞゑてははだ着のうつりがから大やきもちが
 こるぞや詞とかくけいせいいかひは六十から七十まで
 そのぶんこゝろへ歌たんぼにけがはへたさち／＼
 くら／＼な／＼おりねづみなどかけがねはずすが大じ
 おやの金ばこあくるが大じ詞其大じの太夫はどふじ

やせめてかぶろの女なみおなみになりとあいたいコ
 リヤかぶろ／＼かぶろよやい三下り歌ヒヤッ「かぶろ
 かぶろと七たじかぶろよべどかぶろでもせで番太郎
 めがとおつた番太何にしよにやかいよねのおそばに
 まつともござらぬよいはせきやるな人目のあるには
 てさそれからそれまでさ明の鐘にはかならずしのび
 てあおふにはてさそれからそれまでさわがきやうら
 んのなりかたち野にすむかしそうづどもつかいは
 たしたせみのからちつとしぞこなふてこんななりに
 なられたそのやうなことはなん／＼／＼／＼／＼な
 んと／＼とんとんといらぬぞおいてたもふつつりば
 つたりおもふまいた／＼ぶつどふをねがふべしそれ一
 だいきやうしゆしやかむにによらひのせつほうはけ
 こんあごんほうどうはんにはよほつけねはんほうそう
 りつしゆなんどといへることむづかしい事どもわれ
 らがやうなるぐちむちどんなるちゑなき身にはおも
 ひもよらずあなたのかどへはひよろりこなたのかう
 しへたんたん／＼／＼／＼た／＼すみて合らつちもな
 いことたわむれあそべいざやかへらんわがやどへ。

「花ひらいてしめすまさにちしきのそのおしえ唐も
 やまともありがたきさとればすぐに春げしき花さく
 けふのいとゆふにぐせいの船とあしの葉の「ながれ
 もきよくさほさしておいてのせをまうけにうけて
 すそもほら／＼うしろおびその青やぎのしなやかに
 のりのほうべんとくだつのもくぎよもうをかたど
 りてこれもさとりて朝夕のつとめも名にしちきしに
 んじんけんせうのくだけて土の道すぐや「花さかば
 つげんといひし色ざとのたよりの文のそろべくとさ
 つと流して心にはあるとうき世の戀ぐさのしあんの
 ほうにさとられぬそのふり袖のうつりがにしんぞい
 のちをあげばののけむり吹くるあてことにおもふ男
 のとをさかり合おもわぬ人のしげ／＼は月にむら雲
 花に風まゝならぬのが戀の關もりヲドリ「うしの角文
 字ゆがみもじとはわしやいやよ合すぐなもじして合
 ねよふといふたほんにへさいな／＼かならずそうじ
 やぞへあ／＼はづかしやカラ歌合方「いんでべいてれい
 合ひうるへいふせいすせいびん合あふてねいぎんて
 ん「太夫のすゑゑてんらく秋風らくはかうしさん
 ちやにはし女郎合た／＼ぼんなふもぼだひにてひとつ

によするいろのみちいきやうくんじて合花ふりおん
がくそうし眞如の月はなきてりてながきつとめをい
つかけとさとのこと葉のならわせなり合いまをさか
りのはなのすがたへ。

第五 こもそう

次第「月はむかしのともならば／＼世の外いづくなら
ましウタイ」是は諸こく一見の僧にて候われいまだす
るがの國富士せんげんへまいらず候ほどにこのたび
思ひ立ふじの御山へ参らばやとおもひ候歌「風にな
びくふじのけむりのそらにきてゆく衛もしらぬわ
がおもひかな合なふ／＼それなる御僧なふ今のうた
をばなにとおもひよりてくちずさみ候ぞ申しこれも
うし御そうしさんへ詞はつち／＼そうあいたはんの
しまもうせうし「正月しまからなんぞいの千とせを
いわふまつのうち合はつち／＼とやかましいわん久
ではあるまいしほんにときしらぬこもそうはいつも
てんがいかふるじやのふハルギン何どきしらぬこもそ
うとやヲ、時しらぬ一中ガカリ山はふじの根いつとて
かかのこまだらに雪のふるらん山はしろたへうみは
みどりの三條の松風さらり／＼さら／＼さつとすが

たの花の名によする大いそのさつにつきにけり「そ
れはむかしの西の江口の君とたわむれを爰にうつ
してなにわなる伊勢のはまをきこませて合女のよ
れるくろかみに大衆もつながらるゝ人はみめよりた
心さとのいろしの戀ばなし。

第六 文七清川

文七アシ「さればなにおふ名もたかき戀のわけしり花
ならばさくらと人によひのくちこと葉にいろをはな
ぐもり二ノギン文とるみやうを鷹がねのなびく青柳う
そじやこんせぬもんどころ通ふちたねをむすぶしこ
なし詞申し文さんいつぞはわしがこなさんにいわふ
いわふとおもふてゐたが二ノギンいまはかゑらぬこと
ながらあそこではけんくわがあるこゝではぬいたき
つたはとあいてかわれぬしさんはかはらぬ名のみ
かりがねの文さまなりときくにつけ三ノギン夜の目さ
のめもあわぎのからすないてあかさぬ夜はとてもな
し三ノギンそのつらさよりこのつらさかわくまもなき
そでのつゆ此間せりふ入ナドッ合方「願とつばめの中よひ
は合ゆくもかへるもわかれてはハルギンはなのさかり
をまらかねて月にゆびおるふかい中戀のいろはも文

潤色放下僧

とかくしよんがへほんに／＼うれしいへ／＼うき名
たつアタルフシ名の戀ごろもヒヤウシ「つばさなけれど
ぬりげたのあたる尺八あたるがさいごれんぼこくふ
のあしらいにレンボナクリ君がすが／＼き三みせんのき
よれいふれいはよしあしも鶴の巢ごもりたてひきに
あき田すが／＼きいやとはいわさぬ獅子の曲までふき
おさめ合よわいものをばよけたがよい合つよいやつ
をばなげたがよいわしやそうおもふてゐるはいなそ
ふだんべ／＼なたねにてうのしこなしをたのみやん
すて合小ざくらのふかいあさいもすへかけてハル名
によばれたる男いちりうみめよき心もはないうぐひ
すかよふかみかせふきや町ひとの市村合方おとこた
てよき春のにぎわい。

第七 石橋

「獅子とらでんの舞がくのみぎんぼたんのはなぶさ
匂ひみち／＼たいきんりきんのし／＼がしらうてやは
やせやぼたんほう／＼こうきんのすいあらわれては
なにはむれゑだにふしまろびげにもうへなきし、
王の勢ひなびかぬくさ木もなき時なれや萬歳千秋と
舞納め／＼獅子の座にこそなぞりけり。

ウタイ「おもしろのはなのみやこや筆にかくともおよ
ばし藤蔵せりふ「ひがしにはぎをん町すじなわていし
がきちよんちよろめかせて戀のうきよにすみぞめの
廣次「ぼんさまたちまではなあふぎぼんあふすなわち
ぼたあしてゑちかりまたの御げんをとほとけをはが
すはくやけいこのまん／＼中居か藤「こひをわたせ
る四條の小ばし三下歌「鳥屋又兵衛がナあひるをな
がすわれはうき名を流し目に心はうてふてんつるて
ん合その二上りが氣あがり夜いたくふけしむつこ
とはいろのせかいとしら／＼あけにわかれのきやく
の合ちんり／＼廣「にしのほうにはほんともちにし
いしかけのしよくわいから藤「くせつしかけのむり
酒も廣「まはらば藤「まはれ廣「水ぐるま藤「水ももら
さぬあいほれに歌「ほんにかはるな川なみ川原へだ
て、よぶちどり合すだれまばゆくにしあがりまねけ
ばまねくうちわあふぎの手もたへにそのみなつきの
夕すゝみおもひ／＼のそめかたびらのすいたもやう
はなに／＼廣「川「なぎは水にもまる、藤「しだり柳
は風にもまる、廣「しんぞうかぶろはしたてにもま

る、藤「花しやがせつかんはらだちがほも廣「ふく
らすめは竹にもまる、藤「みやこのうしはくるま
にもまる、廣「まい夜さみせにうれのこされてちや
うすはひき木にもまる、藤「ヲ、げにまこと、わすれ
たりとよこきりこは合ほうかにもまる、こきりこの
二つの竹の世々をかかねてうちかきなりたるトメ御
代ぞめでたき。

増補新唄

○かきつばた

二上り「ものおもふころはいつしかあけやらぬ合ねや
につれなきほとゝぎすほんに一トこゑきへにしあ
のひとかすみ合夜半にももうきせいもんのばちもあ
たらば神さんのちかひにたてしればくろ合友、今は
あだなれあだなるちぎりとおきらめて残す筆ちらし
がきうすきゑにしは合うき墨につゆのいのちのおし
からんふたりの中の水もらさじもおつるなみだのは
ら／＼といふにいわれぬこゝろの戀ぢきみを御無事
とかきつばた。

○女夫水

「さてもうき世のうきことに二ノギンいとッおもひの
ますかみ合カンうつせばうつるハリとりなりもし
ん氣しんくをくらべごし二ノギンなみだのたまのくし
げみづ露ももらさぬチャンハズム女夫水合中もしつくり
あわせどにカンハルかゝりやつながるくろかみもほん
にちすじのいとぐるまトメめぐりあふせをかたりあ

明和七歳庚寅夏六月吉日

神田佐久間町河岸

書肆 和泉屋庄次郎

賣弘所

日本橋南三丁目

書肆 吉文字屋治郎兵衛

かさん。

○松朝日鳥指

「野みち山みちうつかれ／＼／＼てきしさほかたげ
ひよつとつんでたやつがれは合けふことぶきのはつ
やくのしよしんは御めんさいてくりよ合さいてくり
よこすゑ／＼に小とり小すゑめたむれあそぶなか
につくどのは合まじ／＼でござるござれ／＼子ども
しゆ合鳥をさいてやろぞいろならござれ戀でもござ
れぬれもちつくり合ゑてものでござる合ひよく合お
しどりかわらぬちぎり合さりとほ／＼しほらしや合
あのや女郎様にやナアわれらもちつくり打こんだほ
んに一夜のかりづまに合ヲドリ「今宵しのぶのすげの
笠さんさ合花がさゆきがさようによふたではないか
いなそんなもまことによふいふた合ふれ／＼春雨合
かすがの山のもみぢがさ着よなりよやみてもよや
合だてらしや合ひやうしとり／＼その尾にとりつき
こゝまでござれ合よいものとしよ合あとながさき
になれさほになつてござれおびになつて合ござれお
びになつて合ござれ天氣よかれ日よりよかれおふら
くひうらくひよどりをさいてくりよとおもふてこれ

ものにかまへてまつこれもものにかまへて合ひよつと
さいておつとつたこれをきてみよかしのへ合「ひい
たたもとの／＼しやうわるがほのその／＼めもと合
むすぶちかひのゑんのむらさき。

○しろたゑ

本てうし二ノ上「うしと見し合夜半にふりつむしらゆき
のなかにしよんぼりみどり子の合かわい／＼の聲き
けばち／＼は、の事おもひだす合「ざりと戀ぢのなか
たんぼれんぼながしにむかひちのみ／＼にもれくる合
ものあわれ合カン「くいなのとりの二ノギンものおも
ひ二ノギンこよひばかりはくひ／＼とさのみこゝろは
有明のつれなくのこるにはのしろたゑ。

○雪の一夜室亂梅

三下り「雪にながめががす／＼／＼ござる木々にふりつむ
春さく花とみてはたのしむ中をにくやあらしのふき
ちらすまつしろたへにふりかゝる花のゑんや寺々の
かねつくほうしのにくや／＼よなかの鐘の音にうき
わかれせしその人のさきへぬけがらゆくゑなくわし
にはそれと候べく候かしことのこす一筆もよめぬ
しかたじやないかいのなにかこゝろのみだれがみ

合「おちやめのとのくせとしてせなに子をおいねさ
せて置いてんのこくせとほとくたき川舟にのせ
てつれてござれやかんざきへ合さてもくわごりよ
はおどりぶりがみたいがおどりがみたくばきた
さがへござれのふきたさがのおどりはついのぼうし
をしやんときてまづさがのおどりがおもしろい
よし野はつ瀬の花よりもみちよりいとときわが
子がみたいものじや所々おまいりやつてとうげこ
めされとかをばいちやがほうへまいらしよまいり下
かふの手に風車にしへひらり合ひがしへひらりく
ひらりとするとときはこころうかれてひよつくりひよ
合ひよつくりくくく二上り「竹馬くつわがりん
いんくくわのりはだいじくそれでたわむれあ
そぶへ合チドリ「まつよひは三味せんひいてきんきぶ
しないでわかれしきぬくのそでよたもとようらみ
わびすへはどうなることじややらよんやさく合び
んとすねてはみすれどもついあやまつてはりよわき
なせ女子には生れたぞよんやさくこれもうきよの
ならわせに合こころはものにくるわねどきみゆへま
よひみだれごころのやるせなく物くるはしくぞ見え

にけり。

○さゝひき

三下り「世のあわれかきあつめたる秋ぐさの中にしげ
れる竹きりてかきあげのする笹の葉はなきたまおく
るこしぐるまながもほそきちひろのたけかたにう
ちかけひくあしもしどろもどろにさだめなきふちせ
とかわる世のうきを身ひとつにふるなみだの雨にみ
ちのべのくさばもひたすそでたもとなくくたどり
たちいづる。

○うきまくら

天 滴 述

三下り「あだびとのうきこととふも身のつらさなんの
るんぐわにしやばにきてこころづくしのひとのはな
ア、さてうたてのよるのゆき三ノギンとけぬこころの
をびといてよしなきうき名ぬれぬの合かわくまも
なききみがたもとをふたりしきねもいつの夜にいつ
ぞこの身はつゆときへなんゆめの夜ごとの浮枕。

○鳥の音

天 滴 述

三下り「おもふことかなはねばこそそのひとの三ノギン
くちなしどりの三下りのおもひしんき三ノギンしんき
のあつめぐさカンしほれしほらるゝそでたもと合カン

「はらへばつもあるしらゆきの三ノギンふりゆくものは
わが身にてきへもはてなんあだごころ。

○ほしあかり

天 滴 述

三下り「時なれやそらにいもせのふたつほしその戀ぐ
さのたねまきをめて合をめてみだるゝあきぐさの露
のこの身のおきどころかたさまならでギン夜すがな
し合方「ならぬことならほれまいものをおもひハルキ
るならんのそのころがさつばりせうがへやれさつ
ばりせうがえさはさりながら苦の世界。

○わかくさ

「さいすなく野のわかくさもつみすてらるゝあぢき
なさもへいづるかるゝもしらぬのべのくさいづれか
はるのゆめうつゝさめてあとなきうたかたのあわれ
やげにもひとごころア、まゝならぬくゝの世かい
つかくもりもはれゆくそらのしのゝめしらすとりの
聲おのがねぐらにまたもかえらん。

○わがなみだ

「いのちをろんずれば江のほとりにつながざるふね
合身をくわんずればきしのしたべのねなしぐさはる
のおじかのつまごひにゆふべをまたぬあさがほのは

かなきたとるわくらわにのこるまくらにびんのかみ
こぼれかゝるや合我涙。

○髪梳十寸鏡

天 滴 述

三下り「春風はハルはなにはたんとにくまれてりんき
に三ノギンもつれみだれがみすき返しぬる水ぐしの水
にうつろふかほとかほあふたその夜のときぐしにス
カスカみもなみだもはらくくと鏡に櫻のちりかゝる
三ノギンガハルおもひはつげのくしくと三ノギンいふに
いわれぬわがくろかみのみだれてけさのうきわかれ
ぐちなこころのないてゐるはいナア三ノギンわしをか
わいとおもふてゐるや月もいるさのせうじみは三ッ
り上もれてうき名のますかゞみ。

○あだざくら

天 滴 述

二上り「ひとすじに合おもひあふたるそでのつゆ合カ
ンぬれてしつばりッリ上三下り三ノギンカハルはるさめの三
ノギンふたりが三ノギンなかにふりかゝる三ノギンそふにそ
われぬ三ノギン身となることも三ツマ三ノギンどふした
くわちなかみくゝさんに合ゑんのむすぶのつなきれ
はて、三下りあかぬわかれとあけぬまい三ノギンそぐよ
いのかうしん三ノギンみちしるべ三下りあすはうき名のあ

だざくら。

○主や誰十重襦

サガリハカトリ「むめのすがたのしやんとしてさくらの
かほのあでやかに合みどりのまゆや柳ごしうちかけ
ふうぞくしなもよし合すそやもすそのくれないはよ
し野龍田もおよばじないづれめかれぬ花のさかり
え。

○翁草霜の舞女 (菊三番)

人ヨモ「ちはやぶるかみのそのふやその菊々にしも月
しもおきなくさちとせくむなる菊水のひさしかれと
ぞいわくしや三味せんひやうし三番更もみの段あり「あまつ
そらなる乙女の花とちぎり草とはたれいわ菊の菊の
も、夜に名ものこる菊しのび黄菊も夜はしら菊にみ
だれ菊かや猩々菊の都は紅葉こちやはづかしの茅草
かや菊がさね。

○梅顔 壽丹前

二上り合方「花のかほみせ一よりに合させんのそでの
つもる山はなのさかりの三ノギンみよし野もまさるい
ろ香のふきや町合ヒヤウシハル手ひきつれていさぎ
よや入くるいりくるやぐらだいこの合はつとりをあ

まのいわ戸のひらきぞめきてみよ／＼さてもみごと
へ鼓歌吉次「まどのむめのほくめんは雪ほうじてさむ
しとはそのからうたの氣色よや「むろさぎのさてさ
きそめてふゆのむめそのなげ入のしやんとしてどふ
とも合かうとも合いわれたものではないわいな合家
の一ふり一りうはサッギンそのふにみへてかくれなき
大小すがながばをりひだもくすさで水仙のきつと
させわたつもりし戀のすがたをみばやさみせんのみ
く手合あまたに合ねじめの絲のしんぞうれしききみ
が玉づさ合方「はづかしのもりてよそにもしらむめの
色もおほこにもち／＼といふかいわぬのそでの
なみハル三下モギンわすれぬゆびの三ノギン小よりにも
むすびあふ夜のスカス手枕にヨビダシねよとのかねの
つく／＼とおもひあかしてアタルスカシのたわいな二
ノギンせめて一度はあふさかのカンせきのひまよりま
づのいろのちのこゝろにくらぶればとなをいやまし
のおもひぐさ葉すへのつゆの三ノギンつゆほどもなさ
けのはなのいろに出てゑしやくにあまるもみち葉の
しづごころなくみゆるらん二上り合方「なん／＼／＼
なん／＼なさけのみちならば雪にもあめにもかよわ

んせ二ノギンまがきに立てこれ申しなんじやへいつも
のきやくしゆかばからしいすかぬぞへと二ノギンいわ
れてぞつとハルチンはらはた、いでかはゆさのひとつ
のんでは合にくい／＼はかわいのうらよちよくげに
まちよげしてこめ／＼ちやわん酒げこじや／＼とお
もふてゐたに夕べ一座のはなしをきけばのみやるよ
のみやるよ酒をのみやるよなよ／＼へ調てんもくで
ぐい／＼／＼孫左衛門よいかなふ／＼くにもかたむ
く花のたしなみヲドリ合方「君ならで合たれにかみせ
ん梅のはな合いろをもかをもしる人ぞしるゑんをむ
すぶのかみがきや「おらがだんなの／＼かたみをみ
れば石部金吉上下仕立た様然ばそこをやわらぐむろ
ざきのやばをもすいの手くだにて合上ヒヤウシいなに
はあらぬいなぶねのたがいちん／＼ちがひのお手ま
くらウクヒヤウシいつか小梅をさきわけのしるひとぞ
しるかをとめて合トメにぎわう／＼はなのかほ見世。

○冬牡丹園生獅子

あら面白や／＼ひやうしにつれてくるふや獅子のみ
ねにかけりてたにおりてまたはいわねにとりついで
てかしらをふつて合たわむれあそぶあなたへよりつ

こなたへよりつおりつのぼりつさま／＼に合そのに
さきそふばたんの合花をめぐけてくるふ又は小てう
をめぐけてくるふてふやこてふやおおし女獅子の花
にみだれてひら／＼／＼合とびあがりてはひらり合
はねかへりてはくるりさながら獅子のものぐるひみ
ればうつくし五色八色九色のふんじんのし／＼がしら
石橋をふむたんし／＼とらんぎよくをふむ雲のあし
どり合こくふをわたるがごとくなり「今は太鼓のし
らべにもつれとけぬこゝろをしめなをさすゆるまぬ
しらべの太鼓のねいろうてはひやうしをとんからと
んからとんから／＼ひやうしにのせてうつは八つば
ちたいこのひやうしもなをもみだれて獅子がしらを
かついでエ、まおふよふ八つばちをうたふよ吉野
龍田の花もみちさらしなこしちの月雪し／＼とらでん
はときをしる合あめむら雲やそうすらんあまりの曲
のおもしろさになを／＼めぐるさかづきの／＼ゑい
をすゝめて舞にける「うかれいでてともにくるふや
獅子のきよくさすがに色もふかみぐさこかげはてふ
のやどりかやみかへる袖にかいもつれおしやちらす
な牡丹花のいろよくさいたりいろあるさまにこゝろ

ひかれて戀のやましげきおさつゆふみわけてはる
 ばるこゝにしどけなくどれがどれとも夕日かげさす
 が女のこゝろから合どふしたゑんをまつがへにじつ
 とはなれぬつたかづらそのよいなかをにくやくし
 やまな小とりがあるわいなとかかせにちらしはしに
 かけゑんをきらふとするわいなさわりがちなる世の
 中や月にむら雲はなにかせそれがうき名のたねじ
 やいなチドリ「思ひねの合こゝろがらなるゆめぞかし
 またうつゝかうつゝなやちらとばかりのおもかげを
 みすのおいかせさら／＼／＼さらになすれもやらぬ
 身のつらさ／＼三下り「いちやうにきつれてたれにお
 もひをかけごうの匂ひみちくるきせんの中にめに立
 ふうぞくきふねいのるも戀のかせいとしとのごのす
 へをいのるや千秋萬歳萬歳千秋とうたひつれ／＼し
 ばしこゝにぞつきにけり。

○月の弓

三下り中ギン「うきことをおもへばしげきそでの露合
 カンひにはもゝたびまたちたひぬれてぞ戀のやるせ
 なき三ノ上こゝろニノ中ギンふたつをならべておいて
 いづれをそれと月の弓合方「ひきぞわづらふおんな氣

のついですばれしニノギンいとすゝきほどけてほどい
 てといはんにつかはれなんきやうの霧さめ。

○花角力里盃

三下り前彈「雪のふるときやわらべの花よみぞれまじ
 りにやんれおもしろや合野山いちやうにまつしろま
 つしろ／＼しろたへの雪をまろめてころ／＼／＼と
 わるさざかりのしどもなく合あしのつめたいぞうり
 かふてたもれのむかいのや小てらはやたが立た八ま
 んてうじやのおとむすめ／＼／＼るり／＼合とんぼう
 がへり水ぐるまはしりとさきりや／＼／＼わるさぐる
 ひに合がするなくなるひあそべば雪ちつていづるや
 すもふのよせだいこ「そろふたりな／＼すもふ男の
 そのはなやかにひがしは白き銀山やにしけれないの
 もろたづなきり／＼しやんとむすびあげすでにどひ
 やうへ合とりけるまひは何々ぞ四つでくづしには
 らやぐらしきののがへしこしぐるま合おいなげうつ
 ぼなげすめの小おどり水ぐるまひきすてつまざり
 かいなぞり合もゝでをくたくおもしろや「よれるつ
 なにはひかるゝひきふねあきのみやじまよさんやま
 はれば七里うらはよさんや七浦七ゑびす合いつそし

○一つみぞ

三下り「ひとまへたてし戀のやみかもるはだかふつか
 われてみてもふかひがうらやましきるはなんのい
 んぐはやらつねにふまれてそのくせあさいおもやふ
 しぎの縁のわきわきといふじのにくてらし合方ぬれ
 て手水のみづくさくまねぬななじやあるまひけれ
 ど目のものかみかけてふすまひとへにいぐせのお
 もひきみはかもるよわしやしきぬふかいあさいもひ
 とつみぞ。

○月の前

ゆふかせはたれがうらみか身にしてみいていつわりなら
 ぬいひわけも秋のちぐさのさいてふかれてみだれが
 み／＼合方あかひかほして名をながすならたつ田川
 じやといわふぞへそれもそれもうき世竹のひとよの
 ものおもひ。

○蝶鳥千年藤

三下り「いさましや曾我の五郎時致はさかおもだかの
 おもよろひかるげにひつさげかけ出すそのいきほひ
 はおにがみや合おにをあざむく小林が合ちよつとお
 じやまとよろひのそで手をかけ合ゑはしつるのまる

よてからつとめがましじやいやなむろのうきつと
 めいやな酒をもむりのみにわらふてのむも里のくせ
 合酒にあまたの合きどくがござるしも夜のねざめあ
 たゝかにはつのひとにもなるゝは酒のいとくなりと
 かくやとかくうき世はのめやうたへやもろともにし
 げれ松山ざゝんざゝ／＼はままつのおとはざゝんざは
 まのまさごはつくるともよもつきじ／＼夫婦いもせ
 のゑんはいなものよ合おれとそなたとそなたとおれ
 とよさりやまいろとやくそくしたがいとしをこな
 ふてこんなりになられた／＼あんまけんびき／＼ひ
 ねろさりと／＼ひねろ合やろかしなの／＼／＼しなの
 ゑちこの雪よりもつめたいとゝな詞けいせいこのまこ
 とと玉子の四角といふことがおかしやんせくるわは
 なれてこゝろのまゝにすへのゑにしもかみごころか
 はるまくらのうきつとめチドリ「たまにくるのに／＼
 寐たとはつらやそわれぬ身なりやせひもなしア、ま
 まならぬ月見ぬ君が名こそおしそいねやそいねのま
 くら／＼うつゝなやかよひくるわのふかあみがさす
 いもぶすいもうてうてんてつとんはなをかざりしけ
 ふの今やう。